別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本工業規格 A4 縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（人間社会科学研究科人文社会科学専攻　博士課程前期）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院共通科目	持続可能な発展科目	Hiroshima から世界平和を考える	（概要）被爆地広島に立脚する広島大学は，理念の第一に平和を希求する精神を掲げる。本講義の目的は次の二点である。ヒロシマの基盤ともいうべき原爆・被爆被害の概要を理解する。さらに，ヒロシマを基軸としながらも普遍的で恒久的な平和のあり方を模索する。そこでは，今日的に緊急性の高いテーマである。例えば，貧困・飢餓・難民・環境問題そして世界各地の地域紛争等をテーマに，理想と現実との間にあるギャップをも理解し，理想的な平和のあり方を検討する。 （オムニバス方式／全８回） （1　川野　徳幸／2 回） 被爆地「Hiroshima」における原爆・被爆被害の概要 （267　小宮山　道夫／2 回） 原爆と広島大学の関わり，広島の歴史，広島に課された役割 （222　河合　幸一郎／1 回） 途上国における貧困と飢餓，食糧生産の現状と課題 （223　中坪　孝之／1 回） 地球温暖化，環境破壊，天然資源の枯渇等の現状と解決のための方策 （104　山根　達郎／2 回） 現代における地域紛争の特徴，紛争後の平和構築の在り方	オムニバス方式
		Japanese Experience of Social Development-Economy, Infrastructure, and Peace	（英文）This course intends to discuss the issues of SDGs under the Guiding principles of Hiroshima University “Pursuit of Peace” and the long-term vision “Splendor Plan 2017”. The SDGs sets sustainability as a core of the global issues. Such a broad issue always involve many related issues. Resolution of one issue may produce another issue. It is important to consider cross-disciplinary approach and hisotorical aspect. Also inclusiveness is an important principle of SDGs, and thus all countries, developed and developing countries, should collaborate to tackle these. When considering these cross-disciplinary approach, historiy, and inclusiveness of development, Japanese experience of development provides an important case, becuase Japan, among non-European countries, is the first country which has become a member of OECD. Here, we can learn many points from the developing efforts whether they are success or failure. These efforts, including development assistance, are connected to Japanese society of today. On the other hand, Japan currently faces such new issues as rapid aging and depopulation. Thus this course discusses Japanese experience of social development from the above aspects. lesson1 Guidance of the course lesson2 JICA chugoku center lesson3 Yuichiro Yoshida “Japanese policy experience: Success and Failures” lesson4 Masaru Ichihashi “Industrial Policy and Economic growth” lesson5 Junyi Zhang “History of environmental policies in Japan”1 lesson6 Junyi Zhang “History of environmental policies in Japan”2 lesson7 Osamu Yoshida “Japanese ODA and its Asia Policy” lesson8 Mari Katayanagi “Reconstruction of Hiroshima from Peacebuilding Perspective” （和訳）本講義では，「自由で平和な一つの大学」という建学の精神と長期ビジョン Splendor Plan 2017 をベースとして，SDGs について議論する。SDGs は，世界的な問題の核として，持続可能性を置いている。そのような幅広い問題は，常	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院共通科目	持続可能な発展科目		に多くの関連した問題を含み，ある問題の解決は，別の問題を引き起こすかもしれない。分野間の連続性や歴史的視点が重要である。さらに，SDGs は包摂性を重要な原則としており，先進国，発展途上国を含むすべての国が協働して取り組んでいかなければならない。 　これらの学際的アプローチ，歴史的視点と包摂性を踏まえれば，日本は貴重な経験を有しており，日本は非ヨーロッパ諸国の中では最初の OECD 加盟国でもある。発展に向けた努力にあたっては，我々はその結果に関わらず，多くの点を学ぶことができ，今日の日本社会の課題にも直結するものである。一方で，日本は急激な少子高齢化に直面している。上記のとおり，本講義では社会の発展における日本の経験に関して学ぶものである。 （オムニバス方式／全 8 回） （226　金子　慎治／1 回） 本講義のガイダンス、概要説明 （331　三角　幸子／1 回） JICA の活動、役割 （224　吉田　雄一朗／1 回） 日本の政策経験 （227　市橋　勝／1 回） 産業政策と経済成長 （225　張　峻屹／2 回） 日本の環境政策の歴史 （2　吉田　修／1 回） 日本の ODA とアジア政策 （3　片柳　真理／1 回） 平和構築から見た広島の復興	
		Japanese Experience of Human Development-Culture, Education, and Health	（英文）This course intends to discuss the issues of SDGs under the Guiding principles of Hiroshima University “Pursuit of Peace” and the long-term vision “Splendor Plan 2017”. The SDGs sets sustainability as a core of the global issues. Such a broad issue always involve many related issues. Resolution of one issue may produce another issue. It is important to consider cross-disciplinary approach and hisotorical aspect. Also inclusiveness is an important principle of SDGs, and thus all countries, developed and developing countries, should collaborate to tackle these. When considering these cross-disciplinary approach, historiy, and inclusiveness of development, Japanese experience of development provides an important case, becuase Japan, among non-European countries, is the first country which has become a member of OECD. Here, we can learn many points from the developing efforts whether they are success or failure. These efforts, including development assistance, are connected to Japanese society of today. On the other hand, Japan currently faces such new issues as rapid aging and depopulation. Thus this course discusses Japanese experience of human development from the above aspects. lesson1 Guidance of the course lesson2 Maharajan Keshav Lall “Japanese experience of development in Agriculture and Remote area” lesson3 Koki Seki “Socio-cultural Aspect of Modernization of Japan: Focusing on the Transformation of Norm, Mentality, and Way ofLiving” lesson4 Kinya Shimizu “A History of Education in Japan” lesson5 Kinya Shimizu “Lesson Study in Japan: As a tool of PDSI in Japanese	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院共通科目	持続可能な発展科目		Education” lesson6 Junko Tanaka “International cooperation and research collaboration in the field of public health” lesson7 Michiko Moriyama "Healthcare system in Japan: its characteristics and history" lesson8 Discussion (和訳）本講義では，「自由で平和な一つの大学」という建学の精神と長期ビジョン Splendor Plan 2017 をベースとして，SDGs について議論する。SDGs は，世界的な問題の核として，持続可能性を置いている。そのような幅広い問題は，常に多くの関連した問題を含み，ある問題の解決は，別の問題を引き起こすかもしれない。分野間の連続性や歴史的視点が重要である。さらに，SDGs は包摂性を重要な原則としており，先進国，発展途上国を含むすべての国が協働して取り組んでいかなければならない。 これらの学際的アプローチ，歴史的視点と包摂性を踏まえれば，日本は貴重な経験を有しており，日本は非ヨーロッパ諸国の中では最初の OECD 加盟国でもある。発展に向けた努力にあたっては，我々はその結果に関わらず，多くの点を学ぶことができ，今日の日本社会の課題にも直結するものである。一方で，日本は急激な少子高齢化に直面している。上記のとおり，本講義では人類の発展における日本の経験に関して学ぶものである。 （オムニバス方式／全 8 回） （231　馬場　卓也／2 回） 本講義のガイダンス，概要説明，まとめ （4　MAHARJAN，KESHAV LALL／1 回） 農業開発における日本の経験 （5　関　恒樹／1 回） 日本の現代化における社会文化的側面 （228　清水　欽也／2 回） 日本における教育開発 （229　田中　純子／1 回） 公衆衛生学分野の国際協力と共同研究 （230　森山　美知子／1 回） 日本のヘルスケアシステム	
		SDGs への学問的アプローチ　A	（概要）国際目標 SDGs と広島大学長期ビジョン Splendor Plan2017 の理念を受けて、学部教養科目などとともに広島型教養教育の一環として、大学院博士課程前期共通プログラムを創設する。SDGs は持続可能性を核に据えた私たちの時代・社会の課題である。しかしこの課題は単独での問題解決に止まらず、分野間の連続性や時間的連続性が重要である。さらに、その解決には、援助国、被援助国のみならず、地方自治体、民間企業、市民社会が協働して取り組む新しい社会の在り方が求められている。本 SDGs への学問的アプローチ A では、人権を中心に取り組む。B と合わせて受講することが推奨される。 （オムニバス方式／全 8 回）（括弧内 SDGs 目標番号） （231　馬場　卓也／2 回） １．コースの概要、SDGs と貧困問題　（1，17）：SDG s の設置経緯について説明し、17 の目標の中で、貧困は様々な問題の根底に位置することについて説明、議論する。 ８．総括討議 （232　実岡　寛文／1 回）	オムニバス方式・共同（一部）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院共通科目	持続可能な発展科目		２．持続可能な消費と飢餓　（2，12）：地球規模で食料の持続可能性を考える時、先進国と途上国のインバランスが問題となる。持続可能な生産消費形態、栄養改善などについて議論する。 （229　田中　純子／1 回） ３．公衆衛生と社会医学　（3，6）：安全な水の供給と確保は人が健康に生きていくための不可欠の開発課題であることから、疾病対策を含む健康維持のための社会医学的、公衆衛生学的側面からの持続可能な管理と問題について講義する。 （230　森山　美知子・ 268　RAHMAN MD MOSHIUR／1 回）（共同） ４．健康と福祉　(3)：プライマリ・ヘルスケア、リプロダクティブ・ヘルス、非感染性疾患と高齢化などグローバルな健康問題についてて講義する。 （234　永田　良太／1 回） ５．教育と社会　(4)：情報化による急激な変化が進む中で、先進国と途上国の境目がなくなりつつある。今後の教育に求められる役割と課題について議論する。 （233　石田　洋子／1 回） ６．ジェンダー問題と平等な社会　（5，10）／ジェンダーの平等と女性のエンパワーメントに向けた課題、国家間及び各国内の不平等削減に係る課題、そしてこれら 2 つの課題解決が他の SDGs ゴール達成に深く関わることについて議論する。 （332　隈元　美穂子／1 回） ７．国際機関の取り組み（17）：　SDGs を推進している立場から、その取り組みの課題と進捗状況について議論する。	
		SDGs への学問的アプローチ　B	国際目標 SDGs と広島大学長期ビジョン Splendor Plan2017 の理念を受けて、学部教養科目などとともに広島型教養教育の一環として、大学院博士課程前期共通プログラムを創設する。SDGs は持続可能性を核に据えた私たちの時代・社会の課題である。しかしこの課題は単独での問題解決に止まらず、分野間の連続性や時間的連続性が重要である。さらに、その解決には、援助国、被援助国のみならず、地方自治体、民間企業、市民社会が協働して取り組む新しい社会の在り方が求められている。本 SDGs への学問的アプローチ B では、環境、社会、ガバナンスを中心に取り組む。A と合わせて受講することが推奨される。 （オムニバス方式／全 8 回）（括弧内 SDGs 目標番号） （3　片柳　真理／2 回） １．コース概要、平和な社会（16）：SDGs の設立経緯について説明し、それら目標の最終ゴールとして、平和な社会の実現について議論をする。 ８．総括討議 （270　長谷川　祐治／1 回） ２．気候変動と防災　(13)：気候変動の兆候がますます顕著になりつつあり、その影響を軽減するための防災、緊急対策について議論する。 （269　日比野　忠史／1 回） ３．エネルギーと持続可能な都市　（7，11）：安価かつ信頼できる持続可能なエネルギーへのアクセスを確保し、包摂的、強靭(レジリエント）で持続可能な環境の実現について議論する。 （105　佐野　浩一郎／1 回） ４．経済成長と雇用　(8)：すべての人々の雇用と働きがいのある労働環境の実現と、持続可能な経済成長の可能性と課題とについて議論する。 （236　河合　研至／1 回） ５．インフラと産業　(9)：包摂的で強靭（レジリエント）なインフラ構築、持	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院共通科目	持続可能な発展科目		続可能な産業化及びイノベーションの可能性と課題について議論する。 （235　小池　一彦／1 回） 　6．陸上資源 生物資源学(14，15)： 農業・畜産・水産業における生物資源の利用と生態系保全とのジレンマについて講義する。 （333　川本　亮之／1 回） 　7．地域社会の取り組み （地方自治体） （17、11）：広島県内の地方自治体での種々の取り組みを、SDGs の観点から議論する。	
		SDGs への実践的アプローチ	SDGs は、貧困や飢餓の根絶、質の高い教育の実現、女性の社会進出の促進、再生可能エネルギーの利用、経済成長と生産的で働きがいのある雇用の確保、強靭(きょうじん)なインフラ構築と持続可能な産業化・技術革新の促進、不平等の是正、気候変動への対策等の 17 の目標と各目標を達成するための 169 のターゲットからなる。これらを実現するために、最も影響力があるのは小中高等学校における教育である。授業では、次世代を生きる子どもたちに地球規模での課題をどのように教え、行動力を育成しているかについて実践的にアプローチする。具体的には、SDGs の理念、基本的な考え方を学ぶとともに、ユネスコスクールに認定されている学校への訪問・見学等を行う。社会人を優先する。	共同
		ダイバーシティの理解	SDGs の達成を目指す社会において、ダイバーシティ＆インクルージョンの価値を理解し、それを実現するスキルを習得することは、いかなる専門性を有する人材にとっても重要である。この授業では、ダイバーシティのリスクとメリットを理論的・実践的に理解し、インクルージョン実現のためのシステム構築について考える力を習得することを目的とする。 （オムニバス方式／全 8 回） （6　坂田　桐子・ 273　櫻井　里穂 ／2 回)(共同） 　1．ダイバーシティに関する理論：特に組織におけるダイバーシティのリスクとメリットについて，理論的背景及び組織における現状について理解することを目的とする。 （297　北梶　陽子／5 回） 　2．ゲーム演習：多様な人々で構成される集団や社会において，異なる他者の視点を取得し，問題を解決するプロセスを体験できるシミュレーションゲームを行う。 （7　大池　真知子・ 297　北梶　陽子／1 回）（共同） 　3．ディスカッション：理論とゲーム演習の体験に基づき，ダイバーシティ＆インクルージョンの価値と実現方法について議論する。	オムニバス方式・共同（一部）
	キャリア開発・データリテラシー科目	データリテラシー	（概要）ICT の普及とともに様々な分野で膨大なデータが蓄積され，これを活用した新しいビジネスも展開されるようになり，データ解析の技能や統計学の知識をもった人材が社会から必要とされている。本講義では，社会的背景，データを取り扱う手法として機械学習，統計学といったデータ科学の考え方について紹介し，いくつかの具体例を通してデータの取り扱い等に関して注意すべき点を解説する。また，セキュリティ，個人情報の保護といった問題についても触れる。 （オムニバス方式／全 8 回） （274　宮尾　淳一／4 回） 　ビッグデータと呼ばれる膨大なデータの活用に関する現状を理解することを目的とする。具体的には，ビッグデータの機械学習への利用例と最新の成果を示し，その可能性を理解すると共に，AI への応用なども解説する。また，ディープラーニングによる実行例なども提示する。さらに，ビッグデータの取り扱いに関する問題点や注意点についても触れる。 （238　柳原　宏和／4 回）	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院共通科目	キャリア開発・データリテラシー科目		本格的な統計解析手法を学ぶ前の取り掛かりとして，記述統計を学ぶことを目的とする。具体的には統計ソフトRを用いて，データの取り込み，抽出，結合，ヒストグラムやボックスプロット，散布図などによるデータの視覚化，平均や分散などの基本統計量の計算を行う。さらに，単回帰分析を用いた変数間の関連を明らかにする手法も紹介する。	
		医療情報リテラシー	（概要）がんゲノム情報を用いる新しいがん治療の開発や，有効な治療法を確立するための臨床研究をはじめ，電子カルテの普及によりビッグデータとして取り扱うことが可能になったカルテ情報を用いた疫学研究など，医学研究では医療情報を取り扱う研究分野の重要性を増している。このため，これからの医療関連分野で活躍するためには，個人情報保護などの倫理的な観点も含めて様々な医療情報をどのように取り扱うかを学ぶことが必須となっている。本講義では，医療情報を処理するために必要な知識，解析結果の応用・活用などについて基礎的な解説をするとともに，その慎重な取り扱いに求められる情報セキュリティ，倫理，法律などについても触れる。 （オムニバス方式／全８回） （303　小笹　晃太郎／1回） 原爆被爆者コホートデータの概要と大規模長期情報を用いた医学研究 （239　工藤　美樹／1回） ゲノム情報の種類と，ゲノム情報を用いた研究の倫理的取り扱い規則，功罪や有用性 （275　森野　豊之／1回） 医学分野における疫学研究の倫理的側面からみた情報の取り扱いと解析方法 （241　粟井　和夫・240　有廣　光司／1回）（共同） 医学医療分野における画像データの種類や倫理的課題，情報の有用性と社会における活用 （304　田中　剛／1回） 広島県独自の HMnet（ひろしま医療情報ネットワーク Hiroshima Medical Network）を利用した医療情報共有の仕組みと活用 （229　田中　純子／1回） NDB（National data base）などの大規模医療データベースの種類，概要，倫理，疫学研究への活用 （276　大上　直秀／1回） がんゲノム情報の概要，理的課題，応用と活用 （242　久保　達彦／1回） 臨床治験の大規模化に伴う課題，功罪，応用と活用と演習	オムニバス方式・共同（一部）
		人文社会系キャリアマネジメント	この授業の目標は次の２点である。１．キャリア理論を学習することで，大学院での自分の研究とキャリア（生き方）を，どう関連付けるかを考える契機とする。２．大学院から社会へのトランジションについて意識し，課題発見解決力やコミュニケーション力等，充実して生きていくために必要な力を養成することを目指す。これらの目的を達成するため、授業では次の３点に取り組む、１．自己理解。２．社会の現状を知る。３．グループワークや自主活動を行う。じっくり考える事と行動の両立によって、社会で通用する力を身につける。	
		理工系キャリアマネジメント	コミュニケーション力は，社会で活躍するうえで必要不可欠な能力である．本科目では主として対話・発話によるコミュニケーションについて解説する．対話・発話によるコミュニケーションにおいて非言語情報（表情，視線，態度など）は重要な意味を持つため，本科目では非言語情報と言語情報の両面からコミュニケーションについて理解を深め，演習を通してスキルを向上させる．具体的な内容は，１）対話によるコミュニケーションの基礎，２）プレゼンテーション，３）	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院共通科目	キャリア開発・データリテラシー科目		高度なコミュニケーションスキルである傾聴，4）ファシリテーション，である．授業の目標は次のとおりである．1. 対話コミュニケーションにとっては，言語情報だけでなく非言語的要素（視線，あいづち，うなずき等）が重要であることを理解する．2. 目的に応じた研究概要書の作成方法，研究内容のプレゼンテーション方法を修得する．3. 傾聴スキルの基本について理解する．4. ファシリテーションスキルについて理解し，グループでのディスカッション方法を修得する．	
		ストレスマネジメント	現代は，社会・経済環境の変化や家族関係の変化によってストレスが増大している．ストレスの多くは心理・社会的な要因によるものであり，対処が適切でないと，心身の健康や対人関係に影響を及ぼし，個人や組織の生産性を低下させることになる．したがって，社会で活躍し充実した人生を過ごすためには，ストレスを上手にコントロールすることが必要不可欠となる． そこで，本講義では実践的なストレスマネジメントについて解説し，心身相関的アプローチによるストレスマネジメントの技法を修得するための演習を実施する． 講義の目標は，次のとおりである．1.心理・社会的ストレスと，その特徴について知り，ストレスマネジメントの本質的な考え方について理解する．2.心身相関的アプローチによるストレスマネジメントの技法を修得する．3.ネガティブな感情や思考に巻き込まれずに、「今，ここ」の自分を客観的に観察する方法について理解する．	
		情報セキュリティ	（概要）本講義は社会人として、研究者として必要とされる情報セキュリティの基本を体系的に習得することを目標とする。情報セキュリティの基本概念の理解をはじめに、情報セキュリティを確保するための基礎技術、対策、教育などを体系的に学習するとともに、情報セキュリティ管理やインシデント対応などの実際について事例を交えて説明する。 （オムニバス形式／全 15 回） （244　西村　浩二／5 回） 情報セキュリティの基本概念および情報セキュリティ管理を実現するための体制構築や手法について、事例を交えて解説する。 （292　岩沢　和男／5 回） 情報システムのライフサイクルを中心に、セキュアシステムを構成するための経営戦略やプロジェクトマネジメントについて解説する。 （298　渡邉　英伸／5 回） 情報セキュリティを構成する基本技術および関連技術について、情報セキュリティ対策の実際を事例を交えて解説する。	オムニバス形式
		MOT 入門	本講義は MOT とベンチャービジネスの基本を系統的に学習することを目標とする。経営管理の本質を理解するために，多くの事例を用いて，経営管理の基本である効率をはじめ，損益分岐点分析，倫理，品質管理，在庫管理，モティベーション，リーダーシップ，ビジネスプランなどの中核的な問題を系統的かつ分かりやすく説明する。	
		アントレプレナーシップ概論	イノベーションを起こすには、アントレプレナーシップが不可欠である。日本経済が長らく停滞してきた背景には、アントレプレナーシップが軽視されたことがあげられる。かつて、アントレプレナーシップは“起業家精神”と訳されていた。しかし、経営学の世界では、アントレプレナーシップを起業家的な思考と行動ととらえる。練習を通じて習得でき、決して神秘的なものではないことが研究で裏づけられている。本科目では、小説や映画などを教材に使い、授業内演習を通じてアントレプレナーシップについて学ぶ。科学者を目指さなくても、サイエンスの方法論を学ぶことに意義がある。キャリアとして起業家になることを考えていなくても、起業の方法論を知り、ある程度実践できることは、グローバル社会で活躍するために必要なスキルとなりつつある。受講者が自分なりにアントレプレナーシップを理解し、自分の言葉で表現できることなどを到達目標とする。	
		人間社会科学特別講義	（概要）文学，史学，哲学，言語学，経済学，経営学，法学，政治学，社会学，心理学，教育学などの，人間や社会及びその活動の所産を研究対象とする諸分野の研究内容について，自然科学や生命科学を含む他分野との関連を踏まえて解説	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科共通科目		する。それぞれの分野に関する専門的知見を学び，人間社会科学研究科の各プログラムにおける専門性の基礎を身に付けるとともに，幅広い分野を俯瞰的に理解することを目指す。講義形式であるが，少人数による討論等も実施する。 （オムニバス方式／全 15 回） （9　衞藤　吉則・26　森田　愛子・23　星野　一郎・3　片柳　真理／1 回） ガイダンスとして，本講義の全体像を解説する。 （8　溝渕　園子・245　本田　義央・203　古川　昌文・109　上野　貴史／1 回） 多文化社会，比較文化などの分野の研究内容について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （107　後藤　雄太・10　末永　高康・106　川村　悠人／1 回） 哲学，倫理学，思想文化などの分野の研究内容について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （108　奈良　勝司・11　本多　博之・12　前野　弘志／1 回） 日本史学，東洋史学，西洋史学などの分野の研究内容について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （16　安嶋　紀昭・110　伊藤　奈保子・219　笛吹　理絵／1 回） 地理学，考古学，文化財学などの分野の研究内容について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （13　小川　恒男・15　小林　英起子・251　柳澤　浩哉・14　今林　修／1 回） 日本語学，日本文学，中国語学，中国文学，英米文学語学などの分野の研究内容について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （21　大内田　康徳・112　大河内　治・20　大澤　俊一・214　中川　雅央／1 回） 経済学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野との関連を踏まえて解説する。 （113　松嶋　健・197　金　宰ウク・204　吉田　有紀・22　PELTOKORPI VESA MATTI／1 回） 経営学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野との関連を踏まえて解説する。 （19　宮永　文雄・252　片木　晴彦／1 回） 法学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野との関連を踏まえて解説する。 （247　永山　博之・104　山根　達郎／1 回） 政治学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野との関連を踏まえて解説する。 （18　江頭　大藏／1 回） 社会学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野との関連を踏まえて解説する。 （17　服巻　豊・111　上手　由香・115　梅村　比丘・27　杉村　和美／1 回） 心理学・行動科学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野との関連を踏まえて解説する。 （24　長谷川　博・25　井上　永幸・114　杉浦　義典・278　進矢　正宏／1 回） 心理学・行動科学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野と	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		の関連を踏まえて解説する。 （248　小山　正孝・250　山田　浩之・293　DELAKORDA KAWASHIMA TINKA／1 回） 教育学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野との関連を踏まえて解説する。 （249　松見　法男・279　中矢　礼美・253　松浦　武人・228　清水　欽也／1 回） 教育学に関する分野を中心として，研究内容について，他の分野との関連を踏まえて解説する。	
研究科共通科目	人間社会科学のための科学史	（概要）文学，史学，哲学，言語学，経済学，経営学，法学，政治学，社会学，心理学，教育学などの，人間や社会及びその活動の所産を研究対象とする諸分野について，それらが自然科学や生命科学を含む他分野とどのように関連しながら発展し，現代社会を形成してきたかを解説する。それぞれの分野の歴史を学ぶことで，人間社会科学研究科の各プログラムにおける専門性の基礎を身に付けるとともに，歴史を接点として幅広い分野を俯瞰的に理解することを目指す。 （オムニバス方式／全 15 回） （255　草原　和博・250　山田　浩之・254　加藤　厚海・224　吉田　雄一朗／1 回） ガイダンスとして，本講義の全体像を解説する。 （28　高永　茂・207　奥村　真理子・34　宮川　朗子・206　松本　舞／1 回） 多文化社会，比較文化などの分野の歴史について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （116　赤井　清晃・205　藤田　衛・29　有馬　卓也・299　岡本　慎平／1 回） 哲学，倫理学，思想文化などの分野の歴史について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （117　舩田　善之・30　八尾　隆生・31　井内　太郎／1 回） 日本史学，東洋史学，西洋史学などの分野の歴史について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （36　友澤　和夫・38　野島　永・118　後藤　秀昭・37　奥村　晃史／1 回） 地理学，考古学，文化財学などの分野の歴史について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （32　有元　伸子・35　今田　良信・251　柳澤　浩哉・33　大地　真介／1 回） 日本語学，日本文学，中国語学，中国文学，英米文学語学などの分野の歴史について，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （119　小野　貞幸・120　折登　由希子・39　角谷　快彦・169　高橋　新吾／1 回） 経済学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。 （121　陳　俊甫・41　林　幸一・122　徐　恩之・40　築達　延征／1 回） 経営学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。 （19　宮永　文雄・256　秋野　成人・257　田村　耕一／1 回） 法学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。 （247　永山　博之／1 回）	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科共通科目		政治学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。 （18　江頭　大蔵・198　中空　萌／1 回） 社会学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。 （42　森永　康子・123　清水　寿代・208　神原　利宗・27　杉村　和美／1 回） 心理学・行動科学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。 （124　上泉　康樹・127　大嶋　広美・126　有賀　敦紀・125　小川　景子／1 回） 心理学・行動科学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。 （255　草原　和博・250　山田　浩之・294　WALTER BRETT RAYMOND／1 回） 教育学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。 （249　松見　法男・280　牧　貴愛・253　松浦　武人・281　三輪　千明／1 回） 教育学に関する分野を中心として，その歴史について他の分野との関連を踏まえて解説する。	
	異分野協働プロジェクト	複数の分野が協働して取り組むプロジェクトを取り上げ，受講生それぞれの専門分野がそのプロジェクトにどのように貢献できるかを考察する。分野は人文社会科学，自然科学，生命科学の全てを対象とする。また，プロジェクトは学内のものに限定せず，学外の研究者も積極的に活用する。異分野の学生で構成するグループを構成し，講義とグループワークを通して，人間や社会を多角的に捉え，他分野との共働により共通の課題を解決する過程を体験する	
	未来創造思考（基礎）	本講義では，新規事業を開発・実行するために必要な知識や方法として，ビジネスプラン，マーケティング，資金調達，事業運営などに関する計画と実行についての理解が必要であるという観点に立ち，起業の観点から未来創造思考（future creation thinking）を実践するための基礎を学ぶ。未来創造思考は未来を創造するための思考枠組みであり，現実の問題を解決し望ましい未来の実現を図るプロフェッショナルにとって必須のスキルである。新ビジネスの開発・事業化のみならず，社会問題の解決や組織の改革などに必要とされるものである。本講義では，未来創造思考の概念，問題の定義，未来の構想，チームビルディング，戦略的実行という未来創造思考に関する講義と演習を通して，自ら率先して未来創造を実践するための基礎知識と基礎能力を育成する。	
	国際標準化論	広く世の中経済・社会活動は，ルール（標準等 「任意」及び規制等の「強制的なルールにより定められた土俵上で行われているが， 標準等の任意ルールは誰でも主導することが可能であるので，民間企業であっても積極的にルール作り取組まなければ，競争に生き残れないことを認識する。実例を元に国際的な標準化についての問題点や対応策について説明する。	
	理工系のための経営組織論	過去におけるものづくり現場での無数の観察結果や証言を凝縮する形で，現場から見上げた歴史及び世界観を総括し，今後の日本のものづくり産業の競争戦略・企業戦略について講義する。これまでの世界のものづくり産業の興廃の歴史などを概観することによって，現場の能力構築やイノベーション・アーキテクチャをどう育てていくかが重要な時代となってきたことが明確になってきている。今後，ものづくり現場と本社が一体となって，どのような方向性で取り組むべきかについて学ぶ。	
	平和教育の構築への実践的アプローチ	平和を希求する広島大学において，平和教育を構築することは重要な課題である。グローバル社会の進展により多様な文化的歴史的背景をもった人々が共生す	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		る時代において，平和教育をどのように構築していけばよいか，ヒロシマからの視点を含め，実践的にアプローチする。授業では，積極的平和観，消極的平和観等の平和教育に関する理論について学び，各国における平和の概念について検討する。さらに，広島市内の小中学校，附属学校等，平和教育を実践している学校や平和教育関係施設への訪問・見学等，実践的なアプローチを行い，平和を継続発展するための実践力を培う。社会人を優先する。	
専攻共通科目	人文社会科学のための研究法と倫理	（概要）人文科学や社会科学で用いられる代表的な研究法について解説する。それぞれの分野における主要な研究を取り上げ，問題への気づきからその解決に至る過程がどのように進行していったのかを具体的に調べることにより，受講生の専門分野における方法論との異同や特徴についての理解を深める。また，人文社会科学領域における研究倫理について，具体的な事例を取り上げて解説し，受講生自身の研究テーマと関連づけながら倫理意識を高める。 （オムニバス方式／全 15 回） （105　佐野　浩一郎・130　秋山　高志／1 回） ガイダンスとして，本講義の全体像を解説する。 （9　衞藤　吉則・55　青木　利夫／1 回） 人文科学の諸分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （52　荒見　泰史・47　妹尾　好信／1 回） 人文科学の諸分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （46　後藤　弘志・53　市川　浩／1 回） 人文科学の諸分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （54　淺野　敏久・137　深見　兼孝／1 回） 人文科学の諸分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （44　久保田　啓一・50　井口　容子／1 回） 人文科学の諸分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （131　奥居　正樹・49　千田　隆／1 回） 経済学，経営学を中心とする分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （48　鈴木　喜久・23　星野　一郎／1 回） 経済学，経営学を中心とする分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （19　宮永　文雄・133　友次　晋介／1 回） 法学，政治学，社会学を中心とする分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （132　掛江　朋子・18　江頭　大藏／1 回） 法学，政治学，社会学を中心とする分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題を提起する。 （26　森田　愛子・136　中島　健一郎／1 回）	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		心理学・行動科学分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題について解説する。 （51　船瀬　広三・209　吉本　早苗／1 回） 心理学・行動科学分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題について解説する。 （26　森田　愛子・199　平川　真／1 回） 心理学・行動科学分野における主要な研究法について具体例に基づいて解説するとともに，研究の実施に伴って生じうる倫理的問題について解説する。 （135　三村　太郎・134　眞嶋　俊造／2 回） 人文社会科学領域における研究倫理について総括的に解説する。	
専攻共通科目	人文社会科学と社会	（概要）人文科学，社会科学の諸分野における研究が社会にどのような影響を及ぼし，また社会からどのような影響を受けてきたのかについて，自然科学や生命科学を含む他分野との関連も踏まえて解説する。それぞれの分野と社会との繋がりを学ぶことにより，人文科学，社会科学が今後の社会の形成においてどのような役割を期待されているのかの理解につなげる。また，受講生自身の研究テーマが人間社会の発展にどのような関与をし得るのかを考察することにより，研究意欲の向上を目指す。 （オムニバス方式／全 15 回） （247　永山　博之・148　相馬　敏彦・227　市橋　勝／1 回） ガイダンスとして，本講義の全体像を解説する。 （210　劉　金鵬・141　白井　純・56　中村　平／1 回） 多文化社会，比較文化などの分野と社会との関りについて，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （138　硲　智樹・57　根本　裕史／1 回） 哲学，倫理学，思想文化などの分野と社会との関りについて，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （59　金子　肇・58　中山　富廣・139　足立　孝／1 回） 日本史学，東洋史学，西洋史学などの分野と社会との関りについて，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （62　竹広　文明・145　後藤　拓也・146　有松　唯／1 回） 地理学，考古学，文化財学などの分野と社会との関りについて，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （142　陳　チュウ・60　川島　優子・61　吉中　孝志／1 回） 日本語学，日本文学，中国語学，中国文学，英米文学語学などの分野と社会との関りについて，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （140　下岡　友加・144　今道　晴彦・143　大野　英志／1 回） 日本語学，日本文学，中国語学，中国文学，英米文学語学などの分野と社会との関りについて，他の諸分野との関連を踏まえて解説する。 （64　瀧　敦弘・65　友田　康信・282　後藤　大策／1 回） 経済学に関する分野を中心として，社会との関りについて他の分野との関連を踏まえて解説する。 （149　原田　隆・66　小柏　葉子・67　盧　濤／1 回） 経営学に関する分野を中心として，社会との関りについて他の分野との関連を踏まえて解説する。	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
			（19　宮永　文雄／1 回） 法学に関する分野を中心として，社会との関りについて他の分野との関連を踏まえて解説する。 （247　永山　博之／1 回） 政治学に関する分野を中心として，社会との関りについて他の分野との関連を踏まえて解説する。 （18　江頭　大蔵・5　関　恒樹／1 回） 社会学に関する分野を中心として，社会との関りについて他の分野との関連を踏まえて解説する。 （63　石田　弓・147　尾形　明子・27　杉村　和美／1 回） 心理学・行動科学に関する分野を中心として，社会との関りについて他の分野との関連を踏まえて解説する。 （151　田中　亮・68　岩崎　克己・150　山根　典子／1 回） 心理学・行動科学に関する分野を中心として，社会との関りについて他の分野との関連を踏まえて解説する。 （69　中條　和光・152　中尾　敬・220　宮谷　真人／1 回） 心理学・行動科学に関する分野を中心として，社会との関りについて他の分野との関連を踏まえて解説する。	
		リサーチメソッド	リサーチメソッドでは,社会科学論文の作成をゴールとする研究活動の展開方法を実践的に習得する．論文作成を見据え，明確な問題設定をするための先行研究の収集，科学論文の読み方とその包括的なレビューの方法，リサーチ・クエスチョンと仮説の構築，仮説検証を行うためのデータ収集の技法やその分析方法の選定方法，分析結果の提示やそのプレゼンテーション技法に至るまでのプロセスを，実践的に習得する。	
プログラム専門科目	人文学プログラム	比較日本文化学研究Ａ	この授業は，戦後日本知識人の言論について考える。戦争を体験した世代によって議論された「日本」という国の来し方と行方に関する様々な言説を再検討する内容である。新聞と雑誌を中心とする資料を取り上げながら，資料精読・発表，及びテーマごとのディスカッションを行う。特に,「アジア」の語り方に注目し，日本とアジアをめぐる諸論を考察するとともに，知識人によって提起された「日本のあり方」を様々な射程で読み直し,「比較的」な視野で日本文化を構築する能力を身に着ける。	
		比較日本文化学研究Ｂ	この授業は，戦後日本知識人の言論について考え，戦争を体験した世代によって議論された「日本」という国の来し方と行方に関する様々な言説を再検討する内容である。新聞と雑誌を中心とする資料を取り上げながら，資料精読・発表，及びテーマごとのディスカッションを行う。主に戦後日本知識が行った知識生産をいかにして継承することについて,「日本」の外部からの視点を加えながら検討し,「比較的」な視野に備えられた思想研究の方法を習得する。	
		比較日本文化学研究Ｃ	「文化」を知るためには他の文化と比較をすることが有効な手段となる。本授業では，「日本文化」を世界諸地域の文化との比較を通じて相対化し，文化の動的性格と多様性の諸相を検討し，その上で，相互理解の可能性と方法を探る。各回のテーマはできるだけ卑近なものを取り上げる。授業形態は，講義と講読及び出席者の発表や討論を適宜組み合わせるが，授業中は参加者の積極的な発言を期待している。資料は必要に応じて配布する。授業への取り組みと期末のレポートによって評価する。	
		比較日本文化学研究Ｄ	比較による相対化を通じた客観化が文化理解には必要となる。本授業では，主としてアジア各地の文化と日本のそれとの比較によって文化の相対化と客観化について考える。とりあげる内容はできるだけ身近なものが望まれる。講義，講読，発表，討論，を随時おこなう。参加者の斬新な考え方が歓迎され，己を空しくすれば新しい境地が開く。資料は必要な場合に用意される。評価は，授業への取り組みとレポートによる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	日本文化論講義Ａ	「日本文化」を多分野の見地で検討し，文化というものが形成された道なりやその背後に存在する複雑な背景を探求する。文字資料を基礎とした伝統的な人文学の研究手法にとらわれず，日本と西洋の建築士に関する比較研究や日本経済が文化形成に及ぼした影響，又は日本語と諸外国語の対照研究など，複眼的な「日本文化論」を形成させるための視点を提供する。また，マルチメディアを活用しながら講義を中心とする授業を行い，受講者の関心に合わせて討論する時間も用意する。	
		日本文化論講義Ｂ	戦後における歴史的な事象に関する記述を中心に講義を行う。日本近現代史，特に同時代史の歴史と文化について，相対的な視点に立って理解する能力を身に付けることを目標としている。授業形態は主に講義とテキスト精読である。「現在」を理解するためのもっとも近い歴史へ注目し，国際的な視野を取り入れながら，様々な角度から「日本学」を研究する上に，不可欠とされる同時代史の知識を学問として取り扱う方法を学び，独自の日本文化論を形成させる力を養う。	
		日本文化論演習Ａ	「日本文化」を多分野の見地で検討し，文化というものが形成された道なりやその背後に存在する複雑な背景を探求する。文字資料を基礎とした伝統的な人文学の研究手法にとらわれず，日本と西洋の建築士に関する比較研究や日本経済が文化形成に及ぼした影響，又は日本語と諸外国語の対照研究など，複眼的な「日本文化論」を形成させるための視点を提供し。また，マルチメディアを活用しながら講義を中心とする授業を行い，受講者の関心に合わせて討論する時間も用意する。	
		日本文化論演習Ｂ	戦後における歴史的な事象に関する記述を中心に演習を行う。日本近現代史，特に同時代史の歴史と文化について，相対的な視点に立って理解する能力を身に付けることを目標としている。授業形態は主にテキストの精読とディスカッションである。「現在」を理解するためのもっとも近い歴史へ注目し，国際的な視野を取り入れながら，様々な角度から「日本学」を研究する上に，不可欠とされる同時代史の知識を学問として取り扱う方法を学ぶ。	
		歴史文化論講義Ａ	専門分野「比較日本文化学」とアジアの歴史文化の探究という主題を重ね合わせながら，探究の方法論自体を俎上に載せて講義=討議する。教育研究の営み自体と，知の生成と流通を反照的に考え，さらにナショナリズムと一国史の乗り越え（歴史学）が問われてきたことを振り返りつつ，資本と国家の結託という問題を手放さずに議論する。さまざまな（学問）領域で問題になっている議論や著作を持ち寄り，歴史の探究を踏まえながら，現在の社会文化を理解するための講読・精読と，報告によるディスカッションを実践する。	
		歴史文化論講義Ｂ	専門分野「比較日本文化学」とアジアの歴史文化の探究という主題を重ね合わせながら，探究の方法論自体を俎上に載せて講義=討議する。教育研究の営み自体と，知の生成と流通を反照的に考え，さらに「文化を書く」ことの行為遂行性と政治（人類学）が問われてきたことを振り返りつつ，マジョリティとマイノリティの権力関係という問題を手放さずに議論する。さまざまな（学問）領域で問題になっている議論や著作を持ち寄り，歴史の探究を踏まえながら，現在の社会文化を理解するための講読・精読と，報告によるディスカッションを実践する。	
		歴史文化論演習Ａ	広島県と中国地方を起点に東アジアとの関係の歴史と文化の諸相に分け入り，そこで生きた人びとの歴史経験を想像する試みをフィールド・トリップという方法を交えながら進めたい。フィールド・トリップについては，瀬戸内海の島嶼の歴史と文化交流，軍都や移民送り出し地域としての広島の近代史，被爆を含めたアジア・太平洋戦争の記憶と歴史経験などを対象とする。自らの問題関心が押し広げられることを，参加者同士の触発され合う関係性のなかで培っていく。	
		歴史文化論演習Ｂ	台湾や東アジア諸社会をめぐる植民地史と植民主義をテーマに，それに関わって生きた人びとの歴史経験と記憶を描くことを考える。また，植民主義や脱植民化，ナショナリズムに関わり，歴史や文化を記述すること自体の問題についても探究する。参加者の問題関心の所在を話し合い，その都度精読テキストを設定しながら，発表討議の会を織り込む。日本との関係を描いた映像資料の比較検討からも，感情の表象などをめぐって討議したい。	
		表象文化論講義Ａ	本講義では，明治期以降の日本近代文学の形成過程において，〈異文化〉としての外国文学がどのように〈自文化〉とつながるように〈翻訳〉され，読者にいかなる形で受容されたのかを検討する。講義内容をふまえた各自の発表によって，具体的な事例が示す翻訳文学の諸相を知るとともに，翻訳研究の基礎知識を習得する。領域横断的展開を見せる翻訳研究の中で翻訳文学を捉えることを通して，文	講義　５時間 演習　１０時間

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		学の表現やジャンル的特性への理解を深めたい。	
		表象文化論講義Ｂ	本講義では，1980 年代に迎えたとされる，翻訳学の「文化的転回」(cultural turn) に関連する文化理論を取り上げ，比較文学研究の観点から検討する。講義内容をふまえて欧米の基礎理論を講読しながら，非西欧諸国において，翻訳文学が果たす役割について討議する。二言語間の純粋な変換行為に映る翻訳を，二文化間の，錯綜した,双方向的な,しばしば不均一な空間で行われる交渉・交流現象として捉える力を涵養したい。	講義　５時間 演習　１０時間
		表象文化論演習Ａ	本演習では，選定したテキストの読解を通して，19 世紀から現在に至るまで，文化接触を繰り返しながら，新たな形で流通＝生成し続ける〈世界文学〉の概念とその可能性及び困難を検討する。そうした視点から日本近現代文学作品を分析した各自の発表をもとに，「読みのモード」としての世界文学に関わる諸理念を理解する。また,「世界文芸市場」をめぐる討議を行うことによって，人や情報の移動が引き起こす言語文化の諸問題へと視野の拡大を図る。	
		表象文化論演習Ｂ	本演習では，選定したテキストの読解によって，文学が，翻訳を通して，異なる文化圏・言語圏に入り，世界中に移動しながら，オリジナルの言語が抱える文化を反映し，また新しい生命を授けられていく動態を検証する。各自の発表を軸に，世界文学の〈正典〉の形成，文学という制度，世界機構との関係について討議する。既存の比較文学研究における受容論／影響論の成果に対する理解を深めるとともに，それを超える横断的なリーディングの可能性へと視野を広げたい。	
		言語文化論講義Ａ	（1）講義内容：言語と文化，地域方言と共通語，社会方言，ポライトネス，親密性とコミュニケーション，自己とコミュニケーション，人間関係とコミュニケーション（2）講義の目標：①身近な日本語の事例を材料にして，日本語によるコミュニケーションがどのような仕組みで成り立っているかを考察する。コミュニケーションに関する基礎知識を習得し日常の生活に活用してもらいたいと考えている。②日常の生活の中で異文化と接触する機会が増えている状況を考慮に入れ，異文化コミュニケーションに関する既存の理論や研究成果の検証を通して異文化理解を深めるとともに，文化比較の視点を習得する。	
		言語文化論講義Ｂ	（1）講義内容：談話の構造，談話を理解するメカニズム，身体とコミュニケーション，メディアの影響力，社会関係とコミュニケーション，情報社会とコミュニケーション，現代のコミュニケーションの特徴（2）講義の目標：①身近な日本語の事例を材料にして，日本語によるコミュニケーションがどのような仕組みで成り立っているかを考察する。コミュニケーションに関する基礎知識を習得し日常の生活に活用してもらいたいと考えている。②日常の生活の中で異文化と接触する機会が増えている状況を考慮に入れ，異文化コミュニケーションに関する既存の理論や研究成果の検証を通して異文化理解を深めるとともに，文化比較の視点を習得する。	
		言語文化論演習Ａ	（1）演習の内容：次のテーマに関連する論文を取り上げて検討する。言語と文化，地域方言と共通語，社会方言，ポライトネス，親密性とコミュニケーション，自己とコミュニケーション，人間関係とコミュニケーション（2）演習の目標：①言語学，言語教育関連の学術論文を批判的に検討する。学術論文の分析を通して，言語文化をより深く理解するとともに論文の書き方を習得する。②日常生活のなかで観察される諸現象の背後にある原理や法則性，歴史性などを考えている。③言語研究に関する知識を応用して，諸現象の観察から生まれた疑問をいかに研究につなげていくかを習得する。	
		言語文化論演習Ｂ	（1）演習の内容：次のテーマに関連する論文を取り上げて検討する。談話の構造，談話の理解，身体とコミュニケーション，メディアの影響力，社会関係とコミュニケーション，情報社会とコミュニケーション，現代のコミュニケーション（2）演習の目標：①言語学，言語教育関連の学術論文を批判的に検討する。学術論文の分析を通して，言語文化をより深く理解するとともに論文の書き方を習得する。②日常生活のなかで観察される諸現象の背後にある原理や法則性，歴史性などを考えている。③言語研究に関する知識を応用して，諸現象の観察から生まれた疑問をいかに研究につなげていくかを習得する。	
		超域文化論講義Ａ	（1）講義内容：この講義では東アジアと東南アジアを中心に取り上げて，映像を駆使しながら文化比較を行う。（2）講義の目標：現代社会では人や文化が国境を越えて頻繁に接触し合っている。そのなかにあって人文学の研究はますます多様化・複雑化しており，新たな文化論の構築が求められている。この授業では，人間に関わる様々な社会文化事象について，国や地域，言語，ジャンル等の境界	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		を越えた領域横断的な視点から講義を行う。	
		超域文化論講義Ｂ	（1）講義内容：この講義ではヨーロッパ，南北アメリカ，アフリカを中心に取り上げて，映像を駆使しながら文化比較を行う。（2）講義の目標：現代社会では人や文化が国境を越えて頻繁に接触し合っている。そのなかにあって人文学の研究はますます多様化・複雑化しており，新たな文化論の構築が求められている。この授業では，人間に関わる様々な社会文化事象について，国や地域，言語，ジャンル等の境界を越えた領域横断的な視点から講義を行う。	
		超域文化論演習Ａ	（1）演習の内容：この演習では東アジアと東南アジアの各国を舞台にした映像を比較文化の観点から分析する。（2）演習の目標：現代社会では人や文化が国境を越えて頻繁に接触し合っている。そのなかにあって人文学の研究はますます多様化・複雑化しており，新たな文化論の構築が求められている。この授業では，人間に関わる様々な社会文化事象について，国や地域，言語，ジャンル等の境界を越えた領域横断的な視点から分析と考察を行う。	
		超域文化論演習Ｂ	（1）演習の内容：この演習ではヨーロッパ，南北アメリカ，アフリカの各国を舞台にした映像を比較文化の観点から分析する。（2）演習の目標：現代社会では人や文化が国境を越えて頻繁に接触し合っている。そのなかにあって人文学の研究はますます多様化・複雑化しており，新たな文化論の構築が求められている。この授業では，人間に関わる様々な社会文化事象について，国や地域，言語，ジャンル等の境界を越えた領域横断的な視点から分析と考察を行う。	
		西洋哲学演習Ａ	この授業の目標は，哲学文献の読解能力と哲学的問題に取り組む能力を養うことである。そのためこの授業では，言語哲学，心の哲学，現代行為論，社会哲学そして政治哲学などの現代の哲学的議論における主要なトピックからひとつを選び，それをテーマとする基本的な哲学文献及び最新の哲学文献を取り上げ，それを講読する。この授業では特に哲学文献の読解能力を養うことに重点を置き，議論の構造を精確に辿りながら著者の見解を理解するとともに，現代哲学に関する知識を身に付けることを目指す。	
		西洋哲学演習Ｂ	この授業の目標は，哲学文献の読解能力と哲学的問題に取り組む能力を養うことである。そのためこの授業では，言語哲学，心の哲学，現代行為論，社会哲学そして政治哲学などの現代の哲学的議論における主要なトピックからひとつを選び，それをテーマとする基本的な哲学文献及び最新の哲学文献を取り上げ，それを講読する。この授業では，特に自ら哲学的問題に取り組むことのできる能力を養うことに重点を置き，授業参加者である学生のプレゼンテーションとディスカッションを中心にして授業を進める。	
		西洋哲学特別演習Ａ	この授業の目標は，現代ドイツ哲学における主要文献を読み進めつつ，関連資料を探索し，その活用を通じて西洋哲学の研究方法を習得することにある。授業計画は，現象学的価値論及び徳論の発端についてのガイダンスに始まり，その代表的思想家であるブレンターノ，シェーラー，及び彼らが批判対象としたカントの実践哲学文献の背景説明の後に，これら一次文献を丹念に読み進めつつ，そのテキストにまつわる概念史・問題史的知識を獲得するとともに，関連一次資料及び二次資料の活用を通じて，西洋哲学の研究方法を実践的かつ有機的に学ぶ。	
		西洋哲学特別演習Ｂ	この授業の目標は，現代ドイツ哲学における主要文献を読み進めつつ，関連資料を探索し，その活用を通じて西洋哲学の研究方法を習得することにある。授業計画は，現象学的価値論及び徳論の展開についてのガイダンスに始まり，その代表的思想家であるハルトマン，フッサール，さらにはミュラー，ボルヒャースら同時代の徳論文献の背景説明の後に，これら一次文献を丹念に読み進めつつ，そのテキストにまつわる概念史・問題史的知識を獲得するとともに，関連一次資料及び二次資料の活用を通じて，西洋哲学の研究方法を実践的かつ有機的に学ぶ。	
		哲学文献資料研究Ａ	この授業の目標は，哲学文献の原典による読解を通じて，文献資料の扱い方を学ぶとともに，哲学的思考の基礎的な訓練を行なうことである。授業計画は，受講者の関心に応じて，哲学文献の中から，特定の文献を選定し，その文献を原典で読むために必要な読解力の修得に，一定の時間を充て，基礎的な訓練を行なうことを主眼とする。次いで，当該文献を，研究文献等を補助資料として参照しつつ，原典で講読し，原著者の哲学的思考法を摘出する基礎的な方法を学ぶ。	
		哲学文献資料研究Ｂ	この授業の目標は，哲学文献の原典による読解を通じて，文献資料の扱い方を学ぶとともに，哲学的思考の発展的訓練を行なうことである。授業計画は，受講者の関心に応じて，哲学文献の中から，特定の文献を選定し，必要に応じて，その文献を原典で読むために必要な読解力の修得に，一定の時間を充てる。次いで，	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		当該文献を，研究文献等を補助資料として参照しつつ，原典で講読し，原著者の哲学的思考法を摘出する発展的方法を学ぶ。	
		西洋哲学史演習A	この授業の目標は，古典的な哲学文献を読解する能力を養うとともに，西洋哲学史についての専門的な知識を習得することである。そのために，西洋哲学史における近・現代の独語圏又は英語圏の古典的哲学文献を取り上げ，原典で講読する。この授業では，特に一次文献の丁寧な読解に重点を置く。その際には，複数の翻訳書を比較しながら，翻訳と原典を相互に参照しつつ，翻訳に表されている解釈の相違に目を向けて，より深い原典の読解を目指す。	
		西洋哲学史演習B	この授業の目標は，古典的な哲学文献を読解する能力を養うとともに，西洋哲学史についての専門的な知識を習得することである。そのために，西洋哲学史における近・現代の独語圏又は英語圏の古典的哲学文献を取り上げ，原典で講読する。この授業では，様々な二次文献(先行研究)を参照しながら文献の解釈に取り組み，そこに見いだされる哲学的問題について参加者同士でディスカッションを行うことに重点を置く。また，これらを通じて，西洋哲学史についての専門的な知識とその研究方法を習得することを目指す。	
		西洋哲学史特別演習A	この授業の目標は，現代ドイツ哲学における主要文献を読み進めつつ，関連資料を探索し，その活用を通じて西洋哲学史の研究方法を習得することにある。授業計画は，新カント派・現象学・哲学的人間学についてのガイダンスに始まり，とくに新カント派のコーヘン，ヴィンデルバント，リッカートの認識論・科学論に関するテキストの背景説明の後に，これらの一次文献を丹念に読み進めつつ，そのテキストにまつわる概念史・問題史的知識を獲得するとともに，関連一次資料及び二次資料の活用を通じて西洋哲学史の研究方法を実践的かつ有機的に学ぶ。	
		西洋哲学史特別演習B	この授業の目標は，現代ドイツ哲学における主要文献を読み進めつつ，関連資料を探索し，その活用を通じて西洋哲学史の研究方法を習得することにある。授業計画は，新カント派以後の現象学・哲学的人間学についてのガイダンスに始まり，ブレンターノ心理学，フッサール認識論，シェーラー，プレスナー，ゲーレンの人間学に関するテキストの背景説明の後に，これらの一次文献を丹念に読み進めつつ，そのテキストにまつわる概念史・問題史的知識を獲得するとともに，関連一次資料及び二次資料の活用を通じて西洋哲学史の研究方法を実践的かつ有機的に学ぶ。	
		西洋哲学史文献資料研究A	この授業の目標は，西洋哲学史上の文献を原典で読解するとともに，二次文献の扱い方を含めた，西洋哲学史研究の基礎的な方法を学ぶことである。授業計画は，はじめに，受講者の関心に応じて，古代，中世，近現代にわたる西洋哲学史の文献の中から，特定の文献を選定する。次いで，受講者の学力に鑑みて，必要に応じて，文献を原典で読むために必要な読解力の修得に一定の時間を充てる。次いで，原典及び各国語による翻訳・註解等，さらに，現時点で入手可能な研究文献の調査・探索方法を学んだ後，入手した一次文献，二次文献の読解作業を行なう。	
		西洋哲学史文献資料研究B	この授業の目標は，西洋哲学史上の文献を原典で読解するとともに，二次文献の扱い方を含めた，西洋哲学史研究の発展的な方法を学ぶことである。授業計画は，はじめに，受講者の関心に応じて，古代，中世，近現代にわたる西洋哲学史の文献の中から，特定の文献を選定する。次いで，原典及び各国語による翻訳・註解等，さらに，現時点で入手可能な研究文献の調査・探索方法を学んだ後，入手した一次文献，二次文献の読解作業を行なう。	
		西洋哲学特講	この授業の目標は，古代から現代に至る西洋哲学の歴史，及びそこにおいて考究されてきた哲学の諸問題と取り組み，それを通じて西洋哲学及び西洋哲学史の研究方法を習得する。授業計画は，自然，社会，世界，神，存在の意味，論理，人間の認識，科学の方法など，西洋哲学史上の主要な諸問題の中から，開講年度ごとに特定のトピックと時代とを選び出し，それにまつわる概念史・問題史的知識を獲得するとともに，西洋哲学・哲学史の研究方法を実践的かつ有機的に学ぶ。	
		インド哲学研究	本授業は，ヴェーダ期から中世までのインド哲学に関する文献を解読し，インド哲学の存在論・認識論・言語理論・宇宙論・解脱論や，インド古典文化に対する理解を深めることを目的とする。文献解読に当たっては，複数の校訂本や写本資料を可能な限り収集し，相互に比較対照を行なう。伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の先行研究を批判的に検討する思考法を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		原典読解の方法を習得する。	
		インド哲学史講義	本授業は，ヴェーダ期から中世までのインド哲学に関する文献を取り上げ，インド哲学の存在論・認識論・言語理論・宇宙論・解脱論や，インド古典文化に対する理解を深めることを目的とする。文献解読に当たっては，複数の校訂本や写本資料を可能な限り収集し，相互に比較対照を行なう。伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の先行研究を批判的に検討する思考法を養う。授業は講義形式で実施する。授業で配布する翻訳資料を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		インド哲学演習Ａ	本授業は，サンスクリット文法学・詩学・文学などに関する文献を解読し，インドの言語理論・修辞理論や，インド古典文化に対する理解を深めることを目的とする。本年度はインド最古の聖典『リグ・ヴェーダ』を取り上げる。最新の言語学的研究の成果を踏まえつつ，伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の研究者による解釈を批判的に検討する感覚を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		インド哲学演習Ｂ	本授業は，サンスクリット文法学・詩学・文学などに関する文献を解読し，インドの言語理論・修辞理論や，インド古典文化に対する理解を深めることを目的とする。本年度は文法学者パタンジャリの『大註釈（マハーバーシャ）』を取り上げる。伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代語訳を批判的に検討する感覚を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		インド哲学史演習Ａ	本授業は，ヴェーダ期から中世までのインド哲学に関する文献を解読し，インド哲学の歴史的展開に対する理解を深めることを目的とする。本年度は文法学者バットージ・ディークシタの『シッダーンタ・カウムディー』を取り上げる。伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の研究を批判的に検討する思考法を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		インド哲学史演習Ｂ	本授業は，ヴェーダ期から中世までのインド哲学に関する文献を解読し，インド哲学の歴史的展開に対する理解を深めることを目的とする。本年度はヴェーダ補助学の一つである語源学の文献として知られるヤースカの『語源学（ニルクタ）』を取り上げる。伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の研究を批判的に検討する思考法を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		仏教学研究	本授業は，インド・チベット仏教思想に関する文献を解読し，中観思想・唯識思想・仏教認識論などに対する理解を深めることを目的とする。文献解読に当たっては，複数のサンスクリット校訂本，写本資料，チベット語訳，漢訳を可能な限り収集し，相互に比較対照を行なう。インド撰述・チベット撰述の伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の先行研究を批判的に検討する思考法を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		仏教思想史研究	本授業は，インド・チベット仏教思想に関する文献を解読し，仏教思想の歴史的展開に対する理解を深めることを目的とする。文献解読に当たっては，複数のサンスクリット校訂本，写本資料，チベット語訳，漢訳を可能な限り収集し，相互に比較対照を行なう。インド撰述・チベット撰述の伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の先行研究を批判的に検討する思考法を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		仏教学演習Ａ	本授業は，初期仏教に関するパーリ語文献を解読し，仏教思想の起源とパーリ語読解法に対する理解を深めることを目的とする。本年度は『餓鬼事経』を取り上げる。文献解読に当たっては，パーリ聖典協会（Pāli Text Society）の校訂本を底本とし，伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の先行研究を批判的に検討する思考法を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		仏教学演習Ｂ	本授業は，初期仏教に関するパーリ語文献を解読し，仏教思想の起源とパーリ語読解法に対する理解を深めることを目的とする。本年度は『天宮事経』を取り上げる。文献解読に当たっては，パーリ聖典協会（Pāli Text Society）の校訂本を底本とし，伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の先行研究を批	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		判的に検討する思考法を養う。授業はゼミ形式で実施する。出席者が準備する翻訳資料の検討を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		仏教思想史講義A	本授業は，インド・チベット仏教思想に関する文献を取り上げ，インドからチベットまでの仏教思想の歴史的展開に対する理解を深めることを目的とする。本年度はチャンドラキールティの『入中論』を取り上げる。文献解読に当たっては，サンスクリット校訂本，複数のチベット語訳の比較対照を行なう。インド撰述・チベット撰述の伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の先行研究を批判的に検討する思考法を養う。授業は講義形式で実施する。授業で配布する翻訳資料を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		仏教思想史講義B	本授業は，インド・チベット仏教思想に関する文献を取り上げ，インドからチベットまでの仏教思想の歴史的展開に対する理解を深めることを目的とする。本年度はチャンドラキールティの『明句論』を取り上げる。文献解読に当たっては，複数のサンスクリット校訂本，写本資料，チベット語訳を可能な限り収集し，相互に比較対照を行なう。インド撰述・チベット撰述の伝統的な註釈に依拠した原典読解の方法を学び，現代の先行研究を批判的に検討する思考法を養う。授業は講義形式で実施する。授業で配布する翻訳資料を通じて，上記の厳密な原典読解の方法を習得する。	
		インド哲学仏教学総合演習A	本授業は，インド哲学・仏教学研究の方法論を習得し，論理的思考能力を養うことを目的とする。参加者が自身の研究成果を交替に発表し，その内容を全員でディスカッション形式により批判的に検討する。担当者は完全原稿（日本語又は英語）を配布して発表し，他参加者との質疑応答を通じて，サンスクリット・チベット語の原典解釈，問題設定から課題解決までの論理展開，論文的表現の妥当性を検証する。本授業を通じて，論文作成能力・コニュニケーション能力の向上と，インド哲学・仏教学の各分野の最新の研究状況に対する理解の深化が期待される。	共同
		インド哲学仏教学総合演習B	本授業は，インド哲学・仏教学研究の方法論を習得し，論理的思考能力を養うことを目的とする。参加者が自身の研究成果を交替に発表し，その内容を全員でディスカッション形式により批判的に検討する。担当者は完全原稿（日本語又は英語）を配布して発表し，他参加者との質疑応答を通じて，サンスクリット・チベット語の原典解釈，問題設定から課題解決までの論理展開，論文的表現の妥当性を検証する。本授業を通じて，論文作成能力・コニュニケーション能力の向上と，インド哲学・仏教学の各分野の最新の研究状況に対する理解の深化が期待される。（インド哲学仏教学総合演習Aの継続）	共同
		倫理学基礎演習A	この授業の目標は，基本的な倫理学文献の読解能力を身に着けることと，ニーチェの基本思想を理解することである。具体的方法としては，ニーチェの主著とされることが多い『ツァラトゥストラはこう言った』を講読していく。特に，この書の執筆時期から前面に押し出されてくる「生の肯定」の思想を，その現代的意義も視野に入れながら，ともに考究していく。また，『ツァラトゥストラ』には数多くの訳書があるが，それらをいくつか「読み比べ」することを通して，日本語による表現技術についても探究していく。	
		倫理学基礎演習B	この授業の目標は，現代的な倫理的問題への応用を意識しつつ文献を読解する能力を身に着けることと，ニーチェ哲学に対する批判的視点からの考察の力を磨くことである。具体的方法としては，ニーチェの主著とされることが多い『ツァラトゥストラはこう言った』を講読していく。特に，この書の執筆時期から前面に押し出されてくる「生の肯定」の思想を，その現代的意義も視野に入れながら，ともに考究していく。また，『ツァラトゥストラ』には数多くの訳書があるが，それらをいくつか「読み比べ」することを通して，日本語による表現技術についても探究していく。	
		応用倫理学方法論研究A	この授業の目標は，文献読解・人物研究とディスカッションを通して，倫理的諸問題を実践的見地から思考する能力を養うことである。A では，宮沢賢治の倫理的実践と基本思想について理解することを特に目標とする。具体的方法としては，宮沢賢治の作品を倫理学的観点から読解していく。賢治はもちろん倫理学者ではないが，彼ほど「倫理を生きよう」とした実践的人物はそうそういない。にもかかわらず，倫理学の分野においてはあまり研究されてこなかった。本演習では，童話を中心とした作品の読解を通して，現代的な倫理問題を視野に入れつつ，実践的な倫理について探求していきたい。また，本演習では，文学作品を倫理学研究の題材にするための方法論も探究していきたい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	応用倫理学方法論研究Ｂ	この授業の目標は，文献読解・人物研究とディスカッションを通して，倫理的諸問題を実践的見地から思考する能力を養うことである。B では，宮沢賢治の現代倫理学における意義を考究することと賢治の実践と思想を批判的見地から検討する能力を身に着けることを特に目標とする。具体的方法としては，宮沢賢治の作品と実践を倫理学的観点から読解していく。賢治はもちろん倫理学者ではないが，彼ほど「倫理を生きよう」とした実践的人物はそうそういない。にもかかわらず，倫理学の分野においてはあまり研究されてこなかった。本演習では，童話を中心とした作品の読解を通して，現代的な倫理問題を視野に入れつつ，実践的な倫理について探求していきたい。また，本演習では，文学作品を倫理学研究の題材にするための方法論も探究していきたい。	
		応用倫理学基礎演習Ａ	この授業の目標は，最新の研究論文の読解と哲学的問題に取り組む能力を養うことにある。授業計画は，応用倫理学の最前線の議論を理解するため，定評のある情報倫理学のジャーナルから受講者の関心のある論文を各受講者に選択してもらい，担当者には論文の内容の紹介をおこなわせる。その内容を全受講者により検討する。とりわけ応用倫理学についての研究をおこなうにあたり，当該領域に関する最新の知識・情報を理解し，現在の論争状況を把握することは不可欠である。可能であれば，担当論文だけでなく，引用・言及されている文献にも当たることが望ましい。	
		応用倫理学基礎演習Ｂ	この授業の目標は，最新の研究論文の読解と哲学的問題に取り組む能力を養うことにある。授業計画は，応用倫理学の最前線の議論を理解するため，Cambridge Companion シリーズ(Cambridge University Press)より自らの関心に合わせて論文を選択し，その紹介と検討をおこなう。当該論文だけでなく，そこで言及されている様々な研究論文にも直接あたり，解釈において何が問題になっており，どのような説が提唱されているのかを包括的に理解することを目指す。	
		応用倫理学文献研究Ａ	この授業の目標は，研究主題に関する包括的なサーヴェイをおこなう能力を養う。授業計画は，各種の哲学的論題についての最新のサーヴェイをおこなっている Stanford Encyclopedia of Philosophy から，受講者の関心に合わせていくつかのトピックを選択し，それぞれの論題について，何が問題になっており，何が争点なのかを考えていく。英語による学問的記述を単に訳読するのではなく，議論の流れを把握し，適切に要約し必要な情報をとりだせるようになることを目指す。	
		応用倫理学文献研究Ｂ	この授業の目標は，研究主題に関する包括的なサーヴェイをおこなう能力を養うことに加え，その主題について自らの見解を深めることにある。 授業計画は，各種の哲学的論題についての最新のサーヴェイをおこなっている Stanford Encyclopedia of Philosophy から選んだテーマについて現在の論争状況を把握した上で，その問題について参照数の多い主要論文を読解し，内容の是非を検討していく。	
		倫理思想史基礎演習Ａ	この授業の目標は，倫理学に関する基礎的な知識を，西洋の倫理思想を通して理解することにある。授業計画は，「善」に焦点を当て，まず，「ひとはより善くなりうるか」という課題について話し合った後，倫理学上の見取り図を描き，次に,古代倫理思想（ソクラテス，プラトン，アリストテレス，プロティヌス，中世倫理思想（アウグスティヌス，トマス･アクィナス），ドイツ観念論（カント），功利主義（ミル），実存主義（キルケゴール，ニーチェ）の具体的な見方を理解していく。	
		倫理思想史基礎演習Ｂ	この授業の目標は，倫理学に関する基礎的な知識を，日本の倫理思想を通して理解することにある。授業計画は，「善」に焦点を当て，まず初めに,西洋近代の認識論的・存在論的二元論の構図をおさえたうえで，次に,一元的な認識・存在論を展開する近世の日本倫理思想（禅僧仙厓義梵，中江藤樹），近代日本の倫理思想（西晋一郎，山本空外），さらには現代日本の倫理思想（中村雄二郎）について学習し，それらがもつ共通のパラダイムを理解する。	
		倫理思想史文献研究Ａ	この授業の目標は，西晋一郎の思想を中心に近代日本思想の特徴と構造を理解することにある。授業計画は，西晋一郎の著作『忠孝論』（岩波書店）,『倫理学の根本問題』（岩波書店）ならびに衛藤吉則著『西晋一郎の思想－広島から「平和・和解」を問う』（ナカニシヤ出版）を輪読し，西晋一郎の思想がもつ特有の構造（「特殊即普遍のパラダイム」や「主体変容のプロセス」や「虚の思想」など）を理解し，西思想がもつ現代的意義を考究する。	
		倫理思想史文献研究Ｂ	この授業の目標は，西晋一郎の思想を中心に近代日本思想の特徴と構造を理解することにある。授業計画は，西晋一郎の著作『忠孝論』（岩波書店）,『倫理学の	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		根本問題』（岩波書店）ならびに衛藤吉則著『西晋一郎の思想－広島から「平和・和解」を問う』（ナカニシヤ出版）を輪読し，西晋一郎の思想がもつ特有の構造（「特殊即普遍のパラダイム」や「主体変容のプロセス」や「虚の思想」など）を考察し，その思想がもつ平和理論としての可能性，さらには近代日本思想の特徴と構造を理解する。	
		応用倫理思想基礎演習Ａ	この授業の目標は，ルドルフ・シュタイナーのドイツ語原典を講読し，彼の認識論の構造を理解することにある。授業計画は，Rudolf Steiner のドイツ語著作“Wahrheit und Wissenschaft”を輪読し，そこで検討される認識論の構造を当時の哲学上の議論をふまえて理解する。学習する具体的な箇所は，第二章「カントにおける認識論上の根本問題」で，そこにおいて認識的二元論の克服として提示される「思考内容の一元論」の構造を理解し，その現代的意義について考察する。	
		応用倫理思想基礎演習Ｂ	この授業の目標は，ルドルフ・シュタイナーのドイツ語原典を講読し，彼の認識論の構造を理解することにある。授業計画は，Rudolf Steiner のドイツ語著作“Wahrheit und Wissenschaft”を輪読し，そこで検討される認識論の構造を当時の哲学上の議論をふまえて理解する。学習する具体的な箇所は，第三章「カント以降の認識論」であり，そこにおいて，エドワルト・フォン・ハルトマンの「超越論的観念論」とシュタイナー自身の「思考内容の一元論」の構造を比較検討する。	
		中国哲学文献研究Ａ	本演習は，経学を中心とする中国の哲学やその派生としての日本漢学に関する文献の精読を通して，中国哲学の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，歴代の注釈を利用しながら，それぞれの注釈に即した解釈を与えつつ，より妥当な解釈を求める手法を修得していく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国哲学文献研究Ｂ	本演習は，経学を中心とする中国の哲学やその派生としての日本漢学に関する文献の精読を通して，中国哲学の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国哲学文献研究Ａで修得した技法に加え，各種の工具書を利用しつつ，明示されていない典拠を踏まえながら原文を精確に解釈していく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国哲学文献研究Ｃ	本演習は，経学を中心とする中国の哲学やその派生としての日本漢学に関する文献の精読を通して，中国哲学の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国哲学文献研究Ｂで修得した技法による精確な本文理解を基礎として，当該資料に示された哲学思想を再構成していく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国哲学文献研究Ｄ	本演習は，経学を中心とする中国の哲学やその派生としての日本漢学に関する文献の精読を通して，中国哲学の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国哲学文献研究Ｃで修得した技法による当該文献の哲学思想の理解を基礎として，他文献との関係を視野におきながら，それを思想史的に位置づけていく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国思想文献研究Ａ	本演習は，諸子学を中心とする中国の思想やその派生としての日本漢学に関する文献の精読を通して，中国思想の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，歴代の注釈を利用しながら，それぞれの注釈に即した解釈を与えつつ，より妥当な解釈を求める手法を修得していく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国思想文献研究Ｂ	本演習は，諸子学を中心とする中国の思想やその派生としての日本漢学に関する文献の精読を通して，中国思想の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国思想文献研究Ａで修得した技法に加え，各種の工具書を利用しつつ，明示されていない典拠を踏まえながら原文を精確に解釈していく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	中国思想文献研究C	本演習は，諸子学を中心とする中国の思想やその派生としての日本漢学に関する文献の精読を通して，中国思想の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国思想文献研究Bで修得した技法による精確な本文理解を基礎として，当該資料に示された哲学思想を再構成していく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国思想文献研究D	本演習は，諸子学を中心とする中国の思想やその派生としての日本漢学に関する文献の精読を通して，中国思想の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国思想文献研究Cで修得した技法による当該文献の哲学思想の理解を基礎として，他文献との関係を視野におきながら，それを思想史的に位置づけていく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国文化文献研究A	本演習は，中国の文化やその派生としての日本漢学に関する多様な文献の精読を通して，中国文化の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，歴代の注釈を利用しながら，それぞれの注釈に即した解釈を与えつつ，より妥当な解釈を求める手法を修得していく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国文化文献研究B	本演習は，中国の文化やその派生としての日本漢学に関する多様な文献の精読を通して，中国文化の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国文化文献研究Aで修得した技法に加え，各種の工具書を利用しつつ，明示されていない典拠を踏まえながら原文を精確に解釈していく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国文化文献研究C	本演習は，中国の文化やその派生としての日本漢学に関する多様な文献の精読を通して，中国文化の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国文化文献研究Bで修得した技法による精確な本文理解を基礎として，当該資料に示された文化を再構成していく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国文化文献研究D	本演習は，中国の文化やその派生としての日本漢学に関する多様な文献の精読を通して，中国文化の本質及びその理論構造，また日本漢学への伝播状況や潤色の有り様などを考えるものである。文献の読解に際しては，中国文化文献研究Cで修得した技法による当該文献の文化の理解を基礎として，他文献との関係を視野におきながら，それを思想史的に位置づけていく技量を身に着けていく。演習においては，担当する学生に書き下し・注釈語釈・出典などを記した資料を作成し，口頭発表することを求める。	
		中国思想学専題講義	本講義は，多様な実相を有する中国の哲学・思想，及びその派生としての日本の哲学・思想へのアプローチを，さまざまな手法・手順を用いて試みることによって，受講生各自の中国思想文化学研究にその具体例を示すことを目的とする。講義は毎回教員が現在行っている研究と関連するものとなる。受講生には講義の内容もさることながら，その着想，問題の設定，及び問題解決のための手順等に目配りし，常に自らの修士論文作成を意識しながら学ぶことを求める。	隔年
		中国文化学専題研究	本演習は，多様な実相を有する中国の思想・文化，及びその派生としての日本の思想・文化へのアプローチを，さまざまな手法・手順を用いて試みることによって，受講生各自の中国思想文化学研究にその具体例を示すことを目的とする。講義は毎回教員が現在行っている研究と関連するものとなる。受講生には講義の内容もさることながら，その着想，問題の設定，及び問題解決のための手順等に目配りし，常に自らの修士論文作成を意識しながら学ぶことを求める。	隔年
		中国思想文化学研究法A	本演習は，中国思想文化学における著名な先行研究を分析・検討することによって，学生自身の修士論文作成のための力を培うことを目的とするものである。学生（１年次生）は自らの修士論文作成のために必読の先行研究をセレクトし，筆者の研究業績を明らかにした上で，当該論文の構成を提示し，検討（a,研究の視点・方法。評価すべき点や独創性。b,資料の処理・論述や構成で特筆すべき点。c,	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		問題点，感想，意見。）を加える。他の参加者（２年次生も含む）も事前に当該論文を読み，質疑応答の中で論文への理解を深めていく。	
		中国思想文化学研究法Ｂ	本演習は，前期開講のＡに引き続き中国思想文化学における著名な先行研究を分析・検討することによって，学生自身の修士論文作成のための力を培うことを目的とするものである。学生（１年次生）は自らの修士論文作成のために必読の先行研究をセレクトし，筆者の研究業績を明らかにした上で，当該論文の構成を提示し，検討（a,研究の視点・方法。評価すべき点や独創性。b,資料の処理・論述や構成で特筆すべき点。c,問題点，感想，意見。）を加える。他の参加者（２年次生も含む）も事前に当該論文を読み，質疑応答の中で論文への理解を深めていく。	共同
		中国思想文化学研究法Ｃ	本演習は，前年開講のＢに引き続き中国思想文化学における著名な先行研究を分析・検討することによって，学生自身の修士論文作成のための力を培うことを目的とするものである。学生（２年次生）は自らの修士論文作成のために必読の先行研究をセレクトし，筆者の研究業績を明らかにした上で，当該論文の構成を提示し，検討（a,研究の視点・方法。評価すべき点や独創性。b,資料の処理・論述や構成で特筆すべき点。c,問題点，感想，意見。）を加える。他の参加者（１年次生も含む）も事前に当該論文を読み，質疑応答の中で論文への理解を深めていく。「A」と同じ授業内容であるが，「C」の受講生にはより深い理解を要求する。	共同
		中国思想文化学研究法Ｄ	本演習は，前期開講のＣに引き続き中国思想文化学における著名な先行研究を分析・検討することによって，学生自身の修士論文作成のための力を培うことを目的とするものである。学生（２年次生）は自らの修士論文作成のために必読の先行研究をセレクトし，筆者の研究業績を明らかにした上で，当該論文の構成を提示し，検討（a,研究の視点・方法。評価すべき点や独創性。b,資料の処理・論述や構成で特筆すべき点。c,問題点，感想，意見。）を加える。他の参加者（１年次生も含む）も事前に当該論文を読み，質疑応答の中で論文への理解を深めていく。「B」と同じ授業内容であるが，「D」の受講生にはより深い理解を要求する。	共同
		歴史文化研究	（概要）歴史学研究は，対象とする国や地域によって扱う史料や分析方法が異なる面がある一方，共通する面も勿論ある。それは対象とする時期（年代）においても同様である。その意味で，自分の研究と異なる国・地域や時代の専門家の扱う史料や研究成果の話を聴くことは，自身の研究の方向性を探る上で重要である。そこで，歴史文化学講座の全教員がそれぞれの専門分野で扱った研究課題や利用した史料，そしてその成果について話す講義に触れることで，受講生それぞれが自身の研究について改めて考える機会として欲しい。 授業は歴史文化学講座の全教員によるオムニバス形式で講義をおこない，第一回は受講生と授業を担当する全教員が参集し，教員の専門と講義内容，受講生の研究対象について確認する。また受講生は日本史・東洋史・西洋史の区切り毎にレポートを提出することとし，最終日に授業を担当した全教員が再び参集して総合討論を実施する。 （オムニバス方式／全 15 回） （11　本多　博之／2 回） 日本中世に関する歴史文化研究 （58　中山　富廣／2 回） 日本近世に関する歴史文化研究 （108　奈良　勝司／1 回） 日本近代に関する歴史文化研究 （117　舩田　善之／2 回） アジアに関する歴史文化研究 （30　八尾　隆生／2 回） アジアに関する歴史文化研究	隔年・オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
			（59　金子　肇／1 回） アジアに関する歴史文化研究 （12　前野　弘志／2 回） ヨーロッパに関する歴史文化研究 （139　足立　孝／2 回） ヨーロッパに関する歴史文化研究 （31　井内　太郎／1 回） ヨーロッパに関する歴史文化研究	
プログラム専門科目	人文学プログラム	文化交流－日本と世界－	（概要）現代は，グローバル社会の中で国際的な視野・世界観をもつことが，高度専門職業人にとって欠かせない時代であり，異なった背景をもつ国・地域・個人を理解するために，文化交流の歴史を学ぶことはきわめて重要である。そこで，歴史文化学講座の全教員がそれぞれの専門分野で日本・アジア・ヨーロッパの視点から文化交流の歴史を講義することで現在，そして未来のあるべき姿を考える機会とする。 授業は歴史文化学講座の全教員によるオムニバス形式で講義をおこない，第一回は受講生と授業を担当する全教員が参集し，教員の専門と講義内容，受講生の研究対象について確認する。また受講生は日本史・東洋史・西洋史の区切り毎にレポートを提出することとし，最終日に授業を担当した全教員が再び参集して総合討論を実施する。 （オムニバス方式／全 15 回） （11　本多　博之／2 回） 日本中世に関する文化交流 （58　中山　富廣／2 回） 日本近世に関する文化交流 （108　奈良　勝司／1 回） 日本近代に関する文化交流 （117　舩田　善之／2 回） アジアに関する文化交流 （30　八尾　隆生／2 回） アジアに関する文化交流 （59　金子　肇／1 回） アジアに関する文化交流 （12　前野　弘志／2 回） ヨーロッパに関する文化交流 （139　足立　孝／2 回） ヨーロッパに関する文化交流 （31　井内　太郎／1 回）	隔年・オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		ヨーロッパに関する文化交流	
		日本地域文献資料実習	地域の文化財や史跡を実見し，歴史学的に考察する「日本地域史研究実習」を実施する前提として，実習を実施する対象地域の文化財や史跡についてあらかじめ学習する。対象地域に関する古代から近現代までの歴史的歩みについて図書・論文を読むことにより皆で共有し，現地におけるフィールド調査の準備作業とする。実習実施地域に関する学術成果（図書・論文）を古代～近現代までリストアップし，受講者全員でそれを読み，報告・議論を重ねることで現地調査の課題を設定する。とりわけ閲覧を希望する文献資料を選定し，内容をあらかじめ検討した上で，現地調査に臨む。	隔年・共同
		日本地域史研究実習	地域の文化財や史跡を実見し，歴史学的に考察する中国・瀬戸内海地域を中心に列島各地の文字史料，美術工芸品，建造物，遺跡・遺物などの資史料について，臨地調査・研究を進めるとともに，特定地域を分析の対象として設定し，考古学・歴史地理学など周辺学問分野の成果を活用して現地におけるフィールド調査を行う。この調査を通して具体的に地域史研究の方法と整理，情報の分析の視角などを体得しながら，地域の歴史像の総合化をはかり，東アジアならびに日本列島における特定地域の史的特質を明らかにする方法を習得させる。	隔年・共同
		日本古代資料解析論	日本古代の社会・文化研究の基礎資料である『日本書紀』以下の六国史，『小右記』などの古記録，『類聚三代格』他の古典籍などについて，それぞれの条文を具体的・実態的に解釈し，歴史資料として活用するための方法論などを実践的に習得させるとともに，こうした内容的研究にとどまらず，これらを文献文化財として活用していくための資料論的研究の方法と視座について習得させる。また，近年増加が著しい木簡などの出土文字資料についても内容的研究・資料学的研究の現状と課題，ならびにその活用方法等について習得させる。	隔年
		日本古代社会文化研究	日本古代社会文化研究の課題・目的についての認識を深め，その方法論を学ぶ。古代社会を「貢納」国家段階（律令国家段階以前），律令国家段階，王朝国家段階に区分し，各段階における国家体制，王権の構造，政治社会システム，地域社会構造，そこに生成される文化的営みの諸相などについて，具体的な文献資料・造形文化財・埋蔵文化財などを素材に，従来の文献史学の方法論のみならずフィールド論的・歴史景観論的視点を加味しながら，考察・大系化することを通して，古代社会文化研究の方法と課題・目的について研究指導する。	隔年
		日本中世資料解析論Ａ	歴史学の基本である実証主義的な分析・考察方法を身につけるため，史料読解を中心とした演習形式で授業をおこなう。古文書・古記録など多様な史料の分析と，関連研究の整理，発表用プリントの作成や実際の報告を通して，歴史学研究の方法について学び，修士論文の作成に必要な基礎的な能力を養成する。具体的には，最初の授業で統一テーマと演習の進め方について説明するので，演習担当者は史料の読み・内容を調べ，関連史料を収集し，課題史料が成立した歴史的背景を説明する。そしてその報告内容をもとに受講者全員で議論する。	隔年
		日本中世資料解析論Ｂ	中世社会の構造的な研究には，荘園・公領や大名領国が主な素材となる。その基本史料であり，全国的にみても質量ともに豊富な「東大寺文書」「東寺文書」「高野山文書」などの荘園史料や，大内氏・尼子氏・毛利氏などの大名領国関係史料を演習素材とし，従来の研究成果に学びながら，原文書を基礎とする研究方法を実践し，新たな研究の方向性を探る。実証主義的な考察・分析を身につけるため，史料読解を中心とした演習形式で授業をおこなう。	隔年
		日本中世社会文化研究Ａ	日本中世の主として西日本地域を対象に各時代の政治社会や流通経済の構造，さらに文化的な営みについて具体的に検討する。特に，東アジア諸国との交流に注目して東日本地域との比較をおこない，畿内中央政権への求心性と東アジアへの求心性をあわせ持ちながら次第に変貌していく西日本地域の諸様相を明らかにし，日本列島の政治的不均質性を念頭に，地域社会固有の地域性と時代性を理解させる。実証主義的な考察・分析を身につけるため，史料読解を中心とした演習形式で授業をおこなう。	隔年
		日本中世社会文化研究Ｂ	歴史学の基本である実証主義的な考察・分析を身につけるため，史料読解を中心とした演習形式で授業をおこなう。古文書・古記録など多様な史料の分析と，関連研究の整理，発表用プリントの作成や実際の報告を通して，歴史学研究の基礎作業を学び，修士論文の作成に必要な基礎的な能力を養成する。課題史料を掲載したプリントをあらかじめ受講者全員に配布するので，演習担当者はもちろん，それ以外の受講者も授業前には課題史料の読み，意味，文書の成立背景を考えて，授業後半に実施する討論に備える。	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	日本近世資料解析論Ａ	既に翻刻され活字化された近世史料を選定して受講者に割り振り，受講者は与えられた史料を徹底的に解読し，当該史料の内容にかかわる事柄の歴史的背景や，当該史料部分を素材として研究された著書・論文を紹介しながら，従来の研究史の問題点を検討し，それに関連した考察をおこなう。発表者は発表用のレジュメを作成して受講者に事前に配布し，その他の受講者は当該史料を読解して授業にのぞみ，質疑応答の討論に参加し，史料の多様な分析方法や史料批判の方法などを学習する。	隔年
		日本近世資料解析論Ｂ	学内所蔵の近世古文書を解読することを通じて，日本近世史研究の根幹をなす古文書に直接触れ，かつ古文書読解能力を高めることを目標とする。授業内容は，３人一組の班をつくり，協力しながら史料（古文書）の読解につとめ，当該史料の意味や史料内容について，関連する事柄・事件などがあれば調べ，史料の持つ歴史的意義などを話し合ってレジュメを作成する。発表は隔週とし，２班ずつ発表して解読史料文字の正否をはじめ，発表者が考察した事柄について討論をおこなう。	隔年
		日本近世社会文化研究Ａ	日本近世社会のもつ特質について，西欧や東アジア諸国との比較を通じて考察する。具体的な考察の対象となる事柄は，土地制度，領主制，市場制度，身分制度，農村社会，ジェンダーなどからいくつか絞って取り上げる。授業は演習形式によって進め，発表担当者は選択した論文内容をレジュメにまとめ，かつ論文のもつ研究史的意義や疑問点などをもとに，西欧や中国社会と比較考察した内容を発表し，討論の材料を提供する。以上を通じて，歴史学的分析の視野を広げ，常に世界史的視野から考察する方法を深めることを目標とする。	隔年
		日本近世社会文化研究Ｂ	近世社会の文化及び地域（地方）文化の展開について，安土桃山，寛永，元禄，宝暦天明，化政，天保期の各文化，及び全般的な日本近世文化論に関連する代表的論文を講読する。授業は演習形式によって進め，発表担当者は，選択した論文を熟読して論文内容をレジュメにまとめ，さらに論文のもつ研究史的意義や疑問点などを討論の材料として提示し，事前に他の受講者に配布しておく。以上を通じて，日本近世の文化のありようやその発展の特質について理解を深めることを目標とする。	隔年
		日本近代資料解析論Ａ	中国四国地域に現存する行政史料や個人所蔵史料を選定して受講者に割り振り，受講者は与えられた史料の解読を進め，さらに関連する資料や論文を探して，与えられた地域史料から日本近代史の論点をいかに引き出すかという，歴史学研究の基礎作業を訓練することを目標とする。授業は演習形式で，２人一組の班をつくり，分担協力し合って史料の読解と近代史の論点を考察し，発表レジュメを作成して事前配布をおこなう。授業では発表者が司会を兼ねて質疑討論をおこない，史料批判や日本近代史研究の方法を学習する。	隔年
		日本近代資料解析論Ｂ	幕末維新期から昭和初期にかけて，エポック・メーキングな出来事に関連する諸史料を選定して割り当て，その解読とともにその出来事・事件の研究史を学習することを目標とする。授業は演習形式をとり，２人一組の班をつくり，分担協力して史料の読解とその史料批判及び研究史の流れや論争史などを調べて，その出来事・事件の歴史的意義などを考察する。発表レジュメは事前に他の受講生に配布し，授業では発表者が司会を担当して討論を進行させ，史料批判や日本近代史研究の方法を学習する。	隔年
		日本近代社会文化研究Ａ	近代日本がいかにして成立し，またいかにして帝国主義への道をあゆむことになったのかについて，日本をとりまく国際環境と国内に起きた諸事件・諸問題を有機的関連のもとにとらえながら考察する。具体的には維新変革の政治過程から日清・日露戦争時に帝国主義世界が確立するまでの政治と社会を中心として講義する。講義では使用する主な史料を事前配布するので，受講者は事前に史料の読み，意味や史料の成立背景などを予習し，授業の後半に実施する討論に備える。	隔年
		日本近代社会文化研究Ｂ	日本の近代はいかにしてもたらされたのか，いかに国民国家として成長を遂げたのか，そこには日本の近世のあり方がいかに関わっていたのか，こうした問題を学問世界や教育界，さらには文化の質，世論の動向などから考察していく。授業は講義と演習を交互におりまぜ，関連研究の整理，発表用飼料の作成と報告を通じて，歴史学研究の基礎作業を学び，修士論文の作成に必要な基礎的能力を養成する。演習担当者は作成したレジュメを事前配布し，討論すべき論点を提示する。	隔年
		日本社会文化史特論	日本社会の変遷について文化の視点から考察する。 古代・中世では，律令国家期の文化，国風文化の熟成，交錯する公家と武家の	隔年・オムニバス

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		文化，中世文化の到達点について通史的に概観する。また，文化を分析する視点として文化の自立性，文化の階層性，さらには外来文化の受容と文化創造，国際性，文化の庶民性・地方性などを検討し，中世社会の到達点と近世社会への萌芽，そして庶民世界の自立について展望する。 また近世・近代では，「わび」と「かぶき」に象徴される桃山文化と寛永文化から出発して，「イエ」の確立と豊かになる民衆の生活，思想と宗教の日本化，地方へ広がる都市文化などの面から近世社会の文化を検討する。特に近代社会では，家父長制的家族制度や明治期の労働・社会運動，都市文化の諸相を検討し，大正期の労働運動・部落解放運動・女性解放運動にみられる社会と民衆の変容について考察する。 （オムニバス方式／全 15 回） （11　本多　博之・58　中山　富廣／1 回） 日本社会の変遷を文化の視点から考察していく上での課題設定 （11　本多　博之／7 回） 日本古代・中世に関する社会文化史 （58　中山　富廣／7 回） 日本近世・近代に関する社会文化史	方式・共同（一部）
		アジア歴史文化論Ａ	近年のアジア史研究，特に東南アジア史研究においては，従来の「東アジアとは異質な世界」という見方が大きく後退し，むしろ歴史的・社会的・文化的共通性を強調する議論が増えてきている。これらの研究趨勢を踏まえ，本講義では，学生の発表とディスカッションを加味した形式で授業を進めるが，受講生の専門に深く関係するテーマを選び，それに関係する日本語及び英語論文の講読を通じて，両世界の同質性と異質性に関して理解を深めていく。	隔年
		アジア歴史文化論Ｂ	近年のアジア史研究，特に東南アジア史研究においては，従来の「東アジアとは異質な世界」という見方が大きく後退し，むしろ歴史的・社会的・文化的共通性を強調する議論が増えてきている。これらの研究趨勢を踏まえ，本講義では，学生の発表とディスカッションを加味した形式で授業を進め，「国家論」「官僚制度」「東・東南アジアの近世問題」「社会史・都市史」等，近年話題を集めているトピックにつき関係する日本語及び英語論文の講読を通じて，両世界の同質性と異質性に関して理解を深めていく。	隔年
		アジア社会史史料研究Ａ	演習形式で，学生の発表とディスカッションを中心に授業を進め，アジア，特に東南アジアの社会史の展開について理解を深めることをめざす。まず，教員が社会史に関わる基本的文献を紹介した上で，社会史全般に関わるヴェトナム漢文年代記史料（『大南寔録』など）を読み，内容について発表と議論をおこなう。次いで当時の地方志（『同慶地輿誌』など）や統計資料等から選択した社会史関連史料の講読・解析をおこない，近世アジアの社会史の展開について総合的に把握する。	隔年
		アジア社会史史料研究Ｂ	演習形式で，学生の発表とディスカッションを中心に授業を進め，アジア，特にヴェトナムの社会史の展開について理解を深めることをめざす。阮朝以前の社会史を再構成するためには，従来の正史（『大南寔録』前編，『大越史記全書』など）に加えて地方文書が最も有効な史料である。この授業ではこれらの文書の解題，利用するに際しての留意点を解説するとともに，それを講読して阮朝以前の社会の特質を分析し，中国との比較検討をも行い，東南アジア・東アジアの社会史研究に関する研究指導を行う。	隔年
		アジア政治史史料研究Ａ	演習形式で，学生の発表とディスカッションを中心に授業を進め，アジア，特に東南アジアの政治史の展開について理解を深めることをめざす。まず，教員が政治史に関わる基本的文献を紹介した上で，政治史全般に関わるヴェトナム漢文年代記史料（『大南寔録』など）を読み，内容について発表と議論をおこなう。次いで当時の地方志や官僚の上奏文等から選択した政治史関連史料の講読・解析をおこない，近世アジアの政治史の展開について総合的に把握する。	隔年
		アジア政治史史料研究Ｂ	演習形式で，学生の発表とディスカッションを中心に授業を進め，アジア，特にヴェトナムの社会史の展開について理解を深めることをめざす。阮朝以前の政治史を再構成するためには，従来の正史に加えて行政関係史料（『大南會典』など）	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		が最も基本的な史料である。この授業ではこれらの文書の解題，利用するに際しての留意点を解説するとともに，それを講読して各王朝の政権構造の特質を分析し，アジアの他国の王朝権力との比較検討をも行い，政治史研究に関する研究指導を行う。	
		アジア地域史研究Ａ	演習形式で，学生の発表とディスカッションを中心に授業を進め，近現代中国と東アジアの政治・外交について，その歴史的個性と特徴をつかみとることに目標を置く。東アジアと中国政治の展開，日本と中国の外交，伝統的中華世界と近代，近現代中国の国家と政治システム，革命の諸相，ナショナリズムと抗日戦争，リベラリズム等の諸問題に関して外国語を含む論文を読み，議論を通じて中国と東アジアの歴史的展開に対する理解を深める。	隔年
		アジア地域史研究Ｂ	演習形式で，学生の発表とディスカッションを中心に授業を進め，中国を中心とした戦後東アジア史の展開をつかみとることに目標を置く。第二次世界大戦後における東アジア情勢の全般的動向，戦後中国の政治的変動，戦後中国の社会経済的変動，朝鮮戦争と中国の対応，日本の戦後改革の変容等の諸問題に関して外国語を含む論文を読み，戦後における中国・朝鮮半島・日本の状況の推移について，その相互連関に留意しながら議論し理解を深める。	隔年
		アジア地域文化論Ａ	講義に，文献講読・学生発表とディスカッションを加味した形式で授業を進める。関係する前近代アジア史に関する日本語・英語の研究文献を講読し，アジアの地域文化の歴史的展開について，その研究状況・課題を十分に理解し，各自の問題意識を深化させる。授業では，東アジア・中央ユーラシア・海域アジアなどの地域を設定し，各自の研究と関連する文献を選び出して輪読する。また特定のテーマについて発表し，その内容について議論をおこなう。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		アジア地域文化論Ｂ	講義に，文献講読・学生発表とディスカッションを加味した形式で授業を進める。関係する前近代アジア史に関する英語・中国語の研究文献を講読し，アジアの地域文化の歴史的展開について，その研究状況・課題を十分に理解し，各自の問題意識を深化させる。授業では，政治史・社会史・環境史などのトピックを設定し，各自の研究と関連する文献を選び出して輪読する。また特定のテーマについて発表し，その内容について議論をおこなう。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		アジア交流史史料研究Ａ	演習形式で，前近代のアジア交流史に関する史料を輪読する。前近代のアジア交流とその多様性に対する理解を深め，一次史料を読解する能力を向上させ，訳注を作成する技術を涵養する。本授業では，史書・地方志・旅行記・政書・法典史料・文集史料・筆記史料などから基礎レヴェルの史料を選び出して輪読する。履修者は，事前に各種工具書と関連史料を調査して学術的な水準をある程度満たした訳注を作成し，授業ではそれをもとに議論をおこなう。	隔年
		アジア交流史史料研究Ｂ	演習形式で，前近代のアジア交流史に関する史料を輪読する。前近代のアジア交流とその多様性に対する理解を深め，一次史料を読解する能力を向上させ，訳注を作成する技術を涵養する。本授業では，年代記・普遍史といった歴史書，アジア諸言語・ヨーロッパ諸言語で記述された旅行記，アジア諸言語で記録された文書史料，宗教文献などからやや難解な史料を選び出して輪読する。履修者は，事前に各種工具書と関連史料を調査して学術的な水準をかなりの程度満たした訳注を作成し，授業ではそれをもとに議論をおこなう。	隔年
		中国制度史史料講義Ａ	講義に，史料の輪読とディスカッションを加味した形式で授業を進める。中国制度史料の解析を通じて，前近代中国の各種制度について理解を深め，一次史料を読解する能力を向上させる。まず，教員が前近代中国の法制史や各種制度を理解するための基本文献について解説し，次に，法令・法典から政治制度・官制・行政制度・法制・刑罰・財政制度・経済・戸籍・商業などに関する適切な史料を選び出して輪読し，その内容について分析と議論をおこなう。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		中国制度史史料講義Ｂ	講義に，史料の輪読とディスカッションを加味した形式で授業を進める。中国公文書史料の解析を通じて，前近代中国の各種制度について理解を深め，一次史料を読解する能力を向上させる。まず，教員が前近代中国の公文書史料や各種制度を理解するための基本文献について解説し，次に，公文書史料から行政・裁判などに関する公文書史料，勅令・官文書などを刻んだ石刻文書，官制・行政・駅站・税役・戸籍などに関する原文書など適切な史料選び出して輪読し，その内容について分析と議論をおこなう。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		中国経済史史料研究Ａ	演習形式で，学生の発表とディスカッションを中心に授業を進め，近現代中国における社会経済史の展開について理解を深めることをめざす。まず，教員が社会経済史に関わる基本的文献を紹介した上で，産業史全般に関わる論文を読み，	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		その内容について発表と議論をおこなう。次いで，当時の政府による報告書・統計や雑誌記事類等から選択した工業・農業関連史料の講読・解析をおこない，近現代中国の社会経済史の展開について総合的に把握する。	
		中国経済史史料研究Ｂ	演習形式で，学生の発表とディスカッションを中心に授業を進め，「中国経済史史料研究 A」に引き続き，近現代中国における社会経済史の展開について理解を深める。まず，産業史全般に関わる論文を読み，その内容について発表と議論をおこなう。次いで，当時の商工業団体や金融・銀行団体の報告書，及び刊行していた雑誌類等から選択した商業・金融・貿易・交通関連史料の講読・解析をおこない，近現代中国の社会経済史の展開について総合的に把握する。	隔年
		中国政治史史料講義Ａ	講義に，学生の発表とディスカッションを加味した形式で授業を進め，関係する中国語基本史料の解析を通じて，近現代中国の政治と諸政策が社会にもたらした影響について理解を深めていく。まず，教員が近現代中国の政治・社会を理解するための基本的文献について解説し，その上で政治については行政・財政・法制の三分野，諸政策が社会に与えた影響については教育・文化・民衆の三分野から関連中国語文献史料を選び出し内容の解析をおこなう。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		中国政治史史料講義Ｂ	講義に，学生の発表とディスカッションを加味した形式で授業を進める。中国近現代政治史の基本的諸問題，及び政治と社会との相互連関に関わる中級レヴェルの（やや難解な）史料を読み，解析能力を身につけることが目標である。清末洋務政策・変法運動・新政，民国初年の外交，袁世凱政権の国家統合，連省自治と省自治などの基本的諸問題，江南地域（上海・南京・蘇州・無錫等）を対象とした政治と社会との関係について，官報・新聞・雑誌等より重要史料を厳選して内容を吟味し討論していく。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		中国文化史史料研究Ａ	演習形式で，前近代の中国文化史に関する史料を輪読する。前近代の中国文化とその多様性に対する理解を深め，一次史料を読解する能力を向上させ，訳注を作成する技術を涵養する。本授業では，宮廷・士大夫・民衆・商業・手工業・文学・演劇・芸術・思想などに関する文化史料から基礎レヴェルの史料を選んで輪読する。履修者は，事前に各種工具書と関連史料を調査して学術的な水準をある程度満たした訳注を作成し，授業ではそれをもとに議論をおこなう。	隔年
		中国文化史史料研究Ｂ	演習形式で，前近代の中国文化史に関する史料を輪読する。前近代の中国文化とその多様性に対する理解を深め，一次史料を読解する能力を向上させ，訳注を作成する技術を涵養する。本授業では，社会生活・風俗・言語・都市・地方・儒学・仏教・道教・イスラームなどに関する文化史料からやや難解な史料を選んで輪読する。履修者は，事前に各種工具書と関連史料を調査して学術的な水準をかなりの程度満たした訳注を作成し，授業ではそれをもとに議論をおこなう。	隔年
		中国社会史史料研究Ａ	近現代中国の政府档案史料（公文書史料）を活用しながら，社会・経済と政治との相互作用に着目しつつ，歴史を構造的に認識する能力を養う。演習形式で，学生の档案史料読解とディスカッションが中心となる。本授業では，中華民国期を対象とした国家（憲法・政府組織・国会）と行政（政策法令・地方制度・地方行財政）に関する档案史料を読み，同時期の社会・経済的発展と国家・行政との関連性を読み取っていくことに主眼を置く。	隔年
		中国社会史史料研究Ｂ	档案史料（公私文書史料）を活用しながら，近現代中国の社会経済史に関する知見を深め，歴史を実証的に再構成する能力を養う。演習形式で，学生の档案史料読解とディスカッションが中心となる。本授業では，中華民国期における社会・経済関連档案（農業，工業，商業，財政・税政，金融，商会・同業団体），中華人民共和国初期を対象とした社会・経済関連档案（取り上げる事象は民国期に同じ）を読み，近現代中国の社会経済に関する系統的理解をめざす。	隔年
		アジア歴史社会論Ａ	東南アジア・南アジア史研究においては，かつての「インド化」論などに代わって，歴史的・社会的・文化的特色を踏まえた様々な新しい枠組み（港市国家論，長期波動期論，「アジアの近世論」問題，グローバルヒストリーなど）が議論の対象となってきている。本講義では，学生の発表とディスカッションを加味した形式で授業を進め，受講生の専門に深く関係するテーマを選び，それに関係する日本語・英語論文の講読を通じて，歴史的・社会的・文化的特色を踏まえた上述の様々な新しい枠組みにつき，具体的な検討を行う。	隔年
		アジア歴史社会論Ｂ	東南アジア・南アジア史研究においては，かつての「インド化」論などに代わって，歴史的・社会的・文化的特色を踏まえた様々な新しい枠組み（港市国家論，長期波動期論，「アジアの近世論」問題，グローバルヒストリーなど）が議論の対象となってきている。本講義では，学生の発表とディスカッションを加味した	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		形式で授業を進め，近年話題を集めているトピックにつき関係する日本語・英語論文の講読を通じて，歴史的・社会的・文化的特色を踏まえた上述の様々な新しい枠組みにつき，具体的な検討を行う。	
		近代国家論研究	この授業の目標は，16～19 世紀にかけてのヨーロッパにおける近代国家の形成過程について比較しながら，その共通点やそれぞれの特質について，政治，経済，文化など多角的に検討する。授業計画は，かつて近代国家の形成過程については，一国史的観点から発展段階論的に理解されてきた。本講義は，1) 近年の西洋史学の地域史やグローバル・ヒストリ研究の成果を踏まえて，地域 ⇔ 国家 ⇔ 帝国の相互関係の中で，近代国家の形成過程について論ずる。2) K.ポメランツの「大分岐論」とその後の議論に注目しながら，16～18 世紀のアジアとヨーロッパの経済成長の過程についても比較検討を行う。	隔年
		欧米社会構造論研究	この授業の目標は，近年の西洋史研究において注目されている文化史研究について，とくに 1980 年代の「新しい歴史」の段階を経てポスト言語論的転回の段階にある現代歴史学の潮流のなかに文化史研究を位置付ける。 授業計画は，(1) 1970 年代以降の文化史研究 研究対象の深化・拡大が見られ，広範な芸術(イメージ，道具，家屋)や慣習行為(会話や読書)などの日常レヴェルでの慣習や規範が含まれるようになった。さらに人類学的アプローチとの親和性が認められ，政治や経済に対する文化の相対的自律性が強調されるようになった。 (2) 1990 年代の新しい文化史研究 ・「新しい文化史」 1980 年代末に「新しい文化史」という言葉が使われるようになる。これは，バフチン，フーコ，デリダ，ギアーツらの文化領域の拡大や文化理論の台頭への応答であった。わけても方法論的特徴として，「表象」と「実践」への関心が高まったことの意味について理解する。	隔年
		欧米政治文化史史料研究 A	この授業は，基礎演習として行われる。使用言語は，日本語と英語を併用して行われる。授業の目標は，16～19 世紀の欧米の政治文化史に関わる一次史料の基本的読解能力の向上を目指す。授業計画は，まず近代欧米の政治文化研究に関する二次文献を講読しながら研究史を整理し，何が研究課題として提示できるのかを考えていく。次に，その課題に基づきながら演習において検討する研究テーマを設定し，それに関する史資料の書誌情報をデータ化し，関連資史料の渉猟を行う。ただし，この演習では，主に政治文化に関する史料の書式や読解方法について学びながら史料の読解能力の向上を目指す。	隔年
		欧米政治文化史史料研究 B	この授業は，発展演習として行われる。使用言語は，日本語と英語を併用して行われる。授業の目標は，16～19 世紀の欧米の政治文化史に関わる一次史料の読解能力の向上を目指す。演習において検討する研究テーマを設定し，それに関する史資料の書誌情報をデータ化し，関連資史料の渉猟を行う。演習で取り上げる史料の分析を行い，その意味を読み取りながら，研究史の中に位置付ける。毎回，史料の読解範囲を指定し，分析結果を発表する。	隔年
		欧米社会経済史史料研究 A	この授業は基礎演習として行われる。使用言語は，日本語と英語を併用して行われる。授業の目標は， 16～19 世紀の欧米の社会経済史に関わる一次史料の読解能力の向上を目指す。授業計画は，まず近代欧米の社会経済史研究に関する二次文献を講読しながら研究史を整理し，何が研究課題として提示できるのかを考えていく。それに基づき，演習で取り扱う史料を選定する。ただし，この演習では，主に会計文書や貿易・関税記録などを扱い，その史料の書式や読解方法について学びながら史料の読解能力の向上を目指す。	隔年
		欧米社会経済史史料研究 B	この授業は基礎演習としてわれる。使用言語は，日本語と英語を併用して行われる。授業の目標は， 16～19 世紀の欧米の社会経済史に関わる一次史料の読解能力の向上を目指す。授業計画は，まず近代欧米の社会経済史研究に関する二次文献を講読しながら研究史を整理し，何が研究課題として提示できるのかを考えていく。それに基づき，演習で取り扱う史料を選定する。ただし，この演習では，主に行財政文書を扱い，史料の書式や読解方法について学びながら史料の読解能力の向上を目指す。	隔年
		欧米社会経済史史料研究 C	この授業は発展演習として位置付け，使用言語は英語により行われる。授業の目標は， 16～19 世紀の欧米の社会経済史に関わる一次史料の読解能力の向上を目指す。授業計画は，まず近代欧米の社会経済史研究に関する二次文献を講読しながら研究史を整理し，演習で取り扱う史料を選定する。この演習では，主に会	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		計文書や貿易・関税記録に関する史料を取り上げ，その意味を読み取り，研究課題に対していかなる意味を有するのかを検討する。毎週，課題を提示した課題について報告を行う。	
		欧米社会経済史史料研究D	この授業は発展演習として位置付け，使用言語は英語により行われる。授業の目標は， 16～19 世紀の欧米の社会経済史に関わる一次史料の読解能力の向上を目指す。授業計画は，まず近代欧米の社会経済史研究に関する二次文献を講読しながら研究史を整理し，演習で取り扱う史料を選定する。この演習では，主に行財政文書を取り上げ，その意味を読み取り，研究課題に対していかなる意味を有するのかを検討する。毎週，研究課題について報告を行う。	隔年
		西洋社会史文書研究A	近年，史料論的研究の隆盛により，従来の社会経済史研究を実証的に支えてきた歴史史料の見直しが広く進められている。本演習では，こうした研究潮流をふまえ，とくに社会経済史に関連する歴史史料をとりあげた最新の英語文献を，受講生各自が要約・報告し，それを材料に討論を行う。本年度はとくに，中世初期の経済成長の諸相に注目する。なお，現今のヨーロッパ学界の動向を正確に把握すべく，テクストは開講時にそのつど最新の研究成果を選別する。	
		西洋社会史文書研究B	近年，史料論的研究の隆盛により，従来の社会経済史研究を実証的に支えてきた歴史史料の見直しが広く進められている。本演習では，こうした研究潮流をふまえ，とくに社会経済史に関連する歴史史料をとりあげた最新の英語文献を，受講生各自が要約・報告し，それを材料に討論を行う。本年度はとくに，中世盛期の封建制の形成過程に注目する。なお，現今のヨーロッパ学界の動向を正確に把握すべく，テクストは開講時にそのつど最新の研究成果を選別する。	
		西洋文化史文書研究A	中世ヨーロッパにおけるリテラシーや文字文化に対する関心が高まるなかで，わたしたちが依拠すべき歴史史料は，それ自体，いかに生成したか，いかに機能したか，いかに保存されたかを問う，歴史研究の欠かすべからざる対象とみなされるようになって久しい。本演習では，一般に史料論と総称されるこうした研究潮流をふまえ，関連するフランス語文献を精読・報告し，それを材料に討論を行う。本年度はとくに，中世初期～盛期の文書史料に注目する。なお，現今のヨーロッパ学界の動向を正確に把握すべく，テクストは開講時にそのつど最新の研究成果を選別する。	
		西洋文化史文書研究B	中世ヨーロッパにおけるリテラシーや文字文化に対する関心が高まるなかで，わたしたちが依拠すべき歴史史料は，それ自体，いかに生成したか，いかに機能したか，いかに保存されたかを問う，歴史研究の欠かすべからざる対象とみなされるようになって久しい。本演習では，一般に史料論と総称されるこうした研究潮流をふまえ，関連するフランス語文献を精読・報告し，それを材料に討論を行う。本年度はとくに，中世盛期～後期の台帳系史料及び公証人登記簿に注目する。なお，現今のヨーロッパ学界の動向を正確に把握すべく，テクストは開講時にそのつど最新の研究成果を選別する。	
		地中海世界史研究A	授業計画は，この授業の形態は演習であり，少人数による外国語の論文あるいは専門書の解読を行う。あらかじめ配布した資料を予習して読み，授業の場で読み合せする。この授業の目的は四点ある。①あるテーマに関する最新の研究成果を知る。②そのテーマに関する研究史を把握する。③書かれた言語を正確に読むための技術と知識を身につける。④研究の方法論や視覚を学ぶ。今回は，Claire Holleran, Amanda Claridge (eds.), *A Companion to the City of Rome*, Wiley Blackwell, (2018)を中心に読み進めるが，他の文献も適宜使用する。	隔年
		地中海世界史研究B	授業計画は，この授業の形態は演習であり，少人数による史料解読を行う。あらかじめ配布した史料を予習して読み，授業の場で読み合せする。この授業の目的は三点ある。①ギリシア語碑文のテキストを解読する技術と知識を身につけること。②テキストのみならず，附置され場所の意味，施された装飾の意味，文字の大きさ・丁寧さなどの意味を読み解くスキルを養うこと。③それらの碑文を生成した国家・社会・宗教などの背景を知ること。史料としては，*Inscriptiones Graecae* を中心に読み進めるが，他の史料集も適宜使用する。また写真や拓本も使用する。	隔年
		地中海文書解析学A	この授業の形態は演習であり，少人数による史料解読を行う。あらかじめ配布した史料を予習して読み，授業の場で読み合せする。この授業の目的は三点ある。①ラテン語碑文のテキストを解読する技術と知識を身につけること。②テキストのみならず，附置され場所の意味，施された装飾の意味，文字の大きさ・丁寧さなどの意味を読み解くスキルを養うこと。③それらの碑文を生成した国家・社会・	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		宗教などの背景を知ること。史料としては，*Corpus Inscriptionum Latinarum* を中心に読み進めるが，他の史料集も適宜使用する。また写真や拓本も使用する。	
		地中海文書解析学Ｂ	授業計画は，この授業の形態は演習であり，少人数による史料解読を行う。あらかじめ配布した史料を予習して読み，授業の場で読み合せする。この授業の目的は三点ある。①ギリシア語及びラテン語のパピルス文書のテキストを解読する技術と知識を身につけること。②テキストのみならず，附置され場所の意味，施された装飾の意味，文字の大きさ・丁寧さなどの意味を読み解くスキルを養うこと。③それらの碑文を生成した国家・社会・宗教などの背景を知ること。史料としては，P. W. Pestman, The New Papyrological Primer, Brill, (1994)を中心に読み進めるが，他の史料集も適宜使用する。また写真や拓本も使用する。	隔年
		日本古典文学注釈研究Ａ	日本の古代文学作品について，詳細な注釈を行う力を身につける。テキストには，当該作品について最も信頼できる古写本を，複製又は影印資料によって採用する。さらに，有力な他の写本の本文をも参照することによって，文献学的な本文批判を加えて校訂を行う。校訂された本文に従って読解するが，その際には同時代の他作品における用例なども参照しつつ本文を吟味し，正確に読み解くことをめざす。主に平安時代の私家集を取り上げるが，物語や日記など散文作品との関係も念頭に置きつつ，文学史的な視点も大事にしたい。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		日本古典文学注釈研究Ｂ	日本の古代文学作品について，詳細な注釈を行う力を身につける。前期開講の「日本古典文学注釈研究 A」に引き続いて，同様の形式で行う。テキストには，当該作品について最も信頼できる古写本を，複製又は影印資料によって採用する。さらに，有力な他の写本の本文をも参照することによって，文献学的な本文批判を加えて校訂を行う。校訂された本文に従って読解するが，その際には同時代の他作品における用例なども参照しつつ本文を吟味し，正確に読み解くことをめざす。前・後期合わせて受講することで，格段に注釈能力が向上することが期待される。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		日本古典文学注釈研究Ｃ	日本の中世文学作品について，詳細な注釈を行う力を身につける。テキストには，当該作品について最も信頼できる古写本を，複製又は影印資料によって採用する。さらに，有力な他の写本の本文をも参照することによって，文献学的な本文批判を加えて校訂を行う。校訂された本文に従って読解するが，その際には同時代の他作品における用例なども参照しつつ本文を吟味し，正確に読み解くことをめざす。さらには，さまざまな文芸ジャンルが存在する中世の他作品との関係性も考慮して，日本中世の言語表象文化のありようについて理解を深める。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		日本古典文学注釈研究Ｄ	日本の中世文学作品について，詳細な注釈を行う力を身につける。前期開講の「日本古典文学注釈研究Ｃ」に引き続いて，同様の形式で行う。テキストには，当該作品について最も信頼できる古写本を，複製又は影印資料によって採用する。さらに，有力な他の写本の本文をも参照することによって，文献学的な本文批判を加えて校訂を行う。校訂された本文に従って読解するが，その際には同時代の他作品における用例なども参照しつつ本文を吟味し，正確に読み解くことをめざす。さらには，さまざまな文芸ジャンルが存在する中世の他作品との関係性も考慮して，日本中世の言語表象文化のありようについて理解を深める。前・後期合わせて受講することで，より確かな注釈力が身につくことが期待される。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		日本古典文学注釈研究Ｅ	主として日本近世文学の領域から作品を選び，学問的な注釈の方法を体得させることを目的とする。同じ作品，あるいは同じ著者の作品，又は同時代の同ジャンルに属する作品から広く用例を求め，それらの検討を通して語義や用法を確定し，著者の表現意識に密着しつつ注釈を施すことを基本とし，さらに作品の背後にある時代状況や環境，作者の属する階層特有の問題などへも目を配ることの重要性を説く。また，近世文学が和漢の古典をどのように受容しているかという典拠論をも導入し，さまざまな観点から重層的な注釈を試みる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		日本古典文学注釈研究Ｆ	「日本古典文学注釈研究Ｅ」を直接継承する科目であり，授業の内容としては連続したものとなる。Ｅ・Ｆを前期・後期のセメスター科目として開設することになるが，１年を通じて同じ作品を輪読する経験を持つことで，受講者は前期から後期へと自分の学力が向上したことを実感できるはずである。また，受講者相互で有効な方法を確認し合うこともできる。専門的な研究力は細切れの授業では決して養成できない。せめて１年をかけてゆっくりと身につけてほしいと願うものである。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		日本古典文学解読研究Ａ	日本の古代文学作品について，正確な読解力を身につけることを目的とする。「日本古典文学注釈研究Ａ」と隔年で交互に開設するが，基本的には同じ形式で，	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		主に平安朝の私家集を解読する。テキストには，当該作品について最も信頼できる古写本を，複製又は影印資料によって採用する。さらに，有力な他の写本の本文をも参照することによって，文献学的な本文批判を加えて校訂を行う。校訂された本文に従って読解するが，その際には同時代の他作品における用例なども参照しつつ本文を吟味し，正確に読み解くことをめざす。	
		日本古典文学解読研究Ｂ	日本の古代文学作品について，正確な読解力を身につけることを目的とする。前期開講の「日本古典文学解読研究Ａ」に引き続いて，同様の形式で行う。テキストには，当該作品について最も信頼できる古写本を，複製又は影印資料によって採用する。さらに，有力な他の写本の本文をも参照することによって，文献学的な本文批判を加えて校訂を行う。校訂された本文に従って読解するが，その際には同時代の他作品における用例なども参照しつつ本文を吟味し，正確に読み解くことをめざす。前・後期合わせて受講することで，しっかりとした読解力が身につくことが期待される。	隔年
		日本古典文学解読研究Ｃ	「日本古典文学注釈研究Ｃ」と隔年で交互に開設するが，基本的には同じ形式で行う。テキストには，当該作品について最も信頼できる古写本を，複製又は影印資料によって採用する。さらに，有力な他の写本の本文をも参照することによって，文献学的な本文批判を加えて校訂を行う。校訂された本文に従って読解するが，その際には同時代の他作品における用例なども参照しつつ本文を吟味し，正確に読み解くことをめざす。さらには，さまざまな文芸ジャンルが存在する中世の他作品との関係性も考慮して，日本中世の言語表象文化のありようについて理解を深める。	隔年
		日本古典文学解読研究Ｄ	日本の中世文学作品について，正確な読解力を身につけることを目的とする。前期開講の「日本古典文学解読研究Ｃ」に引き続いて，同様の形式で行う。テキストには，当該作品について最も信頼できる古写本を，複製又は影印資料によって採用する。さらに，有力な他の写本の本文をも参照することによって，文献学的な本文批判を加えて校訂を行う。校訂された本文に従って読解するが，その際には同時代の他作品における用例なども参照しつつ本文を吟味し，正確に読み解くことをめざす。さらには，さまざまな文芸ジャンルが存在する中世の他作品との関係性も考慮して，日本中世の言語表象文化のありようについて理解を深める。	隔年
		日本古典文学解読研究Ｅ	「日本古典文学注釈研究Ｅ」と隔年開講の関係にある科目である。主として日本近世文学に対象を求める点では同様であるが，基本的にこれまで活字化されてこず，勿論注釈もない原典を，文意を取れるまで精密に解読することを目的とする。解読のためには，くずし字の解読，句読点や濁点の付与，文脈の理解，固有名詞の特定など，あらゆる学力が動員される必要があり，この作業に従事することによって，古典解読の総合的な力が身に付くはずである。	隔年
		日本古典文学解読研究Ｆ	「日本古典文学解読研究Ｅ」を直接継承する科目であり，授業の内容としては連続したものとなる。Ｅ・Ｆを前期・後期のセメスター科目として開設することになるが，１年を通じて同じ作品を輪読する経験を持つことで，受講者は前期から後期へと自分の学力が向上したことを実感できるはずである。また，受講者相互で有効な方法を確認し合うこともできる。専門的な研究力は細切れの授業では決して養成できない。せめて１年をかけてゆっくりと身につけてほしいと願うものである。	隔年
		日本近現代文学注釈研究Ａ	「日本近現代文学解読研究Ａ」と隔年開講の関係にある科目である。担当学生による報告をもとに，全員で質疑する演習型式により，授業を行う。注釈・語釈等の技法を学び，日本近代文学研究の種々の方法論に自覚的に取り組む手がかりとする。一定のテーマのもとに選ばれた日本近現代文学の作家・作品群を対象として，テクストに表象された事物を取り上げ，作品が執筆された同時代の社会・文化状況・言説を精査したうえで，読解を進める。	隔年
		日本近現代文学注釈研究Ｂ	「日本近現代文学注釈研究Ａ」を直接継承する科目であり，授業の内容としては連続したものとなる。担当学生による報告をもとに，全員で質疑する演習型式により，授業を行う。注釈・語釈等の技法を学び，日本近代文学研究の種々の方法論に自覚的に取り組む手がかりとする点では同様であるか，Ａとは異なった日本近現代文学の作家・作品群を対象として，テクストの検討を行っていく。Ｂにおいては，とりわけ現代的な価値も入れつつ総合的な評価を試み，各学生の研究への応用を図る。	隔年
		日本近現代文学注釈研究	日本近現代文学研究を遂行するための専門・発展的知識と方法を習得することを本授業の目的とする。個々の文学テクスト，並びに雑誌，新聞，広告，挿絵等	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	C	のメディアを含めた同時代言説の解読・注釈を行い，テクスト評価，作家，文学史への再考，再構築をはかる。考察の対象に拠っては，雑誌掲載や単行本・全集所収の定稿のみならず，草稿・未定稿も分析の範囲とする。受講生は指定された資料を通読し，各自で課題を発見し，雑誌論文に繋がる研究発表を行うことが求められる。なお，本授業で扱う資料は，旧来の「日本文学」が前提とする作家・テクストのみならず，近代日本〈帝国〉の植民行為・日本語教育において生まれた「日本語文学」も対象とする。その場合，「日本文学」という〈制度〉が前提としてきた「言語＝民族＝国家＝文化」の四位一体を脱構築する視座を得ることも授業の重要な目的となる。	
		日本近現代文学注釈研究D	日本近現代文学研究を遂行するための専門・発展的知識と方法を習得することを本授業の目的とする。個々の文学テクスト，並びに雑誌，新聞，広告，挿絵等のメディアを含めた同時代言説の解読・注釈を行い，テクスト評価，作家，文学史への再考，再構築をはかる。考察の対象に拠っては，雑誌掲載や単行本・全集所収の定稿のみならず，草稿・未定稿も分析の範囲とする。受講生は指定された資料を通読し，各自で課題を発見し，雑誌論文に繋がる研究発表を行うことが求められる。なお，本授業で扱う資料は，旧来の「日本文学」が前提とする作家・テクストのみならず，近代日本〈帝国〉の植民行為・日本語教育において生まれた「日本語文学」も対象とする。その場合，「日本文学」という〈制度〉が前提としてきた「言語＝民族＝国家＝文化」の四位一体を脱構築する視座を得ることも授業の重要な目的となる。	隔年
		日本近現代文学解読研究A	「日本近現代文学注釈研究Ａ」と隔年開講の関係にある科目である。担当学生による報告をもとに，全員で質疑する演習型式により，授業を行う。「注釈研究Ａ」とは異なった観点から選ばれた日本近現代文学の作家･作品群を対象として，2000年代以降に発表された鮮度が高く重要な先行文献を取り上げて検討を加える。各論文が援用している研究理論を明らかにし，方法面から批判的に検証して，その意義と限界を検討していく。	隔年
		日本近現代文学解読研究B	「日本近現代文学解読研究Ａ」を直接継承する科目であり，授業の内容としては連続したものとなる。担当学生による報告をもとに，全員で質疑する演習型式により，授業を行う。テクスト解読の技法を学び，日本近代文学研究の種々の方法論に自覚的に取り組む手がかりとする。Ａとは異なったテーマによって選ばれた日本近現代文学の作家・作品群を対象として，その研究史を検討することにより，作品や作家の再評価を試みる。そのうえで，当該テクストの新たな解読方法を模索し実践して，各学生の研究への応用を図る。	隔年
		日本近現代文学解読研究C	日本近現代文学研究を遂行するための専門・発展的知識と方法を習得することを本授業の目的とする。個々の文学テクスト，並びに雑誌，新聞，広告，挿絵等のメディアを含めた同時代言説の解読・注釈を行い，テクスト評価，作家，文学史への再考，再構築をはかる。考察の対象に拠っては，雑誌掲載や単行本・全集所収の定稿のみならず，草稿・未定稿も分析の範囲とする。受講生は指定された資料を通読し，各自で課題を発見し，雑誌論文に繋がる研究発表を行うことが求められる。なお，本授業で扱う資料は，旧来の「日本文学」が前提とする作家・テクストのみならず，近代日本〈帝国〉の植民行為・日本語教育において生まれた「日本語文学」も対象とする。その場合，「日本文学」という〈制度〉が前提としてきた「言語＝民族＝国家＝文化」の四位一体を脱構築する視座を得ることも授業の重要な目的となる。	隔年
		日本近現代文学解読研究D	日本近現代文学研究を遂行するための専門・発展的知識と方法を習得することを本授業の目的とする。個々の文学テクスト，並びに雑誌，新聞，広告，挿絵等のメディアを含めた同時代言説の解読・注釈を行い，テクスト評価，作家，文学史への再考，再構築をはかる。考察の対象に拠っては，雑誌掲載や単行本・全集所収の定稿のみならず，草稿・未定稿も分析の範囲とする。受講生は指定された資料を通読し，各自で課題を発見し，雑誌論文に繋がる研究発表を行うことが求められる。なお，本授業で扱う資料は，旧来の「日本文学」が前提とする作家・テクストのみならず，近代日本〈帝国〉の植民行為・日本語教育において生まれた「日本語文学」も対象とする。その場合，「日本文学」という〈制度〉が前提としてきた「言語＝民族＝国家＝文化」の四位一体を脱構築する視座を得ることも授業の重要な目的となる。	隔年
		日本語学研究A	日本語で書かれた歴史的な典籍を取り上げ，そこに現れた日本語のさまざまな事象に関して，学問的に探究する。授業は演習形式で行う。高等学校の教科書で	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		学習する古文は，平安時代の語法を規範としたいわゆる文語文法で書かれているが，上代から中古・中世・近世と時代が移るにしたがって，日本語も変遷していく。この授業では，文語文法の規範からは外れることの多い，中世後期から近世前期頃の日本語資料を主に取り上げて，日本語の変遷の様相を知るという観点から，詳しい考察を加える。	
		日本語学研究Ｂ	前期に開講する「日本語学研究Ａ」に引き続いて，同様の形式で行う。日本語で書かれた歴史的な典籍を取り上げ，そこに現れた日本語のさまざまな事象に関して，学問的に探究する。高等学校の教科書で学習する古文は，平安時代の語法を規範としたいわゆる文語文法で書かれているが，上代から中古・中世・近世と時代が移るにしたがって，日本語も変遷していく。この授業では，文語文法の規範からは外れることの多い，中世後期から近世前期頃の日本語資料を主に取り上げて，日本語の変遷の様相を知るという観点から，詳しい考察を加える。	隔年
		日本語史研究Ａ	日本語の歴史的な変遷をさまざまな文献に基づいて探究する。「日本語学研究Ａ」と隔年で交互に開講するが，基本的には同じ形式で行う。上代から中古・中世・近世と時代が移るにしたがって，日本語も変遷していく。この授業では，文語文法の規範からは外れることの多い，中世後期から近世前期頃の日本語資料を主に取り上げて，日本語の変遷の具体相を知るという観点から，詳しい考察を加える。それとともに，歴史的な変遷を経て，現代の日本語がどのようにして形成されたのかということについても深く掘り下げていく。	隔年
		日本語史研究Ｂ	前期に開講する「日本語史研究Ａ」に引き続いて，同様の形式で行う。上代から中古・中世・近世と時代が移るにしたがって，日本語も変遷していく。この授業では，文語文法の規範からは外れることの多い，中世後期から近世前期頃の日本語資料を主に取り上げて，日本語の変遷の具体相を知るという観点から，詳しい考察を加える。それとともに，歴史的な変遷を経て，現代の日本語がどのようにして形成されたのかということについても深く掘り下げていく。	隔年
		中国古典散文演習Ａ	明清時代に作られた文章を演習形式で読解する。取り上げる資料は，小説を中心とした俗文学に関する随筆や日記，序跋などである。この時代には，出版文化の興隆によって数多くの俗文学作品が編纂され，読み物として刊行された。従来「正統」とみなされてきた詩文とは異なる文学がジャンルとして確立するという，革命的ともいえる変化が起きたのである。そこでこうした資料の精読を通して，明清小説に関する基礎知識を身につけると同時に，当時の「小説観」についても考える。第一回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的や演習の進め方などについての説明を行う。第二回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。授業では，発表担当者以外もあらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。	
		中国古典散文演習Ｂ	段玉裁『説文解字注』を演習形式で読解し，漢字の形・音・義及び六書に関する基本的知識を習得し，中国語文言文を読みこなすための基礎について学ぶことを目的とする。中国語は非常に早い段階から文言（書面語）と白話（口頭語）とが乖離し，両者がほぼ独自に発展を遂げてきた。漢字は中国語を表記するために生み出された文字だが，１字１字が意味を持つ表語文字として世界的に見ても極めてユニークな存在である。この授業では中国語文言文を読解することを前提としてまず漢字の特徴をよく理解するところから始め，中国語の統辞法・文法を概観していく。第１回，第２回の授業では授業の目的を説明し，演習に必要な工具書・データベースなどを紹介し，その使い方及び使用する際の留意点について概説する。第３回以降は演習形式でテキストを丹念に読解していく。予め定められた演習担当者は資料を作成の上で発表を行い，発表内容を基に受講生と質疑応答を行う。第 15 回は授業担当教員が演習全体についてまとめる。	
		中国古典散文演習Ｃ	明清時代に作られた文章を演習形式で読解する。取り上げる資料は，小説を中心とした俗文学に関する随筆や日記，序跋などである。この時代には，出版文化の興隆によって数多くの俗文学作品が編纂され，読み物として刊行された。従来「正統」とみなされてきた詩文とは異なる文学がジャンルとして確立するという，革命的ともいえる変化が起きたのである。中国古典散文演習Ａと内容は同じであるが,より深い理解を必要とし,明清小説に関する基礎知識を身につけることはもとより,当時の「小説観」について,また出版文化についても議論を深める。第一回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的や演習の進め方などについての説明を行う。第二回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。授業では，発表担当者以外もあらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	中国古典散文演習D	段玉裁『説文解字注』を演習形式で読解する。本年度は「手」を部首とする文字を扱う。「手」部に属する文字の多くは手によって行われる動作を表すが，それらの動作が動作の結果や目的ではなく，動作が行われる時の手の形によって分節されていることを理解する。また，その注釈態度に着目し，段玉裁が許慎『説文解字』をどのような体系を備えた著作として捉えようとしたのか，という問題意識をもって読解を進める。第１回，第２回の授業では授業の目的を説明し，演習に必要な工具書・データベースなどを紹介し，その使い方及び使用する際の留意点について概説する。第３回以降は演習形式でテキストを丹念に読解していく。予め定められた演習担当者は資料を作成の上で発表を行い，発表内容を基に受講生と質疑応答を行う。第 15 回は授業担当教員が演習全体についてまとめる。	
		中国古典韻文演習A	賦は中国古典文学の内，詩と並んで韻文の主要な文学様式の一つに数えられる。漢魏六朝を代表する様式であり，後の唐詩宋詞や明清の小品文にも大きな影響を与えた。本授業は，中国で最も早く編まれた文学作品のアンソロジーである『文選』を取り上げ，唐代の文選注を最も多く保存する『文選集注』（鈔本）巻八所収の賦をテキストとし，現存する『文選』の諸版本及び旧鈔本を読み比べ，テキストの翻字・断句・校勘・出典の確認・本文の精読及び現代日本語訳などの作業を通じて，古文献解読及び古典漢文解釈の基礎を学ぶ。第１回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的，テキストの使い方や演習の進め方などについての説明を行う。第２回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。授業では，発表担当者以外もあらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。	
		中国古典韻文演習B	賦は中国古典文学の内，詩と並んで韻文の主要な文学様式の一つに数えられる。漢魏六朝を代表する様式であり，後の唐詩宋詞や明清の小品文にも大きな影響を与えた。本授業は，中国で最も早く編まれた文学作品のアンソロジーである『文選』を取り上げ，唐代の文選注を最も多く保存する『文選集注』（鈔本）巻九所収の賦をテキストとし，現存する『文選』の諸版本及び旧鈔本を読み比べ，テキストの翻字・断句・校勘・出典の確認・本文の精読及び現代日本語訳などの作業を通じて，古文献解読及び古典漢文解釈の基礎を学ぶ。また，文献学，特に日本に現存する旧鈔本に関わる基礎知識を身に付け，中国古典文学における韻文学に関する基本的研究能力を養う。第１回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的，テキストの使い方や演習の進め方などについての説明を行う。第２回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。本授業では，中国古典韻文演習Aと内容は同じであるが,より深い理解を必要とし,中国六朝時代の賦の特徴や研究方法等についても議論を深める。	
		中国古典韻文演習C	本授業は，中国で最も早く編まれた文学作品のアンソロジーである『文選』を取り上げ，唐代の文選注を最も多く保存する『文選集注』（鈔本）所収の韻文をテキストとし，現存する『文選』の諸版本及び旧鈔本を読み比べ，テキストの翻字・断句・校勘・出典の確認・本文の精読及び現代日本語訳などの作業を通じて，古文献解読及び古典漢文解釈の基礎を学ぶ。第１回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的，テキストの使い方や演習の進め方などについての説明を行う。第２回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。授業では，発表担当者以外もあらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。	
		中国古典韻文演習D	本授業は，中国で最も早く編まれた文学作品のアンソロジーである『文選』を取り上げ，唐代の文選注を最も多く保存する『文選集注』（鈔本）所収の韻文をテキストとし，現存する『文選』の諸版本及び旧鈔本を読み比べ，テキストの翻字・断句・校勘・出典の確認・本文の精読及び現代日本語訳などの作業を通じて，古文献解読及び古典漢文解釈の基礎を学ぶ。また，文献学，特に日本に現存する旧鈔本に関わる基礎知識を身に付け，中国古典文学における韻文学に関する基本的研究能力を養う。第１回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的，テキストの使い方や演習の進め方などについての説明を行う。第２回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。本授業では，中国古典韻文演習 C と内容は同じであるが,より深い理解を必要とし,中国六朝時代の韻文の特徴や研究方法等についても議論を深める。	
		中国古典詩演習A	杜甫の詩を清・仇兆鰲『杜詩詳注』をテキストとし，演習形式で読み進める。中国古典詩及びその注釈を読解するための基本的能力を習得することを目的とする。杜甫の作品は詩のあるべき姿として後世の人々から非常に重んじられてきた。そのため杜甫の詩に対する注釈は質量ともに極めて充実したものがある。その中で『杜詩詳注』は歴代の注釈を集大成し，最も標準的な注釈書として高く評価さ	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		れてきた。一方，データベースなどが以前に比べて飛躍的に充実したため，中国古典詩研究は以前とはまったく異なる方法によって行われるようになった。しかし，「作品の読み」という点があまりにも軽視されるという弊害も無視できなくなりつつある。文学研究の原点に立ち帰って，作品を丹念に読み進めるという研究態度を見直すこととしたい。第１回，第２回の授業では授業の目的を説明し，演習に必要な工具書・データベースなどを紹介し，その使い方及び使用する際の留意点について概説する。第３回以降は演習形式でテキストを丹念に読解していく。予め定められた演習担当者は資料を作成の上で発表を行い，発表内容を基に受講生と質疑応答を行う。第 15 回は授業担当教員が演習全体についてまとめる。	
		中国古典詩演習Ｂ	杜甫の詩を演習形式で読み進める。杜甫の詩に対しては宋代から現代に至るまで多くの注釈が作られているが，本演習では清・仇兆鰲『杜詩詳注』をテキストとする。約 1400 首が現存する杜甫の詩の内，本年度は彼の夔州期の作を中心に読解を進める。夔州期の杜甫は月の光と長江の水の揺らぎを詩的言語に定着させることを様々な表現方法を駆使して試みているように思われる。本演習では中国古典詩に於ける月と水の表現を踏まえた上で杜甫の詩をより深く読み解くことを目的としたい。第１回，第２回の授業では授業の目的を説明し，演習に必要な工具書・データベースなどを紹介し，その使い方及び使用する際の留意点について概説する。第３回以降は演習形式でテキストを丹念に読解していく。予め定められた演習担当者は資料を作成の上で発表を行い，発表内容を基に受講生と質疑応答を行う。第 15 回は授業担当教員が演習全体についてまとめる。	
		中国古典詩演習Ｃ	杜甫の詩を清・仇兆鰲『杜詩詳注』をテキストとし，演習形式で読む。杜甫が『文選』を重視していたことはよく知られているが，本演習では杜甫が詩に用いた語がどの程度『文選』からの影響を受けているのかに着目しながら，個々の語についてひとつひとつ丹念に跡付けていき，詩人たちが自分たちに先行する作品をどのように継承し発展させていったのかを跡付けていくかについて考える。この作業は杜甫詩に対する歴代の注釈を参考にすることができるので，中国古典詩及びその注釈を読解するための基本的能力を身に付けることができる。第１回，第２回の授業では授業の目的を説明し，演習に必要な工具書・データベースなどを紹介し，その使い方及び使用する際の留意点について概説する。第３回以降は演習形式でテキストを丹念に読解していく。予め定められた演習担当者は資料を作成の上で発表を行い，発表内容を基に受講生と質疑応答を行う。第 15 回は授業担当教員が演習全体についてまとめる。	
		中国古典詩演習Ｄ	杜甫の詩を演習形式で読む。杜甫の詩作活動に『文選』が大きな影響を与えたことは既に周知の事柄に属するが，『文選』以後，即ち六朝梁・陳代の詩がどの程度の影響を杜甫に与えたかについては未だに明らかにされていない部分がある。中国古典詩史に於いても陳後主・張正見・陰鏗など陳代の詩人たちの作はこれまでずっと等閑視されてきたと言ってよい。本演習ではデータベースを利用しつつ細かな表現にまで踏み込み，従来の杜甫詩研究とは少し異なるアプローチを試みる足掛かりとしたい。第１回，第２回の授業では授業の目的を説明し，演習に必要な工具書・データベースなどを紹介し，その使い方及び使用する際の留意点について概説する。第３回以降は演習形式でテキストを丹念に読解していく。予め定められた演習担当者は資料を作成の上で発表を行い，発表内容を基に受講生と質疑応答を行う。第 15 回は授業担当教員が演習全体についてまとめる。	
		中国古典小説演習Ａ	『太平広記』の精読を通して，漢語（特に文言）の語彙，語法に関する基礎知識を習得し，文言小説の読解力を養う。北宋に成立した類書のひとつである『太平広記』には，それ以前に成立した七千篇にも及ぶ不思議な話が収められており，それ以降の文学作品（明清小説等）にも多大なる影響を与えた。授業では，いまだ邦訳のない『太平広記』「神の部」を中心に演習形式で読解を行う。第１回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的や演習の進め方などについての説明を行う。第２回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。授業では，発表担当者以外もあらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。	
		中国古典小説演習Ｂ	『太平広記』の精読を通して，漢語（特に文言）の語彙，語法に関する基礎知識を習得し，文言小説の読解力を養う。北宋に成立した類書のひとつである『太平広記』には，それ以前に成立した七千篇にも及ぶ不思議な話が収められており，それ以降の文学作品（明清小説等）にも多大なる影響を与えた。授業では，いまだ邦訳のない『太平広記』「神の部」,つづく「鬼の部」を中心に演習形式で読解を行う。第１回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的や演習の進め方	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		などについての説明を行う。第２回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。授業では，発表担当者以外もあらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。	
		中国古典小説演習Ｃ	『太平広記』の精読を通して，漢語（特に文言）の語彙，語法に関する基礎知識を習得し，文言小説の読解力を養う。北宋に成立した類書のひとつである『太平広記』には，それ以前に成立した七千篇にも及ぶ不思議な話が収められており，それ以降の文学作品（明清小説等）にも多大なる影響を与えた。授業では，いまだ邦訳のない『太平広記』「神の部」を中心に演習形式で読解を行う。第１回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的や演習の進め方などについての説明を行う。第２回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。授業では，発表担当者以外もあらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。中国古典小説演習Ａと内容は同じであるが,より深い理解を必要とし,『太平広記』全体の構成や,「神」の描写の特徴等についても議論を深める。	
		中国古典小説演習Ｄ	『太平広記』の精読を通して，漢語（特に文言）の語彙，語法に関する基礎知識を習得し，文言小説の読解力を養う。北宋に成立した類書のひとつである『太平広記』には，それ以前に成立した七千篇にも及ぶ不思議な話が収められており，それ以降の文学作品（明清小説等）にも多大なる影響を与えた。授業では，いまだ邦訳のない『太平広記』「神の部」,つづく「鬼の部」を中心に演習形式で読解を行う。第１回は授業についてのガイダンスを行い，授業の目的や演習の進め方などについての説明を行う。第２回以降は，演習形式で資料を読み進めていく。授業では，発表担当者以外もあらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。中国古典小説演習Ｂと内容は同じであるが,より深い理解を必要とし,『太平広記』全体の構成や,「神」「鬼」の描写の特徴等についても議論を深める。	
		中国文学特殊講義Ａ	中国文学は，時代により，ジャンルにより，用いられる言語も様式も大きく異なる。本講義では，古代～中世の散文，韻文，及び近代の散文，韻文について，具体的な作品を取り上げて精読する。また，書物の形式や，科挙試験の制度等，各時代の様々な風潮も当然ながら文学作品の在り方に大きな影響を与えており，こうした外的な要因を考えることも文学研究においては不可欠である。本講義では，読解力を養うのみならず，こうした中国文学に関する様々な知識を身につけることも目的としている。第１回では，授業についてのガイダンスを行う。第２回以降は，担当者の指示に従って，資料を読み進めて行く。授業では，あらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。	
		中国文学特殊講義Ｂ	中国文学は，時代により，ジャンルにより，用いられる言語も様式も大きく異なる。本講義では，古代～中世の散文，韻文，及び近代の散文，韻文について，具体的な作品を取り上げて精読する。また，書物の形式や，科挙試験の制度等，各時代の様々な風潮も当然ながら文学作品の在り方に大きな影響を与えており，こうした外的な要因を考えることも文学研究においては不可欠である。本講義では，読解力を養うのみならず，こうした中国文学に関する様々な知識を身につけることも目的としている。第１回では，授業についてのガイダンスを行う。第２回以降は，担当者の指示に従って，資料を読み進めて行く。授業では，あらかじめ資料を熟読していることを前提とした上で議論を行う。中国文学特殊講義Ａと内容は同じであるが,より深い理解が求められ,中国文学における当該作品の位置付けなどについても議論を深める。	
		欧米文学語学・言語学概説	イギリス文学，アメリカ文学，フランス文学，ドイツ文学，英語学，コーパス言語学，言語学の基本的かつ重要な理論と研究方法を学ぶ。授業形態はオムニバス方式で，各担当教員が現在行っている研究に関する主要な理論と研究法の解説，それに付随する参考文献の紹介，そして所属する専門分野の研究内容の概説が講義の中核をなす。受講生には，自らの専門領域を越えて，欧米文学，英語学，言語学における様々な専門分野について学んでもらいたい。 （オムニバス方式／全 15 回） （61　吉中　孝志／1 回） イギリス戯曲・詩文学における研究の実践例を学ぶ。 （33　大地　真介／1 回）	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		アメリカ文学とは何かということについて学ぶ。 （154　倉田　賢一／1 回） イギリス小説と現代批評理論について学ぶ。 （206　松本　舞／1 回） 初期近代英国の芸術と文学について学ぶ。 （14　今林　修／1 回） 英語文体論について主要参考文献を紹介しながら概説する。 （143　大野　英志／1 回） 文学作品に見る言語現象について主要参考文献を紹介しながら概説する。 （15　小林　英起子／3 回） イソップの寓話―ドイツの寓話 （144　今道　晴彦／1 回） コーパス言語学 （203　古川　昌文／1 回） 文学解釈の諸問題 （34　宮川　朗子／1 回） フランス文学研究のさまざまな方法 （207　奥村　真理子／1 回） フランス文学研究の諸方法 （35　今田　良信 ／1 回） 言語と文化－言語記号の恣意性及び言語による外界の範疇化と文化－ （109　上野　貴史／1 回） 理論言語学の研究史を概説し，その基本的考え方を学ぶ。	
		近代アメリカ文学演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，アメリカの近代，特に 19 世紀のアメリカ文学をアメリカの文化（歴史・宗教・風俗習慣など）と関連づけて学ぶことにある。具体的には，ナサニエル・ホーソン，エドガー・アラン・ポー，ウォルト・ホイットマンなどのアメリカン・ルネサンスの作家，マーク・トウェイン，ヘンリー・ジェームズ，セオドア・ドライサーなどのリアリズムの作家の作品を精読し，ディスカッションをする。	
		近代アメリカ文学演習Ｂ	本授業は演習形式であり，授業目的は，アメリカの近代，特に 19 世紀のアメリカ文学をアメリカの文化（歴史・宗教・風俗習慣など）と関連づけて学ぶことにある。具体的には，ラルフ・ウォルドー・エマソン，ヘンリー・デイヴィッド・ソロー，エミリー・ディキンソンなどのアメリカン・ルネサンスの作家，スティーヴン・クレイン，フランク・ノリス，ヘンリー・ジェームズなどのリアリズムの作家の作品を精読し，ディスカッションをする。	
		現代アメリカ文学演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，アメリカの現代，特に 20 世紀のアメリカ文学をアメリカの文化（歴史・宗教・風俗習慣など）と関連づけて学ぶことにある。具体的には，T・S・エリオット，ユージン・オニール，ウィリアム・フォークナーなどのモダニズムの作家，ウラジーミル・ナボコフ，トマス・ピンチョン，トニ・モリソンなどのポストモダニズムの作家の作品を精読し，ディスカッションをする。	
		現代アメリカ文学演習Ｂ	本授業は演習形式であり，授業目的は，アメリカの現代，特に 20 世紀のアメリカ文学をアメリカの文化（歴史・宗教・風俗習慣など）と関連づけて学ぶことにある。具体的には，アーネスト・ヘミングウェー，ウィリアム・フォークナー，テネシー・ウィリアムズなどのモダニズムの作家，フィリップ・K・ディック，ソール・ベロー，コーマック・マッカーシーなどのポストモダニズムの作家の作品	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		を精読し，ディスカッションをする。	
		アメリカ文学理論演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，19 世紀から 21 世紀に至るアメリカの文学を文学理論の観点から学ぶことにある。具体的には，ニュー・クリティシズム，構造主義，ポスト構造主義，精神分析，新歴史主義，ポストコロニアリズムなどの文学理論を踏まえて，ワシントン・アーヴィング，ヘンリー・ジェームズ，ガートルード・スタイン，Ｅ・Ｅ・カミングズなどのアメリカの主要な作家の作品を精読し，ディスカッションをする。	
		アメリカ文学理論演習Ｂ	本授業は演習形式であり，授業目的は，19 世紀から 21 世紀に至るアメリカの文学を文学理論の観点から学ぶことにある。具体的には，ニュー・クリティシズム，構造主義，ポスト構造主義，精神分析，新歴史主義，ポストコロニアリズムなどの文学理論を踏まえて，ハーマン・メルヴィル，ヘンリー・ジェームズ，エズラ・パウンド，テネシー・ウィリアムズなどのアメリカの主要な作家の作品を精読し，ディスカッションをする。	
		アメリカ小説作品演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，19 世紀から 21 世紀に至るアメリカの小説をアメリカの文化（歴史・宗教・風俗習慣など）と関連づけて学ぶことにある。具体的には，ジェイムズ・フェニモア・クーパー，ナサニエル・ホーソン，ハーマン・メルヴィル，イーディス・ウォートン，ジョン・ドス・パソス，ウィリアム・フォークナー，アリス・ウォーカーなどの小説を精読し，先行研究を踏まえてディスカッションをする。	
		アメリカ小説作品演習Ｂ	本授業は演習形式であり，授業目的は，19 世紀から 21 世紀に至るアメリカの小説をアメリカの文化（歴史・宗教・風俗習慣など）と関連づけて学ぶことにある。具体的には，エドガー・アラン・ポー，ハーマン・メルヴィル，マーク・トウェイン，Ｆ・スコット・フィッツジェラルド，ウィリアム・フォークナー，フラナリー・オコナー，コーマック・マッカーシーなどの小説を精読し，先行研究を踏まえてディスカッションをする。	
		アメリカ文学特殊講義Ａ	本授業は講義・演習形式であり，授業目的は，アメリカ文学に関係する日本や海外の主要な学会に出席する意義や方法を学ぶことにある。具体的には，エコクリティシズム研究会，中・四国アメリカ文学会大会，中・四国英文学会大会，日本アメリカ文学会全国大会（可能であれば the MLA Annual Convention などの海外の学会）に出席して研究発表者に質問などをするための準備をし，成績は，学会出席，研究発表者への質問，レポートによって評価する。	講義　１６時間 演習　１４時間
		アメリカ文学特殊講義Ｂ	本授業は講義・演習形式であり，授業目的は，アメリカ文学に関係する日本や海外の主要な学会に出席する意義や方法を学ぶことにある。具体的には，中・四国アメリカ文学会大会，中・四国英文学会大会，日本アメリカ文学会全国大会，日本英文学会全国大会，the MLA Annual Convention などの海外の学会に出席して研究発表者に質問などをするための準備をし，成績は，学会出席，研究発表者への質問，レポートによって評価する。	講義　１６時間 演習　１４時間
		アメリカ文学研究演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，アメリカ文学に関係する日本や海外の主要な学会で研究発表するための方法を学ぶことにある。具体的には，エコクリティシズム研究会，中・四国アメリカ文学会大会，中・四国英文学会大会，日本アメリカ文学会全国大会（可能であれば the MLA Annual Convention などの海外の学会）でアメリカ文学について研究発表するための準備をし，成績は，学会での研究発表，レポートなどによって評価する。	
		アメリカ文学研究演習Ｂ	本授業は演習形式であり，授業目的は，アメリカ文学に関係する日本や海外の主要な学会で研究発表するための方法を学ぶことにある。具体的には，エコクリティシズム研究会，中・四国アメリカ文学会大会，中・四国英文学会大会，日本アメリカ文学会全国大会（可能であれば the MLA Annual Convention などの海外の学会）でアメリカ文学について研究発表するための準備をし，成績は，学会での研究発表，レポートなどによって評価する。	
		批評理論演習Ａ	文学テクストに援用可能な様々な現代批評理論を学ぶ。構造主義とポスト構造主義，新批評，歴史主義的批評と新歴史主義批評，神話批評，女性擁護論的批評，脱構築批評，ポスト・植民地主義批評，精神分析批評などを概観するとともに，表象，作者，読者，ディスクール，エクリチュール，解釈，パフォーマンス，意図，無意識，レトリック等の基本概念を学習する。批評理論を扱った書物や論文を読み，討議する演習形式で行う。評価は，授業への貢献度とレポートで行う。	隔年
		批評理論演習Ｂ	文学テクストに援用可能な様々な現代批評理論を学ぶ。構造主義とポスト構造主義，新批評，歴史主義的批評と新歴史主義批評，神話批評，女性擁護論的批評，	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		脱構築批評，ポスト・植民地主義批評，精神分析批評などを概観するとともに，表象，作者，読者，ディスクール，エクリチュール，解釈，パフォーマンス，意図，無意識，レトリック等の基本概念を学習する。具体的な文学作品へ批評理論を援用した論文を読み，討議する演習形式で行う。評価は，授業への貢献度とレポートで行う。	
		イギリス詩文学作品演習A	本授業は演習形式であり 16 世紀から 20 世紀にイギリスで書かれたソネット形式の英詩，具体的には，Sir Thomas Wyatt, Fulke Greville, Sir Philip Sidney ,Edmund Spencer , Michel Drayton, William Shakespeare, Christina Rossetti ,W.B. Yeats Earnest Dowson, Edward Thomas, Wilfred Owen, Louis MacNiece, W.H. Auden, Ted Hughes などの作品を精読する。	
		イギリス詩文学作品演習B	本授業は演習形式であり 16 世紀から 17 世紀に書かれたイギリスの恋愛詩，具体的には，Robert Herrick, Thomas Campion, Edmund Waller, Christopher Marlowe, Sir Thomas Wyatt, Sir Philip Sidney, Sir John Sucking, Thomas Carew, John Wilmot, John Donne, John Dryden, George Wither などの詩を精読する。また注を丁寧に読むことで，文学議論の在り方を学ぶ。	
		イギリス詩文学作品研究演習A	16 世紀から 20 世紀に書かれたイギリスの宗教詩，具体的には，John Donne, George Herbert, Henry Vaughan, Thomas Traherne, Emily Bronte, Christina Rossetti, Gerard Manley Hopkins, W. B. Yeats Earnest Dowson, Wilfred Owen, W.H. Auden, Ted Hughes, Seamus Heaney, R. S. Thomas などの作品を精読する。英語が持つ言語的な意味，作品が書かれた当時の社会状況，受容のされ方についても念頭に置き，テキストにつけられた注釈を参考にしながら，作品を丹念に読み，文学的な議論を展開させる能力を養う。	
		イギリス詩文学作品研究演習B	本授業は演習形式であり 16 世紀から 19 世紀に書かれたイギリスの叙事詩，具体的には，Edmund Spencer, Fulke Greville, John Milton, Abraham Cowley, Richard Crashaw, George Gordon, Lord Byron などの作品を精読する。EEBO などのデータベースを使用しながら一次資料を活用し，文学議論の中に新しい論点を提示することを目標とする。最終的には英語でのプレゼンテーションを行う。	
		イギリス小説作品研究演習A	現代批評理論を文学テクストに援用する方法を学ぶとともに，19 世紀，及び 20 世紀のイギリス小説家の作品の読解をとおして，文学作品解釈の能力を高める。対象作家は，ジェーン・オースティン，サー・ウォルター・スコット，チャールズ・ディケンズ，エリザベス・ギャスケル，シャーロット・ブロンテ，エミリー・ブロンテ，アン・ブロンテ，ジョージ・エリオット，ウィリアム・サッカレー，ウィルキー・コリンズ，トマス・ハーディー，オスカー・ワイルドなどで，演習形式で行う。評価はレポートに拠る。	
		イギリス小説作品研究演習B	現代批評理論を文学テクストに援用する方法を学ぶとともに，19 世紀，及び 20 世紀のイギリス小説家の作品の読解をとおして，文学作品解釈の能力を高める。対象作家は，ジェーン・オースティン，サー・ウォルター・スコット，チャールズ・ディケンズ，エリザベス・ギャスケル，シャーロット・ブロンテ，エミリー・ブロンテ，アン・ブロンテ，ジョージ・エリオット，ウィリアム・サッカレー，ウィルキー・コリンズ，トマス・ハーディー，オスカー・ワイルドなどで，演習形式で行い，さらに個々の学生が研究対象とする作家研究の視点を加えて議論する。評価はレポートに拠る。	
		イギリス小説作品演習A	19 世紀，及び 20 世紀のイギリス小説家の作品の読解をとおして，文学作品解釈の能力を高める。対象作家は，ジェーン・オースティン，サー・ウォルター・スコット，チャールズ・ディケンズ，エリザベス・ギャスケル，シャーロット・ブロンテ，エミリー・ブロンテ，アン・ブロンテ，ジョージ・エリオット，ウィリアム・サッカレー，ウィルキー・コリンズ，トマス・ハーディー，オスカー・ワイルドなどで，演習形式で行う。評価はレポートに拠る。	
		イギリス小説作品演習B	19 世紀，及び 20 世紀のイギリス小説家の作品の読解をとおして，文学作品解釈の能力を高める。対象作家は，ジェーン・オースティン，サー・ウォルター・スコット，チャールズ・ディケンズ，エリザベス・ギャスケル，シャーロット・ブロンテ，エミリー・ブロンテ，アン・ブロンテ，ジョージ・エリオット，ウィリアム・サッカレー，ウィルキー・コリンズ，トマス・ハーディー，オスカー・ワイルドなどで，演習形式で行い，さらに個々の学生が研究対象とする作家研究の視点を加えて議論する。評価はレポートに拠る。	
		イギリス戯曲文学演習A	イギリスの戯曲，特にシェイクスピアを中心にしたエリザベス朝の戯曲を精読し，当該の先行研究と演劇理論，及び批評理論を援用する方法を学ぶとともに，	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		文学的な議論を展開させる能力を養う。対象テクストは，シェイクスピアの４大悲劇『ハムレット』,『リア王』,『マクベス』,『オセロウ』とローマ歴史劇『タイタス・アンドロニカス』,『ジュリアス・シーザー』,『トロイラスとクレシダ』,『コリオレイナス』,『アントニーとクレオパトラ』,『アテネのタイモン』など。演習形式で評価はレポートに拠る。	
		イギリス戯曲文学演習Ｂ	イギリスの戯曲，特にジャコビアン・トラジディーを中心とする戯曲を精読し，文学的な議論を展開させる能力を養う。対象となるテクストは，ジョン・ウエブスターの『白い悪魔』,『マルフィ公爵夫人』，シリル・ターナーによるとされる『復讐者の悲劇』，ウィリアム・ローリーの筆とされる『取り替え子』，トマス・ミドルトンを含む同時期の作家との共作と考えられる『チェス・ゲーム』,『女よ，女を警戒せよ』などである。演習形式で行い，レポートによって評価する。	
		イギリス戯曲文学演習Ｃ	イギリスの戯曲，特にシェイクスピアを中心にしたエリザベス朝の戯曲を精読し，当該の先行研究と演劇理論，及び批評理論を援用する方法を学ぶとともに，文学的な議論を展開させる能力を養う。対象テクストは，シェイクスピアの４大悲劇『ハムレット』,『リア王』,『マクベス』,『オセロウ』と喜劇『間違いの喜劇』,『ヴェローナの二紳士』,『じゃじゃ馬慣らし』,『恋の骨折り損』,『夏の夜の夢』『尺には尺を』,『十二夜』など。演習形式で評価はレポートに拠る。	
		イギリス戯曲文学演習Ｄ	イギリスの戯曲，特にジャコビアン・トラジディーを中心とする戯曲を精読し，当該の先行研究と演劇理論，及び批評理論を援用する方法を学ぶとともに，文学的な議論を展開させる能力を養う。対象となるテクストは，ジョン・ウエブスターの『白い悪魔』,『マルフィ公爵夫人』，シリル・ターナーによるとされる『復讐者の悲劇』，ウィリアム・ローリーの筆とされる『取り替え子』，トマス・ミドルトンを含む同時期の作家との共作と考えられる『チェス・ゲーム』,『女よ，女を警戒せよ』などである。演習形式で行い，レポートによって評価する。	
		英語圏文学概論Ａ	本授業は演習形式であり 16 世紀から 20 世紀に書かれた英語圏の文学作品を精読する。小説の精読においては，Thomas Hardy や Oscar Wilde などの作品を精読し，作品における「語りの構造」とその意味，「性格」，「階級制」，「家庭」，「女性の状況」などのテーマを考察する。作品における主要人物間の結婚をめぐる関係，社会における階級を理解することを目標とする。授業における教師の釈義，学生の発表，院生間の議論，質疑応答を通じて浮かび上がった問題点について，更なるリサーチを行い，論文執筆の萌芽的研究へと繋げることが求められる。また，夏季に開催される学部生の読書会のテキストの紹介等，補助を行う。	
		英語圏文学概論Ｂ	本授業は演習形式であり 16 世紀から 20 世紀に書かれた英語圏の文学作品を精読する。作品の精読により，その意義，文学的技巧，英語の音韻的美しさ，後代への影響などを考察する。Oxford English Dictionary を使用した語の検索と意味理解，『欽定英語訳聖書』をはじめとする英語訳聖書との比較・考察を通じて，これらの英語訳聖書の語彙と語法，そしてイメージと概念が具体的にどのように作品の構成要素となっているかを理解する。精読においては，文学議論のテーマを提示することを目標とする。	
		英語圏文学特殊講義Ａ	学会での発表を視野に，作品を精読するのに必要な知識を養う。論文作成のための二次資料を収集の方法を学ぶ。講義形式。成績は，学会での研究発表，レポートなどによって評価する。具体的には，広島シェイクスピアと現代作家の会，中・四国英文学会大会，日本英文学会全国大会（可能であれば海外の学会）に出席してイギリス文学に研究発表を行うか，研究発表者に質問などをするための準備をし，成績は，学会出席，研究発表者への質問，レポートによって評価する。	共同
		英語圏文学特殊講義Ｂ	学会での発表原稿を作成するための論の展開を学ぶ。特にプレゼンテーションに必要な技能を身に付ける。講義形式。成績は，学会での研究発表，レポートなどによって評価する。具体的には，広島シェイクスピアと現代作家の会，中・四国英文学会大会，日本英文学会全国大会（可能であれば海外の学会）に出席してイギリス文学に研究発表を行うか，研究発表者に質問などをするための準備をし，成績は，学会出席，研究発表者への質問，レポートによって評価する。	共同
		世界英語圏文学批評演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，ロマン派やヴィクトリア朝の詩について学ぶことにある。対象詩人は，William Blake, William Wordsworth, Samuel Taylor Coleridge, John Keats, Percy Bysshe Shelley, George Gordon Byron, Alfred Tennyson, Robert Browning, Elizabeth Barret Browning, Matthew Arnold などである。	
		世界英語圏文学批評演習	本授業は演習形式であり，授業目的は，ロマン派やヴィクトリア朝の詩につい	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	B	て学ぶことにある。対象詩人は，William Blake, William Wordsworth, Samuel Taylor Coleridge, John Keats, Percy Bysshe Shelley, George Gordon Byron, Alfred Tennyson, Robert Browning, Elizabeth Barret Browning, Matthew Arnold などであるが，これらの詩人たちに影響を与えた女流詩人の果たした役割について特化した読解を行う。	
		英語圏文学作品演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，19 世紀後半の主要なアメリカの小説について学ぶことにある。具体的には，*Daisy Mill*er，*Washington Square*，*The Portrait of a Lady*，*The Bostonian* などの Henry James の代表作を取り上げ，それらの作品の形式や文体の革新性，当時の政治や社会との共鳴性，当時の文学や思想との関係性について考察する。その際，様々な研究アプローチによる，それらの作品についての先行研究も読む。成績は授業への参加度とレポートで評価する。	
		英語圏文学作品演習Ｂ	本授業は演習形式であり，授業目的は，19 世紀後半の主要なアメリカの小説について学ぶことにある。具体的には，*The Aspern Papers*，*The Tragic Muse*，*The Turn of the Screw* などの Henry James の代表作を取り上げ，それらの作品の形式や文体の革新性，当時の政治や社会との共鳴性，当時の文学や思想との関係性について考察する。その際，様々な研究アプローチによる，それらの作品についての先行研究も読む。成績は授業への参加度とレポートで評価する。	
		英語圏文学作品研究演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，19 世紀の主要なアメリカの小説について学ぶことにある。具体的には，Nathaniel Hawthorne，Edgar Allan Poe といったアメリカン・ルネサンスの作家を取り上げ，それらの作家の小説の形式や文体の革新性，当時の政治や社会との共鳴性，当時の文学や思想との関係性について考察する。その際，様々な研究アプローチによる，それらの小説についての先行研究も読む。成績は授業への参加度とレポートで評価する。	
		英語圏文学作品研究演習Ｂ	本授業は演習形式であり，授業目的は，19 世紀の主要なアメリカの小説について学ぶことにある。具体的には，Herman Melville，Henry David Thoreau といったアメリカン・ルネサンスの作家を取り上げ，それらの作家の小説の形式や文体の革新性，当時の政治や社会との共鳴性，当時の文学や思想との関係性について考察する。その際，様々な研究アプローチによる，それらの小説についての先行研究も読む。成績は授業への参加度とレポートで評価する。	
		英語圏詩文学作品演習Ａ	本授業は演習形式であり，授業目的は，モダニズムの詩について学ぶことにある。対象となる詩人は，W. B. Yeats, Ezra Pound, T. S. Eliot, Norman Cameron, Robert Graves, Walter de la Mare, W. H. Auden, Stephen Spender, Louis MacNeice, C. Day-Lewis, Hugh MacDiarmid などである。評価は，授業中の英語でのディスカッションにどの程度貢献したかによって行う。	
		英語圏詩文学作品演習Ｂ	本授業は演習形式であり，授業目的は，モダニズムの詩について学ぶことにある。対象となる詩人は，W. B. Yeats, Ezra Pound, T. S. Eliot, Norman Cameron, Robert Graves, Walter de la Mare, W. H. Auden, Stephen Spender, Louis MacNeice, C. Day-Lewis, Hugh MacDiarmid などである。さらに個々の学生が研究対象とする作家研究の視点を加えて議論する。評価は，授業中の英語でのディスカッションにどの程度貢献したかによって行う。	
		英語学概論Ａ	音韻論・文法・語彙論・意味論・文体論のみならず，英語学の諸問題について，基本的かつ必読な学術書や学術論文を紹介しながら議論する。授業の形態は，毎回，英語学に関する学術書や学術論文を輪読しながら，担当者が問題点を指摘し，どのような点が各自の研究に援用することができ，また，応用することができるのかについて討論する。可能ならば，担当した学術書や学術論文が，各自の研究にどのような効果や影響をもたらすかについて，実例を挙げながら説明してもらいたい。	共同
		英語学概論Ｂ	音韻論・文法・語彙論・意味論・文体論のみならず，英語学の諸問題について，最新（直近の 2 年間）の学術書や学術論文を紹介しながら議論する。授業の形態は，毎回，英語学に関する学術書や学術論文を輪読しながら，担当者が問題点を指摘し，どのような点が各自の研究に援用することができ，また，応用することができるのかについて討論する。可能ならば，担当した学術書や学術論文が，各自の研究にどのような効果や影響をもたらすかについて，実例を挙げながら説明してもらいたい。	共同
		英語学理論演習Ａ	英語学における諸理論を援用しながら，近代英語期の文学作品を精読し，その言語と文体を分析する。特に，イギリス 18 世紀の散文及び小説を精読しながら，	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		英語の連続性を音韻論，統語論，文法，語彙論，意味論，語用論，及び文体論の視点から概観するとともに，英語の歴史的研究法と文献学的研究能力の涵養をはかる。授業の形態は，演習形式で，担当者が担当箇所を音読し，和訳し，言語・文体に関する問題点を指摘し，それぞれについて皆で議論する。	
		英語学理論演習Ｂ	英語学における諸理論を援用しながら，近代英語期の文学作品を精読し，その言語と文体を分析する。特に，イギリス 18 世紀の劇を精読しながら，英語の連続性を音韻論，統語論，文法，語彙論，意味論，語用論，及び文体論の視点から概観するとともに，英語の歴史的研究法と文献学的研究能力の涵養をはかる。授業の形態は，演習形式で，担当者が担当箇所を音読し，和訳し，言語・文体に関する問題点を指摘し，それぞれについて皆で議論する。	隔年
		近代英語作品研究演習Ａ	近代英語で書かれた文学作品が正確に読めるようになることを目標にする。特に，イギリス 19 世紀を代表する小説家ディケンズの前期と中期の作品を精読しながら，イギリス 18 世紀の小説の言語・文体とディケンズのそれとを比較検討する。英語の連続性を音韻論，統語論，文法，語彙論，意味論，語用論，及び文体論の視点から文学作品を通して精査するとともに，英語の歴史的研究法と文献学的研究能力の発展をはかる。授業の形態は，演習形式で，担当者が担当箇所を音読し，和訳し，言語・文体に関する問題点を指摘し，それぞれについて皆で議論する。	隔年
		近代英語作品研究演習Ｂ	近代英語で書かれた文学作品が正確に読めるようになることを目標にする。特に，イギリス 19 世紀を代表する小説家ディケンズの後期の作品を精読しながら，イギリス 18 世紀の小説の言語・文体とディケンズのそれとを比較検討する。英語の連続性を音韻論，統語論，文法，語彙論，意味論，語用論，及び文体論の視点から文学作品を通して精査するとともに，英語の歴史的研究法と文献学的研究能力の発展をはかる。授業の形態は，演習形式で，担当者が担当箇所を音読し，和訳し，言語・文体に関する問題点を指摘し，それぞれについて皆で議論する。	隔年
		中期英語概論Ａ	中期英語で書かれた文献の講読を通して，中期英語研究及び英語学研究の基礎を学ぶ。チョーサーの前期の作品（*The Book of the Duchess, The House of Fame, The Parliament of Fowls* といった夢物語詩）を講読しながら，韻律（主として 8 音節）や脚韻の特徴，そして夢物語詩に特有の英語表現を学ぶ。また，音韻論，統語論，文法，語彙論，及び意味論の視点から概観し，英語の歴史的研究法と文献学的研究能力が身に付くようにする。講読形式で，担当者が担当箇所を音読し，和訳し，言語・文体に関する問題点を指摘し，それぞれについて皆で議論する。	隔年
		中期英語概論Ｂ	中期英語で書かれた文献の講読を通して，中期英語研究及び英語学研究の基礎を学ぶ。チョーサーの中期と後期の作品（*Troilus and Criseyde, The Legend of Good Women, The Canterbury Tales*）を講読しながら，詩作上の自由度の増した 10 音節詩や，散文作品の語学的特徴を前期作品と比較しながら学ぶ。同時に，諸写本に言及しながら，英語の歴史的研究法と文献学的研究能力が身に付くようにする。講読形式で，担当者が担当箇所を音読し，和訳し，言語・文体に関する問題点を指摘し，それぞれについて皆で議論する。	隔年
		中期英語作品研究演習Ａ	初期中期英語で書かれた文献が正確に読めるようになることを目標にする。韻文作品（*The Owl and the Nightingale, The Fox and the Wolf, Havelok* 等）を精読する。地域方言に注意を払いながら，中期英語後期のチョーサーの韻文作品に見られる英語と比較し，英語の連続性を形態論，音韻論，統語論，語彙論，及び意味論の視点から考察する。同時に，イギリス中世初期の文学作品における言語と文体を研究する。授業の形態は，演習形式で，担当者が担当箇所を音読し，和訳し，言語・文体に関する問題点を指摘し，それぞれについて皆で議論する。	隔年
		中期英語作品研究演習Ｂ	初期中期英語で書かれた文献が正確に読めるようになることを目標にする。散文作品（*Ancrene Wisse, Sawles Warde* 等）を精読する。地域方言に注意を払いながら，同時代に書かれた韻文作品，及び中期英語後期のチョーサーの散文作品との比較により，形態論，音韻論，統語論，語彙論，及び意味論の視点から言語的特徴を考察する。同時に，英語の歴史的研究法と文献学的研究の在り方を考える。授業の形態は，演習形式で，担当者が担当箇所を音読し，和訳し，言語・文体に関する問題点を指摘し，それぞれについて皆で議論する。	隔年
		英語学特殊講義Ａ	歴史的な視座に立ち，英語学，とりわけ文献学的研究手法を用いながら，古期英語と中期英語を中心とする時代の洗練された文学作品を精読し，その言語芸術と文体的特徴を分析する。授業の形態は，設定された文学作品を輪読しながら，担当者がその言語芸術と文体的特徴について詳述する。そして，扱う文学作品が，近代英語期の作品（特に各自の研究対象の文学作品）と言語・文体においてどの	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		ような差異があるのかについて議論を行う。	
		英語学特殊講義Ｂ	歴史的な視座に立ち，英語学，とりわけ文献学的研究手法を用いながら，初期近代英語期と後期近代英語期の詩，戯曲，小説を精読し，時代とともに拡大したジャンルを意識しながら，その言語芸術と文体的特徴を分析する。授業の形態は，設定された作品を輪読しながら，担当者がその言語芸術と文体的特徴について詳述する。そして，その言語特徴が，より古い時代の作品，また各自の研究対象の文学作品と言語・文体においてどのような差異があるのかについて言及してもらいたい。	共同
		ドイツ文学理論演習Ａ	授業は演習形式で行なう。20 世紀における代表的なドイツ文学の文芸評論をドイツ語原文で精読し，その内容について解説し，討論することを目標にする。近現代のドイツ文芸思潮について，ルカーチ，ベンヤミン，エンツェンスベルガーの論文をもとに考察する。さらに 21 世紀では，文化と記憶の諸問題について A.アスマンの論文を手掛かりにして考察する。新しい研究動向の把握に努め，ドイツ文学の研究方法論について論文例をもとに解説し，近年の研究方法で顕著な例を紹介する。	隔年
		ドイツ文学理論演習Ｂ	授業は演習形式で行なう。ドイツ演劇史を概観して，伝統的なイリュージョンの演劇と叙事的演劇を比較し，共通点と違いを探ることを目標にする。そのためにアリストテレスの『詩学』における演劇論に遡って解説する。18 世紀レッシングの『ハンブルク演劇論』の原文から演技論，悲劇論，喜劇論，文学論に関する重要な批評を抜粋で精読し，古典演劇における舞台と観客のイリュージョンの問題について考える。それに対して，20 世紀ブレヒトが提唱した叙事的演劇と異化効果について，代表的作品の場面を原文で精読し，討論を行なう。ブレヒトの演劇論文を参照して叙事的演劇の基本理論を探る。ブレヒトから影響を受けた劇作家 H.ミュラーやデュレンマット等についても検討する。古典演劇と叙事的演劇の比較により，両者の演劇史的背景を考える。	隔年
		近現代ドイツ語学演習Ａ	1 年をかけてコーパス言語学の基礎を概観すると共に，コーパス分析のための基本的技法を習得することを目指す。また，各自の研究テーマにおいての応用可能性についてもあわせて探ることを目指す。前期は，英独の各種コーパス，検索・分析ツール，研究事例を概観することで，コーパス言語学についての基礎を学ぶ予定である。授業は，ドイツ語又は英語の文献を輪読しつつ，並行して PC を使用しながら，種々のコーパス検索・分析ツールにも接してもらう予定をしている。	隔年
		近現代ドイツ語学演習Ｂ	1 年をかけてコーパス言語学の基礎を概観すると共に，コーパス分析のための基本的技法を習得することを目指す。また，各自の研究テーマにおいての応用可能性についてもあわせて探ることを目指す。後期は，コロケーションを授業の中心テーマとする。これまで，語学，教育，文学研究の各分野でどのように議論されてきたのかを概観しつつ，実際に種々のコーパス検索・分析ツールを使って，コロケーションを抽出し，学期末には 1 年の集大成としてミニ発表をしてもらう予定である。	隔年
		ドイツ文学語学特殊講義Ａ	授業は講義形式で行なう。ドイツの戦後史は贖罪の歴史であったが，20 世紀から 21 世紀への変わり目に，ドイツ文学は自国の被害をどう描くかという困難な問題に直面した。講義の目標は，何人かの文学者を例にとって，今までほとんど語られてこなかった，空襲によるドイツ民衆の苦難について考えることである。同時に，ドイツ人作家の，ドイツの罪との関わり方についても考える。ノサック，ベル，ゼーバルト等の代表的短編を原文で読解し，解説に続けて報告と討論を行なう。	隔年
		ドイツ文学語学特殊講義Ｂ	授業は講義形式で行なう。ドイツ語史を概観し，中世ドイツ語学，文学，文化に関する発展的知識の習得を目標とする。そのために中高ドイツ語の基礎的文法の確認と中世文学の重要な作品の読解を行なう。ヴァルター・フォン・デァ・フォーゲルヴァイデの抒情詩とコンラート・フォン・ヴュルツブルクの叙事詩『裸の騎士』を主に扱い，講義では以下の項目を学ぶ。 1）ドイツ語史　2）中高ドイツ語の基礎文法　3）古代から中世へ 4）中世の世界　5）宮廷文化　6）騎士文化 7）ミンネ　8）中世の文学と抒情詩 9)中世の文学と英雄叙事詩 10)アルテュース物語群 11）宗教的作品 12）写本　13）写本とテキスト批判	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	ドイツ文学語学特殊講義C	授業は講義形式で行なう。「現代スイス文化論」をテーマとして，ドイツ語圏スイスの現代文学を読解し，スイスという国の成り立ちや多言語主義，歴史教育のあり方を理解することを目標とする。講義では以下の内容について学ぶ。 1）スイスを支える三大原則　　2）多言語主義と「スイス文学」 3）デュレンマット『ヘラクレスとアウゲイアスの牛舎』 4）永世武装中立とウィリアム・テルの神話 5）マックス・フリッシュ『学校版ウィリアム・テル』 6）マックス・フリッシュ『ビーダーマンと放火犯たち』 7）デュレンマット『疑惑』 8）スイスの牧歌的イメージ：ヨハンナ・シュピーリ『アルプスの少女ハイジ』 9）デュレンマット『老貴婦人の訪問』 10）アドルフ・ムシュク『ツゼン，あるいはわしらが住処』	隔年
		ドイツ語圏文化論演習A	授業は演習形式で行なう。レッシングの英雄悲劇『フィロータス』(1756)を精読し，作品解釈を行なうとともに，ドイツ語圏の文化史的背景を解き明かすことを目標とする。18 世紀中葉のプロイセンとオーストリアの政治的関係，7 年戦争が作品に及ぼした影響を小発表と討論により考察していく。歴史上のフィロータス王子の実像と作品中の描写の違いについて比較する。メンデルスゾーン，ニコライとの往復書簡におけるレッシングの悲劇についての基本的な考え方や後の『ハンブルク演劇論』を参照して，レッシングの英雄悲劇に反映された悲劇理論について考える。	隔年
		ドイツ語圏文化論演習B	授業は演習形式で行なう。19 世紀前半から 19 世紀後半にかけてのドイツ文学史と西洋史を概観し，文学と政治の関係についてハインリヒ・ハイネとゲオルク・ビュヒナーを例に検討することを目標とする。そのために，ハイネの抒情詩やビュヒナーの戯曲の音楽における受容についても検討する。ハイネの政治詩を精選して原文で読み，背景知識となる当時の社会体制を学びつつ，政治風刺とハイネ独特のイロニー手法を学ぶ。ビュヒナー文学では戯曲『ヴォイツェク』や『ヘッセンの急使』等を扱い，封建制社会での下級兵卒の苦悩や農民の困難な生活について原文から読み解く。ドイツ三月革命前期における政治状況を理解するために，原典の読解と合わせて数篇の研究論文を輪読し，小発表を行ない内容について討論する。	隔年
		ドイツ語圏言語文化演習A	（独文）Einer der wichtigsten deutschen Literaturpreise ist der Georg-Büchner-Preis. Seit 1951, als Gottfried Benn diesen Preis erhielt, hat sich eine Tradition der Bücher-Preis-Reden entwickelt: zumeist sind es keine bloßen Dankreden, sondern hochartifizielle Essays, in denen Schriftsteller über Georg Büchner und/oder über ihre eigene Poetik sprechen, im Idealfall über beides, wie das in Paul Celans Rede "Der Meridian" der Fall ist. In diesem Seminar sollen zwei Reden aus dem 21. Jahrhundert analysiert und besprochen werden. Die Auswahl wird in der ersten Unterrichtsstunde gemeinsam getroffen. Das Seminar ist ein Lektüreseminar, bei dem Vorbereitung und Mitarbeit entscheidend sind. Das gilt auch für die Beurteilung der Leistungen der Studenten. （和訳）ドイツ語による文学的エッセイの読解，分析，ディスカッションの力を養成する。ドイツ最高文学賞の一つ，ゲオルク・ビューヒナー賞授賞式では，ゴットフリート・ベンが受賞した 1951 年以来，受賞演説が行われるようになった。たいていは単に受賞の辞を述べるだけでなく，ビューヒナー文学もしくは自己の詩学をめぐる技巧を凝らしたエッセイとなっている。パウル・ツェラーンによる「子午線」と題する演説はその両方について語った理想的な演説の一つである。この演習では 21 世紀に行われた演説から 2 つを選び，読解と分析を行う。演説テクストの選択にあたっては受講者と相談の上決定する。本演習は能動的読解を中心とするので，受講者の十分な準備と積極的な議論が演習の質を左右する。	隔年
		ドイツ語圏言語文化演習B	（独文）Gegenstand dieses Seminars ist eine Erzählung Adalbert Stifters, die möglichst genau gelesen und analysiert werden soll. Die Entscheidung, welche Erzählung das sein wird, ist in der ersten Unterrichtsstunde nach einer kurzen Einführung in das Werk Adalbert Stifters gemeinsam zu treffen. Das Seminar ist ein Lektüreseminar, bei dem Vorbereitung und Mitarbeit	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		entscheidend sind. Das gilt auch für die Beurteilung der Leistungen der Studenten. （和訳）この演習ではオーストリアの代表的作家の一人，アーダルベルト・シュティフターの諸作品を対象とし，できるだけ精確な読解と解釈を行うことを通して，ドイツ語による作品読解と分析及び意見発表の能力を養うことを目的とする。授業ではまずシュティフター文学とその作品について概説的な紹介を行った上で，受講生と相談の上扱う作品を決定する。本演習は能動的読解を中心とするので，受講者の十分な準備と積極的な議論が演習の質を左右する。	
		ドイツ語圏言語文化演習C	（独文）Einer der wichtigsten deutschen Literaturpreise ist der Georg-Büchner-Preis. Seit 1951, als Gottfried Benn diesen Preis erhielt, hat sich eine Tradition der Bücher-Preis-Reden entwickelt: zumeist sind es keine bloßen Dankreden, sondern hochartifizielle Essays, in denen Schriftsteller über Georg Büchner und/oder über ihre eigene Poetik sprechen, im Idealfall über beides, wie das in Paul Celans Rede "Der Meridian" der Fall ist. In diesem Seminar sollen zwei Reden aus dem 21. Jahrhundert analysiert und besprochen werden. Die Auswahl wird in der ersten Unterrichtsstunde gemeinsam getroffen. Das Seminar ist ein Lektüreseminar, bei dem Vorbereitung und Mitarbeit entscheidend sind. Das gilt auch für die Beurteilung der Leistungen der Studenten. （和訳）ドイツ語による文学的エッセイの読解，分析，ディスカッションの力を養成する。ドイツ最高文学賞の一つ，ゲオルク・ビューヒナー賞授賞式では，ゴットフリート・ベンが受賞した 1951 年以来，受賞演説が行われるようになった。たいていは単に受賞の辞を述べるだけでなく，ビューヒナー文学もしくは自己の詩学をめぐる技巧を凝らしたエッセイとなっている。パウル・ツェラーンによる「子午線」と題する演説はその両方について語った理想的な演説の一つである。この演習では 21 世紀に行われた演説から 2 つを選び，読解と分析を行う。演説テクストの選択にあたっては受講者と相談の上決定する。本演習は能動的読解を中心とするので，受講者の十分な準備と積極的な議論が演習の質を左右する。	隔年
		ドイツ語圏言語文化演習D	（独文）Gegenstand dieses Seminars ist eine Erzählung Adalbert Stifters, die möglichst genau gelesen und analysiert werden soll. Die Entscheidung, welche Erzählung das sein wird, ist in der ersten Unterrichtsstunde nach einer kurzen Einführung in das Werk Adalbert Stifters gemeinsam zu treffen. Das Seminar ist ein Lektüreseminar, bei dem Vorbereitung und Mitarbeit entscheidend sind. Das gilt auch für die Beurteilung der Leistungen der Studenten. （和訳）この演習ではオーストリアの代表的作家の一人，アーダルベルト・シュティフターの諸作品を対象とし，できるだけ精確な読解と解釈を行うことを通して，ドイツ語による作品読解と分析及び意見発表の能力を養うことを目的とする。授業ではまずシュティフター文学とその作品について概説的な紹介を行った上で，受講生と相談の上扱う作品を決定する。本演習は能動的読解を中心とするので，受講者の十分な準備と積極的な議論が演習の質を左右する。	隔年
		ドイツ文学発展演習A	授業は演習形式で行なう。若きゲーテのワイマール宮廷時代初期における文学と日常生活を，作品と伝記によって解き明かすことを目標とする。そのために，ゲーテの戯曲『兄妹』やその頃の代表的抒情詩を選択して精読し，作品内容を検討する。文化史の面からは，ワイマール時代のゲーテの日常生活や文学サロンの様子も考察する。シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人との交流とその影響を重要な手紙の原文から読み取りたい。作品の主題に関する研究論文も数篇読み，報告と討論を行なう。戯曲の基本的な分析方法や抒情詩の技法，作品解釈について学ぶ。	隔年
		ドイツ文学発展演習B	授業は演習形式で行なう。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのドイツ文学のモデルネに関連する多彩な作家の文学活動をグループに分類して確認する。その中からテオドール・フォンターネ，トーマス・マン，ハインリヒ・マン，ゲルハルト・ハウプトマン等の作品を抜粋で精読し，作品解釈と時代背景の考察を行	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		なうことを目標とする。原典の読解に合わせて，作家の伝記を学び，作家の手紙や作品論に関する数篇の研究論文を輪読し，小発表を行ない，それに続いて討論をする。研究資料の収集法や研究会での発表スキルも指導する。	
		ドイツ近現代文学演習Ａ	世紀転換期のトーマス・マン，ムージル，ホーフマンスタールら重要な作家・作品を素材として，それぞれの文学がもつ意義を技法，文学史，歴史・社会等，様々な観点から考えていく。 １セメスターで検討可能な作品には限りがあるため，扱う素材は参加者の関心に応じて決めていくが，どれを選ぶ場合も作品の全体又は一部の精読とともに，上記の様々な観点から作品を多角的に捉えるために複数の文献を参照し，参加者の発表とディスカッションを交えた演習を行う。	隔年
		ドイツ近現代文学演習Ｂ	２０世紀前半のローベルト・ヴァルザー，カフカ，ブレヒト，２０世紀後半のグラス，ヴォルフら重要な作家・作品を素材として，それぞれの文学がもつ意義を文学史，芸術史，歴史・社会等，様々な観点から考えていく。 １セメスターで検討可能な作品には限りがあるため，扱う素材は参加者の関心に応じて決めていくが，どれを選ぶ場合も作品の全体又は一部の精読とともに，上記の様々な観点から作品を多角的に捉えるために複数の文献を参照し，参加者の発表とディスカッションを交えた演習を行う。	隔年
		ドイツ小説演習Ａ	世紀転換期から 20 世紀前半のドイツ語小説作品を読み，従来の 19 世紀的文学とは異なる新たな小説形式の可能性を考察していく。またこの演習では多読練習のために，長編であっても最後まで読み切ることを目指す。 主として扱う作品は参加者の関心も考慮して１セメスターで１つか２つを選ぶ。併せてシュタンツェル以来ドイツでも盛んになった語りや物語理論を概観し，在来の理論の有効性と限界についても理解を深める。授業は作品分析に関する参加者のレポートとディスカッションを交えて進めていく。	隔年
		ドイツ小説演習Ｂ	戦後を含む 20 世紀のドイツ語小説作品を読み，主として物語論の観点からそれらがもつ様々な特徴を捉え，小説形式の可能性を考察していく。またこの演習では多読練習のために，長編であっても最後まで読み切ることを目指す。 主として扱う作品は参加者の関心も考慮して１セメスターで１つか２つを選ぶ。併せて様々な文学理論を概観し，複雑かつ多層化した現代小説への様々な研究方法を検討する。授業は作品の読解の他，そうした作品へのアプローチに関する参加者のレポートとディスカッションを交えて進めていく。	隔年
		ドイツ語コーパス言語学Ａ	本授業では，コーパス言語学とは何かを概観すると共に，コーパスを用いた言語分析の方法を獲得することを目指す。前期は，とりわけドイツ語で書かれたコーパス言語学に関する概説書を用いて，基礎的知識の獲得を目指す。また，ドイツ語の主要コーパス検索システムの使い方とその問題点を整理すると共に，自作でコーパスを構築し，それを用いて分析する基礎的手法について学ぶ。なお，学期の最後には，コーパス言語学の観点から，各自が設定した課題について報告してもらう予定である。	隔年
		ドイツ語コーパス言語学Ｂ	本授業では，コーパス言語学とは何かを概観すると共に，コーパスを用いた言語分析の方法を獲得することを目指す。後期は，コーパス言語学の研究書や論文を用いて，これまでなされてきた研究のいくつかを概観し，履修者に具体的なイメージを抱いてもらうことを目指す。また，コーパス分析に必要となる仮説検定や多変量解析といった統計手法についても，学ぶ予定である。なお，学期の最後には，コーパス言語学の観点から，各自が設定した課題について報告してもらう予定である。	隔年
		フランス語文学研究Ａ	詩，演劇，小説，エッセーの各ジャンルにおけるフランス語文学の大作を取り上げます。演習の目標は，フランス文学とフランス語圏の文学についてジャンルの変化，テーマの繋がり，歴史・社会との関係を大まかに見ます。具体的な例を取り上げて，各テクストの文体やその時代又はその空間のフランス語の特徴も見ます。「フランス語文学研究Ａ」は，中世文学から現代文学まで，詩，演劇，エッセーに集中します。実際の授業は，学生の要望や必要に応じて柔軟に授業を行います。	隔年
		フランス語文学研究Ｂ	詩，演劇，小説，エッセーの各ジャンルにおけるフランス語文学の大作を取り上げます。演習の目標は，フランス文学とフランス語圏の文学についてジャンルの変化，テーマの繋がり，歴史・社会との関係を大まかに見ます。具体的な例を取り上げて，各テクストの文体やその時代又はその空間のフランス語の特徴も見ます。「フランス語文学研究 Ｂ」，は１７世紀から現代まで渡って，フランス語と	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		フランス語圏の物語性のあるフィクションや自叙伝に集中します。実際の授業は，学生の要望や必要に応じて柔軟に授業を行います。	
		フランス語文学批評研究A	フランス語文学に関する文学批評の主要な著作や理論的研究を学ぶことにより，文学批評の基礎的な知識を身につけることを目的とする。具体的には，小説論や演劇論などジャンルに関するもの（モンテーニュ，ボードレール，モーパッサンなど）や古典主義，ロマン主義，写実主義，超現実主義，ヌーヴォーロマンなどの文芸思潮に関するもの（ボワロー，ユゴー，ゾラ，サント＝ブーヴ，ブリュヌティエールなど）からいくつか選んで読み，それぞれのジャンルや思潮の概念を理解する。	隔年
		フランス語文学批評研究B	フランス語文学に関する文学批評の主要な著作や理論的研究を学ぶことにより，文学批評の基礎的な知識を身につけることを目的とする。具体的には，古典主義時代以降に発表された作品（『クレーヴの奥方』,『悪の華』,『ボヴァリー夫人』,『異邦人』,『犀』など）に対する同時代評，1960 年代以降のフランス文学理論の主要な研究（ジュネット，バルト，ルジュンヌ，マシュレーなど）からいくつか選んで読み，その批評的立場を理解する。	隔年
		フランス語文学・フランス語学演習A	フランス語文学の具体的なテクストを読みながら，又は日本文学の仏訳を行いながら，フランス語文学の文体や詩法を学生に身につけてもらいます。文章の構造，活用の時間の感覚の分析，作家と読者の関係の作り方，ジャンルの全体的な流れ，又は，各文芸ジャンルにおける書き言葉のフランス語の特徴（小説における会話，詩のリズムや一ページの空間の使い方等）又は（詩や演劇等の読み方に当たる）口頭のフランス語の特徴等を扱います。「フランス語文学・フランス語学演習A」は，散文を中心にして，長編と短編小説の文体や心理描写を取り上げます。実際の授業は，学生の要望や必要に応じて柔軟に授業を行います	隔年
		フランス語文学・フランス語学演習B	フランス語文学の具体的なテクストを読みながら，又は日本文学の仏訳を行いながら，フランス語文学の文体や詩法を学生に身につけてもらいます。文章の構造，活用の時間の感覚の分析，作家と読者の関係の作り方，ジャンルの全体的な流れ，又は，各文芸ジャンルにおける書き言葉のフランス語の特徴（小説における会話，詩のリズムや一ページの空間の使い方等）又は（詩や演劇等の読み方に当たる）口頭のフランス語の特徴等を扱います。「フランス語文学・フランス語学演習 B」は，前半は１９世紀の短編小説を通して物語の構造と散文の文体に集中して，後半は詩と演劇の読み方を触れながら韻文の文体を重点的に行います。実際の授業は，学生の要望や必要に応じて柔軟に授業を行います。	隔年
		フランス文学特別研究演習A	［授業形態］演習形式で行う。 ［授業目標］フランス文学研究のために必要な研究テーマの設定法や研究の方法論などを学び習得し，それによって受講生各自の研究のテーマ設定や方法を模索することを目標とする。 ［授業計画］受講生の要望や必要性を考慮に入れて，題材とする文学作品や研究書や研究論文などを選択し，授業計画を立て，選択した文学作品や研究書や研究論文などを題材に，立てた計画に沿って演習形式で学んで行く。ただし，必要に応じて適宜柔軟に変更を行うことを厭わない。	隔年
		フランス文学特別研究演習B	［授業形態］演習形式で行う。 ［授業目標］フランス文学研究のために必要な研究テーマの設定法や研究の方法論などを学び習得し，それによって受講生各自の研究のテーマ設定や方法を模索することを目標とする。 ［授業計画］受講生の要望や必要性を考慮に入れて，題材とする文学作品や研究書や研究論文などを選択し，授業計画を立て，選択した文学作品や研究書や研究論文などを題材に，立てた計画に沿って演習形式で学んで行く。ただし，必要に応じて適宜柔軟に変更を行うことを厭わない。言うまでもないことだが，フランス文学特別研究演習 A を前年度に履修した学生が受講していても，学生の今年度の要望や必要性は前年度とは異なるのであるから，選択する題材も授業計画も当然，フランス文学特別研究演習 A とは別のものになる。	隔年
		近現代フランス語文学作品研究演習A	19 世紀のフランス語で書かれた文学作品，とりわけ版による異同の多い作品を選び，精読するとともに，新たな解釈の可能性を考える。具体的には，ゾラ『テレーズ・ラカン』(Zola, *Thérèse Raquin*) の初版と第 2 版の異同を踏まえた上で，さまざまな校訂版(nouveau monde 版， cercle des œuvres précieux 版, pléiade 版， folio 版など)にある注や解説も参照しながらテクストを読み解くとともに，この作品に関する先行研究を調査した上で，従来のアプローチ方法とは異なる方	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		法論での評価の可能性を探る。	
		近現代フランス語文学作品研究演習Ｂ	19 世紀のフランス語で書かれた文学作品で，とりわけ時代との関連性が強い作品を選び，精読するとともに，新たな解釈の可能性を考える。具体的には，ゾラ『真実』(Zola, *Vérité*) をさまざまな校訂版(nouveau monde 版， cercle des œuvres précieux 版, livre de poche 版など)にある注や解説を参照し，かつドレフュス事件との関連をこの事件の歴史的研究などから確認したうえでテクストを読み解くとともに，その作品に関する先行研究を調査した上で，従来のアプローチ方法とは異なる方法論での評価の可能性を探る。	隔年
		近現代フランス語文学批評演習Ａ	文学テクストを批評するための基礎知識を学び，理論的立場からテクストを分析する練習を行う。この授業では，小説を一点選び，その版の選定やヴァリアントの取捨選択といった基礎的な作業を行いながら，分析するテクストの選定に関する基礎知識を体得する。さらに，間テクスト性，語用論，文体論などの理論的研究から一つ選び，その観点からのテクスト分析を試みる。尚，前年度の「近現代フランス語文学批評演習 B」の授業で取り上げたテクストは，原則として扱わない。	隔年
		近現代フランス語文学批評演習Ｂ	文学テクストを批評するための基礎知識を学び，理論的立場からテクストを分析する練習を行う。この授業では，詩集あるいは演劇作品を一点選び，その版の選定やヴァリアントの取捨選択といった基礎的な作業を行いながら，分析するテクストの選定に関する基礎知識を体得する。さらに，間テクスト性，語用論，文体論などの理論的研究から一つ選び，その観点からのテクスト分析を試みる。尚，前年度の「近現代フランス語文学批評演習 B」の授業で取り上げたテクストは，原則として扱わない。	隔年
		近現代フランス語表現小説研究Ａ	小説に対する伝統的な考え方から現代の代表的な小説研究までを概観し，参加者自身の見解を確立することを目的とする。具体的には，18 世紀までのさまざまな散文のジャンルを把握した後，スタンダール，バルザック，フロベール，ゾラなどのフランス語文学の代表的な作家が著した小説論や，小説とロマネスクとの関係，小説の教育的機能などに関する理論的研究の抜粋の講読とこれらのテクストの批判的検証を通して，小説に対する知識を深める。尚，前年度の「近現代フランス小説研究 B」の授業で取り上げたテクストとトピックは，原則として扱わない。	隔年
		近現代フランス語表現小説研究Ｂ	小説に対する伝統的な考え方から現代の代表的な小説研究までを概観し，参加者自身の見解を確立することを目的とする。具体的には，19 世紀までのさまざまな散文のジャンルを把握した後，ブルトン，サルトル，ロブ＝グリエ，クンデラなどのフランス語文学の代表的な作家が著した小説論や，小説批判，小説とジャンルの問題などに関する理論的研究の抜粋の講読とこれらのテクストの批判的検証を通して，小説に対する知識を深める。尚，前年度の「近現代フランス小説研究 B」の授業で取り上げたテクストとトピックは，原則として扱わない。	隔年
		フランス語コミュニケーションと修辞学演習Ａ	この授業の主な目的は以下の通りである。 - 論理的な方法で考えをまとめることを学ぶ。 - フランス式の論文作成方法の原則に慣れる。 - 議論に参加しながらフランス語の口頭表現を上達させる。 - （時事的な話題に沿った）さまざまなテーマに関する語彙を増やす。 - 複雑な文法的要素を含んだ文型（接続法，半過去，補語代名詞，伝聞の話法など）を使いこなせるようになる。 取り上げるテーマは，時事的な話題と学生の必要性によって決定する。 原則として，前年度フランス語コミュニケーションと修辞学演習 B,D の授業で議論されたテーマは扱わない。	隔年
		フランス語コミュニケーションと修辞学演習Ｂ	この授業の主な目的は以下の通りである。 - 論理的な方法で考えをまとめることを学ぶ。 - フランス式の論文作成方法の原則に慣れる。 - 議論に参加しながらフランス語の口頭表現を上達させる。 - （時事的な話題に沿った）さまざまなテーマに関する語彙を増やす。 - 複雑な文法的要素を含んだ文型（接続法，半過去，補語代名詞，伝聞の話法など）を使いこなせるようになる。 取り上げるテーマは，時事的な話題と学生の必要性によって決定する。 原則として，前年度フランス語コミュニケーションと修辞学演習Ａ, C の授業で議論されたテーマは扱わない。	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	フランス語コミュニケーションと修辞学演習C	この授業の主な目的は以下の通りである。 - 論理的な方法で考えをまとめることを学ぶ。 - フランス式の論文作成方法の原則に慣れる。 - 議論に参加しながらフランス語の口頭表現を上達させる。 - （時事的な話題に沿った）さまざまなテーマに関する語彙を増やす。 - 複雑な文法的要素を含んだ文型（接続法，半過去，補語代名詞，伝聞の話法など）を使いこなせるようになる。 取り上げるテーマは，時事的な話題と学生の必要性によって決定する。 原則として，前年度フランス語コミュニケーションと修辞学演習Dと前セメスターのフランス語コミュニケーションと修辞学演習Aの授業で議論されたテーマは扱わない。	隔年
		フランス語コミュニケーションと修辞学演習D	この授業の主な目的は以下の通りである。 - 論理的な方法で考えをまとめることを学ぶ。 - フランス式の論文作成方法の原則に慣れる。 - 議論に参加しながらフランス語の口頭表現を上達させる。 - （時事的な話題に沿った）さまざまなテーマに関する語彙を増やす。 - 複雑な文法的要素を含んだ文型（接続法，半過去，補語代名詞，伝聞の話法など）を使いこなせるようになる。 取り上げるテーマは，時事的な話題と学生の必要性によって決定する。 原則として，前年度フランス語コミュニケーションと修辞学演習 C と前セメスターのフランス語コミュニケーションと修辞学演習 B の授業で議論されたテーマは扱わない。	隔年
		フランス語圏文化論演習A	フランス語・フランス文学を既に学んだ学生が，フランス語でかかれた資料を通してフランスの歴史，社会，宗教，家族，政治等について学び，各テーマの基本な専門用語を身につけることを目的とする。実際の授業は，学生の要望や必要に応じて柔軟に変更する。授業で扱うテーマは以下の通りである。 「フランス語圏文化論演習 A」は地理を初め世界における現代フランス，そして国際関係，フランスの政治と宗教を取り上げます。実際の授業は，学生の要望や必要に応じて柔軟に変更します。	隔年
		フランス語圏文化論演習B	フランス語・フランス文学を既に学んだ学生が，フランス語でかかれた資料を通してフランスの歴史，社会，宗教，家族，政治等について学び，各テーマの基本な専門用語を身につけることを目的とする。実際の授業は，学生の要望や必要に応じて柔軟に変更する。授業で扱うテーマは以下の通りである。 「フランス語圏文化論演習 B」は芸術や文化に集中して，料理，映画，ポップカルチャーを取り上げます。実際の授業は，学生の要望や必要に応じて柔軟に変更します。	隔年
		フランス語圏文化論演習C	この授業の目的は以下の通りである。 - テクストや資料から見るフランス文化のさまざまな様相を紹介する。 - 新聞記事やテレビの情報（インターネットからも配信される）を理解するための語彙を増やす。 - さまざまな話題についてフランス語で議論することを学ぶ。 - フランス語の文章の書き方に慣れる。 予定されているテーマは以下の通りである。フランスにおける礼儀作法，社会における女性と男性，家族，夫婦と子供，年中行事，フランスの文化的な生活，スポーツと趣味，メディア，都市と田舎，フランスにおける健康問題，経済とフランス製品，フランスとヨーロッパ，フランス語圏など。 必要と時事的な問題によりこれらのテーマは変更しうる。原則として，前年度フランス文化論演習Dの授業で取り上げたテーマは扱わない。	隔年
		フランス語圏文化論演習D	この授業の目的は以下の通りである。 - テクストや資料から見るフランス文化のさまざまな様相を紹介する。 - 新聞記事やテレビの情報（インターネットからも配信される）を理解するための語彙を増やす。 - さまざまな話題についてフランス語で議論することを学ぶ。 - フランス語の文章の書き方に慣れる。 予定されているテーマは以下の通りである。フランスにおける礼儀作法，社会における女性と男性，家族，夫婦と子供，年中行事，フランスの文化的な生活，スポーツと趣味，メディア，都市と田舎，フランスにおける健康問題，経済とフ	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		ランス製品，フランスとヨーロッパ，フランス語圏など。 必要と時事的な問題によりこれらのテーマは変更しうる。原則として，前年度フランス文化論演習Dの授業で取り上げたテーマは扱わない。	
		フランス語文学・フランス語学特殊講義A	フランス語文学の領域から選んだ一つのトピックについて，それに関連する基本的知識を学び，代表的研究や最新の研究成果などの紹介を交えながら論じることにより，そのトピックに関する知識と理解を深めることを目的とする。トピックによっては，演習をとりいれることもある。基本的には集中講義の形式で行うが，講義内容によっては，タームもしくはセメスターで行うこともある。また，前年度のフランス語文学・フランス語学特殊講義 B で取り上げたトピックは取り上げない。	隔年
		フランス語文学・フランス語学特殊講義B	フランス語学あるいはフランス思想や歴史と文学が交差する複合的な領域から選んだ一つのトピックについて，それに関連する基本的知識を学び，代表的研究や最新の研究成果などの紹介を交えながら論じることにより，そのトピックに関する知識と理解を深めることを目的とする。トピックによっては，演習をとりいれることもある。基本的には集中講義の形式で行うが，講義内容によっては，タームもしくはセメスターで行うこともある。また，前年度のフランス語文学・フランス語学特殊講義 B で取り上げたトピックは取り上げない。	隔年
		言語研究法講義ＩＡ	この授業の目的は，言語研究を行う教師・院生が，それぞれ自らが進める研究内容に関する自分の研究論文（修士の院生の場合は最終的には修士論文）完成のため，論文完成に必要な文献の紹介や書評などを含めた研究発表を行い，それついて意見を出し合い，参加者で検討して，充実した内容の論文（修士の院生については修士論文）を作成することを目標とする。授業の形態は，研究発表を中心とした演習形式となるが，場合によっては講義形式もあり得る。Ｂの内容も踏まえて，発展させる。	隔年・共同 講義　１５時間 演習　１５時間
		言語研究法講義ＩＢ	この授業の目的は，言語研究を行う教師・院生が，それぞれ自らが進める研究内容に関する自分の研究論文（修士の院生の場合は最終的には修士論文）完成のため，論文完成に必要な文献の紹介や書評などを含めた研究発表を行い，それついて意見を出し合い，参加者で検討して，充実した内容の論文（修士の院生については修士論文）を作成することを目標とする。授業の形態は，研究発表を中心とした演習形式となるが，場合によっては講義形式もあり得る。Ａの内容も踏まえて，発展させる。	隔年・共同 講義　１５時間 演習　１５時間
		言語研究法講義ⅡＡ	この授業の目的は，言語研究を行う教師・院生が，それぞれ自らが進める研究内容に関する自分の研究論文（修士の院生の場合は最終的には修士論文）完成のため，言語研究法講義ＩＡの授業を踏まえ，それをさらに発展させるように，論文完成に必要な文献の紹介や書評などを含めた研究発表を行い，それついて意見を出し合い，参加者で検討して，充実した内容の論文（修士の院生については修士論文）を作成することを目標とする。授業の形態は，研究発表を中心とした演習形式となるが，場合によっては講義形式もあり得る。Ｂの内容も踏まえて，発展させる。	隔年・共同 講義　１５時間 演習　１５時間
		言語研究法講義ⅡＢ	この授業の目的は，言語研究を行う教師・院生が，それぞれ自らが進める研究内容に関する自分の研究論文（修士の院生の場合は最終的には修士論文）完成のため，言語研究法講義ＩＢの授業を踏まえ，それをさらに発展させるように，論文完成に必要な文献の紹介や書評などを含めた研究発表を行い，それついて意見を出し合い，参加者で検討して，充実した内容の論文（修士の院生については修士論文）を作成することを目標とする。授業の形態は，研究発表を中心とした演習形式となるが，場合によっては講義形式もあり得る。Ａの内容も踏まえて，発展させる。	隔年・共同 講義　１５時間 演習　１５時間
		一般言語学演習A	この授業の目的は，研究題材の把握及び研究方法の習得である。一般言語学の視座から，言語研究を行う教師・院生が，各自の研究を進めるために最大公約数的に有益と思われる，研究内容及び方法論に関する論文等を一緒に読み，その問題点の検討を通して，院生に研究方法を習得させることを目標とする。授業の形態は，演習・講義である。Ｂの内容も踏まえて，発展させる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		一般言語学演習B	この授業の目的は，研究題材の把握及び研究方法の習得である。一般言語学の視座から，言語研究を行う教師・院生が，各自の研究を進めるために最大公約数的に有益と思われる，研究内容及び方法論に関する論文等を一緒に読み，その問題点の検討を通して，院生に研究方法を習得させることを目標とする。授業の形態は，演習・講義である。Ａの内容も踏まえて，発展させる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	一般言語学特別演習Ａ	この授業の目的は，研究題材の把握及び研究方法の習得である。また，言語研究に必要な基礎的知識，基礎的理論の習得も目指す。一般言語学の視座から，言語研究を行う教師・院生が，各自の研究を進めるために最大公約数的に有益と思われる，研究内容及び方法論に関する論文等を一緒に読み，その問題点の検討を通して，院生に研究方法を習得させることを目標とする。授業の形態は，演習・講義である。Ｂの内容も踏まえて，発展させる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		一般言語学特別演習Ｂ	この授業の目的は，研究題材の把握及び研究方法の習得である。また，言語研究に必要な基礎的知識，基礎的理論の習得も目指す。一般言語学の視座から，言語研究を行う教師・院生が，各自の研究を進めるために最大公約数的に有益と思われる，研究内容及び方法論に関する論文等を一緒に読み，その問題点の検討を通して，院生に研究方法を習得させることを目標とする。授業の形態は，演習・講義である。Ａの内容も踏まえて，発展させる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		理論・応用言語学演習Ａ	この授業の目的は，修士論文を完成させようとしている院生に資するため，世界の様々な言語の言語構造（音韻・形態・統語・意味）に関する基礎知識や言語研究の方法論に関する知識を提供することである。自分の修士論文を完成させるに当たって，より広範な視野から自らの研究対象及び方法論を俯瞰することを目標とする。授業の形態は，演習・講義である。Ｂの内容も踏まえて，発展させる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		理論・応用言語学演習Ｂ	この授業の目的は，修士論文を完成させようとしている院生に資するため，世界の様々な言語の言語構造（音韻・形態・統語・意味）に関する基礎知識や言語研究の方法論に関する知識を提供することである。自分の修士論文を完成させるに当たって，より広範な視野から自らの研究対象及び方法論を俯瞰することを目標とする。授業の形態は，演習・講義である。Ａの内容も踏まえて，発展させる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		理論・応用言語学特別演習Ａ	この授業の目的は，修士論文を完成させようとしている院生に資するため，世界の様々な言語の言語構造（音韻・形態・統語・意味）に関する基礎知識や言語研究の方法論に関する知識を提供することである。自分の修士論文を完成させるに当たって，理論・応用言語学演習Ａを発展させ，より広範な視野から自らの研究対象及び方法論を俯瞰することを目標とする。授業の形態は，演習・講義である。Ｂの内容も踏まえて，発展させる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		理論・応用言語学特別演習Ｂ	この授業の目的は，修士論文を完成させようとしている院生に資するため，世界の様々な言語の言語構造（音韻・形態・統語・意味）に関する基礎知識や言語研究の方法論に関する知識を提供することである。自分の修士論文を完成させるに当たって，理論・応用言語学演習Ｂを発展させ，より広範な視野から自らの研究対象及び方法論を俯瞰することを目標とする。授業の形態は，演習・講義である。Ａの内容も踏まえて，発展させる。	隔年 講義　１０時間 演習　２０時間
		歴史・対照言語学演習Ａ	個別言語研究と一般言語学を結び付けるものが対照言語学であり，各時代の共時態を通時的に研究するものが歴史言語学である。いずれの研究も，言語間・時間的相違を比較・考察することにより，個別言語の現象や通時的推移を明確にするものである。この演習では，理論言語学を用いた対照言語学・歴史言語学に関する論文（ゲルマン語歴史言語学，日本語・イタリア語対照言語学，英語理論言語学）を各人が選び，それを履修生で講読をした後，発表・質疑応答を行う。この授業では，この中で対照言語学における手法を用いた演習を行う。	
		歴史・対照言語学演習Ｂ	個別言語研究と一般言語学を結び付けるものが対照言語学であり，各時代の共時態を通時的に研究するものが歴史言語学である。いずれの研究も，言語間・時間的相違を比較・考察することにより，個別言語の現象や通時的推移を明確にするものである。この演習では，理論言語学を用いた対照言語学・歴史言語学に関する論文（ゲルマン語歴史言語学，日本語・イタリア語対照言語学，英語理論言語学）を各人が選び，それを履修生で講読をした後，発表・質疑応答を行う。この授業では，この中で歴史言語学における手法を用いた演習を行う。	
		歴史・対照言語学特別演習Ａ	個別言語研究と一般言語学を結び付けるものが対照言語学であり，各時代の共時態を通時的に研究するものが歴史言語学である。いずれの研究も，言語間・時間的相違を比較・考察することにより，個別言語の現象や通時的推移を明確にするものである。この演習では，理論言語学を用いた対照言語学・歴史言語学に関する論文（ロマンス語歴史言語学，日本語・中国語対照言語学，イタリア語理論言語学）を各人が選び，それを履修生で講読をした後，発表・質疑応答を行う。この授業では，「歴史・対照言語学演習Ａ」の授業を踏まえ，それをさらに発展させるように，対照言語学における手法を用いた演習を行う。	
		歴史・対照言語学特別演	個別言語研究と一般言語学を結び付けるものが対照言語学であり，各時代の共	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム	習B	時態を通時的に研究するものが歴史言語学である。いずれの研究も，言語間・時間的相違を比較・考察することにより，個別言語の現象や通時的推移を明確にするものである。この演習では，理論言語学を用いた対照言語学・歴史言語学に関する論文（ロマンス語歴史言語学，日本語・中国語対照言語学，イタリア語理論言語学）を各人が選び，それを履修生で講読をした後，発表・質疑応答を行う。この授業では，「歴史・対照言語学演習 B」の授業を踏まえ，それをさらに発展させるように，歴史言語学における手法を用いた演習を行う。	
		ヨーロッパ語比較構文論講義A	Noam Chomsky が理論言語学を提唱して半世紀が過ぎるが，その理論内容は時代と共に変化している（標準理論→拡大標準理論→ GB 理論→ミニマリストプログラム）。本講義では，このような理論がどのように変遷し，現在のミニマリストプログラムに至っているかを理解するため，「空構成素」，「主要部移動」，「Wh 移動」，「A 移動」，「一致・格・移動」，「分離投射」，「位相」といった理論内容を概説する。この授業では，特にロマンス語を講義する。	
		ヨーロッパ語比較構文論講義B	Noam Chomsky が理論言語学を提唱して半世紀が過ぎるが，その理論内容は時代と共に変化している（標準理論→拡大標準理論→ GB 理論→ミニマリストプログラム）。本講義では，このような理論がどのように変遷し，現在のミニマリストプログラムに至っているかを理解するため，「範疇」，「経済性の原理」，「束縛原理」，「局所性」，「時制・相・法」，「否定」，「数量詞」，「情報構造」，「パラミター」といった理論内容を概説する。この授業では，特にゲルマン語を講義する。	
		ヨーロッパ語比較構文論演習A	Noam Chomsky が理論言語学を提唱して半世紀が過ぎるが，その理論内容は時代と共に変化している（標準理論→拡大標準理論→ GB 理論→ミニマリストプログラム）。本演習では，このような理論がどのように変遷し，現在のミニマリストプログラムに至っているかを理解するため，ヨーロッパ言語を扱った理論言語学に関する論文（GB 理論，ミニマリストプログラム，位相）を各人が選び，それを履修生で講読した後，発表・質疑応答を行う。この授業では，特にスラヴ語を講義する。	
		ヨーロッパ語比較構文論演習B	Noam Chomsky が理論言語学を提唱して半世紀が過ぎるが，その理論内容は時代と共に変化している（標準理論→拡大標準理論→ GB 理論→ミニマリストプログラム）。本演習では，このような理論がどのように変遷し，現在のミニマリストプログラムに至っているかを理解するため，ヨーロッパ言語を扱った理論言語学に関する論文（ロマンス語統語論，ゲルマン語統語論，スラブ語統語論）を各人が選び，それを履修生で講読した後，発表・質疑応答を行う。各自が選んだ論文を読み，その内容について発表を行っていく。この授業では，特にケルト語を講義する。	
		人文地理学特別講義	（概要）本講義では，様々な空間スケールで人文社会の変化を捉え，学際的視点から人間生活・人間活動を総合的に理解する人文地理学的思考を学ぶ。講義では，こうした思考の基礎となる理論や概念，モデルを解説した上で，それらが具体的な現象の解釈にどのように有効性を発揮し得るかを事例研究を基に提示する。これらを通して，近代化や都市化が人々の場所・土地・環境との関わり方をどのように変化させるのかについて，人文地理学的な視点から読み解くことができるような能力の育成を目指す。	隔年
		人文地理学基礎論演習A	（目標）人文地理学の研究を進める上で基礎となる研究動向の把握を目標とする。（授業形態）日本の人文地理学界における近年の研究動向を知るため，人文地理学会編『人文地理（学界展望）』や，経済地理学会編『経済地理学の成果と課題』などの学界展望に関する文献を題材として，履修者による担当章（項目）の紹介とそれにもとづくディスカッションを行う。具体的には，履修者それぞれが各自の研究テーマに最も近い分野を扱った章（項目）を選び，それを精読した上でレジュメを作成し発表を行う。その後，教員を含めた全員でディスカッションを行う。（授業計画）第 1 回をガイダンスとし，第 2 回～第 14 回を学生による発表とディスカッションとする。第 15 回には，まとめを実施する。	隔年
		人文地理学基礎論演習B	（目標）人文地理学の研究を進める上で基礎となる理論及び研究方法の習得を目標とする。（授業形態）日本の人文地理学会における近年の理論や研究方法を学ぶため，人文地理学の 5 大全国誌（地理学評論，人文地理，経済地理学年報，地理科学，季刊地理学）に掲載された論文を題材として，履修者による担当論文の紹介とそれにもとづくディスカッションを行う。具体的には，履修者それぞれが 5 大全国誌の中から各自の研究テーマに最も近い論文（論説）を選び，それを精読した上でレジュメを作成し発表を行う。その後，教員を含めた全員でディスカッ	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		ションを行う。（授業計画）第１回をガイダンスとし，第２回～第 14 回を学生による発表とディスカッションとする。第 15 回には，まとめを実施する。	
		人文地理学特論演習Ａ	（目標）先進国を対象とした人文地理学の最新知識や概念の習得を目標とする。（形態）先進国を対象とした人文地理学の先端的テーマを扱った外国語文献の紹介とディスカッションを行う。紹介者は文献を精選・精読した後に，レジュメを事前に作成・配布して発表に臨む。履修者は，当該文献の一読を参加条件とする。外国語文献の検討を通じて，人文地理学分野における最新の知識や概念を習得させる。（授業計画）第１回をガイダンスとし，第２回～第 14 回を学生による発表とディスカッションとする。第 15 回には，まとめを実施する。	隔年
		人文地理学特論演習Ｂ	（目標）新興国・発展途上国を対象とした人文地理学の最新知識や概念の習得を目標とする。（形態）新興国・発展途上国を対象とした先端的テーマを扱った外国語文献の紹介とディスカッションを行う。紹介者は文献を精選・精読した後に，レジュメを事前に作成・配布して発表に臨む。履修者は，当該文献の一読を参加条件とする。外国語文献の検討を通じて，人文地理学分野における最新の知識や概念を習得させる。（授業計画）第１回をガイダンスとし，第２回～第 14 回を学生による発表とディスカッションとする。第 15 回には，まとめを実施する。	隔年
		世界地域システム論演習Ａ	（目標）現代日本における地域システムの構造と変動について，主に空間的側面から理解する。（授業形態）現代日本における地域システムの構造と変動を扱った人文地理学の論文を題材として，履修者による担当論文の紹介とそれにもとづくディスカッションを行う。具体的には，履修者それぞれが現代日本における地域システムの構造と変動に関するテーマ（グローバル化，多国籍企業，都市システム，農村システムなど）を選び，それを扱った日本語論文を精読した上でレジュメを作成し発表を行う。その後，教員を含めた全員でディスカッションを行う。（授業計画）第１回をガイダンスとし，第２回～第 14 回を学生による発表とディスカッションとする。第 15 回には，まとめを実施する。	隔年
		世界地域システム論演習Ｂ	（目標）現代世界における地域システムの構造と変動について，主に空間的側面から理解する。（授業形態）現代世界における地域システムの構造と変動を扱った人文地理学の論文を題材として，履修者による担当論文の紹介とそれにもとづくディスカッションを行う。具体的には，履修者それぞれが日本以外の諸外国における地域システムの構造と変動に関するテーマ（グローバル化，多国籍企業，都市システム，農村システムなど）を選び，それを扱った外国語論文を精読した上でレジュメを作成し発表を行う。その後，教員を含めた全員でディスカッションを行う。（授業計画）第１回をガイダンスとし，第２回～第 14 回を学生による発表とディスカッションとする。第 15 回には，まとめを実施する。	隔年
		グローバル経済地域論演習Ａ	（目標）先進国を対象とした経済地理学の最新知識や概念の習得を目標とする。（形態）先進国を対象とした経済地理学の先端的テーマを扱った外国語文献の紹介とディスカッションを行う。紹介者は文献を精選・精読した後に，レジュメを事前に作成・配布して発表に臨む。履修者は，当該文献の一読を参加条件とする。外国語文献の検討を通じて，経済地理学分野における最新の知識や概念を習得させる。（授業計画）第１回をガイダンスとし，第２回～第 14 回を学生による発表とディスカッションとする。第 15 回には，まとめを実施する。	隔年
		グローバル経済地域論演習Ｂ	（目標）新興国・発展途上国を対象とした経済地理学の最新知識や概念の習得を目標とする。（形態）新興国・発展途上国を対象とした経済地理学の先端的テーマを扱った外国語文献の紹介とディスカッションを行う。紹介者は文献を精選・精読した後に，レジュメを事前に作成・配布して発表に臨む。履修者は，当該文献の一読を参加条件とする。外国語文献の検討を通じて，経済地理学分野における最新の知識や概念を習得させる。（授業計画）第１回をガイダンスとし，第２回～第 14 回を学生による発表とディスカッションとする。第 15 回には，まとめを実施する。	隔年
		現代インド地誌学	（目標）インドで研究を実施する際に必要となる地理学的知識・スキル・ノウハウを身につけることを目標とする。（授業形態）講義形式を中心とするが，人口を対象とした統計解析・多変量解析の技法を学ぶなど実習的な内容を伴うとともに，文献を読んでディスカッションするなどの演習的要素も取り入れる。（授業計画）第１回をガイダンスとし，第２回から第 14 回でインドの人口，文化，社会，経済などの空間的側面について講義する。第 15 回をまとめとする。なお，本講義は英語で実施する。	隔年 講義　１２時間 演習　　３時間
		条件不利地域の地理学	（目標）現代日本における条件不利地域の現状を理解する。（授業形態）講義形式	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		を中心とするが，日本の条件不利地域に関する地図判読や統計分析の技法を学ぶなど実習的な内容を伴うとともに，実際に条件不利地域でエクスカーションを行うなどの演習的要素も取り入れる。（授業計画）第1回をガンダンスとし，第2回から第13回で日本の条件不利地域が有する空間構造や地域問題，及び農村振興の課題について講義する。さらに，第14回と第15回で広島県内におけるエクスカーションを行う。なお，本講義は英語で実施する。	講義　１０時間 演習　２０時間
		経済地理学研究	（目標）経済地理学において重要となる知識・概念・モデル・考察方法を理解した上で，自らの研究に応用できることを目標とする。（授業形態）講義形式を中心とするが，文献を読んでディスカッションするなどの演習的要素も取り入れる。（授業計画）第1回をガイダンスとし，第2回から第10回で，分業，集積，立地，フォード主義，移動などの経済地理学のキー概念を講じる。第11回から第14回は日本及びインドの経済地域構造について講義する。第15回をまとめとする。	隔年 講義　１０時間 演習　　５時間
		農村地理学研究	（目標）農村をフィールドとする地理学研究に必要な概念や方法論を理解した上で，それらを自らの研究に応用できるようになることを目標とする。（授業形態）講義形式を中心とするが，文献を読んでディスカッションするなどの演習的要素も取り入れる。（授業計画）第1回をガイダンスとし，第2回から第8回でフードシステム，アグリビジネス，フェアトレード，ブランド化，内発的発展論，農村空間の商品化，レジリエンスといった農村地理学のキー概念を講じる。第9回から第14回はそれらの概念を扱った文献の購読を行う。第15回をまとめとする。	隔年 講義　２０時間 演習　１０時間
		自然地理学特別講義	（概要）様々なスケールで自然環境やその変化を捉え，学際的視点から自然環境及び人間生活を総合的に理解する自然地理学的思考を学ぶ。講義では，山岳地域や熱帯のサンゴ礁地域などでみられる長期的な自然環境の変化のほか，自然災害など突発的な環境変化などを事例にあげながら進める。地球規模から地域社会にまで広がりをもつテーマを取り上げ，身近な地域でも自然地理学的視点で読み解いたり，仮説を創出できるような能力の育成を目指す。	隔年
		自然地理学基礎論演習Ａ	（概要）変動地形学，自然地理学，地理学の研究課題の設定の視点や意義，研究方法について，これまでの研究をもとに検討を行い，研究に対する基礎的な資質の育成を目指す。公刊されている論文や書籍などを読解し，整理することで，過去数十年の研究の変遷とともに，最新の研究動向を捉え，発展的な課題を設定できるよう基礎的な資質の育成を目指す。本演習では主に，受講者の研究分野を対象に研究史での位置づけが明確にできるように検討を進める。	隔年
		自然地理学基礎論演習Ｂ	（概要）地形学一般，自然地理学，地理学の研究課題の設定の視点や意義，研究方法について，これまでの研究をもとに検討を行い，研究に対する基礎的な資質の育成を目指す。公刊されている論文や書籍などを読解し，整理することで，過去数十年の研究の変遷とともに，最新の研究動向を捉え，発展的な課題を設定できるよう基礎的な資質の育成を目指す。本演習では特に，受講者の研究分野の周辺分野を対象に検討し，幅広い分野での研究史上で位置づけができるように検討を進める。	隔年
		自然地理学特論演習Ａ	自然地理学と関連する学術分野に関わる最新の研究成果を論文講読を中心に演習形式で学ぶ．博士課程前期の研究を遂行し修士学位論文を作成するための基礎となる，自然地理学と関連する学術分野におけるさまざまなテーマの研究の進捗状況を網羅的に学び，重要かつ優先的な課題を見いだす．また，それらの研究において活用されている最新の技術についても学び，自らの研究への活用可能性を検討する．受講者は随時それぞれの指向する研究分野の最新の論文を探索して論文リストを作成して紹介し，その中から最も重要と考える論文につき，論文の内容と関連する技術の紹介を行い，受講者相互で議論を行って理解を深める．	隔年
		自然地理学特論演習Ｂ	第四紀学と関連する研究分野に関わる最新の成果を海外の研究論文講読を中心に講読形式で学ぶ．第四紀学に関わる研究を遂行し博士課程前期の学位論文作成につながる研究の基礎となる，第四紀学と関連する研究分野におけるさまざまな研究課題の進捗状況を網羅的に学び，各自が追求すべき課題を見いだす．また，その課題を解くために必要な基礎的な技術を習得し，その応用をめざし，自らの研究への活用する道を開く．受講者は随時それぞれの指向する研究分野の最新の論文を探索して論文リストを作成して紹介し，その中から最も重要と考える論文につき，論文の内容と関連する技術の紹介を行い，受講者相互で議論を行って理解を深める．	隔年
		地表変動論演習Ａ	（概要）変動地形学，自然地理学，地理学に関する基礎的な研究手法について，原理や理論を学ぶとともに，計算機や主題図作業など室内での作業のほか，野外	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		や実験室などでの実習を通して，当該分野の研究内容の理解の深化と実践的な研究能力の育成を目指す。本演習では，主に，受講者がこれから取り組む研究分野での具体的な研究方法について議論し，新たな研究手法の開発についても検討を行う。これらを通し，新しい研究を志向する態度を育成する。	
		地表変動論演習Ｂ	（概要）地形学一般，自然地理学，地理学に関する基礎的な研究手法について，原理や理論を学ぶとともに，計算機や主題図作業など室内での作業のほか，野外や実験室などでの実習を通して，当該分野の研究内容の理解の深化と実践的な研究能力の育成を目指す。本演習では特に，受講者の研究分野の周辺分野を対象に，具体的な研究方法について議論し，新たな研究手法の開発についても検討を行う。これらを通し，新しい研究を志向する態度を育成する。	隔年
		自然地域形成論演習Ａ	地表圏システム学の課題を自然地理学の観点から解明するために必要な，地形学・第四紀学・年代学の基礎的な技術を習得し，野外調査と実験において実践して研究技術のレベルを高めるとともに論文作成に必要なフィールドデータ・実験データを取得する。受講者は各自の研究課題に応じて野外調査や実験を遂行するが，演習では調査と実験でより優れた成果を取得することを目的として，最初に研究課題の設定と調整を行い，次いで野外調査及び実験の成果の蓄積にあわせて方法の確認と改良をすすめ，最終的に野外調査と実験の成果の報告と確認，成果に基づく議論の深化を行う。	隔年
		自然地域形成論演習Ｂ	地表圏システム学の課題を第四紀学の観点から解明するために必要な基礎的な技術を習得し，室内実験と野外調査において実践して研究技術の水準を高めるとともに学位論文作成に必要な野外調査技術・実験技術を習得し論文の骨子をなす分析データを取得する。受講者は各自の研究課題に応じて野外調査や実験を遂行するが，演習では調査と実験でより優れた成果を取得することを目的として，最初に研究課題の設定と調整を行い，次いで野外調査及び実験の成果の蓄積にあわせて方法の確認と改良をすすめ，最終的に野外調査と実験の成果の報告と確認，成果に基づく議論の深化を行う。	隔年
		自然地域システム論研究	自然地域システムに関わる地形学的な研究に関わる最新の研究成果について演習形式をとりいれた講義を行い，受講者が専門研究者として調査研究をすすめるための基礎的な訓練を行う。 授業計画 第１回～第３回：自然地域についての演習と講義 第４回～第６回：第四紀学についての演習と講義 第７回～第９回：地形学についての演習と講義 第 10 回～第 12 回：第四紀年代学ついての演習と講義 第 13 回～第 15 回：受講者の調査研究成果を反映した総合的な演習と講義	
		地表変動論研究	（概要）変動地形学，活断層研究に関する主な課題や最近の研究動向について講義し，当該分野の研究の進展や方向性を議論する。また，海外での研究動向について主な国際雑誌（英語論文）から注目すべき論文を取り上げ，全員で読解して理解を深めるとともに，方法，理論の妥当性について議論を行う。これらを通し，当該分野の世界最先端の研究課題を志向する態度を育成するとともに，合理的な研究方法で，説得的に記述できる能力の育成を目指す。	
		地理情報システム学講義	（概要）地理学は地理的事象を「場所」と関連づけて考えることが特徴である。地図は「場所」を記すツールであり，特定の事象を表現した地図（主題図）は調査・観察の成果を表現する手段であるとともに考察や思考の道具である。最近では様々な地理的情報を統合的に扱う地理情報システム(GIS)で地図を作成したり，分析したりすることが一般的になってきた。この授業では，地図の基礎知識を学ぶとともに，地理情報システムの基礎的概念と研究成果について紹介する。	
		地理情報システム学演習	（概要）地理学は地理的事象を「場所」と関連づけて考えることが特徴である。地図は「場所」を記すツールであり，特定の事象を表現した地図（主題図）は調査・観察の成果を表現する手段であるとともに，分析や考察の道具である。最近では様々な地理的情報を統合的に扱う地理情報システム（GIS）で地図を作成したり，分析したりすることが一般的になってきた。この授業では，地理情報システム（ArcGIS）を実際に操作・演習することを通して地域分析の方法を学び，地理情報システム及び自分の研究での利用の可能性を考える。	
		地理学研究法Ａ	（目標）人文地理学と自然地理学の垣根を超えた幅広い観点から発表と議論を行い，地理学研究の方法を習得する。（形態）学生が前期セメスターに遂行した（あるいは遂行する）自身の研究内容をレジュメやプレゼンテーションツールを用い	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		て報告し，それについて参加者全員で議論する。教員は発表者の研究の方向性と進捗状況を把握した上で，建設的なアドバイスを行う。これらは，発表者は研究を効率的に進めることに寄与する。（授業計画）毎回 1 人が 45 分程度の発表を行い，その後 45 分程度の議論を実施する。	
		地理学研究法Ｂ	（目標）人文地理学と自然地理学の垣根を超えた幅広い観点から発表と議論を行い，地理学研究の方法を習得する。（形態）学生が後期セメスターに遂行した（あるいは遂行する）自身の研究内容をレジュメやプレゼンテーションツールを用いて報告し，それについて参加者全員で議論する。教員は発表者の研究の方向性と進捗状況を把握した上で，建設的なアドバイスを行う。これらは，発表者は研究を効率的に進めることに寄与する。（授業計画）毎回 1 人が 45 分程度の発表を行い，その後 45 分程度の議論を実施する。	共同
		地理学野外実験	（目標）「地理学野外演習」において決定したテーマに基づいて現地で調査実習を遂行するものであり，それを通じて社会生活や経済活動，自然環境等を対象とする地域調査の専門的な手法を体得することを目標とする。（授業形態・授業計画）夏季休業期間中に４日間の集中の形式で行い，初日は参加者全員で調査を実施し，対象地域の地域構造の理解を深める。２日目から４日目は，各自があらかじめ設定したテーマに沿った調査を実施する。そこでは聞き取り調査や質問票調査が中心となる。夜にはミーティングを開催し，当日の調査内容・方法を確認するとともに，翌日の調査について説明しアドバイスを受ける。	共同
		地理学野外演習	（目標）地理学研究の企画，実施，論文作成に必要な能力を醸成することを目標とする。（授業形態）「地理学野外実験」を実施する上で必要となる調査の企画や調査項目の設定を行う。また，同実験終了後には，報告会を開催するとともに報告書を作成する。これらを通じて地域や社会を対象とした専門的な調査研究方法への理解を深め，さらにそれを用いて調査研究能力を高める。（授業計画）本講義は通年で不定期に開催するが，「地理学野外実験」を実施する前に計４回×２コマ，以降に１回×２コマを実施する。その後，各自が報告書を教員の指導を受けながら完成させる。	共同
		日本考古学解析Ａ	考古学の講義及び演習。日本考古学の歩みを解析し，研究史について理解を深め，今後の研究課題を探る。考古学研究に関わる査読雑誌論文を題材として輪読し，20 世紀代の研究状況を理解する。具体的には，考古学研究会の会誌である『考古学研究』について 2000 年以前のものを題材とし，収録された個々の論考を旧石器時代、縄文時代、弥生時代などの対象時代・時期ごとに検討し，20 世紀代の研究状況を理解するとともに，その後の研究の展開を推察していく。	隔年
		日本考古学解析Ｂ	考古学の講義及び演習。日本考古学の歩みを解析し，研究史について理解を深め，今後の研究課題を探る。考古学研究に関わる査読雑誌論文を題材として輪読する。各自，個別に収録された個々の論考をテーマ（時代区分論･年代論･環境論･遺跡論･遺物論･型式論･技術論･生業論･集団論･流通論･文化交流論･精神文化論･墓制論）ごとに検討しつつ，考古学研究の学史の動向を研究背景とともに理解し，その後の研究の展開を解析し，現在の研究視点を客観的に把握していく。	隔年
		アジア考古学解析	考古学の講義。アジア全般にわたる考古学研究を俯瞰し，その文化的連関を考古学の遺跡や考古学の出土遺物から解き明かしていく。幅広い文明史観から個別の文化事象をとらえる授業課程とする。石器時代を含め，古代から中世にかけてのアジアにおける考古学の時代区分･年代論，集団論，遺跡･遺物論，技術･生業文化，流通･文化交流論，墓制論などに言及し，その交流を示す遺跡･遺物の紹介を行っていく。おもにアジア各地の考古学資料等の映像や画像をもとに解説し，各論のなかで説明を行っていく。	隔年
		日本考古学特論	考古学の講義。日本考古学に関わる特殊かつ重要な課題や論点を中心とし，その調査研究成果を研究史に沿って明らかにしていく。日本考古学の研究史を論点の背景として理解し，今後の研究課題を解決する方法を模索する。とくに日本考古学における年代論や古墳時代政治論，古代都城論，中世都市文化論などといった個別テーマにおける日本考古学の研究成果を，それらに関連した考古学の遺跡･遺物の紹介を行いつつ，理解を深めていく。そのなかで研究史からみて重要な課題や論点を把握し，今後の研究課題の具体的解決策を知ることとする。	隔年
		世界考古学解析Ａ	考古学の講義及び演習。考古学･人類学の諸理論を理解し，おもに首長制社会の考古学的事象に対する解釈において多角的な視点を持つことを目標とする。新進化主義の文化階梯による社会文化の進化･発展を主要テーマとして理解し，日本･アジア考古学における諸事象と関連付けていく。考古学的事象の解釈に関して，	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		人類学など関連分野のさまざまな研究成果をどのような視点から援用していくのか，各自テーマを設定し，新たな考古学像を探るため，それらの諸理論を援用した海外文献等の輪読や評論を行う。	
		世界考古学解析Ｂ	考古学の講義及び演習。考古学･人類学の諸理論を理解し，おもに初期国家･国家段階の考古学的事象に対する解釈において多角的な視点を持つことを目標とする。考古学的事象の解釈に関して，各自テーマを設定し，新たな考古学像を探る。いわゆる初期国家や部族国家，王国，古代帝国などといったさまざまな文化段階を考古学の遺跡や遺物から把握していく過程を模索する。国家段階に関わる考古学･人類学の諸理論を援用した海外文献等の輪読や評論を行い，その研究成果を理解し，多角的な視点を認識できるようにする。	隔年
		考古学広領域講義	考古学の講義。考古学の隣接分野（人類学･民族（俗）学･文化財科学など）の調査研究のもつ研究視点から，考古学研究を再考する。幅広い分野の方法論を学びつつ，考古学への援用方法やその技術･方法を理解する。古人類学や理化学的年代測定方法（炭素 14 年代測定法,年輪年代測定法），出土遺物の理化学的な分析方法（蛍光Ｘ線分析，Ｘ線透過法）などの理化学的原理，実際の分析手順と現実的な問題点を理解し，隣接分野の学術に関して，批判的に利用できるための知識を習得し，考古学における研究成果を理解する。	隔年
		考古文献評論Ａ	考古学の講義及び演習。講義及び演習，考古学の研究論文を精読し，考古学の最先端の研究成果を理解する。とくに野外考古学実習で行う発掘調査･測量調査など，実際のフィールドワークと連動した研究テーマ･課題を選択し，それに関係した研究論文を輪読し，現代のフィールドワーク研究の最先端成果を学び取る。発掘調査に関わるさまざまな責務を理解し，実際の調査課題の解決のために最先端の研究成果に関わる諸問題について発表や討論を行なう。	隔年
		考古文献評論Ｂ	考古学の講義及び演習。講義及び演習，考古学の研究論文を精読し，考古学の最先端の研究成果を理解する。とくに大学院の資料実習で行う実際の報告書作成作業に関連した研究テーマ･課題を選択し，輪読する。それらの関連研究論文から現代の発掘調査報告書や研究論文作成のための最先端技術を学び取る。発掘調査報告書の作成に関わるさまざまな責務を理解し，実際の作成課題の解決のために最先端の研究成果に関わる諸問題について，討論を行なう。	隔年
		考古資料評論	考古学の講義及び演習。日本国内で調査された重要遺跡の発掘調査報告書を取り上げ，その書籍の体裁，調査にいたる経過，調査の方法と問題点，提起された新事実，報告書の総論的な視点や考え方などについて検討し，討論を行う。とくに長年携わってきた帝釈峡遺跡群の調査研究などを対象とし，土器･石器利用などのほか骨角器や海産貝類などの分析だけでなく，洞窟･岩陰居住などに関した研究テーマを選択し，現在の石灰岩地帯の発掘調査に関わる先端研究の成果を学び取る。	
		アジア比較考古学演習Ａ	考古学の演習。考古学研究に関わる研究論文，図書などを題材とし，東アジア石器時代考古学の諸問題を探る。おもに東アジア石器時代の石器文化の特徴を検討する。特に黒曜石，サヌカイト，安山岩など産地が特定される石材の原産地遺跡の様相，消費地遺跡の以上の特定の産地からの搬入石器石材利用から復元される行動軌跡，流通の形成過程，社会の複雑化について，関連する先行研究論文，図書の輪読を行い，研究状況を把握していく。また，比較のためヨーロッパのフリント利用に関連する研究論文の輪読を行い，日本，東アジアと対比する。	隔年
		アジア比較考古学演習Ｂ	考古学の演習。アジアの紀元前１千年紀前後に関わる諸問題を題材とし，東西アジアの文化交流を考察していく。とくにアケメネス朝ペルシャアや中国戦国･漢時代に関する概説書を選択し，輪読する。時代区分･年代論，集団論，遺跡･遺物論，技術･生業文化，流通･文化交流論，墓制論に分けて焦点をあてつつ，当該時期の文化様相を考古学の検出遺構や出土遺物からとらえていく。また，そのほかの関連分野の諸論考を参考とし，その後の研究状況を把握していく。	隔年・共同
		考古学資料実習Ａ	考古学の実習。考古学研究室報告，帝釈峡遺跡群発掘調査室年報，考古学研究室紀要での実習･研究成果の公表を目指す。おもに考古学資料の写真撮影，分析･実測を行う。文化庁文化財部発行「発掘調査のてびき」を参照しつつ，実際の研究成果の公表に関わる技術･方法を理解し，実践していく。ドローン撮影とデータ加工，画像データとフィルム写真の保存･活用，理化学的分析装置の使用，実測技術の熟練とともに新たな測量技術を理解していく。	隔年・共同
		考古学資料実習Ｂ	考古学の実習。考古学研究室報告，帝釈峡遺跡群発掘調査室年報，考古学研究室紀要などでの実習･研究成果の公表を目指す。おもに考古学資料の写真撮影，分	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		析･実測を行う。文化庁文化財部発行「発掘調査のてびき」を参照しつつ，実際の研究成果の公表に関わる技術･方法を理解し，実践していく。ドローン撮影とデータ加工，画像データとフィルム写真の保存･活用，理化学的分析装置の使用，実測技術の熟練とともに新たな測量技術を理解していく。	
		考古学資料実習Ｃ	考古学の実習。考古学研究室報告，帝釈峡遺跡群発掘調査室年報，考古学研究室紀要などでの実習･研究成果の公表を目指す。おもに考古学資料の実測と浄図トレースを行う。文化庁文化財部発行「発掘調査のてびき」を参照しつつ，実際の研究成果の公表に関わる技術･方法を理解し，実践していく。実測技術の熟練とともに，浄図に関わる画像加工の技術を理解して実践する。データ加工，画像データとフィルム写真の保存･活用や，理化学的分析装置の使用も適宜行っていく。	隔年・共同
		総合文化財研究法Ⅰ	文化財学を研究する上で基礎となる調査研究法を習得することを目的に置く。調査の心構え，手順，注意点を確認し，鋳造像，法具などを資料に調書作成を行う。調書を著すために必要な照明可能な対象物への照射方法，測量方法，デッサン力を練習する。写真媒体では判断がつかない対象物の情報を，直接に観て，専門的な技術を用いて調書を作成することにより，高い調査能力を育成する。 最終的に履修学生が修士論文で取り上げるテーマに沿った調書元型を作成する。	隔年
		総合文化財研究法Ⅱ	総合文化研究法Ⅰをふまえた上で，写真撮影方法を習得することを目的に置く。撮影道具の扱い方法，撮影の準備，手順，及び注意点を確認し，実際に写真撮影を行う。特に照明可能な対象物への照射方法に重点をおく。また，屋内，屋外など，様々な状況下における撮影方法についても学ぶ。専門的な技術を用いて撮影を行うことにより，高い調査能力を育成する。最終的に履修学生が修士論文で取り上げるテーマに沿った写真撮影方法を確認する。	隔年
		総合文化財調査実習Ⅰ	工芸（伝統的工芸品）の実見を行い，調査法を習得する。総合文化財研究法Ⅰ，Ⅱで得た専門的な知識・技術の実習。国内，特に工房等の現地見学を行い，実際に接し，調書作成，写真撮影，及び聞き取り，その地域に関する文献資料の収集を行う。事前に文献資料を収集して研究会を行い，調査終了後には各自の調書を確認し検討会を行ったうえで報告書を作成する。調査実習を通して専門的な調査能力を養い，文化財の意義を深く理解することを目的におく。履修学生は，事前事後の研究会に各自資料を作成して出席すること。	隔年
		総合文化財調査実習Ⅱ	有形文化財のうち，工芸（金工・漆工・陶磁・染織・甲冑類・古神宝・刀剣及び刀装具等）の実見を行い，調査法を習得する。総合文化財研究法Ⅰ，Ⅱで得た専門的な知識・技術の実習。国内の博物館や寺社，工房などに赴き，有形文化財（工芸品を中心に）に実際に接し，調書作成，写真撮影を行う。事前に文献資料を収集して研究会を行い，調査終了後には各自の調書を確認し検討会を行ったうえで報告書を作成する。調査実習を通して専門的な調査能力を養い，文化財の意義を深く理解することを目的におく。履修学生は，事前事後の研究会に各自資料を作成して出席すること。	隔年
		総合文化財解析演習Ⅰ	有形文化財のうち，工芸における専門的な知識と分析能力の習得を目的におく。有形文化財の一資料に焦点をあて，関連する先行研究・調査資料の収集，専門文献の読解，考察を行う。担当学生が課題を選択し，発表を行い，その後履修学生間でディスカッションを行う。これらを通して対象物の工芸史上における意義を考察する。また，「厳島神社名品展」を観覧する。事前に「平家納経」「法華経」の出陳品を漢訳経典で講読し，見返しとの照合を行い，制作者の意図を読み解く。	隔年
		総合文化財解析演習Ⅱ	総合文化財解析演習Ⅰにおいて学習した，対象物を専門的な知識から読み解く手法を用いて，個々の学生が修士論文に関連する研究課題を選択して発表を行う。その後，履修学生間でディスカッションを行い，議論を深める。担当学生は，先行研究，関連する文献資料を十分に収集し，必ず課題となる対象物を実見，可能であれば現地調査を行っておく。それらをもとに分析・考察を行い，対象物の存在が，文化財においてどのような意義があるのかを考究する。	隔年
		有形文化財研究法Ⅰ	有形文化財のうち，美術作品（絵画・彫刻・書蹟など）全般の研究方法に関する専門的知識を習得する。「いつ」，「どこで」，「だれが」，「なにを」，「どのように」作ったのか。そして「それはなぜか」という，現存遺例の歴史上における存在意義を考究するのが，この学問の真髄である。作品の正確かつ詳細な観察に基づいて「なにを」･「どのように」の情報を読み取り，文献史学の蓄積を加味して「いつ」･「どこで」･「だれが」を検討し，それらを総合して「それはなぜか」を明らかにする，その過程を具体例に即して追う。	隔年
		有形文化財研究法Ⅱ	有形文化財のうち，特に密教絵画の研究方法に関する専門的知識を習得する。密	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	人文学プログラム		教絵画の場合，「なにを」が図像学に当たり，「どのように」が様式論に発展する。前者は十二世紀以来わが国に続く伝統的な学問で，その多くは『大正新脩大蔵経図像篇』に収録されるが，検討に際しては平安初期以来の彩色画・白描画ばかりか彫像の遺例をも網羅せねばならず，幅広い知識が必要となる。一方，後者は，原則は一定の図像（かたち）に則りつつも，その制約の中で各時代の美意識を如何に積極的に取り入れるかが絵師の工夫に委ねられる。この二つの課題を，具体例に即して考察する。	
		有形文化財解析演習Ⅰ	有形文化財のうち，美術作品（絵画・彫刻・書蹟など）全般の現存遺例の中から，個々の学生が自由にそれぞれ一件を選び，その先行研究を解析して問題点や誤りを炙り出し，光画像計測法（4x5 サイズカラーフィルム写真・35 ミリサイズカラースライドフィルム写真・同フルサイズ CCD デジタル写真・ブローニー判デジタルカラー写真・同デジタル反射赤外線写真・半切あるいは四切サイズ透過レントゲン写真・蛍光 X 線分析法など）を応用しつつ，正確かつ詳細な作品の解析を通してその歴史上における真の存在意義を明らかにする。	隔年
		有形文化財解析演習Ⅱ	有形文化財のうち，特に密教絵画の現存遺例の中から，個々の学生が自由にそれぞれ一件を選び，その先行研究を解析して問題点や誤りを炙り出し，光画像計測法（4x5 サイズカラーフィルム写真・35 ミリサイズカラースライドフィルム写真・同フルサイズ CCD デジタル写真・ブローニー判デジタルカラー写真・同デジタル反射赤外線写真・半切あるいは四切サイズ透過レントゲン写真・蛍光 X 線分析法など）を応用しつつ，正確かつ詳細な作品の解析を通してその歴史上における真の存在意義を明らかにする。	隔年
		有形文化財調査実習Ⅰ	国公私立のミュージアム（美術館・博物館・資料館など）や神社・仏閣の宝物館等に出向き，有形文化財のうち，美術作品（絵画・彫刻・書蹟など）全般の現存遺例について，特別展覧会や平常陳列の見学を行って，たとえガラス越しであれ肉眼で「作品（モノ）を見る」訓練を行う。また，特別観覧など実際の調査にあたり，所蔵者への依頼・交渉から始まって，調査の具体的な手段や方法，撮影機材や技師の手配，作品の取り扱い，所蔵者への適切な保存管理や修復方法に関する助言，結果報告など，一連の作業を自ら主導する力量を養成する。	隔年
		有形文化財調査実習Ⅱ	有形文化財のうち，特に平安から室町時代の絵画遺例について，国公私立のミュージアム（美術館・博物館・資料館など）や神社・仏閣の宝物館等に依頼し，4x5 サイズカラーフィルム写真・35 ミリサイズカラースライドフィルム写真・同フルサイズ CCD デジタル写真・ブローニー判デジタルカラー写真・同デジタル反射赤外線写真・半切あるいは四切サイズ透過レントゲン写真などの光画像計測法を，必要に応じて適用する調査を主導するための研究調査実践力を養成する。	隔年
		文化財学特殊講義Ⅰ	文化財の保存管理や修復技術に関する専門的知識を習得する。例えば，温湿度条件について全国美術館会議は一定の指針を示すが，その適用にあたっては保存環境の履歴や気候を充分に考慮するべき旨を提唱している。しかし実際の展示施設では，全国各地からの借用品に対し一律に指針を遵守する傾向が強い。また修復に際して，監督者の知識不足から取り返しのつかない結果を生む例も数多い。本講義では，美術作品（絵画・彫刻・書蹟など）の材料等の特質や，伝統的かつ本格的な装潢師の修復技術について講じ，当該分野における高度の専門的職業人として即戦力となり得る能力を養成する。	隔年
		文化財学特殊講義Ⅱ	文化財の歴史上における存在意義は，当然ながら個々の遺例ごとにすべて異なる。それを明らかにする客観的情報は，光画像計測法を適宜応用した作品（モノ）の正確かつ詳細な観察に基づくのであるが，信仰の対象である仏教美術の場合，そうした調査が常に可能とは限らない。一期一会のモノに対する時，知識と経験とをフル稼働して，一瞬でその本質を見抜く直感力もまた不可欠なのである。本講義では，特に浄土教絵画を例として，その直感力の養成を図る。浄土教絵画は密教絵画の如き図像の制約が無い代わり，施主の意図を反映した自由な表現が現れやすいからである。	隔年
		心理学研究法基礎演習 A	本授業の目標は，研究を他者にプレゼンテーションするために必要な基礎的知識・技能を習得し，実際に学会発表の資料作成やリハーサルを行うことにより，心理学者に必要な研究基礎力を身につけることである。そのために必要な基礎的知識・技能を習得する。 授業の中では，特に，心理学分野の国際学会におけるプレゼンテーション・議論を想定し，その発表準備を行う。準備中に質問等があれば随時，担当教員からサ	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	心理学プログラム		ポートを得る。さらに，実践的訓練と，それにともなうディスカッションを行う。	
		心理学研究法基礎演習 B	本授業の目標は，研究計画の立案と，自身の研究計画を他領域の人にプレゼンテーションするために必要な基礎的知識・技能を習得し，実際に研究計画書を執筆することにより，心理学者に必要な研究基礎力を身につけることである。 授業の中では，特に，心理学分野の申請書を想定した研究計画書についての講義，研究計画立案や計画書作成といった実践的訓練と，それについてのディスカッションを行う。計画立案および計画書作成は，随時，担当教員からサポートを得ながら行う。	共同
		心理学研究法応用演習 A	本授業の目標は，研究を他者にプレゼンテーションするために必要な知識・技能を習得し，実際に学会発表の資料作成やリハーサルを行うことにより，心理学者に必要な研究実践能力を身につけることである。 授業の中では，特に，心理学分野の国際学会におけるプレゼンテーション・議論を想定し，その発表準備を行う。準備中に質問等があれば随時，担当教員からサポートを得る。さらに，実践的訓練と，それにともなうディスカッションを行う。	共同
		心理学研究法応用演習 B	本授業の目標は，研究計画の立案と，自身の研究計画を他領域の人にプレゼンテーションするために必要な知識・技能を習得し，実際に研究計画書を執筆することにより，心理学者に必要な研究実践能力を身につけることである。 授業の中では，特に，心理学分野の申請書を想定した研究計画書についての講義，研究計画立案や計画書作成といった実践的訓練と，それについてのディスカッションを行う。計画立案および計画書作成は，随時，担当教員からサポートを得ながら行う。	共同
		Academic writing in psychology A	本授業の目標は，論文執筆を行うために必要な基礎的知識を習得し，実際に論文やアブストラクトを執筆することにより，心理学者に必要な論理と実践的なライティング能力を身につけることである。 授業の中で，心理学分野の (1) 国際誌へ投稿するための英語論文執筆，または (2) 国内誌へ投稿するための日本語論文，もしくは (3) それに必要なアブストラクトの執筆を行う。執筆中に質問等があれば随時，担当教員からサポートを得る。また，講義を通して，英語・日本語に関わらず，アカデミック分野での文章の書き方を学ぶ（他分野での文章の書き方にも十分応用可）。	共同
		Academic writing in psychology B	本授業の目標は，英語論文執筆を行うために必要な基礎的知識を習得し，実際に論文やアブストラクトを執筆することにより，心理学者に必要な論理と実践的なライティング能力を身につけることである。 授業の中で，心理学分野の (1) 国際誌へ投稿するための英語論文執筆，または (2) 国内誌へ投稿するために必要なアブストラクトの執筆を行う。執筆中に質問等があれば随時，担当教員からサポートを得る。また，講義を通して，英語・日本語に関わらず，アカデミック分野での文章の書き方を学ぶ（他分野での文章の書き方にも十分応用可）。	共同
		Advanced academic writing in psychology A	本授業の目標は，論文執筆を行うために必要な知識を習得し，実際に論文やアブストラクトを執筆することにより，心理学者に必要な論理と実践的なライティング能力を身につけることである。 授業の中で，心理学分野の (1) 国際誌へ投稿するための英語論文執筆，または (2) 国内誌へ投稿するための日本語論文，もしくは (3) それに必要なアブストラクトの執筆を行う。執筆中に質問等があれば随時，担当教員からサポートを得る。また，講義を通して，英語・日本語に関わらず，アカデミック分野での文章の書き方を学ぶ（他分野での文章の書き方にも十分応用可）。	共同
		Advanced academic writing in psychology B	本授業の目標は，英語論文執筆を行うために必要な知識を習得し，実際に論文やアブストラクトを執筆することにより，心理学者に必要な論理と実践的なライティング能力を身につけることである。 授業の中で，心理学分野の (1) 国際誌へ投稿するための英語論文執筆，または (2) 国内誌へ投稿するために必要なアブストラクトの執筆を行う。執筆中に質問等があれば随時，担当教員からサポートを得る。また，講義を通して，英語・日本語に関わらず，アカデミック分野での文章の書き方を学ぶ（他分野での文章の書き方にも十分応用可）。	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	心理学プログラム	臨床心理学特講Ⅰ	さまざまな分野における心理臨床の実践と研究の基礎となる臨床心理学という学問について，その全体像を把握することを目標とする。臨床心理学の歴史と現状，力動論，行動論・認知論，その他の代表的な臨床心理学の理論，臨床心理学的査定（アセスメント），臨床心理学的介入，心理療法，臨床心理学研究法について幅広く講義する。また、上記の内容に関連する文献の講読を行うことによって，臨床心理学の研究の最新の動向を把握する。さらに，ロールプレイなどを通じて，基本的な臨床心理学的介入の体験および実施方法の学習を行う。	共同
		心理学特講 A	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の幅広い領域の知識を身につける必要がある。本授業の目標は，受講生の専門分野のみならず，認知 ・生理，社会，教育・学習，発達・幼児，臨床等の心理学の様々な領域の専門的知識を習得することである。 具体的には，これらの心理学の研究動向の解説を行い，その理解を深めるための議論を行う。受講生は，それをふまえ，自身の研究の展開についても考察を深める。	共同・隔年開講
		心理学特講 B	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，基礎～応用レベルの研究手法の習得が不可欠である。本授業の目標は，実験・調査・観察・面接などの心理学的研究方法，さらにそれらの結果の分析に関し，専門的な知識と技能を習得することである。 具体的には，これらの研究手法・分析方法の解説を行い，その理解を深めるための議論を行う。受講生は，それをふまえ，自身の研究に適切な研究方法や分析方法についても討議・考察する。	共同・隔年開講
		心理学特講 C	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の幅広い領域の知識を身につける必要がある。本授業の目標は，受講生の専門分野のみならず，認知 ・生理，社会，教育・学習，発達・幼児，臨床等の心理学の様々な領域の専門的知識を習得することである。 具体的には，これらの心理学の研究動向の解説や，特定のテーマにおける最新の研究成果の紹介を行い，議論する。受講生は，それをふまえ，自身の研究の展開についても考察を深める。	共同・隔年開講
		心理学特講 D	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，基礎～応用レベルの研究手法の習得が不可欠である。本授業の目標は，実験・調査・観察・面接などの心理学的研究方法，さらにそれらの結果の分析に関し，専門的な知識と技能を習得することである。 具体的には，これらの研究手法・分析方法の解説や，それを用いた様々な研究の紹介を行い，議論する。受講生は，それをふまえ，自身の研究に適切な研究方法や分析方法についても討議・考察する。	共同・隔年開講
		心理学基礎演習Ⅰ	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の最新の研究の動向を把握する必要があり，英語論文の多読・精読は必要不可欠な技能である。本授業の目標は，受講生の専門分野のみならず，認知 ・生理，社会，教育・学習，発達・幼児，臨床等の心理学の様々な領域における専門用語や表現，論文構成を習得することである。 具体的には，受講生は，指定されたテーマの多数のアブストラクトを読み比べ，討議を行う。そのテーマについての理解を深めるとともに，英語での専門用語や表現を習得し，読解スピードを上げる。	共同
		心理学基礎演習Ⅱ	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の最新の研究の動向を把握する必要があり，英語論文の多読・精読は必要不可欠な技能である。本授業の目標は，受講生の専門分野のみならず，認知 ・生理，社会，教育・学習，発達・幼児，臨床等の心理学の様々な領域におけるスタンダードなテーマの論文の読解能力を高めることである。 具体的には，受講生は，指定されたテーマの多数のアブストラクトを読み比べ，そのテーマで研究を展開するための討議を行う。そのテーマについての理解を深めるとともに，英語論文の読解スキルを向上させる。	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	心理学プログラム	心理学基礎演習Ⅲ	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の最新の研究の動向を把握する必要があり，英語論文の多読・精読は必要不可欠な技能である。本授業の目標は，受講生の専門分野における様々なテーマについて，英語論文の読解スキルを向上させることである。 具体的には，受講生は，指定されたテーマの論文を読解し，発表・討議を行う。そのテーマについての専門的知識を身につけるとともに，英語論文の読解スキルを向上させる。	共同
		心理学基礎演習Ⅳ	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の最新の研究の動向を把握する必要があり，英語論文の多読・精読は必要不可欠な技能である。本授業の目標は，受講生の専門分野における様々なテーマについて，英語論文の読解スキルを向上させることである。 具体的には，受講生は，指定されたテーマの論文を読解し，発表・討議を行う。そのテーマについての最新の研究動向を把握するとともに，英語論文を正確に読解するスキルを向上させる。	共同
		心理学応用演習Ⅰ	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の最新の研究の動向を把握する必要があり，英語論文の多読・精読は必要不可欠な技能である。本授業の目標は，受講生の専門分野のみならず，認知 ・生理，社会，教育・学習，発達・幼児，臨床等の心理学の様々な領域における専門用語や表現，論文構成を習得することである。 具体的には，受講生は，指定されたテーマの多数のアブストラクトを読み比べ，討議を行う。そのテーマについての理解を深めるとともに，英語での専門用語や表現を習得し，英語論文の多読スキルを身につける。	共同
		心理学応用演習Ⅱ	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の最新の研究の動向を把握する必要があり，英語論文の多読・精読は必要不可欠な技能である。本授業の目標は，受講生の専門分野のみならず，認知 ・生理，社会，教育・学習，発達・幼児，臨床等の心理学の様々な領域におけるスタンダードなテーマの論文の読解能力を高めることである。 具体的には，受講生は，指定されたテーマの多数のアブストラクトを読み比べ，そのテーマで研究を展開するための討議を行う。そのテーマについての理解を深めるとともに，研究者としての英語論文の読解スキルを習得する。	共同
		心理学応用演習Ⅲ	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の最新の研究の動向を把握する必要があり，英語論文の多読・精読は必要不可欠な技能である。本授業の目標は，受講生の専門分野における様々なテーマについて，英語論文の読解スキルを向上させることである。 具体的には，受講生は，指定されたテーマの論文を読解し，発表・討議を行う。そのテーマについての専門的知識を身につけるとともに，研究者としての英語論文の読解スキルを習得する。	共同
		心理学応用演習Ⅳ	心理学の研究を遂行するため，また，高度な実践を行う専門家になるためには，心理学の最新の研究の動向を把握する必要があり，英語論文の多読・精読は必要不可欠な技能である。本授業の目標は，受講生の専門分野における様々なテーマについて，英語論文の読解スキルを向上させることである。 具体的には，受講生は，指定されたテーマの論文を読解し，発表・討議を行う。そのテーマについての最新の研究動向を把握するとともに，研究者としての英語論文の読解スキルを習得する。	共同
		幼児心理学観察演習	本授業の目標は，幼児や教師の活動を観察することによりデータを収集し，それの分析・考察をとおして，幼児や保育についての理解を深めることである。また，観察によるデータ収集および分析手法を習得する。 具体的には，広島大学附属幼稚園において，幼児や教師の活動を観察し，その結果を分析する。観察のテーマは，予備観察を実施した後，受講生の関心に基づいて設定する。観察の経過，結果をまとめて発表し，討議することで理解を深める。	共同
		臨床心理学特講Ⅱ	本授業では，心理臨床の実践の方法及び効果について理解を深め，実践力を高めることを目指す。特に，行動論・認知論に基づく臨床心理学的介入および集団療	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	心理学プログラム		法，予防的臨床心理学的介入をテーマとして，集団を対象とした介入プログラムの作成，ロールプレイ，ディスカッションを授業の中で行う。そして，心理療法の効果について，文献をもとに最新の研究知見を把握し，それらの知見をどのように実践に活かすかを考えていく。また、心理療法を実施するうえで考えなければならない倫理的問題や配慮すべき事項についても学習を行う。	
		心理療法特講	心理療法では,クライエントがこころの一部あるいは内的な問題等を言語,遊び,態度，表情や行動などの行為化されたメッセージをセラピストが受けとり，くみ取り，どのように扱うかという部分において行為を取り扱う方法として位置づけることもできる。こうした行為化を取り扱う方法をアクションメソッドという。本授業では，受講生自身が経験あるいは体験してきたことを言葉などで表現し，受講生同士で共有し，ときには，自らの行為として表現することで自己理解や他者理解，状況理解をしていくことを目指す。具体的には，受講生が体験してきた心理臨床教育研究センター及び学外実習での臨床体験ならびに事例検討会・発表会などの研修での事例をベースに，問題意識や体験的理解を言語化し，行為化して共有し，深化させることを目標とする。本授業の体験学習を通じて，心理療法家として重要な知識とともに倫理観を涵養する。	
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	本授業の目標は，次の 3 点について，理論の理解とともに，実践的な能力を身に付けることである。(1) 家族関係等，集団の関係性に焦点を当てた心理支援の理論と方法を概説できる。(2) 地域社会や集団・組織に働きかける心理学的援助に関する理論と方法について概説できる。(3) 上記の 1,2 を，心理に関する相談，助言，指導等への応用について概説できる。講義を行うとともに，受講生同士の討議を通して，これらの理論について理解を深め，実践的能力を習得させる。	
		心の健康教育に関する理論と実践	（概要）本授業の目標は，現代社会に生きる人間の心の健康の増進に寄与するさまざまな心理学の理論を習得すること，そして，心の健康教育に関する情報や知識を用いた実践力を習得することである。具体的には，現代社会におけるメンタルヘルスの問題について，認知心理学，学習心理学，社会心理学，教育心理学，発達心理学，臨床心理学など，心理学の主要な領域における最新の知見を紹介する。さらに，心の健康教育の実践として，ストレスマネジメント教育やソーシャルスキルトレーニングなどの理論を概説し，実施方法をロールプレイなどにより習得する。 （オムニバス方式／全 15 回） （147　尾形　明子／2 回） ガイダンス，健康とメンタルヘルス （115　梅村　比丘・27　杉村　和美／2 回） 愛着とメンタルヘルス （123　清水　寿代・45　杉村　伸一郎／2 回） 子育てとメンタルヘルス （136　中島　健一郎・42　森永　康子・199　平川　真／2 回） 対人関係とメンタルヘルス （111　上手　由香／2 回） トラウマケアとメンタルヘルス （72　湯澤　正通・69　中條　和光・26　森田　愛子／2 回） ワーキングメモリと発達障害 （17　服巻　豊・208　神原　利宗・220　宮谷　真人・152　中尾　敬／2 回） ストレスマネジメント （63　石田　弓／1 回） カウンセリングマインド	オムニバス方式
		心理支援に関する理論と	本授業では，力動論，行動論・認知論，その他の代表的な心理療法の理論と技法	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	心理学プログラム	実践（臨床心理面接特講Ⅰ）	について概説する。これらの心理療法の理論を理解し，心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じた適切な支援方法を選択し，調整することができるようになることを目指す。また，各理論を用いた心理療法の事例検討を通して，心理面接の始まりから終結までの展開と経過の理解の仕方，事例の特性やニーズに応じた適切な支援方法や心理療法の技法の選択や工夫について学習する。	
		臨床心理面接特講Ⅱ	受講生の臨床心理面接に必要な心理査定（見立て）と見立てのフィードバック，面接方針の共有という基本的理解について深化させ，臨床心理面接（遊戯療法を含む）のための基本的応答を修得させることを到達目標とする。授業内におけるディスカッションを通じて，自分自身の考えやあり方について学んだこと，受講生同士のディスカッションにより共有できたことについて振り返りを行い，臨床心理面接のそれぞれ各人にあった工夫について考察する。	
		教育分野に関する理論と支援の展開	本授業では，学校教育分野における諸問題に対する心理的支援に関して，公認心理師に求められる基本的なスクールカウンセリングの知識や理論，および技法を習得することを目標とする。わが国における学校教育分野に関する心理臨床（学校心理臨床）の歴史やスクールカウンセリングの独自性・専門性について概説した後，児童生徒や保護者に対する直接的な支援のあり方や，児童生徒の指導・支援にあたる教職員の後方支援のあり方に関する基礎的知識や理論について講義を行う。また，不登校やいじめ問題，発達障害などに対する心理的支援の実際や，学校内における協力体制の構築や他機関との連携のあり方の実際についても講義を行う。さらに，学校に関わる事件や事故，自然災害など緊急事態における支援（緊急支援）あり方についても具体的に説明する。	共同
		保健医療分野に関する理論と支援の展開	本授業では，公認心理師および臨床心理士にとって必要な保健医療分野に関する精神医学および心身医学の基礎知識を習得することを目指す。また，保健医療分野における公認心理師および臨床心理士の役割を明らかにする。精神医学に関しては，精神科治療の概要を解説し，統合失調症や気分障害，不安障害などの代表的な精神疾患の特徴や治療について講義を行う。心身医学については，心身症や摂食障害，サイコオンコロジー，リエゾン精神医学などに関する講義を行う。	
		福祉分野に関する理論と支援の展開	福祉現場は，被虐待児，障害児・者，高齢者など社会的に養護が必要な人々の重要なサポート資源である。そうした福祉現場の支援対象者の虐待構造，障害種・程度ならびに家族力動などを医学的・心理社会的背景や課題を含みながら実践事例などを活用して学習する。また，福祉現場で必要な直接支援としての心理支援方法について体験的かつ実践事例を通して学ぶ。さらに，福祉現場において生じる問題及びその背景を，福祉現場で働くスタッフのメンタルヘルス対応ならびに福祉分野から保健医療・教育・司法などの関連分野との連携の実際について基礎的知識を習得する。	隔年・集中
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	本授業では,非行臨床に焦点を当て,とりわけ司法・矯正領域外で働く公認心理師にも必須の非行・犯罪関連法制度をはじめ,非行・犯罪理解の枠組み,見立ての際に必要な,非行性の見極め方,加害性と被害者性を念頭に置いたダブルロールの問題,関わり方,関係機関の機能と活用の意義等に力点を置き,事前学習,学生による発表を中心に進める。それにより，犯罪や非行をしたものがそれに至る原因を見立てる視点，その心理の分析，再販や再非行のリスク評価といった視点，矯正・更生のための関与の在り方，犯罪や非行の防止について知識や技能を習得する。	隔年・集中
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	産業・労働分野における心理臨床，ストレス対策，メンタルヘルスの計画およびシステムづくりにおいて必要な知識と技術について講義と実習を行う。具体的には，産業・労働分野における心理臨床的問題とその背景，様々な理論，産業カウンセリングの歴史や専門家の役割等について学ぶ。さらに，産業カウンセリングの実践について具体的に学ぶ。それにより，労働分野に関わる公認心理師の実践について理解し，概説できる知識と技能を習得することを目標とする。	隔年・集中
		心理的アセスメントに関する理論と実践（臨床心理査定演習Ⅰ）	本授業では，複数の心理検査と知能検査（WAIS-Ⅲ，WISC-Ⅳ）を，受講生及び学部生を対象とした相互実施体験を通して，検査の導入，ラポールの形成，実施手順，検査結果の読み取り，解釈，報告書の作成，フィードバックについて学ぶ。それにより，心理的アセスメントに関する以下の３つの課題について学ぶ。① 心理的アセスメントの目的と意義，② 心理的アセスメントに関する理論と方法，③ 心理に関する相談、助言、指導等への心理アセスメントの応用。	
		臨床心理査定演習Ⅱ	本授業では，医療・福祉・教育・司法などの領域で広く用いられるロールシャッハテストや描画法を中心に体験的に学習する。ロールシャッハテストでは，受講生自身が検査者体験をし，検査結果の分析および検査所見の書き方を習得する。	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	心理学プログラム		描画法では，バウムテストやS-HTPなど代表的な描画法に関する基礎知識を身につけると同時に，受講生自身が描画法を体験し，検査所見の書き方を習得する。さらに，テストバッテリーの組み方や総合的解釈のノウハウ，および検査結果の報告書の書き方について，グループによる事例検討を通して学ぶ。	
		臨床心理基礎実習Ⅰ	本授業の目標は，実習や事例の担当に備え，臨床心理面接に最低限必要とされる基本的な知識や態度，および技術を習得することにある。具体的には，まず授業内で臨床心理面接の基本について講義を受け，基礎的知識を習得する。次に，実習生同士のロールプレイを通じて，具体的な応答技法のあり方を確認する。これを踏まえて「試行カウンセリング」を行う。ここでは，学部生（依頼クライエント）を対象に1回50分，計5回連続の模擬面接を行うことで，より実践に近い形で臨床心理面接の技能を習得する。	共同
		臨床心理基礎実習Ⅱ	広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センターこころの相談室において，心理検査や心理面接への陪席および，心理面接の実践を行う。これらを通して，以下の事項について学習する。(ア）心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（１）コミュニケーション，（２）心理検査，（３）心理面接，（４）地域支援 等。(イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ）多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ）公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	共同
		心理実践実習Ⅳ（臨床心理実習Ⅰ）	本授業では，学内において15回（1回3時間，計45時間以上）の事例検討による実習を行う。心理に関する支援を要する者等に対して自ら支援を実践した事例，あるいは他者が実践した事例の検討を通して，以下の事項について学習する。(ア）心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（１）コミュニケーション，（２）心理検査，（３）心理面接，（４）地域支援 等。(イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ）多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ）公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	共同
		臨床心理実習Ⅱ	本授業では，ケースカンファレンスおよび事例検討会を通して，カウンセリング・心理療法を行なっていく上で注意すべきことについて実践的な理解を深める。具体的には，附属心理臨床教育研究センターの心理教育相談部門で行なわれている事例について，自ら支援を実践した事例，あるいは他者が実践した事例の検討を行い，特に心理査定，治療関係や心理療法過程に焦点をあてて学ぶ。また，事例研究や事例検討の方法についても学習する。	共同
		心理実践実習Ⅰ	学内において30回（1回3時間，計90時間以上）の事例検討による実習を行う。心理に関する支援を要する者等に対して自ら支援を実践した事例，あるいは他者が実践した事例の検討を通して，以下の事項について学習する。(ア）心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（１）コミュニケーション，（２）心理検査，（３）心理面接，（４）地域支援 等。(イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ）多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ）公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	共同
		心理実践実習Ⅱ	心理に関する支援を要する者等に対する支援の実践について，臨床指導教員によるグループスーパービジョンを通して，以下の事項について学習する。 (ア）心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（１）コミュニケーション，（２）心理検査，（３）心理面接，（４）地域支援 等。(イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ）多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ）公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	共同
		心理実践実習Ⅲ	広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センターこころの相談室において，心理検査や心理面接等の実習を行う。心理検査は1回の検査につき5時間（検査実施時間，所見作成時間，事前事後指導を含む），心理面接は，1回につき3時間（面接時間，記録作成，事前事後指導を含む）の実習時間とみなす。心	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	心理学プログラム		理検査と心理面接を合わせ 30 時間以上の実習を行う。それにより，以下の事項について学習する。(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（1）コミュニケーション，（2）心理検査，（3）心理面接，（4）地域支援 等。(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ) 多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	
		心理実践実習Ⅴ	学内において 15 回（1 回 3 時間，計 45 時間以上）のケースカンファレンスおよびグループスーパービジョンを中心とした実習を行う。それにより，以下の事項について学習する。(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（1）コミュニケーション，（2）心理検査，（3）心理面接，（4）地域支援 等。(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ) 多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	共同
		心理実践実習 A	精神科病院において，8 回（1 回 8 時間，事前事後指導を含め計 70 時間以上）の実習を行う。また，小児科および精神科病院において 2 回以上（1 回 5 時間，計 10 時間以上）の知能検査および心理面接等の実習を行う。それにより，以下の事項について学習する。(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（1）コミュニケーション，（2）心理検査，（3）心理面接，（4）地域支援 等。(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ) 多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	共同
		心理実践実習 B	司法・犯罪，教育，福祉の 4 分野における心理に関する支援を実施する施設において，1 分野以上を選択し，実習に参加する。それにより，以下の事項について学習する。(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（1）コミュニケーション，（2）心理検査，（3）心理面接，（4）地域支援 等。(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ) 多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	共同
		心理実践実習 C	定時制高校において 12 回（事前事後指導，事前準備を含め，72 時間以上）の集団認知行動療法プログラムの実践を行う。それにより，以下の事項について学習する。(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（1）コミュニケーション，（2）心理検査，（3）心理面接，（4）地域支援 等。(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ) 多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。また，教育領域の実習であることから，次の 2 点も目標とする。①教育現場において生じる問題及びその背景について説明できるようになる。②教育現場における心理社会的課題及必要な支援方法について説明できるようになる。	共同
		心理実践実習 D	保健・医療，教育，司法・犯罪，福祉における心理に関する支援を行う施設を 1 か所以上選択し，年間を通して個別ケースの担当による実践を行う（隔週での実習の場合は年間 20 回以上，毎週での実習の場合は年間 40 回以上，計 200 時間以上）。それにより，以下の事項について学習する。(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得：（1）コミュニケーション，（2）心理検査，（3）心理面接，（4）地域支援 等。(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成。(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチのあり方およびその具体的内容の理解。(エ) 多職種連携及び地域連携のあり方およびその具体的内容の理解。(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解。	共同
		法学・政治学プログラム特別演習Ⅰ	（概要）法学・政治学・社会学分野における研究指導に付随する関連の専門知識や専門分野を問わず多くの分野で共通して求められるセンスやスキル等を習得させ，研究指導科目を補完することを目的として行うこととする。最先端の研究や学術論文等の収集法の概説や論文抄読や討論を通して，学生自ら主体的に研究を	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		深化させる基本的な能力の習得を目指す。 （18　江頭　大蔵） 社会学分野の研究成果を主旨論文の作成に反映できるよう，文献講読や調査手法の習得など，各種の指導を行う。 （247　永山　博之） 国際政治学及び安全保障についての研究成果を修士論文の作成に生かしていけるように，履修者に対して研究指導を行う。 （157　岡田　昌浩） 会社法，及び金融商品取引法等の関連法領域，その他企業に関する法に関する文献の講読の成果を，受講者各自の修士論文の作成に反映できるように，各種の指導を行う。	
		法学・政治学プログラム特別演習Ⅱ	（概要）法学・政治学・社会学分野における研究指導に付随する関連の専門知識や専門分野を問わず多くの分野で共通して求められるセンスやスキル等を習得させ，研究指導科目を補完することを目的として行うこととする。最先端の研究や学術論文等の収集法の概説や論文抄読や討論を通して，学生自ら主体的に研究を深化させる基本的な能力の習得を目指す。 （18　江頭　大蔵） 特別演習Ⅰの成果をふまえた上で，社会学分野の研究成果を主旨論文の作成に反映できるよう，文献講読や調査手法の習得など，各種の指導を行う。 （247　永山　博之） 特別演習Ⅰの内容を継承して，国際政治学及び安全保障についての研究成果を修士論文の作成に生かしていけるように，履修者に対して研究指導を行う。 （157　岡田　昌浩） 特別演習Ⅰをふまえて、会社法，及び金融商品取引法等の関連法領域，その他企業に関する法に関する文献をテキストとした講義の成果を，受講者各自の修士論文の作成に反映できるように，各種の指導を行う。	
		憲法理論	まず，現行憲法や憲法判例にとらわれることなく，国家の基本法である憲法の基礎を原理原則に立ち戻って検討することを目指す。そのため，本講義は，憲法の保障する基本的人権の背景にある自由の原理及び国家統治の基本原理について，法哲学的アプローチや経済学的アプローチを理解できるようになることを目標とする。さらに，そうした理解をもとにして，現行憲法の解釈や判例に対する批判的視点を修得することも目指す。講義は，基本となる文献を講読し，質疑応答を中心としながらすすめていく。	
		行政法理論	行政法学の先行研究を精読しつつ，現在の行政法理論について考察する。精読する先行研究は「行政組織法」「行政作用法」「行政救済法」などのいずれかに限定するということはしない。さらに行政実定法の制定や改廃の動向にも関心を寄せながら，ひろく行政の在り方を自ら法的に検討する能力を培うことを目標とする。初回授業時に参加者の研究関心や問題意識を確認した上で精読対象とする文献を選定し，その後は報告割当に沿って読み進め，併せて全体で討論を行う。	
		刑事システム論	刑事法上の重要論点を取り上げ，犯罪と刑罰をめぐる諸問題について，比較法的知見をも踏まえながら考察する。取り上げる論点は，刑事実体法，その中でも刑法典の犯罪に関わる解釈問題や立法論を中心としつつ，しかしそれに限らず，特別刑法上の犯罪や刑事手続法に関わる論点，さらには刑事政策上の問題をも含む。具体的なテーマは，受講学生の関心・属性等に応じてその都度決定され，授業の方法も，特定の書物を精読する，雑誌連載を輪読する，学術論文を検討する，裁判例を分析するなど，様々にありうる。このように本授業は，テーマを限定することなく広く刑事法を対象とし，犯罪と刑罰のあり方について掘り下げて検討し，意見を出し合い，知見を深めることを目的とするものである。	
		現代憲法論	患者・障害者・子ども・外国人・女性等の権利に関する日米の憲法判例を素材に，「自立した強い個人」を主体として想定する人権理念が，「法的・経済的・社	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		会的に不利な立場にある人々」が切実に求める正義の実現に，どのような役割を果たしているか（あるいは，果たしていないか）を考察する。具体的には，不利な立場の人々の人権に関わる日米の憲法判例（主として最高裁・連邦最高裁判決）や関連論文を検討する。受講者は，割り当てられた判例・文献についてレジュメを作成して報告するとともに，毎回のテーマについて事前に研究したうえで，積極的に討論に参加することが求められる。なお，取り上げるテーマは，受講者の問題関心に応じて変更することがある。授業の最後にレポートの提出を求める。	
		社会変動分析論	現代日本社会の趨勢的トレンドに焦点を当て，その背景，要因，社会への影響を分析した諸論を比較検討する。特に，立論の根拠となるデータの扱いについて批判的に検討し，受講者が独自の観点から収集・加工したデータをとりまとめたレポートを作成する。まず，近年の社会変動にかんする分析視角として，再帰的近代化や個人化についての基本文献を講読する。次に，受講生各自が取り扱うテーマについて決定し，各自が選択したテーマについて文献の報告を行う。そして，文献が根拠としているデータについて批判的に検討し，レポート作成のためにどのようなデータ分析が必要か吟味し，データを収集して加工したうえで，レポートを提出する。	
		社会構造分析論	社会学の特定のテーマに沿った指定文献を講読する形式。最近３～５年間の間に刊行された日本語の文献が中心ですが、英語の文献を取り上げることもあります。その日に報告される文献には全員あらかじめ目を通し，論文執筆の練習として，できるだけ批判的に読んできておいてください。最終的には，その期のテーマに基づいて，４千字程度のレポートを作成し提出すること。報告，発言，レポート等を総合的に考慮して評価します。過去に取り上げたテーマには「児童虐待」「子どもの貧困」「特別養子縁組」「児童養護施設」「ケアの思想」「ステップファミリー」などがあります。	
		家族支援社会論	主に戦後日本の家族に関する社会学的研究を取り上げながら，家族に対する社会学的アプローチの特徴（核家族論，近代家族論，家族福祉論等）と，そこから把握される家族の諸側面（核家族化や家族の個人化，多様化）について理解を深めていく。そのうえで，現代家族をめぐる諸問題（育児や介護にみられる性別役割分業，企業や職場のあり方，「子どもの貧困」等）や，家族政策をはじめとする社会的支援の動向について検討し，現状と今後の課題について考察する。	隔年
		政治倫理論	政治と倫理の関係，政治的な事象をめぐってどのような倫理的な問題が生ずるのか，あるいは逆に倫理や道徳をめぐる議論や言説がどのような政治的意味をもつのかといった問題を検討しながら，政治とは何かについて考える。およそ政治的な問題は，具体的な状況への対応や，対象とされる事象についての理解を抜きにして論ずることは無意味である。したがって本講義は，受講者の関心に合わせて具体的なテーマや題材を選定して，適宜文献資料やテキストを検討するという形で実施する。	隔年
		政策過程論	政府(国や地方自治体)の公共政策の政策過程を分析する際に必要となる，様々な分析枠組みや理論モデルを概説する。先ず政策サイクルの五つの段階(政策課題の設定－政策作成－政策決定－政策実施－政策評価)について，それぞれの内容とそこで提起されている問題，例えば，政策課題設定における非決定権力の問題や政策実施における実施のギャップ論など，を説明する。また，それぞれの段階で，問題となる制度とアクターの行動パターンについても検討する。さらに，政策実施において政府が用いることのできる政策手段，情報・権威・資金・組織の特性と政策の特定の類型との親和性について検討する。	隔年
		日本政治論	この授業は，日本政治を考察する際に必要となる，制度やアクターについての一般的な知識の習得とともに，留学生との討論などを通じて，比較政治学的手法の理解を進めることを目指している。その際，日本の内閣，国会，行政官僚制と地方自治などの制度，政党や利益団体などの政治的アクターを順次に取り上げ，考察を進める。教科書として，Ian Neary， 2002:The State and Politics in Japan.(Oxford: Blackwell)を用い，主に20世紀における日本政治を理解した上で，21 世紀に入ってからの変化については，担当教員から，資料を提示しつつ詳述する。なお，この講義は，英語によって行われるので，参加者には十分な英語運用能力が求められる。	
		比較自治体論	高齢化の進展などの社会の変化や産業構造の変容に伴い，我が国の中央政府及	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		び地方自治体の財政状況は徐々に悪化してきている。その一方で，さまざまな社会的なリスクへの対応など地域社会で対応すべき課題も増えてきている。このように地方自治体の財政状況が悪化する中，わが国の地方自治体運営において，民主的で能率的な行政という観点がますます重要となってくる。この科目では，地方自治に関する文献を講読する形で，地方自治体を巡るさまざまな議論を検討する。指定文献の講読を通じて，比較の視点から地方自治の現状・課題を理解することを目的とする。	
		租税法	概要：この授業では租税法理論の基本的部分に当る，租税の意義，租税法律関係の特色，課税要件に関する事項を中心に研究を行う。そこで，実定租税法が如何なる原理に基づいて構築され，その解釈はどうあるべきかを考えるためのベースとなる知識を獲得することが目標である。特に，租税法律主義，法治国家原則，平等原則といった憲法と租税法との関係に重点を置いた現行税制に関する分析がなされる。 さらには，租税法解釈論の基礎理論，租税回避の意義とその規制の可能性を検討することもなされる。	隔年
		国際租税法	概要：この授業は，国際金融，国際取引の実態を踏まえた上で，国際課税制度を理解することが重要であるとの意識のもと，参加者が，国際租税法の基礎知識を身につけると同時に，国際租税法について独自の解釈論を展開することができるようになることを目標とする。検討対象としては，国際租税法の法源，ソース・ルール，二重課税の意義，租税条約の現状と展望，移転価格税制，タックス・ヘイブン対策税制，過小資本税制等を挙げることができる。	隔年
		憲法理論演習	まず，現行憲法や憲法判例にとらわれることなく，国家の基本法である憲法の基礎を原理原則に立ち戻って考察することを目指す。そのため，本演習は，憲法の保障する基本的人権の背景にある自由の原理及び国家統治の基本原理について，法哲学的アプローチや経済学的アプローチをもちいて考察できるようになることを目標とする。さらに，そうした考察をもとにして，現行憲法の解釈や判例を批判的に検討できるようになることも目指す。演習は，学生の発表と質疑応答を中心としてすすめていく。	
		行政法理論演習	行政法学の先行研究を精読しつつ，現在の行政法理論について考察するが，行政法理論を履修していることを前提に参加者の執筆検討中である論文に引きつけて考察を深めることを狙いとする。初回授業時に参加者の研究関心や問題意識を確認した上で精読対象とする文献を選定し，その後は報告割当に沿って読み進め，併せて全体で討論を行うことを基本と考えているが，参加者の執筆中の論文内容によっては，当該執筆中論文を素材に行政法学からの検討を加えること等もあり得る。	
		刑事システム論演習	刑事法上の重要論点を取り上げ，犯罪と刑罰をめぐる諸問題について，比較法的知見をも踏まえながら考察する。取り上げる論点は，刑事実体法，その中でも刑法典の犯罪に関わる解釈問題や立法論を中心としつつ，しかしそれに限らず，特別刑法上の犯罪や刑事手続法に関わる論点，さらには刑事政策上の問題をも含む。具体的なテーマは，受講学生の関心・属性等に応じてその都度決定され，授業の方法も，特定の書物を精読する，雑誌連載を輪読する，学術論文を検討する，裁判例を分析するなど，様々にありうる。このように本授業は，テーマを限定することなく広く刑事法を対象とし，犯罪と刑罰のあり方について掘り下げて検討し，意見を出し合い，知見を深めることを目的とするものである。	
		現代憲法論演習	立憲主義と民主主義，非常事態と憲法，議院内閣制の問題状況，人権の限界など，現代憲法学の諸課題（総論，統治機構，人権）に関する主要な文献・判例を読み解くことにより，問題状況を把握し，解決の方向を模索するとともに，文献・判例の読み方，レジュメの作成法，討論の作法等を修得する。受講者は，割り当てられた文献・判例をレジュメを用いて発表し，積極的に討論に参加することが求められる。なお，取り上げるテーマは，受講者の問題関心に応じて決定する。授業の最後にレポートの提出を求める。	隔年
		社会変動分析論演習	社会調査のなかでも質的調査について，代表的な研究事例の購読，一般的な方法論の学習と検討により，受講者の問題関心に即した題材を対象としたレポートを作成する。まず，質的調査の研究事例について基本文献を講読し，室的調査の有効性と限界についてイメージをつかむ。次に，内容分析，ライフヒストリー分析，会話分析など，質的調査の標準的研究方法について学習し，自らの研究テー	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		マに適した手法を探る。その上で，レポート作成の具体的テーマを検討し，研究計画を立て，レポートを作成し，提出する。	
		社会構造分析論演習	社会学を専攻する修士課程の大学院生の，各自の研究テーマに関連する文献報告と，それにもとづくディスカッションが中心です。その日に報告される文献には全員あらかじめ目を通し，論文執筆の練習として，できるだけ批判的に読んできておいてください。最終的には，自分が担当した文献に基づいて，４千字程度のレポートを作成し提出してください。報告，発言，レポート等を総合的に考慮して評価します。取り上げる文献は各自の研究テーマによって様々なものになりますが、最近では「ワーク・ライフ・バランス」「婚外子」「女子少年非行」「非行少年の家族」「社会的居場所」といったテーマを扱いました。	
		家族支援社会論演習	家族支援のあり方（当事者による支援，専門職による支援，政策的支援など）と研究方法について，関連する社会学領域の文献の検討を通して理解を深めていくことを目的とする。具体的には，社会的支援（支援活動や政策動向）に関する研究論文，ならびに，現代家族（未婚化や多様化，貧困問題等）に関する研究論文を取り上げる。受講者には授業への積極的参加（担当した論文に関する報告と討論への参加）とともに，関連するテーマを各自で設定した期末レポートの作成が求められる。	
		政治倫理論演習	政治と倫理の関係，政治的な事象をめぐってどのような倫理的な問題が生ずるのか，あるいは逆に倫理や道徳をめぐる議論や言説がどのような政治的意味をもつのかといった問題を検討しながら，政治とは何かについて考える。およそ政治的な問題は，具体的な状況への対応や，対象とされる事象についての理解を抜きにして論ずることは無意味である。したがって本演習では，受講者がそれぞれ自分の関心に合わせたテーマ，具体的な思想家や歴史上，政治上の事件・人物を選定して，関連する文献・資料を検討する。	隔年
		日本政治論演習	経済的に発達した民主制諸国において，憲法の規定する統治体制はそのままなのに，その実態的運用が「大統領制化」しているとの認識が広まっている。例えば，議院内閣制をとる国々でも，実際の政権運営としては，首相に権力が集中し，内閣の閣僚や議会，あるいは政党組織や派閥領袖の掣肘をほとんど受けることなく，あたかも首相が大統領のようにふるまう場面が増えていると指摘されている。こうした議論が日本に当てはまるか否か，この演習を通じて参加学生とともに，考えたい。そこで先ず，こうした認識の「理論枠組」を示した，Ｔ.ポグントケ/Ｐ.ウェブ編著岩崎正洋監訳『民主政治はなぜ「大統領制化」するのか』2014 の第一章以下いくつかの章を検討する。次いで，日本政治に即して，そうした理論的な仮説が適応可能かどうか，検討することにしたい。	隔年
		比較自治体論演習	高齢化の進展などの社会の変化や産業構造の変容に伴い，我が国の中央政府及び地方自治体の財政状況は徐々に悪化してきている。その一方で，さまざまな社会的なリスクへの対応など地域社会で対応すべき課題も増えてきている。このように地方自治体の財政状況が悪化する中，わが国の地方自治体運営において，民主的で能率的な行政という観点がますます重要となってくる。この演習では，地方自治に関する文献を講読し，クラス討議などを通して地方自治体を巡るさまざまな議論を検討する。指定文献の講読を通じて，比較の視点から地方自治の現状・課題を理解し，その内容に関して受講者が表現する能力を向上させる。	隔年
		租税法演習	概要：所得税法及び法人税法の基本構造を理解し，その重要判例を素材に租税実体法の解釈論の基礎的能力を身につけることを目的とする。具体的には所得税法，法人税法の基礎理論を身につけるとともに，現実の租税法上の問題が私法取引の上に成り立っているとの認識のもと，ビジネスの上で生じる租税法上の問題解決のあり方を法解釈論の観点から学ぶことを目標とする。特に，民法・商法との関係を意識しつつ，わが国の判例研究を通じて，租税法解釈の作法を身に着けることになる。検討対象としては，所得税の意義，所得概念論，所得分類論，収入金額と必要経費の意義，法人税の意義，資本等取引と損益取引との関係，益金と損金，連結納税制度，グループ法人税制，組織再編税制等が挙げられる。	隔年
		国際租税法演習	概要：この授業においては，国際租税法に関連する重要判例を素材として，国際課税の場面における紛争の実態を理解し，判例研究を通じて，国際取引に係る課税問題につき予測可能性を獲得する手段・センスを身につけることを目的とする。特に取り上げる素材としては，居住地の判定に関する判例，移転価格税制に関する判例，タックス・ヘイブン税制に関する判例，国際的組織再編税制に関す	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		る判例，さらには諸外国の告訴租税政策の動向に関する文献の解読等を挙げることができる。	
		不動産法	不動産にかかわる法的問題につき，民法(財産法)を中心として理解を深めることを目標とする。この授業では，①不動産物権変動に関する諸問題(取消しと登記，解除と登記，共同相続と登記，遺産分割と登記，取得時効と登記など)，②不動産担保物権の諸問題(抵当権の効力の及ぶ目的の範囲，抵当権と物上代位，抵当権の侵害に対する効力，抵当権と利用権など)等を取り扱う。この授業では，事前に各回に取り上げる上記のような具体的テーマを設定・周知し，受講者の個別報告・質疑応答を通じて，この授業で取り扱った個々の具体的問題について受講生全員で討論を行う。	
		物件管理法	物件管理とは，多様な法的主体（自然人，法人，団体）が，物権・債権・家族関係などに基づき，物を管理する場合を総称する。まず，このような場合をめぐって発生する様々な法律問題及び紛争事例について，民法，関連特別法及び裁判例による国内法的規律を分析・検討する。次に，国内法に対する理解を基礎として，外国法（ドイツ・韓国・中国など）との比較法的分析・検討を行い，より深層的・専門的な知識を身につける。これらの過程を通じて，物件管理及び民法全般に関わる各種法律問題に対する批判的思考能力及び比較法的研究能力を養う。授業は，受講者の個別報告に対する質疑・応答とともに，受講者全員の討論で行う。	
		契約法	日本民法における債権発生原因（契約，事務管理，不当利得及び不法行為）の法的規律に関する理解を深めるとともに，報告や発表あるいは討論に必要な能力等の向上を図り，修士論文の執筆等にも資することを目的とする。 授業内容としては，契約をはじめとする債権発生原因に関する法制度についての裁判例や学術論文等を基にした講義と学生の報告・発表・討論等を予定しているが，具体的な日程等については，履修者の基礎知識と毎回の進捗状況等を考慮した上で決定することとする。	
		経営法務	商法・会社法・金融商品取引法に関する最近の事象について討論するとともに、特に判例を読み込んで要件事実の把握とその解決方法について批判的に分析する。さらにそこで得られた論点について解釈論や立法論を検討し，修士論文の執筆に資することを目的とする。そのため，全講義 15 回を概ね４つに分け，最初の３回程度を商法の事象・判例分析に、次の５回程度を会社法の事象・判例分析に，次の４回分を金融商品取引法の事象・判例分析に当て，最後の３回程度において全体の総括を行うという方法で進めることとする。なお、この回数は受講生の修士論文のテーマにより、柔軟に対応することとしたい。	隔年
		経営法務戦略論	個々の商取引ならびに会社法・金融商品取引法に関する重要文献を読み込むとともに，論点を考察する。その上で，論点に関連して実際に実務で行われている事象を取り上げ，可能な限り詳細に分析・検討し，修士論文の執筆に資することを目的とする。ここでは外国文献(英語)も検討対象とする。そのため，全講義 15 回を概ね３つに分け，最初の７回程度を商取引・会社法の文献の検討に，次の５回分を金融商品取引法の文献の検討に当て，最後の３回程度において全体の総括を行うという方法で進めることとする。なお、この回数は受講生の修士論文のテーマにより、柔軟に対応することとしたい。	隔年
		企業組織法	会社法，及び金融商品取引法等の関連法領域，その他企業に関する法についての論文や判例などの法学文献をテキストとした対話型講義を通じ，コーポレートガバナンスなど企業の組織に関する法の諸問題を中心として講究する。受講生のうち報告担当者は法学文献に基づき報告を行い、この報告と文献に基づいて、受講生全員及び教員により討議を行う。こうした報告と討議を通じて、企業の組織に関する法的専門的知識及び学際的知識を習得し、また分析の能力を向上することを目標とする。これにより、企業の法的諸問題への応用を可能にする。	隔年
		企業ファイナンス法	会社法，及び金融商品取引法等の関連法領域，その他企業に関する法についての論文や判例などの法学文献をテキストとした対話型講義を通じ，コーポレートファイナンスなど企業の資金調達に関する法の諸問題を中心として講究する。受講生のうち報告担当者は法学文献に基づき報告を行い、この報告と文献に基づいて、受講生全員及び教員により討議を行う。こうした報告と討議を通じて、企業の資金調達に関する法的専門的知識及び学際的知識を習得し、また分析の能力を向上することを目標とする。これにより、企業法の理論を身につけ，企業の法的諸問題への応用を可能にする。	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム	民事訴訟の理論と実務	民事訴訟法を中心とした司法手続を論点とする裁判例の分析，実務的な諸問題の検討を行う。本講義では従来から重視されてきた手続法上の論点から最新の議論までを幅広く判例や文献を用いて検討する。これらを通じて，民事訴訟に関する最新の議論の状況や問題点について，大学院レベルの知識と応用力を身に着けるとともに，民事訴訟の理論及び実務についての理解を深めることを目標とする。	隔年
		裁判外紛争処理論	裁判外の民事手続に関連する諸論点について，理解を深めることを目標とする。本講義では，裁判外の手続としての民事調停・家事調停をはじめとした司法型調停，個別の紛争類型を前提とした行政型調停，民間型 ADR と呼ばれている民間組織が主催する紛争処理・相談手続について検討を加える。これらの検討に際しては，法社会学や司法政策といった関連する分野についても扱うこととして，多角的な観点から，紛争解決の在り方について理解を深める。	隔年
		雇用関係法	変化してやまない雇用社会では日々新たな紛争が生じてきている。そして、その紛争処理は非常に重要かつ緊急なものとなってきているし、紛争処理のための知識はワーキングライフの展開や企業運営にとって必須のものとなり、現代社会で生きる者に」とっての共通共用ともなっている。そこで、新たな判例が多く収録されている『労働判例百選　第９版』をテキストとして，雇用社会における現代的紛争とその解決，今後の雇用社会とそのルールのあり方を検討する。それを通じて現実の雇用社会における労働法ルールの実務的重要性を認識し，将来ワーキングライフを送る場合に実際に役立つ実践的な知識の習得を目指す。	隔年
		不動産法演習	本授業は，不動産法の授業とあわせて受講することにより，不動産に関わる法的問題につき，さらに理解を深めることを目標とする。この授業では，①不動産物権変動に関する諸問題，②不動産担保物権の諸問題だけでなく，不動産と関わりの深い③環境問題や④自然災害の問題も取り扱う。この授業では，事前に各回に取り上げる上記のような具体的テーマを設定・周知し，受講者の個別報告・質疑応答を通じて，この授業で取り扱った個々の具体的問題について受講生全員で討論を行う。また，環境問題や自然災害に関する問題については，近時，様々な情報・資料が入手可能であることから，それらも参考としつつ，法的問題だけでなく，それと関わりのある問題についても検討する。	
		物件管理法演習	物件管理とは，多様な法的主体（自然人，法人，団体）が，物権・債権・家族関係などに基づき，物を管理する場合を総称する。まず，このような場合をめぐって発生する様々な法律問題及び紛争事例について，民法，関連特別法及び裁判例による国内法的規律を分析・検討する。次に，国内法に対する理解を基礎として，外国法（ドイツ・韓国・中国など）との比較法的分析・検討を行い，より深層的・専門的な知識を身につける。これらの過程を通じて，物件管理及び民法全般に関わる各種法律問題に対する批判的思考能力及び比較法的研究能力を養う。授業は，受講者の個別報告に対する質疑・応答とともに，受講者全員の討論で行う。	
		契約法演習	日本民法における債権発生原因（契約，事務管理，不当利得及び不法行為）の法的規律に関する理解を深めるとともに，報告や発表あるいは討論に必要な能力等の向上を図り，修士論文の執筆等にも資することを目的とする。 授業内容としては，契約をはじめとする債権発生原因に関する法制度についての裁判例や学術論文等を基にした学生の報告・発表・討論等を予定しているが，具体的な日程等については，履修者の基礎知識と毎回の進捗状況等を考慮した上で決定することとする。	
		経営法務演習	会社法・金融商品取引法に関する最近の判例について，１回の演習において，45 分程度の発表と質疑応答を２回行うという方法で進める。ここでの発表内容は受講生の修士論文のテーマに沿った判例を取り上げて行うこととする。ここでは全演習 15 回を概ね３つに分け，最初の５回程度においてテーマの設定と関連する判例を分析・検討することとし，次の５回分ではより深くさまざまな文献にも詳細にあたって検討することとし，最後の５回程度において，それまでの分析・検討を修士論文に取りこむための作業を行う。	隔年
		経営法務戦略論演習	会社法・金融商品取引法に関する重要文献や実務についてその分析・検討を，１回の演習において，45 分程度の発表と質疑応答を２回行うという方法で進める。ここでの発表内容は受講生の修士論文のテーマに沿った文献を取り上げて行うこととする。ここでは全演習 15 回を概ね３つに分け，最初の５回程度においてテーマの設定と関連する文献や実務を分析・検討することとし，次の５回分ではより	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		深くさまざまな文献にも詳細にあたって検討することとし，最後の５回程度において，それまでの分析・検討を修士論文に取りこむための作業を行う。	
		企業組織法演習	会社法，及び金融商品取引法等の関連法領域，その他企業に関する法についての論文や判例などの法学文献の講読による演習を通じ，コーポレートガバナンスなど企業の組織に関する法の諸問題を中心として講究する。受講生のうち報告担当者は法学文献に基づき報告を行い、この報告と文献に基づいて、受講生全員及び教員により討議を行う。こうした報告と討議を通じて、企業の組織に関する法的専門的知識及び学際的知識を習得し、また分析の能力を向上することを目標とする。これにより、企業法の理論を身につけ，企業の法的諸問題への応用を可能にする。	隔年
		企業ファイナンス法演習	会社法，及び金融商品取引法等の関連法領域，その他企業に関する法についての論文や判例などの法学文献の講読による演習を通じ，コーポレートファイナンスなど企業の資金調達に関する法の諸問題を中心として講究する。受講生のうち報告担当者は法学文献に基づき報告を行い、この報告と文献に基づいて、受講生全員及び教員により討議を行う。こうした報告と討議を通じて、企業の資金調達に関する法的専門的知識及び学際的知識を習得し、また分析の能力を向上することを目標とする。これにより、企業法の理論を身につけ，企業の法的諸問題への応用を可能にする。	隔年
		民事訴訟の理論と実務演習	民事訴訟法を中心とした司法手続を論点とする裁判例の分析，実務的な諸問題の検討を行う。本演習では従来から重視されてきた手続法上の論点から最新の議論までを，受講者の報告や議論を基礎として検討する。これらを通じて，民事訴訟に関する最新の議論の状況や問題点について，大学院レベルの知識と応用力を身に着けるとともに，民事訴訟の理論及び実務についての理解を深めることを目標とする。	隔年
		裁判外紛争処理論演習	裁判外の民事手続に関連する諸論点について，理解を深めることを目標とする。 本演習では，裁判外の手続としての民事調停・家事調停をはじめとした司法型調停，個別の紛争類型を前提とした行政型調停，民間型 ADR と呼ばれている民間組織が主催する紛争処理・相談手続について，受講者の報告や議論を基礎として検討を加える。法社会学や司法政策といった関連する分野についても扱うこととして，多角的な観点から，紛争解決の在り方について理解を深める。	隔年
		雇用関係法演習	複雑化し変化してやまない日本の労働法の姿を全体的かつ体系的に検討し，労働法に関する理解を深める。労働法は複雑多様化してきているが、この講義ではあくまで基礎を押さえつつ総合的かつ体系的に最先端の知識・判例・事項の習得を目指し、実際に雇用社会やワーキングライフで役立つ実践的な授業を行う。テキストとしてはわが国労働法の最新像をコンパクトにかつ理論的に一定のレベルを保ちつつ奥深く記述した『ベーシック労働法　第７版』を使用し，演習方式でディスカッションと議論を行いながら授業を進めていく。	
		国際法	第２次世界大戦以降急激にその規律対象を拡大した，主権国家間を規律する法としての国際法の全体像を俯瞰する。特に，現代国際法の諸特性として，法の形成，国際法と国内法の関係，国際法の主体（国際組織，個人等を含む），国家領域を中心として扱う。国際法の各分野における重要な概念について，歴史的背景とともに現代における適用について理解することを目指す。さらに，現代における諸問題を解決に資する規範としての国際法の現実社会における適用の理解を深める。	隔年
		国際機構法	本授業科目では，国際社会の組織化の過程において形成されてきた国際機構の特徴を，法の成立形式及び国際法主体の双方から検討し，現代国際社会における国家と国際機構の基本的構造を明らかにする。また同時に，国際機構の活動が現代国際社会に大きな影響を与えている分野，特に，国連による国際紛争の平和的解決，武力行使の規制と国際安全保障，また国連以外の国際機構による国際経済活動に関する国際法と人権の国際保障についても検討する。	隔年
		国際政治経済論	グローバル化が進展する世界において，どのように国際政治と国際経済が関係しているのかを考察する。例えば，経済における国家間の相互依存関係が戦争と平和に与える影響や国際的な経済制度が国際秩序に与える影響は今後ますます重要となるトピックであり，そうした問題について基本的な国際政治経済学の理論を用いて理解する方法を講義する。まず，国際関係の基本的な理論における経済問題の意義を議論し，その後，通商・金融・環境等の各論も取り上げる。各論部分については，参加者の研究関心に応じて，論点を追加することもある。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム	国際刑事政策	国際刑事政策に関する基本的文献を購読し，国際刑事政策の現状と課題について基礎的理解を深める。その内容は，国際刑事政策の概念から始まり，薬物犯罪，マネーロンダリング，電脳犯罪，組織(的)犯罪，国越犯罪，海賊，テロリズム，戦争犯罪，人道に対する罪，ジェノサイドその他の国際犯罪等，多岐に渡るが，演習科目に接続する過程として，基礎的概念の理解と解釈に重心を置いた検討を行う。さらには、刑事管轄権の基礎国際刑事法上の理論を考究し、国際刑事政策との連関を意識した総合的なアプローチを行う。	
		安全保障論	安全保障に関する基礎的な理論と，現実政治における安全保障政策の原因と結果をともに議論する。ケースとして，アメリカ，日本，中国，韓国，北朝鮮が関わる近年の問題を中心的に取り上げる。中国の台頭、北朝鮮の不安定化、アメリカの政策的立場の動揺、日本の環境適応的変化のような、各国の情勢変化に、安全保障環境がどのように影響されているかという問題を詳細に検討し、それによってもたらされるこの地域の安全保障環境の変化に特に注目する。教員と学生の相互的なプロセスで授業を進行させる。	隔年
		国際政治学	国際政治学における基礎理論，特に国際政治のパラダイムについての論争，安全保障に関連する理論と政策の関係，国内政治と外交政策の結びつきに注目して議論する。国際政治学は，国内政治とは別種のシステムではあるが，両者が相互に結びついて機能していることに常に留意しながら授業を行う。「安全保障論」との違いについては、この授業はグローバルなレベルの変化、特に覇権国、地域大国、小国を含めた国際システムを構成する要素の個別の変化と、システム全体の変化の相互作用に注目して授業を進行する。教員と学生の相互的なプロセスで授業を進行させる。	隔年
		外交論	本授業では，日本の戦前から終戦，あるいは戦後から現代までのさまざまな歴史的な外交問題，又は現代の外交問題を主なテーマとして取り上げる。日本外交をめぐる歴史的事象，あるいは現代的な事象の複雑な内容を中心にして，それが生起した背景と理由，その結果をもたらした影響，そして歴史的かつ現代的な意義を分析，検討する。さらに日本外交を取り巻く東アジア諸国，欧米諸国などとの国際関係をも分析，検討する。最終的には，そうした歴史的，現代的な外交事象や事件の外交的・平和的解決の方法などについて，学術的，客観的に考察する。	
		国際秩序構築論	国際関係において平和と秩序がいかに形成されるかを論ずる。具体的には、南アジアの現代国際政治史を，その成り立ちや特殊性，構成諸国家とそれらの内政，経済発展等にも言及しながら検討し，南アジアの国際関係が、グローバルな国際関係や東アジアの国際関係、域内の諸国関係などに影響されながら、いかに秩序を形成してきたか、あるいはそれに失敗したかを検討する。また，中国を中心とする東アジア国際関係との連続性と対立を中心に，地域国際関係間の比較分析も行う。出席者は南アジア国際関係に関する文献のレビューを課される。	
		国際関係私法	国際私法（又は抵触法。以下，「抵触法」という）とは，二つ以上の（国家）法秩序に関連を有する私人間の法律関係から生じる法的問題を扱う法律ないし法分野であるが，本授業は，双方向的な講義を通じて，受講生が抵触法上の理論及び方法に関する諸論点について理解を深めることを目標とする。扱うテーマとしては，受講生の興味・関心に応じて調整を行うが，準拠法選択（外国法適用理論），外国判決の承認執行，国際裁判管轄，国際仲裁といった，抵触法の主要事項を中心的に取り上げる予定である。	
		比較政治思想論	政治思想史上の最も重要なテーマのひとつはデモクラシーである。デモクラシーはもともと古代の政治理念であり，長期間低い評価にとどまっていたが，近現代には，ほとんど誰もがデモクラシーという言葉でそれぞれの政治体制を擁護するようになった。だが今日ではその危機が語られもしている。本授業では，政治思想史，政治理論，政治史といった観点から，このデモクラシーという概念にどのような理念が込められるようになったのか，そしてこの理念が現実政治とどういった関係を有するのかといった事柄の理解を目的とする。	隔年
		日本法概説１	この授業は，日本法の初心者である留学生向けに，日本語で講義が行われる。『日本法への招待（第 3 版）』（有斐閣）を主なテキストとし，憲法，行政法，刑法，刑事訴訟法及び国際法関連の判例を精読することを通じて，日本立法，行政，司法のしくみなどを学べる。また，「憲法はまだか」「評議」などのドラマ・映画の鑑賞によって，日本国憲法の歴史背景，裁判員制度のあり方について理解を深める。さらに，広島地方裁判所での裁判傍聴によって，裁判の実況を考察する。 本講義の目標は次のとおりである。１．法律基礎用語，法律文章を理解する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		２．法律，判例及び法学論文の検索方法を習得する。３．日本語で判例概要の作成方法，内容のプレゼンテーション方法を習得する。４．比較法的研究の能力を養成する。	
		日本法概説２	この授業は，日本法の初心者である留学生向けに，日本語で講義が行われる。『日本法への招待（第 3 版）』（有斐閣）を主なテキストとし，民法，商法，経済法，民事訴訟法及び国際私法関連の判例を精読することを通じて，日本社会・経済制度，紛争解決のしくみなどを学べる。また，広島弁護士会所属の弁護士らとの交流，広島地方裁判所での裁判傍聴を通して，法曹実務を考察する。 本講義の目標は次のとおりである。１．法律基礎用語，法律文章を理解する。２．法律，判例及び法学論文の検索方法を習得する。３．日本語で判例概要の作成方法，内容のプレゼンテーション方法を習得する。４．比較法的研究の能力を養成する。	
		国際刑事法	この授業では，現在幅広い領域を含む国際刑法における主要問題を研究する。その内容は，国際刑事法の理論，国際刑事法の責任と参加原則，国際刑事法における弁護，国家裁判権と免除，戦争犯罪と重大な人道法違反，人道に対する犯罪，大量虐殺，テロリズム，国越犯罪，犯罪人引渡し，国際的誘拐，国際司法捜査共助等である。我が国のパースペクティブから他の司法権の方針及び刑事国際法の状況を検討しつつ，国境を越える犯罪を扱う内国刑法を探究する	
		国際法演習	国際法の成立形式，国際法の主体に関する基本的理解を前提として，国際法の各分野と関連性を有する近年の問題を中心的に取り上げる。受講者は，課題に関連する文献資料の購読により当該問題の全体を理解するとともに，判例・事例などの分析が求められる。 以下のような抽象的設問を中心として検討するが，これらの設問に関連した実例，判例，条約などを同時に検討する。「一貫した反対国と慣習国際法の成立」，「慣習国際法を成立させる多数国間条約の存否」，「国際法の分権的性格と法の強制」など。	隔年
		国際機構法演習	国際法に関する基本的理解を前提として，国際機構が国家と共に大きな役割を果たす近年の問題を中心的に取り上げる。受講者は，課題に関連する文献資料の購読により当該問題の全体を理解するとともに，判例・事例などの分析が求められる。 以下のような抽象的設問を中心として検討するが，これらの設問に関連した実例，判例を同時に検討する。「安全保障理事会による「立法権」の行使」，「国家による自衛権の行使と国連」，「安保理による権利濫用に対するセーフガード」など。	隔年
		国際政治経済論演習	国際政治経済論に関する近年の研究に関する文献を輪読し，議論する。授業の進め方については，参加者の中から毎回担当を決め，内容について報告した後で議論する形式をとる予定である。基本的な国際政治経済論の理論だけでなく，時事的なテーマについての研究書も扱うことで，今日のグローバル経済を理論に基づいて分析する能力も養うことを目標とする。さらに，各参加者の研究テーマや概要報告も行うことで，そうした能力を各自の研究課題の考察に活かす方法についても検討する。	
		国際刑事政策演習	国際刑事政策に関する最新の文献を購読し，国際刑事政策の現状と課題について理解を深める。その内容は，国際刑事政策の概念から始まり，薬物犯罪，マネーロンダリング，電脳犯罪，組織(的)犯罪，国越犯罪，海賊，テロリズム，戦争犯罪，人道に対する罪，ジェノサイドその他の国際犯罪等，多岐に渡る。これらを踏まえつつ，わが国の国内法的対応と刑事政策についても考究する。さらに、国際刑事法全体の視点から、実体法及び手続法を点検する他、国際人道法上の見地からも国際刑事政策を相対化し、多角的な検討を行える能力の涵養を目指す。	
		安全保障論演習	安全保障の主要トピックを取り上げて，特定のテーマについて文献を輪読する。文献は，近年の中国の台頭や北朝鮮核問題に関するものを中心に幅広い分野をカバーする本を取り上げる。また、各国の国内政治とそれが対外政策にもたらす影響に特に注目する。安全保障政策は、単に他国の政策に対する合理的反応ではなく、それ自体が国内政治や指導者、権力集団の信念や感情の産物でもあることに注意して授業を行う。単に文献の内容を理解するだけでなく，文献を材料として使いながら，安全保障の主要問題についての理解を深めていくことをめざす。	隔年
		国際政治学演習	国際政治学の主要トピックを取り上げて，特定のテーマについて文献を輪読する。国際政治と比較政治を架橋するような分野の文献を中心的に取り上げること	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		とする。グローバルな問題が、各国の国内政治や、経済社会的変化とどのように相互作用を行いながら、「国際政治」という場に現れているかという視点を特に強調する。単に文献の内容を理解するだけでなく，文献を材料として使いながら，国際政治学の主要問題についての理解を深めていくことをめざす。受講者の積極的な参加を期待する。	
		外交論演習	本授業では，戦前から戦後，さらには現代にいたるまでの日本の歴史的又は現代的な外交問題とそれを取り巻く東アジア，欧米諸国をはじめとする国際関係についてのテーマの下で，受講者が発表を行うと同時に，参加者全員が積極的に質疑応答などによる検討を行い，学術的，客観的な考察を深めてゆく。 特に，受講者の学生が，この演習で発表や論文執筆の方法などを学ぶことによって，自らの修士論文の作成に繋げてゆくことを目標とする。	
		国際秩序構築論演習	冷戦の終焉や、非欧米の新たな勢力の政治的台頭の一方、経済的にはますますグローバル化が進むことによって、国際関係は、多極化という言葉でも説明できないほどに複雑化している。国際政治におけるそのような現状を踏まえて、本授業では，「混沌の中の国際秩序」をどのようにとらえ、分析するべきか，を課題として、最新の文献のレビューを通じて，国際政治および国際政治経済に関するより深い理解を追求する。共通の文献の研究に加え，出席者は主題に関連する論文を自ら探求してレビューすることが求められる。	
		国際関係私法演習	国際私法（又は抵触法。以下，「抵触法」という）とは，二つ以上の（国家）法秩序に関連を有する私人間の法律関係から生じる法的問題を扱う法律ないし法分野であるが，本授業（演習形式）は，受講生が抵触法上の理論及び方法に関する諸論点について理解を深めることを目標とする。具体的には，受講者の興味や関心，抵触法に関する知識の程度，語学（日本語・英語等）能力に応じて，テーマを決定し，抵触法一般に関する古典的文献又は近時の文献の講読や，抵触法上の重要論点に関する受講者による報告及び全体での討論，抵触法に関する我が国の最新判例研究（＋抵触法に関する諸外国の重要最新判例研究）等を行なう。	
		比較政治思想論演習	他の様々な分野と同じく，政治思想史においても，解釈と方法は切り離しがたく結びついている。大学院レベルでは，この政治思想史の方法に関する一定の理解も必要である。本授業では，政治思想史の方法に関する文献や，特定の対象（たとえばホッブズの『リヴァイアサン』）についての異なった方法論的立場から書かれた論文や著作を読解する。こうした理論面での検討と実際になされた解釈の比較を通じて，参加者各人が，方法に意識的な形で政治思想のテクスト分析ができるようになることを目標とする。	隔年
		医療と人権	近年，医療の様々な場面で，人権の観点から問い直しが行なわれるようになってきている。侵襲的な医療行為に対するインフォームド・コンセントの要求，医療情報をめぐるプライバシーの保護，生と死に関する自己決定権の保障等々。このような問題のそれぞれについて，関連する判例や法学文献を検討することにより，適正な医療のあり方を探る。具体的には，医療と人権が交錯する様々な局面について，法学文献や日米の関連判例を検討する。受講者は，割り当てられた判例・文献についてレジュメを作成して報告するとともに，毎回のテーマについて事前に研究したうえで，積極的に討論に参加することが求められる。なお，取り上げるテーマは，受講者の問題関心に応じて変更することがある。授業の最後にレポートの提出を求める。	隔年
		医事法制度論	この授業では，医事法制度論の基礎として，ドイツにおける医事刑法のトピックの中から，とりわけ，医療過誤の問題について検討する。とりわけ，犯罪構成の見地から，近時注目されている，「仮定的同意論」について，わが国でも意欲的な論文が多数公刊されており，これらの深い分析も行いながら，日独理論の比較法的検討を行う。さらには、イタリアの精神医療改革に学び、触法精神障害者の処遇の在り方を比較法的に考察し、それを踏まえて、わが国の刑事司法と精神鑑定の現状と課題の検討に発展させていく。	隔年
		医事刑法論	医療分野における刑法の意義・役割を，とりわけ刑事実体法上の観点から検討する。授業内容についてそれ以上に限定はなく，具体的なテーマは受講学生の関心・属性に応じてその都度決定されるが，主要な論点として，医療行為における患者の同意の意義と限界，医療事故における過失判断や過失共犯の肯否，終末期医療に対する刑法の関わり，臓器移植法をめぐる諸問題などが想定される。本授業は，こうした諸問題について，特定の書物を精読する，雑誌連載を輪読する，学術論文を検討する，裁判例を精査するなどの方法により考察し，医療上の諸問	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	法学・政治学プログラム		題を刑法的観点から分析することを目的とするものである。	
		医療刑事手続論	医療過誤裁判における刑事手続法上の問題を検討する。この授業では，従来等閑視されがちでもあった刑事手続的諸問題について，医療者の身柄拘束の理由と必要性の限界，立証責任と挙証責任配分の問題，医療事故被害者の法的地位や医療事故調査センターの現状と課題，さらには訴訟手続打ち切りの理論に関する検討等，わが国制度を中心としつつも，外国の法制度も視野に入れながら総合的に検討する。さらには、刑事裁判で重要な役割を果たす精神鑑定の現状と課題について検討しつつ、制御能力の希薄化といった実体法上の動向にも関心を払いつつ、責任能力判断をめぐる手続法的を中心に考察する。	隔年
		医療労務管理と法	医療現場においても労働時間や賃金をはじめとして民間企業と同様に労働法に則して適正に労務管理を行うが求められる。しかし、医療の特性に合わせた対処を行うことも必要である。そこで、この講義では労働法の基礎や体系を踏まえ医療現場の労務管理で必要とされる法的知識を最新の知見も交えつつ体系的に習得することを目指す。具体的にはわが国の労働法をコンパクトかつ体系的・総合的に記したテキストを用いて医療現場の特性にも配慮しつつ労働法の全項目について検討を加える。これにより快適な職場で円滑に労務管理がなされ、医療スタッフが安心して職業生活を送ることができるようになることを目標とする。	隔年
		社会調査論	社会科学的データの処理，解析の手続きを，基礎から順を追って解説し，いくつかの応用分野における解析の事例を示すことによって，調査研究の基礎的知識の修得を促す。回帰分析を用いたデータ解析の意味について理解できるようになることを目的とする。まず，社会調査を実施するのに最低限必要な統計の基礎を学習する。基礎から順を追って解説し，各段階での十分な理解が，次の段階での理解の前提条件となる。次に，実際の社会調査で用いられている基本的な技法について学習し，社会科学のデータ分析で多用される重回帰分析の手法について理解を深める。	隔年
		医療社会学特論	医療に関する社会学的研究の概要と研究動向について，関連する文献の検討を通して理解を深める。具体的には，医療社会学の概説書を通して基本概念や主要な分析枠組，学説の展開状況を把握したうえで，終末期医療，高齢者介護，闘病記，ピアサポート，セルフヘルプグループ等に着目した研究論文を取り上げる。受講者には授業への積極的参加とともに，取り上げられる内容に関連するテーマを各自で設定した期末レポートの作成が求められる。	隔年
		精神科医療法制論	精神科医療は，他の診療科と比べ，法と関わる場面が多い。法的介入の目的も，社会の安全保持，患者の医療へのアクセスの保障，人権の確保など，異なる性質のものを含む。適正な精神科医療のために法がいかなる役割を果たすべきかを考察する。具体的には，精神科医療と法が交錯する様々な局面について，法学文献や日米の関連判例を検討する。受講者は，割り当てられた判例・文献についてレジュメを作成して報告するとともに，毎回のテーマについて事前に研究したうえで，積極的に討論に参加することが求められる。なお，取り上げるテーマは，受講者の問題関心に応じて変更することがある。授業の最後にレポートの提出を求める。	隔年
	経済学プログラム	経済学プログラム特別演習Ⅰ	（概要）経済学プログラム特別演習Ⅰは，特別研究の補助的な演習である。特別研究の主目的である修士論文指導を，経済学プログラム特別演習Ⅰ及び経済学プログラム特別演習Ⅱで補う。具体的には，経済学プログラム特別演習Ⅰでは，特別研究の授業概要に記述されている研究指導目標のうち，経済理論の基礎知識の習得について，更なる発展と強化を目指す。 （64　瀧　敦弘） 労働経済学又は労使関係論を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。特に，現下の労働市場に関する論文等の購読を通じて，修士論文に関する課題の設定と，課題に関するデータや資料の収集に関する指導を中心とする。 （49　千田　隆） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，金融論を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は金融政策の効果を分析するために必要	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		な，経済理論の基礎知識を習得することである。 （84　山田　宏） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，計量経済分析手法の開発・評価もしくは応用を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。研究テーマに関して，(計量経済学の分野に限らない広い分野における)最先端の研究動向の把握とそうした研究内容への深い理解を踏まえた競争力のある研究論文を作成するために必要な事項を扱う。 （85　早川　和彦） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，計量経済学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は，自分自身で，理論的な分析と数値実験ができるようなることである。 （86　西埜　晴久） 計量分析の手法の開発及びその応用を行う。そのために主として英語の文献を読み解き，合わせてデータ分析のためのプログラミングの能力を育成する。 （87　二村　博司） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，財政学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は財政政策の効果を分析するために必要な，経済理論の基礎知識を習得することである。 （20　大澤　俊一） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，財政学・公共経済学・地方財政論・環境経済学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標はさまざまな経済政策の効果を分析するために必要な，経済理論の基礎知識を習得すること，英語の論文の正確な読解，モデル分析などである。 （21　大内田　康徳） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，競争政策や環境政策に関連した分野を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。政策的な評価や議論のために求められる理論的分析能力を習得することを目標とする。 （88　山口　力） 公共経済学の分野における修士論文の執筆指導を行う。関連文献の精読を通して大学院レベルの公共経済学の知識を習得し，専門ジャーナルの論文を正確に理解できるようになることを目的とする。 （65　友田　康信） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，応用理論研究に基づく修士論文の作成指導を行う。学生の研究テーマに即した先行研究を読み込み，当該分野の研究の流れを整理し，独自の応用理論モデルを導くことを目標とする。 （165　安武　公一） 特別研究での修士論文作成指導の補助演習として経済学プログラム特別演習 I を位置づける。具体的には，計算社会科学（Computational Social Science）など新しい社会科学アプローチを習得することも含めて，修士論文の基礎となる技量と基礎知識を身につけることを目指す。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		（89　森　良次） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，欧米経済史を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は学生の研究テーマに即して主要先行研究の歴史理論的・実証的到達点を確認し，修士論文の実証課題を特定することである。 （166　宮澤　和敏） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，経済学史を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は経済学史上の諸学説の方法的・理論的特徴を理解するとともに，経済学の歴史を通して発展してきた資本主義経済の基礎理論について，基本的知識を習得することである。 （119　小野　貞幸） 実証研究の基礎となる統計学と計量経済学の高度な理論を学び，金融モデルの幾つかの評価方法を理解する。これら理論のファイナンスに関連した応用例から理解を深める。 （48　鈴木　喜久） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，ファイナンスを専攻する学生を対象とした修士論文の作成に必要な資本コストの推計に関連した指導を行う。目標はファイナンス分野の実証分析に必要な，投資理論，資産価格決定理論，資産選択理論を掘り下げて理解し，各種モデルの理論的構造の理解の上に適切な実証的手法を修得することである。 （128　山根　明子） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，ファイナンスを専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は，証券市場に関する分析を行うために必要なファイナンス理論の基礎知識を習得することである。 （112　大河内　治） 特別研究での指導の強化のため，ゲーム理論の応用モデルを用いる学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は，現実の経済現象を理論的に説明，分析する上で必要なゲーム理論の基礎知識，概念の習得である。 （120　折登　由希子） 経済情報分析を研究テーマとする学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。経済学分野における諸問題を最適化問題としてモデル化し，適用すべき最適化手法を決定するための基礎知識を習得する。 （39　角谷　快彦） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，医療経済学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は実証分析を遂行するために必要な，データ分析の基礎知識を習得することである。 （105　佐野　浩一郎） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，公共経済学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は，公共経済学に関する理論的分析に必要な基礎知識を習得し、論文執筆能力を高めることである。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		（167　増澤　拓也） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，数理経済学およびゲーム理論を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。基本的な論文を，理論的な問題意識を持ちながら正確に読む訓練をする。	
		経済学プログラム特別演習Ⅱ	（概要）経済学プログラム特別演習Ⅱは，特別研究の補助的な演習である。特別研究の主目的である修士論文指導を，経済学プログラム特別演習Ⅰ及び経済学プログラム特別演習Ⅱで補う。具体的には，経済学プログラム特別演習Ⅱでは，特別研究の授業概要に記述されている研究指導目標のうち，現実の経済問題分析に必要な応用能力の習得について，更なる発展と強化を目指す。 （64　瀧　敦弘） 経済学プログラム特別演習Ⅰにおいて，各自で設定した課題について，理論分析，データや資料に基づく実証分析についての指導をおこなう。 （49　千田　隆） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，金融論を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は現実的な金融政策の効果を分析することであり，そのために計量経済学の本を講読する。 （84　山田　宏） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，計量経済分析手法の開発・評価もしくは応用を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。研究テーマに関して，(計量経済学の分野に限らない広い分野における)最先端の研究動向の把握とそうした研究内容への深い理解を踏まえた競争力のある研究論文を作成するために必要な事項を扱う。 （85　早川　和彦） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，計量経済学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は，自分自身で，理論的な分析と数値実験ができるようになることである。 （86　西埜　晴久） 計量分析の手法の開発及びその応用を行う。そのために主として海外に標準的なテキストブック及び英語文献を読み解き，理解する能力を涵養する。合わせてデータ分析及びシミュレーション研究のためのプログラミングの能力を培うことを目指す。 （87　二村　博司） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，財政学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は現実的な財政政策の効果を分析するために，各自パソコンを用いて，財政政策の効果の数量分析を行うことである。 （20　大澤　俊一） 学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は現実のさまざまな経済政策の効果を，経済学的手法を用いて分析することと英語の論文を読む力を養うことである。 （21　大内田　康徳）	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		特別研究での指導の更なる発展と強化のために，競争政策や環境政策に関連した分野を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。現実の政策を考察・議論するために求められる理論分析の応用能力を習得することを目標とする。 （88　山口　力） 公共経済学の分野における修士論文の執筆指導を行う。専門ジャーナルにおける関連論文のサーベイを通して既存研究の整理を行い，独創的な研究に発展可能な研究領域を開拓することを目的とする。 （65　友田　康信） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，応用理論研究に基づく修士論文の作成指導を行う。学生の研究テーマに即した当該分野の先行研究に基づき，独自の応用理論モデルの構築を目標とする。 （165　安武　公一） 特別研究での修士論文作成指導の補助演習として経済学プログラム特別演習Ⅱを位置づける。具体的には，経済学プログラム特別演習 Ⅰ で学ぶ計算社会科学（Computational Social Science）など新しい社会科学アプローチに加えて，深層学習（Deep Learning）などを使ったデータ解析手法を学び，修士論文の基礎となる技量と基礎知識を身につけることを目指す。 （89　森　良次） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，欧米経済史を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は学生の研究テーマ・実証課題に即して，史料分析を行うことである。 （166　宮澤　和敏） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，経済学史を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。経済学史上の諸学説の方法的・理論的特徴の理解を深めるために，原典とその関連文献を詳細に検討するとともに，経済学の歴史を通して発展してきた資本主義経済の基礎理論について知識を深めることを目指す。 （119　小野　貞幸） ファイナンス理論に特化した時系列分析方法を学ぶ。加えて実証研究のためデータを管理・運営できるようにプログラミング・ソフト MATLAB 又は EViews の習得を目標とする。進行状況により論文の発表を行う。 （48　鈴木　喜久） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，ファイナンス分野を専攻する学生を対象とした修士論文の作成に必要な計量ファイナンス手法の指導を行う。VAR に代表されるリスク計測手法と実践的運用に関する知識を修得すると伴に，モンテカルロ法などのシミュレーション手法を修得し，金融資本市場で遭遇する不確実性・リスクに対する理解を深め，理論モデルの検証に必要な実証分析手法の修得を目標とする。 （128　山根　明子） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，ファイナンスを専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は，計量経済学の手法を用いて証	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		券市場に関する実証分析を行うことである。 （112　大河内　治） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，ゲーム理論を応用する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は現実的な経済政策・制度設計の効果を分析するために，理論の妥当性，限界を意識しつつ，有効な政策的な含意を導き出すことである。 （120　折登　由希子） 経済情報分析を研究テーマとする学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。経済学分野における最適化問題へ適用する最適化手法アルゴリズムの実装を行う。 （39　角谷　快彦） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，医療経済学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は現実的な実証分析を行うために，各自統計分析ソフトを用いて，データ分析を行うことである。 （105　佐野　浩一郎） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，公共経済学を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は，最新の関連文献のサーベイを行なうことで当該分野に関する知識を深め、論文執筆能力を高めることである。 （167　増澤　拓也） 特別研究での指導の更なる発展と強化のために，数理経済学およびゲーム理論を専攻する学生を対象とした修士論文の作成指導を行う。目標は理論的に有意味な問題の定式化とその解決を，正確に行うことである。	
		応用ファイナンス	応用ファイナンスで取り扱う主要項目は，(1)キャッシュフロー・モデル又は無裁定条件から，株式，債券，為替レート，金融派生商品（先物，オプション，スワップなど）の適正価格を導き分析する。(2)金融資産のリスクとリターンの関係を考察し，また資本資産評価モデル(CAPM)の基本事項を紹介する。講義ではこれら理論の応用方法も説明する。さらに世界の金融市場で実際に起きた事象をファイナンス理論との兼ね合いを考え紹介する。	
		理論ファイナンス	企業の資金調達の場である資本市場の構造と機能，及び企業の資金調達手法の基礎と経営戦略が経営リスクに及ぼす影響を学ぶ。本講義が対象とする範囲は，資金提供者である投資家の行動を分析する「投資理論」と，資金調達者としての企業行動を分析する「コーポレート・ファイナンス」の一部である。特に，ファイナンス分野の基本的理論構造（ポートフォリオ理論，資産価格付理論，投資理論）とそこで用いられる金融技術（デリバティブズ，財務戦略）を理解することにより，企業経営上遭遇する不確実性・リスクに対する効率的で合理的な意思決定とは何かを学ぶ。	
		金融資本市場分析	証券市場における資産価格に関する基礎理論とその実証分析について学び，理論モデルの理解と実証分析手法の理解，習得を主たる目的とする。具体的には，資本資産評価モデル，裁定価格理論，消費資産価格モデルについて理論的な解説を行い，これらのモデルを対象とした古典的な実証研究論文を概観する。また，証券市場に関する最近の研究テーマの紹介や，イベントスタディなどの分析手法，実証分析におけるデータの扱いなどについても広く解説する。	
		経済数学	線型代数と微分の基礎概念を理解し，最適化問題の解法に必要な基礎知識を確立することを目標とし，以下の内容について簡単なケースからより一般的なケースへと，厳密な証明を重視して解説します。 ベクトル・内積・行列，余因子と余因子展開，逆行列の公式，クラーメルの公式，固有値・固有ベクトル，2 次形式，極限・近傍・連続性・微分商・微分可能性，各種の微分公式，ロールの定理，平均値の定理，テイラーの定理と展開，全微分	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		と方向微分係数，極値の必要・十分条件，ヘッセ行列，陰関数定理，ラグランジュ乗数法，関数の独立性と従属性，関数行列，関数行列式等。	
		日本銀行連携講義１	（概要）金融制度の基礎及び金融理論の基礎を踏まえ，わが国の決済システムや中央銀行のオペレーションに関連する業務を中心に解説し，実務的視点から金融システムの全体像とその機能，及び金融政策の意義についての理解を深めることを目的とする。本講義では特に，現金通貨の発行・流通・管理，決済システムの概要とその機能，金融政策と金融調節，関連統計の理解を中心的テーマとする。 （オムニバス方式／全 15 回） （48　鈴木　喜久／7 回） 相対型金融と市場型金融，経済の発展段階と金融市場，長短金融市場と市場参加者の概要，リスクと金融資産価値，金利の期間構造，信用リスクの評価，派生証券市場の概要 （315　濱田　秀夫／4 回） 中央銀行の組織と運営，決済手段，わが国の決済システムの概要，金融政策と金融調節の概要 （314　加賀山　敏郎／4 回） 日本銀行の機能，日本銀行の業務，日本銀行券の発行・流通・管理，金融市場のモニタリング	隔年・オムニバス方式
		日本銀行連携講義２	（概要）金融制度の基礎及び金融理論の基礎を踏まえ，わが国の決済システムや中央銀行のオペレーションに関連する業務を中心に解説し，実務的視点から金融システムの全体像とその機能，及び金融政策の意義についての理解を深めることを目的とする。本講義では特に，金融システムの安定確保，マクロ・プルーデンス，オフサイト・モニタリング，国際業務，関連統計の理解を中心的テーマとする。 （オムニバス方式／全 15 回） （48　鈴木　喜久／7 回） マクロ経済モデルと金融政策，開放マクロ経済モデル，国際金融市場の概要，国際資本移動の現状，コルレスバンクの機能，金融の証券化，金融統計の活用 （315　濱田　秀夫／4 回） 金融システムの安定確保，考査とオフサイト・モニタリングの概要，マクロ・プルーデンス，国際業務 （314　加賀山　敏郎／4 回） 統計の作成・調査・公表，国庫金に関する業務，国債等に関する業務，政府の資金繰りに関する業務	隔年・オムニバス方式
		金融庁連携講義１	（概要）金融制度の基礎及び金融理論の基礎を踏まえ，金融行政，特に主要行・地域金融機関等の預金取扱金融機関に対する監督・検査行政につき，基本的な枠組み・考え方とともに，最近の国際的な金融規制改革の動向について講義を行う。本講義では特に，金融検査監督の基本方針，金融行政方針の理解を中心的テーマとする。 （オムニバス方式／全 15 回） （316　堀本　善雄・48　鈴木　喜久／6 回）(共同) 金融検査監督の基本方針，金融行政方針，国際金融規制改革，マネーロンダリング対策について，金融インフラ支援，金融機関の破綻処理制度 （317　日下　智晴・48　鈴木　喜久／9 回）(共同) 金融行政の現状と課題，金融庁ディスカッションペーパーについて，デジタル化の進展と新たな金融手法について，金融レポート，償却・引当について，有価	隔年・共同・オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		証券運用業に掛かるモニタリング，証券市場を巡る諸問題，金融庁の重点施策，金融システムの安定確保	
		金融庁連携講義２	（概要）金融制度の基礎及び金融理論の基礎を踏まえ，金融行政，特に主要行・地域金融機関等の預金取扱金融機関に対する監督・検査行政につき，基本的な枠組み・考え方とともに，最近の国際的な金融規制改革の動向について講義を行う。本講義では特に，地方創生に果たす地域金融機関の役割，金融機関の経営管理，金融資本市場の活性化に関する理解を中心的テーマとする。 （オムニバス方式／全 15 回） （316　堀本　善雄・48　鈴木　喜久／6 回）(共同) 金融機関の経営管理，金融資本市場活性化に向けた取り組み，地域金融機関の戦略，地域金融機関のガバナンス，統合的リスク管理，新たな自己資本比率規制 （317　日下　智晴・48　鈴木　喜久／9 回）(共同) 地域密着型金融の歴史，金融法制，中小企業等の状況について，地方創生と地域金融機関，地方自治体による地方創生に向けた取り組み，地域金融機関を取り巻く環境変化，事業性評価，顧客本位の業務運営の考え方，財務局における金融行政	隔年・共同・オムニバス方式
		日本政策投資銀行連携講義１	本講義は，株式会社日本政策投資銀行（全額政府出資）の業務のうち，主に「投資」に関する同行の取り組みについて解説を行う。具体的には，同行が実施する成長マネー（資本性資金・メザニン等）供給のケース・スタディなどを通して，国内企業の競争力強化が直面している課題を理解する。合わせて，病院経営や空港など個別プロジェクトの業界事情やコンテンツ・ツーリズムなど最新の地域活性化についても知見を深めることを目的とする。	隔年
		日本政策投資銀行連携講義２	本講義は，株式会社日本政策投資銀行（全額政府出資）の業務のうち，主に「融資」に関する同行の取り組みについて解説を行う。具体的には，環境格付融資，防災格付融資，健康格付融資からなる同行の評価型融資や，グリーンボンド（サステナビリティボンド）発行の仕組みについて理解する。この他，パリ協定や持続可能な開発目標（SDGs）が採択された現代で求められる「責任ある金融」や企業の社会的責任（CSR）について考察を進めていく。	隔年
		マクロ経済学	本講義では，まずマクロ経済を描写する主要な理論モデルである，ソローモデル，世代重複モデル，代表的個人モデルの習得を目指す。必要に応じて動学モデルの分析に必要な数学の講義も行う。次に経済成長に必要な要素やメカニズムを，理論モデル習得を通じて学ぶ。最後にこれらモデルを用いて，政府支出や税制，社会保障制度のマクロ経済に与える影響を分析する。また時間があれば，各国の長期間の時系列データを用いて，人口成長と経済成長の関係を概観する。また現代の先進国が直面する少子高齢化がマクロ経済に与える影響を理論，実証両面から分析する。	
		ミクロ経済学	経済メカニズムについての基本的な事項を理解するために，授業では，効用関数，予算制約式と無差別曲線，所得効果と代替効果，競争均衡，労働供給，貯蓄行動，不確実性と期待効用，保険の理論，モラルハザード，レモンの理論，シグナリング，MM 定理などのトピックからいくつかを取り上げて解説する予定である。さらに，発展的なトピックとして，不確実性の経済モデルへの導入方法，また，期待効用モデルと最適資産選択理論・資産価格決定理論との関係等についても可能な限り取り上げる予定である。	
		マクロ金融分析	金融政策に関する理論，特に流動性の罠やゼロ金利政策の基礎的な理論を講義する。具体的には，（1）流動性の罠の存在を，ミクロ経済学的基礎付けのあるニューケインジアン・モデルを用いて説明すること，（2）名目金利がゼロという下限にあるときに，金融政策や財政政策がどの程度有効かを検討することである。名目金利が下限のゼロにあるとき，金融政策は期待に影響を与えることが重要であること，そして，拡張的な財政政策は有効ではあるが公的債務増大の問題があることを解説する。	
		計量経済学１	コンピュータ及びソフトウェアの発達により高度な計量経済分析は大変身近なものになった。そうした高度な計量経済分析手法をよく理解して使用するには，行列を使った基礎的な回帰分析理論に対する深い理解が欠かせない。行列プログラミングはそうした事項を深く理解し応用するうえで有用である。この講義では，	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		計量経済分析の基礎である回帰分析理論を中心に講義する。具体的な講義内容は次の通りである:(1) 行列代数,(2) 確率ベクトル,(3) 行列プログラミング,(4) 重回帰モデルの推定と検定。	
		計量経済学２	計量経済学の基礎的な内容について講義する。最初に，準備として，線形代数の復習を行い，また，大数の法則や中心極限定理など，計量経済学の理論分析に必要となる漸近理論の基礎的な結果も紹介する。その後，最小二乗推定量，2 段階最小二乗推定量，一般化モーメント法推定量，最尤推定量の各推定量の理論的な性質を説明する。最後に，パネルデータ分析の基礎について説明する。時間があれば，Eviews の演習や Matlab を用いたプログラミングについても講義する。	
		経済統計分析	現実の経済・金融データを分析することを念頭に最尤法などの基礎理論及び一般化線形モデルといった各種の計量モデルの習得を行う。さらには，マルコフ連鎖モンテカルロ法などの計算機インテンシブな計量手法の修得をも視野に入れる。 その際には，海外の標準的なテキストブック及び学術論文を参照し，理解できることを目指す。そして，実際の経済・金融データを用いた応用が行えるようにする。データ分析にあたっては，Ox 言語を用いたプログラムの作成を行うことと。また，Ox プログラミングによってシミュレーション実験も行えることを目指したい。	
		経済時系列分析	この授業の目標は，経済時系列ないしは時系列分析に基づく計量経済学の基礎理論を修得し，経済の実証への応用力を養成することにある。授業では，まず，回帰分析を中心とする計量経済学の基礎理論を講義する。同時に，パソコン実習に基づいて，実証分析や数値分析にとって必要な計測手法を修得する。次に，回帰分析における系列相関の問題からはじまって，伝統的計量経済学に新たな視点を与えた単位根や共和分等の経済時系列分析におけるいくつかのトピックを取り上げ，理論的側面の講義とともに，現実の経済時系列データを用いての実証分析を行う。	
		労働市場分析	現代の経済システムを学ぶ上では，労働市場についての理解が不可欠である。その理解のために，ミクロ経済学をベースとする労働市場のメカニズム，マクロ経済への関連や経済成長との関係などの理論的な側面。労働市場に関するデータについての理解とそれらの分析方法，そして，労働市場を規定する法律や制度に関する経済学的な考察などを講義する。さらに，労働市場の実態や労働市場をとりまく時事問題などを，必要に応じて，講義する。	
		財政学	財政学について学ぶ。方法としては，マクロ経済学の理論を応用する。近年におけるマクロ経済学分析の２つの主要な課題は(i)ミクロ経済学的基礎の構築と，(Ⅱ)マクロ変数の時系列的・動学的性質（ビジネスサイクル，及び経済成長）の解明である。即ちミクロ経済主体の最適化行動が，市場における集計を通じて，一般均衡動学システムとして表される過程，及びこのようなシステムが持つ定常的・定量的性質を分析することである。このような理論的枠組みの中で，財政政策の効果を，実証的・規範的に分析する。	
		経済戦略論	戦略の科学であるゲーム理論は経済学のみならずさまざまな分野で応用されている。本講義ではそのことを念頭に，ゲーム理論の諸概念，基礎理論を習得し，規範的，実証的分析を応用分野でできるようななることを目標とする。ゲームの概念，定式化から始まり，静学的，動学的なゲームやその均衡概念を説明し，各分野への応用モデルの分析，不完備情報のゲーム，契約の理論，メカニズムデザインなどの発展分野のトピックスについての講義をする。	
		地方財政論	地方公共財の供給，地方税，国から地方政府への補助金についての，歴史，制度，理論，政策を学ぶが，中心となるのはミクロ経済学を応用した理論分析である。特に地方公共財の最適供給，最適補助金率，財政競争の理論について紹介する。公共財の最適供給理論としては，サムエルソン・ルール，リンダール・メカニズム，公共財の私的供給，中位投票者理論，足による投票理論（チブーモデル），最適補助金の理論としては，ボードウエイやオガワの理論を説明する。財政競争理論としては，ゾドロウ-ミツコブスキのモデルなどを紹介する。	
		経済情報分析	経済学分野において，現実社会で話題となっているいくつかの制約付き最適化問題を取り上げ，最適解導出の困難さを問題クラス別に学習する。また，情報分析技術として適用可能な最適化手法（１．単体法や分枝限定法などの数理解析的手法，２．メタヒューリスティクス：遺伝的アルゴリズム，分布推定アルゴリズム，差分進化法などの確率的探索手法）の数学的基礎を学習する。これらの最適	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		化手法に対して，プログラミングを通した論理的思考を習得する。	
		公共経済学	この講義では上級レベルの公共経済学を理論的に学ぶ。公共財や外部効果など市場の失敗，協調の失敗，コミットメント問題などに関して，どのような問題が生じるのか，政府はどのように対応すべきなのかを数理モデルを使って解説する。特に重視するのは，近年発展してきた政治経済学的な考え方である。政府を構成する政治家や役人が直面するインセンティブや，そのようなインセンティブが政策決定に与える影響について考察する。海外のテキストを使うことで最新のトピックに触れる機会を提供する。	
		医療経済学	医療経済学に関心を持つ学生を対象に演習形式での講義を行う。医療経済学の主要テーマを概観し，論文の読み方，論文作成手法及び実証研究に必要な統計解析ソフトを用いたデータ分析方法の基礎知識を身につけることを目標とする。受講生は講義修了後までに，１）実証研究の基礎知識の獲得及び２）小規模な研究プロジェクトの実施の経験を得ることができる。講義は，インタラクティブに行うので，受講生の積極的な講義参加が求められる。	
		公共政策論	政府の政策や規制の在り方を中心テーマにした講義を行う。特に，不完全競争市場における競争政策，そして混合市場における公企業の在り方を中心に講義する。また，ミクロ経済学やゲーム理論の基礎を応用しつつ，以下の 8 項目の基礎を理解することを目標とする。(1)競争政策の必要性と仕組み (2)戦略的相互依存関係の下での寡占企業の行動原理と不正競争への対応 (3) 企業結合と独占度 (4) イノベーションと知的財産権，そして国際化対応 (5) 混合市場と公企業の特徴 (6) 公企業民営化の必要性 (7) 公企業部分民営化が社会厚生に与える効果。	
		国際公共政策	本講義は大学院レベルの公共政策に関する基礎理論を理解・習得することを目的とし，ミクロ経済学及びゲーム理論を用いた市場の失敗への応用分析（公共財の自発的供給，地球温暖化問題，共有資源問題，租税競争など）について基礎的な解説を行う。一国の政策が社会やグローバル経済にどのような効果を及ぼし得るか，また，経済学的な処方箋がどのように現実の経済・社会問題に適用できるかについて，最新の研究動向も交えて議論する。	
		応用国際公共政策	国際経済現象に対して計算社会科学（Computational Social Science）などの分析手法を導入した議論を展開します。具体的には，(1) 国際貿易ネットワークの構造特性とその生成メカニズムの数理，(2) 高頻度取引（High-Frequency Trading: HFT）データ解析による外国為替レートの分布特性とその生成メカニズムの数理，(3) こうした実証科学に基づく知見と従来の国際経済学との理論的な比較検討，などを予定しています。	
		開放マクロ経済学	本科目では，マクロ経済学の基礎知識をもとに，短期モデル，中期モデル，長期モデルの区別を考慮して，開放マクロ経済モデルの動学的な振る舞いを理論的に理解することを主たる目的とする。さらに，伝統的な国際金融論の主たるテーマである為替レートの決定理論も学習する。以上の知識を基礎として，ある国の経済政策(特に金融政策)が，為替レートの変化を通じて国際貿易や他国のマクロ経済に与える影響について，マクロ動学モデルに基づき，理論的に考察していくことにする。	
		欧米経済史１	本講義では，なぜヨーロッパで世界史上最初に産業革命が起きたのかという問題について，この問いに取り組んだ古典である M.ウエーバーの著作とならんで，近年のグローバル・ヒストリーの成果を批判的に吟味し，検討する。輪読文献は，以下の通りである。 ・マックス・ヴェーバー（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店，1989 年。 ・R.C.アレン（眞嶋史叙・中野忠・安元稔・湯沢威訳）『世界史のなかの産業革命 資源・人的資本・グローバル経済』名古屋大学出版会，2017 年。 ・K. ポメランツ（川北稔監訳）『大分岐　中国，ヨーロッパ，そして近代世界経済の形成』名古屋大学出版会，2015 年。 ・C.A.ベイリ（平田雅博・吉田正広・細川道久訳）『近代世界の誕生　グローバルな連関と比較 1780-1914』名古屋大学出版会，2018 年。	隔年
		欧米経済史２	本講義では，ヨーロッパの産業革命とその後の工業化過程で自営業・中小経営が果たした役割を，農業，家族経済，労働市場との関連に留意して把握する。本年度の輪読文献は，差し当たり以下の通りである。 ・斎藤修『比較経済発展論　歴史的アプローチ』岩波書店，2008 年。 ・E・トッド（石崎晴己訳）『新ヨーロパ大全Ｉ』藤原書店，1992 年。	隔年

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	経済学プログラム		・若尾裕司『近代ドイツの結婚と家族』名古屋大学出版会，1996 年。	
		政治経済学１	この授業では，資本主義経済の歴史的な発展段階を考察し，現在の資本主義の特徴と問題点を検討する。資本主義は人類の歴史に登場して以来，その姿を変化させながら今日まで存在してきた。現在の資本主義を知るためには過去の資本主義を理解する必要がある。資本主義が発展してきた歴史的段階に対応して，これまでいくつかの資本主義のタイプが存在した。それぞれの発展期にはその時代に特有な安定した資本主義の構造が見られた。その構造の中では特定の国がリーダーシップをとって他の資本主義国に影響を与え，世界的な資本主義の編成が生み出された。資本主義の発展期とその間の転換期には，それぞれに特徴的な安定性と不安定性がある。この特徴を抽出することによって，資本主義の変化を示すことができる。資本主義の現在の状況と将来の動向を考えるためには，資本主義の過去の発展期と転換期を分析する必要がある。この授業ではそれらを展開し論じる。	隔年
		政治経済学２	この授業では，資本主義経済の構造を理論的に分析し，それによって資本主義の一般的な安定性や不安定性を考察する。そこでは，市場経済の要素とそれによって形成される商品経済的機構によって構成される純粋資本主義を論じる。この基礎理論では，流通市場の形態や生産実体の編成，信用制度や株式会社の機構などを考察し，資本主義の一般規定を明らかにする。そこで展開される純粋資本主義は現実の資本主義世界とは異なるが，その異なる部分が複数ある資本主義のタイプを決定する。それぞれのタイプの特性を分析するためにも，純粋な資本主義を展開する必要がある。したがって，この授業では資本主義経済に内在する安定性や不安定性を明らかにし，複数の資本主義を分析する基準となる基礎理論を考察する。	隔年
		経済学史１	資本主義的市場経済を対象として発展してきた過去の諸学説を学ぶ。具体的には，通史的な経済学史のテキストを輪読しながら，主要経済学説の理論的・方法的特徴を理解することに努める。そのさい，現代経済学の諸学派が古典派経済学のどのような問題を乗り越えようとして形成されたのか，という問題に焦点を当てる。それによって，現代までの経済学の歴史の流れを広い視野から把握し，現代経済学の歴史的な位置を理解することが，この授業の目標である。	隔年
		経済学史２	経済学の歴史を通して発展してきた資本主義的市場経済の基礎理論について学ぶ。すなわち，まず商品・貨幣・資本によって構成される市場そのものがどのような仕組みをもっているのかを考察したうえで，資本主義にも他の諸社会にも共通する社会的再生産とは何かを解明し，市場によって社会的再生産を編成する資本主義経済の構造と動態を解明する。さらにそうした資本主義の基礎理論を用いると，資本主義経済の歴史的発展をどのように理解することができるのかについても考察する。	隔年
		エネルギー政策論	本講義では，エネルギー問題を分析するために必要な概念や枠組み，特に政策の企画立案当局の視点から解説し，エネルギー問題に対する受講者の理解を深めることを目指す。エネルギーを巡る諸問題に関して，できるだけ実際の報道や解説等に触れながら，(ⅰ)国際的かつできるだけ広い観点から，関連する歴史や将来の展望などを踏まえてその捉え方や構造を分析し，エネルギーに関する基礎的知識を得るとともに，(ⅱ)基礎となる枠組みや視点について検討することでエネルギー政策についての理解を図る。同時に，エネルギー政策に関し，国際機関や国際会議等の交渉の現場でどのように合意が形成されるのか，交渉官としてどのような能力や経験が必要とされるのかといった問題にも言及したい。エネルギー問題を分析するために必要な概念や枠組み，特に政策の企画立案当局の視点からのものを解説し，エネルギー問題に対する受講者の理解を深めることを目指す。	
		経済学特講	英国・現代奴隷法や金融安定理事会タスクフォース（TCFD）によって，非財務情報の開示強化を求める動きが世界的に広がっている。本講義では，多義的な CSR 活動の類型整理を行うと同時に，CSR 指標のような非財務情報が企業価値に及ぼす効果やその決定要因に関する実証分析を解説して，無形資産分析の理解向上につなげる。決定要因分析では，コーポレート・ガバナンスなど分野横断的なテーマもフォローする予定。実証分析の輪読では，ディスカッションなど学生の積極的な参画も求めていく。	
		リサーチ・リテラシー	（概要）マネジメントをめぐる諸課題について深く追究し，修士論文もしくは課題研究にまとめる上で必要となる論理的思考力と分析力の醸成を目的とする。講	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	マネジメントプログラム		義では，経営学を中心にマネジメントに関する研究知見を取り上げながら，質的調査，量的調査，事例研究といったさまざまな研究手法，研究倫理，文献収集，論文の基本的な作成方法，プレゼンテーションの手法を習得する。最後に，修士論文の中間発表会への参加を通じ，具体的な研究展開を学ぶ。 （オムニバス方式／全 15 回） （148　相馬　敏彦／3 回） 社会科学研究を進めるために必要な能力について解説する。 文献調査法について，主に図書館を通じて利用できるサービスを中心に解説する。 具体的な研究例を紐解きながら，社会科学研究を進める方法論について解説する。 （266　河本　健／6 回） 論文作成法について，マネジメントに関する論文を取り上げて解説する。 英語論文の構成と読み方のポイントに関して，マネジメントに関する論文を取り上げて解説する。 社会科学における研究成果のプレゼンテーションについて解説する。 （149　原田　隆／2 回） 研究倫理の全体的な枠組について解説する。 修士論文の中間発表会に参加し，具体的な研究の進め方を学ぶ。 （67　盧　濤／1 回） 論文執筆において倫理上注意すべき点について解説する。 （66　小柏　葉子／1 回） 質的調査法の進め方と注意点について解説する。 （130　秋山　高志／1 回） 量的調査法の進め方と注意点について解説する。 （254　加藤　厚海／1 回） 事例研究の進め方と注意点について解説する。	
		イノベーション・マネジメント論	イノベーション・マネジメントとは，イノベーションの特質を理解し，その創出や活用に主体的に取り組んだり，そうした取り組みを促進・支援したりすることである。その対象は，研究開発のみならず，組織や組織行動，制度，組織間関係など幅広くに及び，極めて学際的な学問領域である。本科目においては，講義形式でこのマネジメントの基礎理論の理解を図ることに加え，議論形式でイノベーションと経営理論における多様な変数との関係性の検討を行う。	
		経営戦略論	経営戦略とは，ダイナミックに変化する組織の内的及び外的コンテキストを踏まえ，それらを活用したり，新たに獲得したりすることで，目標とする業績を達成するためのロジックを構築することである。本科目においては，講義形式でポジショニング・アプローチやリソース・ベースド・ビューなどの伝統的な戦略理論から現代的理論までの網羅的な理解を図ることに加え，議論形式で経営戦略に関わる主要要素及びその要素間関係についての詳細な検討を行う。	
		市場戦略論	市場戦略は市場競争に焦点を絞る戦略分野のひとつであり，マーケティング戦略とも呼ばれる。その中心課題は，顧客のニーズを満たし競争優位を獲得するために，標的とする顧客市場のニーズとマーケティング・ミックスをよりよく適合させることである。本講義では，市場機会の探索と評価から，市場の細分化，標	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	マネジメントプログラム		的市場の設定，製品政策，ブランド政策，流通政策までの関連トピックスを幅広く採り上げて討論する。市場戦略の表面現象ではなく，その背後にあるロジックの理解を通じて，市場戦略の策定，分析と応用能力を涵養する。	
		サービス経営論	社会経済のサービス化が進むなか，サービス業はともかく，製造業でさえサービスの意義と機能，およびサービス的な発想に関する理解が求められている。本講義では，国内外の最新テキストや論説を題材にして，サービス特性，サービスギャップ，サービススケープといった主要概念の解説と，サービス生産性，製造業のサービス化，サービスドミナットロジックといったサービス固有の論理の討論を行う。これを通して，サービスへの理解を深め，サービス現象の分析や新たな問いかけと理論的発展を考える能力を涵養する。	
		経営組織論	欧米の多くの大学院で採用されているテキストの枠組みに沿って，包括的かつ体系的に組織マネジメントに関する用語・知識を身につけることを目的とする。官・民・学校・非営利団体の区別をすることなく組織現象を冷静に観察，分析，理解でき，かつ，組織マネジメントの標準用語・知識を lingua franca の英語で習得することを目指す。シリコンバレーに拠点を置き，柔軟な職場環境を提供し，創造性を発揮する IT・AI 企業と従来の日本型組織との比較分析も行う。	
		CSR 論	CSR（Corporate Social Responsibility）に関する基本的かつ派生的概念・用語の理解と実践を促すともに，グローバル・スタンダードで最新の話題まで網羅することを目的とする。CSR は，通常，「企業の社会的責任」と訳され，日本では約 25 年前に欧米から取り入れられた概念である。しかしながら，かつて優良企業と呼ばれた企業が不祥事を起こし，実際には社会的責任を果たせないケースが目立つ。したがって，不祥事の防止，コンプライアンス，コーポレート・アポロジア(謝罪)，信用回復という実践的トピックも含む。	
		マーケティング論	マーケティング論とは，企業の市場に対するアプローチを理論化したものである。本講義では，マーケティング論の学びを通じて，次の二つの学習目標の達成を目指す。一つ目は，市場と企業組織の行動における概念及び諸理論に関する内容を理解すること。そして，二つ目は，学んだ諸理論に基づき，現代の市場の動向や企業行動に関する問題を分析することである。	
		国際マーケティング戦略論	本講義では，国際市場環境や国際マーケティング戦略論の学習を通じて，次の学習目標の達成を目指す。一つ目は，国際市場での企業戦略や消費者行動に関する概念及び諸理論を理解すること。そして，二つ目は，理解した国際マーケティングに関する諸理論に基づき，現代の海外市場での企業活動やグローバル消費のトレンドに関する諸問題を分析することである。	
		経営管理論	本講義では，代表的なマネジメント理論について，理論と実証の両面から理解することを目的とする。主な内容は多岐に渡るが，取引コスト論，情報の経済学・エージェンシー理論，組織学習とイノベーション（探索と活用），知識ベース論，組織の記憶，進化理論とルーティン，センスメイキング，ネットワーク論（埋め込み理論，弱い紐帯，構造的空隙，社会関係資本），資源依存理論，制度論（社会学），組織エコロジーなどである。	
		組織行動論	組織行動（Organization Behavior）は，企業組織の生産性や業績に影響を及ぼす個人行動や，集団行動，そして組織そのものの行動を研究する分野として定義されています。この組織行動に関する講義においては，人間の行動の原則や要因やメカニズムを周辺諸科学の知見を活用しながら明らかにしていこうとしています。本講義では，代表的な組織行動論について，理論と実証の両面から理解することを目的としています。	
		人的資源管理論	人的資源管理とは，組織の目的を達成するために，経営資源の一つである人的資源を活用する制度を設計し，運用すること。本講義では，人的資源管理のしくみを経営学の視点からとらえることによって，受講生の実践能力を高めていく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	マネジメントプログラム	コスト・マネジメント	コストの効果的管理を通じて競争力を得るためには，コストを正確に把握，測定し，適正に活用する必要がある。本稿義では，コストを定義し，コストを測定し，コストを活用する論理と技法を考察し，効率的な組織経営活動をサポートする学問体系としてのコスト・マネジメント論を理解することを目標にしている。講義では，原価情報管理と原価情報活用のための伝統的原価管理システムに加えて，ABC/ABM，原価企画，原価改善，在庫，物流，品質，環境原価などの概念と技法，そして，価値連鎖の観点から戦略的原価管理技法の問題も議論する。	
		税法コンプレッション	税法についての基本的な考え方を理解する。個々の具体的な条文ではなく，それらの根底を流れる基礎概念を理解することで，税法につてのより体系的な知識を身に付けることを目標とします。なお，内容の理解を深めるため，教科書に沿った設問を解くことも併せて行います。	
		税法ケーススタディ	個別・具体的な紛争事例を通じ税法条文の理解を深める。各回ひとつの事件をもとに，争点となる法規，その文言と趣旨目的の解釈を中心に検討を行います。裁判事例から条文の考え方を読み取ります。知識だけではなく税法条文の解釈能力を付けることを目標とします。	
		管理会計論	本講義では，企業組織の戦略と計画策定，投資と業務意思決定，業績評価，業績管理などをめぐる現実的な経営問題に焦点をあて，管理会計領域における概念や議論を考察し，効率的な組織経営活動をサポートする学問体系としての管理会計の役割を理解することを目標にしている。そのために講義では，原価情報管理と原価情報活用のための伝統的管理会計システムに加えて，ABC/ABM，在庫，物流，品質，環境原価などの概念と技法，そして，組織の計画と統制のためのシステムとしての BSC，EVA，MPC など，戦略的管理会計技法の問題も議論する。	
		財務会計論	この財務会計論は，会計学領域における重要かつ導入的な科目である。営利組織，非営利組織を問わず，資金や経済的価値がある資産などをどのように管理，把握してゆくかは，組織を経営してゆくうえでは必要不可欠である。この授業において重視するのは，会計技法の解説ではなく，その背後にある基本的な考え方である。これらを十分に理解することは，経済的な活動や生活を送ってゆくうえで重要であるので，この授業では，それらを習得することを目標とする。	
		会計政策論	企業会計あるいは財務会計における制度的または政策的な側面に着目したうえで，可能なかぎり個別具体的なケースを中心とした講義を展開する予定である。現在の日本経済や国際経済のうえで課題となっている事案またはケースを検討することから，会計における政策的要素や政治的要素そして経済的要素の理解と習得を目的とする。具体的なケースは年度によって異なる。	
		経営情報システム論	国を超えたグローバルな事業展開や高度化・複雑化するニーズに対応するため，企業は技術や組織能力の専門化を高めるだけでなく，それにかかわる要素を秩序立てた全体的なまとまりとして最適化するマネジメントが求められる。そこでは有形無形の情報を組織内・組織間で相互に伝達・調整することが課題となる。また情報システムとして機械化するメリット・デメリットも存在する。 本講義では輪読とクラスディスカッションを通じて，経営情報システムが企業の経営戦略で果たす役割，そして情報技術の向上が企業経営に与える影響とその本質的な考え方について，経営情報システムの変遷やデータマネジメントの発展等の事例を糸口として検討し，理解を深めることを目的とする。また，インターネットに見られるような情報伝達の在り方の変化が既存の産業秩序を一変させる事例にも焦点を当て，ビジネスシステムの変化やその背後にある考え方についても理解を深める。	
		企業とコミュニケーション	コミュニケーションとは，メッセージの送り手と受け手との間で伝えるべき内容（コンテンツ）を様々な手段（チャネル）を用いて伝達することにある。企業内では従業員間で情報の伝達や意見の調整がコミュニケーションを通じて行われ，その構図は企業間でも同様である。しかし，その仕組みや操作性については	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	マネジメントプログラム		あまり議論されることがなく，これが課題に挙げられる。 本講義では「伝え方」のメカニズムと異文化ギャップへの対応について理解を深めることを目的とする。「伝え方」は文化の一様式であることを踏まえ，何故その伝え方となるのか，その理由について異文化コミュニケーションと異文化経営学の論文輪読とクラスディスカッションを通じて検討する。さらに日本人に特徴的な意味の二重性と誤解の効用，範囲の操作性，日米比較に基づく価値観や行動様式の違い，さらには経営手法の違いについても理解を深める。	
		社会心理学特論	マネジメントに関連した個人の行動，考えや感情にはさまざまな社会心理プロセスが関与している。この講義では，さまざまな社会行動にはたらく法則性を理解すると同時に，マーケティングや組織の意思決定などの社会現象の理解と予測といった応用可能性を論じる。社会的な関わりの中で，個人の行動が時に無意識に影響され，逆にどう他者の行動に影響していくのかを理解する。また，並行して，実証手続きの一つとして心理学実験の演習を行い，社会科学的な視点の涵養を目指す。	講義 27 時間 実験　3 時間
		国際関係論	「グローバル化」とは，私たちの日常生活においても，よく耳にする言葉であるが，それはいったい何によって引き起こされ，何を意味し，私たちにどのような影響を与えているのだろうか。本講義では，「グローバル化」に関する文献の講読，およびそれに基づいたディスカッションを通じて，政治，経済，社会，文化といった多領域にわたるグローバル化の多元的な様相を理解し，グローバル化の進展する現代国際関係に対する問題意識と思考を養うことを目標とする。また，あわせて，講義を通じて培った問題意識をターム・ペーパーの執筆という形で，論理的文章として表現する応用的能力の獲得も目指す。	
		地域協力論	国際関係論の視点から，東アジアを事例として，さまざまな主体が構成する「地域」について考察する。特に，本講義では，地方自治体や新都市中間層，市民社会といった国家以外の主体に注目し，関連する文献の講読，およびそれに基づいたディスカッションを通じて，国家間関係のみによって構成されるわけではない「地域」のありかたを把握し，そこから国際社会の多元性と重層性について理解を深めることを目標とする。また，あわせて，講義を通じて培った問題意識をターム・ペーパーの執筆という形で，論理的文章として表現する応用的能力の獲得も目指す。	
		異文化コミュニケーション論	コミュニケーション，異文化に対する日本人大学生の見方，考え方の検証を通じて，異文化コミュニケーションの構造とプロセスを理解し，異文化コミュニケーションの背後に潜んでいる，コミュニケーション行動を左右する文化的要因を分析しながら，実際の異文化コミュニケーション力を高める。具体的には，コミュニケーションとは何か，聞き役と話し役，本音と建て前，人との関わり方，外国語の学習，異文化の感じ方，見方，異文化とスポーツ，異文化とマスメディアといった話題を取り上げる。	
		異文化ビジネスコミュニケーション	本講義は，関連文献を読みながら，異文化ビジネスコミュニケーションへの理解と認識を深め，異文化ビジネスコミュニケーションスキルの向上策を探り出すことを目的とする。ビジネスパーソンはもちろんのこと，行政や教育に携わる受講者にとって，異文化コミュニケーション能力を高める一助になればと考えている。具体的には，異文化とビジネス，異文化経営と言語戦略，ビジネスにおける言語・非言語コミュニケーション，異文化交渉，日中異文化ビジネスコミュニケーションといった話題を取り上げる。	
		フィールドワーク論	フィールドワークは，数ある社会科学的な研究方法のうちの一つというのではなく，対象を客体化する知とは異なる思考と感性を開くための経験そのものである。様々な「現場＝フィールド」をすでに持っている，あるいはこれから持つ人にとって，フィールドワークから生まれてくる知の性質について理解することはきわめて重要な意味があるだろう。この授業では，古典的な民族誌から現代の実	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	マネジメントプログラム		践誌まで厳選されたテキストを読みながら，フィールドワークとフィールド知について学ぶ。このことを通して，実践的に真に意味ある知とはどのようなものかについて各自が自分なりのイメージを抱けるようになることを目標とする。	
		コミュニケーション原論	コミュニケーションとは何か。人間のコミュニケーションの特徴とはどこにあるのか。この授業では，メタ・コミュニケーション，身体性，冗長性，弱さ，ダイアローグ性，ポリフォニーなどの鍵概念を手がかりにしながら，コミュニケーションについて根源的なところから考え直すための機会を提供する。AI とのインタラクションや協働が日常化していくなかで，人間のコミュニカティヴな特徴について洞察を深めることは，来たるべき社会で生きていく上で不可欠なことであろう。グループ・ディスカッションを中心に，異なる領域で編み出された手法を実際に経験したりしながら，コミュニケーションとは何かについて理解を深めることを目ざす。	
		社会行動データ解析	マネジメントに関して実証的研究を進める上で必要になる量的データの解析手順について解説する。実証データの特徴，入力手順，基礎統計量の利用法を理解した上で，記述統計と推測統計それぞれについて詳述する。記述統計は，相関係数の利用，因子分析，信頼性と妥当性について論じる。推測統計では，単回帰分析と残差の活用，交互作用効果検証，媒介分析や調整分析モデルについて解説する。どのようなデータにどのように統計解析を用いるのかを理解し，適切なデータ解析の知識，スキルを身につけることを目的とする。	講義 23 時間 演習　7 時間
		アントレプレナーシップ	アントレプレナーシップは，一般的に企業家，中小企業を分析対象とした分野であり，他の経営学の分野と同様に，基礎理論（社会学，経済学，心理学など）の応用領域である。したがって，この授業で利用する文献としては，純粋な理論研究は一部で，大半は社会学，心理学の知見が応用された実証研究を用いる。また，企業家，ファミリービジネスや同族企業，イノベーション，創造性，失敗と学習を題材にしたものを中心に輪読する。	
		情報システム管理学	本授業の目標は，コンピュータシステムの基本的な仕組みを理解し，情報システムの管理運用技術を習得することである。 授業の内容は次のとおりである。コンピュータシステムの基本的な仕組みを理解するために，オペレーティングシステムの提供する機能や仕組みについて講義を行う。さらに，コンピュータシステムについての理解を深め，システム管理運用技術を習得するために，Linux オペレーティングシステムのインストール，電子メールサーバ・ネームサーバの構築等を演習形式で行う。	
		情報ネットワーク論	本授業の目標は，コンピュータネットワークや情報セキュリティに関する基礎知識，およびネットワークシステムの管理運用技術を習得することである。 授業の内容は次のとおりである。まず講義形式で，①ネットワークアーキテクチャの概念，②TCP/IP の機能と仕組み，③情報セキュリティ技術，について学ぶ。さらに演習形式で，ネットワークサーバの構築を行い，コンピュータおよびネットワークシステムに関する理解を深めるとともに，システムの管理運用技術を習得する。	
		公共経営論	高齢化の進展などの社会の変化や産業構造の変容に伴い，我が国の中央政府及び地方自治体の財政状況は徐々に悪化してきている。その一方で，さまざまな社会的なリスクへの対応など公共の政策で対応すべき課題も増えてきている。このような公共の問題に対して主に経営（マネジメント）の視点で対応策を考え，議論していく。公共経営は，経営（マネジメント）の問題であると同時に，法律・政治の要因や，組織の構成員のモチベーションなどの社会的な要因も大きく影響する学際的な問題であるといえる。教科書や参考書の内容を素材に，基本的な知識を習得した上で，クラス討議などを通じて公共経営の問題についてさまざまな視角から考える機会を提供する。	
		地域経営論	高齢化の進展などの社会の変化や産業構造の変容に伴い，我が国の中央政府及	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	マネジメントプログラム		び地方自治体の財政状況は徐々に悪化してきている。その一方で，さまざまな社会的なリスクへの対応など地域社会で対応すべき課題も増えてきている。このような地域社会が抱える課題に対して主に経営（マネジメント）の視点で対応策を考え，議論していく。地域経営は，経営（マネジメント）の問題であると同時に，法律・政治の要因や，まちづくりや NPO などの社会的な要因も大きく影響する学際的な問題であるといえる。教科書や参考書の内容を素材に，基本的な知識を習得した上で，クラス討議などを通じて地域経営の問題についてさまざまな視角から考える機会を提供する。	
		地域分析	政策立案に当たって客観的な実証分析を行う EBPM（Evidence Based Policy Making）の潮流の中で，地域における様々な方策策定に当たっても，①問題定義から始まり，②証拠収集，③方策案設計，④評価基準選定，⑤結果予測，⑥意志決定，⑦公表といったプロセスから成る政策分析の重要性が増している。 「地域分析」は，地域を対象として政策分析の主に①～⑤に関する理論，分析手法，利用するデータ等について学ぶ。授業では，県や市町村の経済・産業，人口移動や出生率を政策分析の分野として取り上げ，具体的なデータを利用しながら，経済と人口の両方から，行政，企業，住民等の地域主体が連携して地域の持続性強化に取り組む知識とスキルの増進を図る。	
		アジア企業論	多国籍企業（MNE）は，われわれの日常生活に深くかかわっている。MNE は，環境の変化に影響を受け，それに適応しつつ，さらに自らの能力を変容させている。それが社会にも作用している。 アジア企業である日系企業，それも大企業だけでなく地域企業の事例，またそのほかのアジア系企業の事例もとりあげながら，理論だけなく，実践的状況や示唆を把握しながら進めていく。	
		アジアビジネス事情	1985 年のプラザ合意後の急激な円高を受けて，日本からの生産拠点の移転が急速に進み，活発な投資によってアジア諸国の経済発展が促されてきた。日本からの投資は大手企業が先導する形で進められたが，やがて，中小製造企業も，低廉な人件費を活用したコスト削減や取引先である大手企業からの要望へ対応するために，アジア進出に取り組むこととなった。大企業に比べ経営資源に限りがある中小企業にとって，海外でのビジネス展開には多くの障害や課題が存在している。 この講義では，中国，ベトナム，タイにおける広島県内中小製造企業のビジネス経験にもとづき，これら地域における経済環境や事業環境について認識を深めるとともに，実際に遭遇した経営上の課題に関する事例研究を通じて，アジアビジネスにおける経営実務課題の解決能力を養うことを目的とする。 講義の担当者は，広島県内からアジア諸国に生産拠点を展開している中小製造業の経営幹部，ならびに長期に渡って現地の生産拠点で経営トップを担った経験を持つ実務家である。	
		ビジネス日本語	主目標：「ビジネス日本語」を広くとらえ，修士論文・就職試験の意見記述文・大学院入試の小論文・大学院での提出レポート等々を書く際にも役立つ文章表現力の伸長・拡充を主目標とする。（この目標達成ために，論文の構成・語法・表現パターン・語彙等について今一度レビューすると共に，授業中に文章作成の実践演習も行う）。 副目標：日本の職場組織(民間企業・官庁・教育機関等々の組織社会)において使用されている日本語（特に，時事用語・ビジネス会話語彙・敬語など）に習熟することを期する。 同時にビジネス会話のトピックスとして，しばしば登場する日本文学の代表的作品についての知見を深める。 また日本的組織社会の中で成功する条件について考えてみる。	
		アジアベンチャービジネ	本授業を通じてベンチャー企業，ベンチャービジネスに関する基礎概念を学び	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	マネジメントプログラム	ス論	ます。 以下の 4 点を授業の到達目標とします。 ①ベンチャー企業の定義と特性を理解し，説明できる。 ②ベンチャー企業の創業と成長プロセスを理解し，説明できる。 ③ベンチャー企業の資金調達に関する基礎的な知識を得ること。 ④ハイテク産業の集積に関する基礎的な理論を理解すること。	
		マネジメント特講（サステイナビリティ・マネジメント論）	国際社会および産官学における，持続可能な開発目標（SDGs）への取り組みが活発化している。本講義では，その背景にある自然・社会環境を包括する世界的課題や，それらへの取り組みを議論する。コモンズの悲劇，自然の生態系サービスとその価値評価，そして ESG (Environment, Social, Governance) 投資など，環境心理学および環境経済学の基礎的理論から最新の話題の議論をとおし，サステイナビリティ・マネジメントに関する理解と批判的思考（クリティカル・シンキング）を深めることを目的とする。	
		マネジメント特講（地域創成論）	現代社会において，地域社会は様々な課題を抱えるとともに，持続可能な開発に欠かせない多くの利点も内包している。本講義では，これらの再評価を念頭に，包括的冨指標（Inclusive Wealth Index）をはじめとした，地域創生に向けた経済指標とそれらの価値評価方法論の是非両論，そして様々な地域の将来像とその実現にむけた戦略についての知見を深める。中でも，自然共生社会像における人の福利（wellbeing）を多様な価値観から議論し，その構築にむけた最新の取り組みを議論する。	
		マネジメント特講（日本の組織と経営）	本講義の目的は，営利・非営利を問わず，さまざまな組織を取り上げ，そこで生じるマネジリアル課題を解説することである。とりわけ，その実践的な課題に対する解決の糸口がどのようにして理論的に見出したかを事例をもって講義する。この科目は，担当教員が博士課程後期の修了生と在学生のうち実務経験を有する者をゲストスピーカーとして招き，議論を展開する。各ゲストスピーカーは，担当教員とともに 2 回にわたって，授業に参加し，ストレートマスターに対する実践教育の役割を担う。現場等で実際に起こった事例を課題とし，議論をつうじて解決するために実践したことを理論的に導き理解することで，学生は理論と実践の繋がりを理解することができるようになる。例えば，ゲストスピーカーに「失敗から学ぶ重要性」との観点から，主に失敗例を挙げていただき，解決の糸口をどのようにして理論的に見出したかを担当教員，ゲストスピーカー，社会人学生，留学生，日本人学生といったそれぞれバックグラウンドの違う者が議論をつうじて理解する。	
		マネジメント特講（地域活性化）	地域の活性化を考えることは，そこで暮らす人々の幸福や豊かさを考えることであるとともに，地域の視点から一国あるいは社会全体の問題解決を考えることに通じる。ところが，人口減少社会の中にあって地域間の競争は否応なしに厳しさを増し，高齢化，財政制約，グローバル化，東京一極集中等，地域の活性化を困難にする変化が続いている。 これらを踏まえ，本講義では，多様なアプローチがある地域活性化について，各分野を専門とする講師により，地域の現状を分析し，課題設定から方策を導く地域活性化の方法論と実践事例を学ぶ。	
		Peace and Co-existence A	（概要）本講義は，　国際平和共生プログラムの教員それぞれの個別の専門から「平和共生」をテーマとして，オムニバス形式で実施される。学問領域としては，国際政治，国際法，文化人類学，社会学等である。現代武力紛争を中心としたグローバルな平和と安全の問題そしてそれへの対応，核兵器に関する問題，国際関係のなかの日本の政治，平和共生のための文化的営み，多文化共生などを内容とする。講義形式を取るものの，一部にディスカッションを含めるため，学生の積極的参加が求められる。 （オムニバス方式／全 8 回）	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	国際平和共生プログラム		（104　山根　達郎／1 回） グローバル社会と紛争 （5　関　恒樹／1 回） 文化人類学から考える平和構築 （133　友次　晋介／1 回） 核軍縮・不拡散 （134　眞嶋　俊造／1 回） 戦争と倫理 （198　中空　萌／1 回） 暴力と非暴力の文化人類学 （216　伊藤　岳／1 回） 交渉の失敗としての武力紛争 （215　SIMANGAN DAHLIA COLLADO／2 回） 国際社会による平和構築の取り組み，試験	
		Peace and Co-existence B	（概要）本講義は，国際平和共生プログラムの個別の専門から「平和共生」をテーマとして，オムニバス形式で実施される。学問領域としては，国際政治，国際法，文化人類学，社会学等である。日本の近・現代の歩みや日本社会のあり方について，戦後復興，戦後外交や開発の経験を踏まえながら，平和共生の視点で分析する講義である。講義形式を取るものの，一部にディスカッションを含めるため，学生の積極的参加が求められる。 （オムニバス方式／全 8 回） （1　川野　徳幸／1 回） 広島の復興の経験 （3　片柳　真理／1 回） 日本の民主化 （132　掛江　朋子／1 回） 日本の領土紛争（尖閣諸島問題） （2　吉田　修／1 回） 福田ドクトリン （198　中空　萌／1 回） 日本の災害政策と地域社会 （129　VAN DER DOES LULI／1 回） 原爆体験の伝承 （133　友次　晋介／1 回） 日本の地球規模課題への取組 （216　伊藤　岳／1 回） 総括，試験	オムニバス方式
		Peace and Conflict Research I	「Peace and Conflict Research I」では，国際関係論を基盤として，紛争研究，安全保障研究，平和構築研究を参照しながら，現代武力紛争の特質と，紛争原因	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	国際平和共生プログラム		を除去し平和の基盤を確立するための様々な平和政策について，大学院レベルでの基礎的知識を提供する。本講義では，現代の内戦や地域紛争を事例に取り上げてその特色を叙述的に説明しつつ，冷戦終結後に活発化した国際平和活動の特色についても講義する。 本講義では，以上の事柄を探求するために，主権国家の形成と失敗国家の課題，人道的介入の意義と課題，国家建設と平和構築支援の意義と課題，などをテーマとして取り上げる。授業では，教員による講義のほか，受講生には，リーディング・アサインメントの読了，ディスカッション・レポートの事前作成を課し，全員でディスカッションを実施する。 なお，本講義の履修にあたっては，「Peace and Conflict Research II 」の履修を求める。	
		Peace and Conflict Research II	「Peace and Conflict Research II 」では，「Peace and Conflict Research I」での講義内容の履修を踏まえ，現代武力紛争の特質と，平和政策について，大学院レベルでの応用的知識を提供する。具体的には，国際秩序の不安定化の問題とも絡む，内戦や地域紛争，テロリズムといった事例に対する国連の対応や，欧州連合，アフリカ連合などの地域機構によって講じられる紛争解決策や平和政策の意義と課題について分析する。本講義では，最終レポートの提出と，ディスカッションへの参加，リーディング・アサインメントの読了が求められる。 なお，本講義の履修を希望する受講学生は，「Peace and Conflict Research I」を履修済みであることが求められる。	
		Conflict Resolution I	Conflict Resolution I では，紛争解決論の基本的な概念を理解することを目的とする。武力紛争の発生前から終結後に至るまでのプロセスにおいて，紛争状況を改善又は悪化させるさまざまな要素に関し，広く検討する入門的なクラスである。 本講義は，紛争解決論の教科書にしたがって議論形式で進められる。受講生は，教科書を章ごとに担当し，その概要をプレゼンテーションする。そのうえで，ディスカッションポイントを提示し，クラス全体で議論をおこなう。 なお，本講義の履修生には，続けて Conflict Resolution II の履修を求める。	
		Conflict Resolution II	Conflict Resolution II では，Conflict Resolution I で学んだ基本的な概念を前提として，紛争解決のための手段とその課題についての理解を深めることを目的とする。交渉，裁判，国際機関による関与等，特定のテーマを取り上げ，そのあり方，意義や紛争解決に失敗する要因や背景を掘り下げていく。 授業形態は，紛争解決論 I と同様，教科書等の文献を用い，受講生による概要の報告とクラス全体での議論というかたちでおこなう。最後に各受講生の関心に沿った内容でのタームペーパーの提出を求める。なお，本講義の履修には，Conflict Resolution I の修得を必須とする。	
		Peacebuilding I	本講義の目標は（1）平和構築の様々な活動について学び，（2）平和構築について考えることを通じ平和そのもの，そして平和を持続できる社会に関する理解を深めることである。まず国連を中心とした平和活動に関する基本的概念を学び，次に平和構築活動の中でも特に法の支配を中心に，治安部門改革や武装解除，動員解除，社会復帰（DDR）について取り上げる。さらに，女性，若者，ディアスポラなど近年平和構築の主体として注目されているアクターの活動を検討する。紛争にはそれぞれの性格があり，一つのモデルをすべてに当てはめることはできない。しかし，これまでの取り組みと議論を学ぶことにより，今後の新たな状況に対応する力を高めることに繋がる。授業は講義とディスカッションの組み合わせによって行い，授業の後半では学生のプレゼンテーションを求める。 なお，本講義の履修生には，続けて「Peacebuilding II」の履修を求める。	
		Peacebuilding II	本講義の目標は（1）平和構築の様々な活動について学び，（2）平和構築論の変遷を理解し，（3）平和構築について考えることを通じ平和そのもの，そして平和を持続できる社会に関する理解を深めることである。平和構築論 II では，特に民主化，人権の保護・促進，移行期正義などの活動について知識を深める。さらに，様々な平和構築活動の理解を踏まえ，平和構築論の変遷を辿り，平和構築論を総合的に理解する。授業は講義とディスカッションの組み合わせによって行い，後半には学生によるプレゼンテーショを実施する。 なお，本講義の受講には，「Peacebuilding I」を履修済みであることが求められる。	
		International Relations	本講義では，国際関係論の中心的な論点である武力紛争の原因・終結・戦後和平	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	国際平和共生プログラム		を主なトピックとして，合理的選択論・戦略的選択アプローチ，特に「戦争の交渉モデル（bargaining model of war）」を中心とした紛争研究や，国際関係論一般の理論・実証・方法を学ぶ。具体的には，「なぜ武力紛争が生じるのか（なぜ交渉による係争解決に失敗し，本来不要なはずのコストを伴うという意味でパレート非効率的な，武力による係争解決が選択されるのか／均衡となるのか）」という中心的な問いと，これに関連する紛争終結・再発等を巡る問いに回答するための理論と実証手法，事例，実証的知見，及びリサーチ・デザインを学ぶ。 毎回の授業では課題文献を割り当てるほか，履修者によるプレゼンテーション・議論の時間を設ける。また，講義内容及び自身の関心に関連するタームペーパーの提出を求める。	
		Hiroshima Peace Studies I	Hiroshima Peace Studies I と II においては，平和学における基本的な諸理論を理解すると同時に，平和学の視点から広島・長崎を含むグローバル核被害の実態について理解を深める。また，グローバル核被害の視点からフクシマについても考えたい。討論中心の講義である。 Hiroshima Peace Studies I においては，平和学の諸理論，特に，直接的暴力・構造的暴力の概念及び事例を学ぶ。受講生は，それぞれの事例を取り上げ，その背景要因，紛争解決の方法などを分析・考察し，発表する。それ以外にも，毎回の講義にて講義内容に関する事例を取り上げ，ショートプレゼンテーションを行う。 なお，本講義の履修生には，続けてヒロシマ平和学Ⅱの履修を求める。	
		Hiroshima Peace Studies II	Hiroshima Peace Studies I と II においては，平和学における基本的な諸理論を理解すると同時に，平和学の視点から広島・長崎を含むグローバル核被害の実態について理解を深める。また，グローバル核被害の視点からフクシマについても考えたい。討論中心の講義である。 Hiroshima Peace Studies II においては，広島・長崎の原爆被害，セミパラチンスクの核被害，チェルノブイリの原発事故被害，福島第一原発事故による被災の実態について学ぶ。また，本講義では，タームペーパーを課す。受講生は，それぞれの修士論文に関連するトピックスを選び，平和学的視点からタームペーパーとしてまとめ，発表する。 なお，本講義の履修には，ヒロシマ平和学 I の修得を必須とする。	
		Hiroshima Peace Heritage I	Hiroshima Peace Heritage I においては，ヒロシマの原爆の記憶の継承について，何を伝えていくべきなのかを検討する。被爆者が高齢化し，直接体験を聞く機会が減じていく中で，伝承の方法と共に，原爆体験の核心を理解することが求められる。本講義では被爆者の意識調査をもとに，定性的及び定量的手法からその体験の核心を明らかにしていく。また，1947 年以来毎年出されてきた平和宣言を振り返り，伝承の意識の高まりを確認する。履修者にはプレゼンテーションが求められる。 なお，本講義の履修生には，続けて Hiroshima Peace Heritage II の履修を求める。	
		Hiroshima Peace Heritage II	Hiroshima Peace Heritage II においては，ヒロシマの原爆の記憶の継承について，どのような方法があるのかを検討する。例えば養成が進む語り部や，平和観光の可能性を検討する。また，戦争体験の伝承のために他国で行われている取り組みを取り上げ，比較分析を行う。特に，戦争の記憶の何をどのように伝えようとしているのかを中心に考察を深める。履修者にはプレゼンテーションが求められる。 なお，本講義の履修には，Hiroshima Peace Heritage I の修得を必須とする。	
		Politics in Japan	この授業は，現代の日本政治に対する理解を深めたい学生に対して，日本政治が作動する場としての国会や内閣をはじめとする諸制度，また，政治の主体となるべき政党や利益集団などの政治アクターについて，概説する。その際，先ず「1955 年体制」の成立から第二次安倍内閣までの日本政治の変遷を歴史的に概観し，続いて，日本の諸政党の特徴，とりわけ自由民主党の特徴を検討する。さらに，日本の内閣，国会，行政官庁と地方自治などの諸制度を個別に取り上げ説明し，利益団体や行政官僚，マスメディアなどの政治アクターを順次に取り上げ，考察を進める。 なお，この講義は，英語によって行われるので，参加者には十分な英語運用能力が求められる。	
		International Politics I	第二次世界大戦後，植民地が独立していく中で，世界が主権国家によっておお	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	国際平和共生プログラム		われていく中で，グローバルな世界政治秩序がいかに形成され展開していったかについて，アジアにおける地域世界の政治秩序を関連づけながら，主として政治経済史的観点から考察する。なお，毎週の講義の後半は，受講者による関連文献の発表とその討論にあてる。これらの講義や発表を通じて，今日の世界政治の動向と，その中での発展途上地域の政治的動向を分析する力の獲得を目指す。	
		International Politics II	第二次世界大戦後の国際政治の展開を，理論的発展と地域的特性とに焦点を当てながら考察する。とくに東アジア世界の政治秩序と南アジア世界の政治秩序を，いくつかの問題領域に焦点を当てながら比較し，それぞれの特徴を明らかにする。また，発展途上国の民主主義をめぐる諸問題にも注目する。なお，毎週の講義の後半は，受講者による関連文献の発表とその討論にあてる。これらの講義や発表を通じて，今日の世界政治の動向と，その中での発展途上地域の政治的動向を分析する力の獲得を目指す。	
		International Security I	本講義は国家間の戦争と平和についてよりよく理解するための，理論的な枠組みに関する入門である。この中で履修者は，戦争が人間性に起因し不可避であるのか否か，国際社会において共通の政府が存在しない中で国家間の協力は果たして可能であるのか，いかなる条件において平和は保たれ得るのかという問題について学ぶ。また，戦争と平和に関する理論的枠組みに関する講義と議論を通じ，核兵器など大量破壊兵器の軍縮・不拡散，並びに東アジアにおける安全保障についての理解を深める。履修者は，課題論文の事前の読み込み，プレゼンテーション，及びこれに続く議論への積極的参加が求められる。	
		International Security II	本講義は，国家間の戦争と平和に収まらない問題について理解を深めるための機会を提供する。気候変動，テロリズム，小型武器の拡散，新興・再興感染症，人口増加，内戦，飢餓，難民と移民，資源・エネルギー需給のひっ迫といった，一国だけではもはや解決が不可能な，越境的な脅威について，また，人工知能や遺伝子工学といった科学技術の急激な進展によってグローバル社会が直面する問題について，履修者がよりよく理解し，議論ができるようになることを目標とする。履修者は，課題論文の事前の読み込み，プレゼンテーション，及びこれに続く議論への積極的参加が求められる。	
		International Law and International Institutional Law	本授業科目は，国際社会の組織化の過程において形成されてきた国際機構（international organisation）の法的意義を検討することにより，国際法関係全体を検討する。主な項目として，下記が含まれる。 ・国際社会の形成過程がいかなるものであったか ・国際法特に条約はどのような役割を果たすのか ・国家と国際機構の基本的構造とは何か ・国際連盟・国際連合など主要な普遍的機構，欧州連合（EU） や 東南アジア諸国連合（ASEAN） など主要な地域的機構は，どのように形成され，どのような機能を果たしているのか	
		International Ethics I	本講義の目的は，国際関係における倫理的諸問題の基礎を学ぶことにある。本講義では，倫理学の視座より，倫理学的な考え方や倫理学理論，倫理学の議論の方法を通して，国際関係における様々な倫理問題を分析・検討し，グループディスカッションを通してお互いに考えていくことを目指す。具体的には，概論（第 2～4 回）では，国際関係における倫理問題を理解するための前提となる，倫理学・応用倫理学の基礎を習得する。続く各論（第 5～13 回）では，倫理学的思考を実践する対象として，戦争と平和を巡る基礎的な倫理問題の諸相を検討する。最後に総合ディスカッションと振り返り，まとめ（第 14～15 回）を行う。	
		International Ethics II	本講義の目的は，国際関係における倫理的諸問題に関する発展的な議論を学ぶことにある。本講義では，倫理学の視座より，倫理学的な考え方や倫理学理論，倫理学の議論の方法を通して，国際関係における様々な倫理問題を精緻に分析・検討し，グループディスカッションを通してお互いに考えを深めていくことを目指す。具体的には，概論（第 2～4 回）では，国際関係における倫理問題を理解するための前提となる，倫理学・応用倫理学の基礎を習得する。続く各論（第 5～13 回）では，倫理学的思考を実践する対象として，戦争と平和を巡る発展的な倫理問題の諸相を検討する。最後に総合ディスカッションと振り返り，まとめ（第 14～15 回）を行う。	
		Law and Human Rights	本講義は，今日各国で実在する諸課題（貧困，差別，難民，無国籍者など）が人権とどのように関わっているのかを検討することを通じて，人権及び国際人権法を理解することを目的とする。同時に，履修者は自国の憲法における人権規定	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	国際平和共生プログラム		を確認することが求められる。授業では具体的な問題に照らして国際人権法を紹介するので，履修者は事前に国際人権法の知識を必要とするものではない。様々な人権条約について学ぶと共に，人権を守るための国際的なメカニズムについて理解していく。 授業は講義とディスカッションの組み合わせによって行い，後半には学生によるプレゼンテーショを実施する。	
		Basic Cultural Anthropology I	この授業は，文化人類学を専攻する博士前期課程の学生及びその理論や調査法に関心を持つ他分野の学生向けの文化人類学の基礎講義である。第Ⅰ部では，学説史の講義，古典の講読及びディスカッションをとおして，基本的な理論とフィールドワーク，民族誌という方法について学ぶ。第Ⅱ部では，学内でのフィールドワーク実習を通して参与観察とインタビューの方法を習得する。その上で，第Ⅲ部において，伝統的な農村ではなく，国連・NGO，病院，産業の現場といった現代的な環境でフィールドワークを行うようになった近年の人類学の展開について学ぶ。受講生はこの授業をとおして，文化人類学の基礎知識を身につけ，その理論と方法を自分の研究に応用できるようになることを目指す。	
		Basic Cultural Anthropology II	文化人類学の基礎を学ぶことを目的とする。同時に文化人類学の知見と方法論が，グローバル化する現代世界の諸問題を批判的に分析・理解し，行動していく上で，いかなる貢献が可能なのかを考える。文化人類学の方法論であるフィールドワークとエスノグラフィー，対象としてきたトピックやアプローチなど学ぶと同時に，それらが現代世界においてどのような変更，修正を迫られ，バージョンアップを試みてきたかを考える。 各回の授業は，講師による解説→課題文献の読解と討論→講師による総括的講義というサイクルで進められる。主なトピックは以下の通り。文化の概念とその変容。フィールドワーク論。エスノグラフィーとその批判。社会的つながりとアイデンティティ。環境・生態・生業活動。経済・市場・文化。交換と互酬性。政治・権力・文化。宗教と儀礼。民族とエスニシティなど。Basic Cultural Anthropology I の履修を必須とする。授業は英語で行われる。	
		Contemporary Anthropology I	この授業では，近年の人類学の新たな展開について講義する。特に科学技術社会論（Science and Technology Studies）との対話を通して，文化とテクノロジー，人間と人工物の関係に焦点を当てるアプローチに焦点を当てる。学期の前半には，文献の講読及びディスカッションをとおして，このアプローチに基づく人類学的なフィールドワークの成果が，農村社会の文化的側面に注目していた従来の人類学とは異なる角度から，特定の社会の理解を試みていることを理解する。学期の後半には，開発プロジェクトや政策，技術移転や環境政治の分析へのこのアプローチの応用を試みる。とりわけ東日本豪雨災害の被災地におけるフィールドワークをとおして，現代人類学がいかに災害復興支援に貢献できるかを議論する。受講生はこの授業をとおして，文化とテクノロジーの関係について理論的・実践的に理解することを目指す。	
		Contemporary Anthropology II	グローバル化が引き起こす現代世界の諸問題の理解と分析のために，文化人類学がどのような知的・理論的貢献が可能なのかを考える。各回の授業は，講師による解説→課題文献の読解と討論→講師による総括的講義というサイクルで進められる。主なトピックは以下の通り。グローバリゼーションとはどのような現象か。リスク・不確実性・アイデンティティの変容。親密圏と公共圏の変容。トランスナショナリズムと人の移動。国民国家とディアスポラ。開発と文化。途上国の社会福祉と生活保障。アジア・アフリカの市民社会論。Contemporary Anthropology I の履修を必須とする。授業は英語で行われる。	
		Identity and Co-existence	様々な側面における多様性の尊重と共生は，現代的重要課題の一つである。本講義では，マレーシアにおける国民アイデンティティの形成と多民族の共生を事例に，アイデンティティと共生について考察することを目的とする。マレーシアは，多民族，多宗教が存在し，長くマレー優遇政策が存在したにも関わらず，大きな民族紛争に直面することなく，共生している国と言える。しかし同時に，マレーシア，という国民アイデンティティについては，依然として形成が必要であると考えられている。そこで，国民あるいは民族アイデンティティ形成に大きな影響を持つ教育に焦点をあて，国民アイデンティティ形成に向けて，どのような国家戦略と教育政策がとられてきたのか，そして，それらがどのような教育制度を生み出し，アイデンティティ形成においてどのような課題を生み出しているのかについて考察する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	国際平和共生プログラム		授業は講義及び事前課題にもとづくディスカッションの形式で進める。	
		Peacebuilding Case Studies	この授業は，平和構築の実践について事例を通して学習することを目的とする。平和構築の活動ではリベラル・ピースに基づく一つのモデルが形成され，異なる条件下の国や地域で実施されてきた。15 回の講義を通じて，カンボジア，東チモール，ルワンダ，コソボなどの事例について，それぞれの紛争の形態やプロセスを振り返り，そこで平和構築活動がどのように行われたのかを学習する。事例の紹介後，事例間の比較を行い，紛争及び紛争が起こった社会の特徴と平和構築活動との関係を検討する。	
		Area Studies	この授業では，経済と文化の関係という切り口から地域研究の方法について考える。とりわけ経済人類学という分野の展開に焦点を当てる。市場のみにとどまらない実体的な「経済」を議論した古典から，市場の装置と文化の関係を議論した現代人類学，グローバル金融を扱った最新の民族誌までを扱う。受講生は，経済人類学の流れとエッセンスを学ぶことにより，グローバル化した地域社会を見つめる新たな視座を獲得することを目指す。授業は，経済人類学についての講義（４回），文献購読に基づくディスカッション（4 回），講師によるモン農民の経済活動についての事例の提示（1 回），受講生によるケーススタディの発表ｘｆ（5 回），全体の振り返り（1 回）からなる。	
		Development and Culture	この授業では，主に健康と病いの問題に焦点をあてながら，世界の様々な場所で生きる人々の価値の多様性が開発介入の効果とどう関わっているか考える。具体的な感染症や脳神経疾患の問題を取り上げ，政策立案者の視点や専門家の視点，当事者の視点を比較しながら，対策の妥当性について討論する。またそのことを通して，開発と文化というふたつの現象の交点に現れる理論的・実践的課題を論じる力を身につけてもらう。授業は，開発と文化に関わる理論的問題についての講義（4 回），講師が提示する具体的課題についてのグループ討論（8 回），講義と討論の内容を踏まえたレポート作成（２回）及び授業の振り返りと講評（１回）からなる。	
	国際経済開発プログラム	社会科学のための数理・計量分析	社会科学のために必要な基礎的な数学･方法を重点的に学びなおす。具体的には，(1)統計的分析方法の基礎，(2)検定の考え方，(3)数理モデルに必要な数学基礎，(4)経済社会への応用例を中心にした講義内容。また，データ分析に必要なプログラミング言語として R の演習を行う。	
		調査方法論基礎	調査方法論基礎では，開発途上国に適用可能な最新の社会調査技法の獲得を目指す．科学論文の作成を見据えた明確な問題意識に基づいて仮説を立て，調査方法の選定やその設計，実査，データ分析，結果の提示に至るまでのプロセスを客観的・科学的に行うための基本的技法を習得する．また調査倫理や調査データ管理の方法についても習得する．	
		開発ミクロ経済学 I	開発ミクロ経済学では，開発途上国の経済開発や市場開発課題に取り組むために必要なミクロ経済分析手法の獲得を目指す．ミクロ経済理論だけではなく，様々な経済政策が各経済主体の行動にいかなる変化をもたらすのか，その帰結として市場にどのような影響を及ぼすのかを分析するための技法を習得する．開発ミクロ経済学 I では，現代の開発ミクロ経済学における消費者行動理論とその分析ツールに精通することに重点を置く．	
		開発ミクロ経済学 II	開発ミクロ経済学では，開発途上国の経済開発や市場開発課題に取り組むために必要なミクロ経済分析手法の獲得を目指す．ミクロ経済理論だけではなく，様々な経済政策が各経済主体の行動にいかなる変化をもたらすのか，その帰結として市場にどのような影響を及ぼすのかを分析するための技法を習得する．開発ミクロ経済学 II では，現代の開発ミクロ経済学における生産者行動理論とその分析ツールに精通することに重点を置く．	
		開発マクロ経済学 I	開発マクロ経済学 I では，開発途上国の社会経済開発に関する課題に取り組むために必要なマクロ経済分析手法の獲得を目指す．国内総生産，物価，利子率，失業率などマクロ変数の相互関係や景気変動・経済成長に関して理解した上で，開発途上国における金融・財政政策といったマクロ経済政策の効果に関する分析手法を習得する．開発マクロ経済学 I では，現代の開発マクロ経済学における基礎理論とその分析ツールに重点を置く．	
		開発マクロ経済学 II	開発マクロ経済学 II では，開発途上国の社会経済開発に関する課題に取り組むために必要なマクロ経済分析手法の獲得を目指す．国内総生産，物価，利子率，失業率などマクロ変数の相互関係や景気変動・経済成長に関して理解した上で，開発途上国における金融・財政政策といったマクロ経済政策の効果に関する分析	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	国際経済開発プログラム		手法を習得する．開発マクロ経済学 II では，開発マクロ経済政策を議論する上で重要な経済成長論とその分析ツールに重点を置く．	
		開発計量経済学 I	開発計量経済学 I では，開発政策の効果測定に必要な計量経済学の理論を理解し，それを研究に応用できるスキルを養うことを目的とする。最小二乗法(OLS)の概念，OLS が因果関係を示すための条件(不偏性の条件)，OLS の漸近論を理解した後，実践的な応用方法を習得する：交差項の使用法，ダミー変数の使用法，部分効果の理解，差分の差分法，固定効果法，操作変数法，同時方程式推定法，不連続回帰分析。	
		開発計量経済学 II	開発計量経済学 II では，引き続き開発政策の効果推定に必要な計量経済のツールの習得を目指す。開発経済における計量経済においては，交通手段の選択など，人々の「選択」を分析したり，被説明変数の一部しか研究者が観察できない状況で推定をする必要があったり，サンプルセレクションの問題に直面する。よって，本講義では離散モデルの習得を目指す：プロビット法・ロジット法， 順序プロビット法・ロジット法，多項ロジット法，トビット回帰法，打切り回帰法， ヘックマン・サンプルセレクション修正法， ハザード関数モデルなどの期間分析法。	
		経済統計分析論	経済統計の特徴とその活用の仕方，分析方法などの基礎を習得する。GDP 統計，SNA，財務データ，国際データ，産業連関表などを中心に解説する予定。 具体的な内容は，概ね以下の通り。 （1）ガイダンス：受講に当たっての注意事項と講義の計画 （2）経済データの特徴（様々な経済データ） （3）産業連関表の枠組みについて （4）投入係数表と線形代数の基礎 （5）逆行列計算と経済波及効果について （6）輸入内生化モデルと IO の応用 （7）確率・統計の基礎概念（平均と分散） （8）因果関係と相関関係の区別について （9）相関係数とその応用 （10）最小自乗法，単回帰分析 1 （11）最小自乗法，単回帰分析 2 （12）検定統計量の意味について （13）消費関数，投資関数の実際例 （14）構造変化分析，ダミー変数 （15）時系列モデルの基礎	
		グローバルガバナンス論	グローバルガバナンスは，国際的なアジェンダにとって非常に重要であり，グローバルな問題や懸念に対処するために協力を維持するための努力基盤となる。世界は今後ますますセキュリティの脅威，経済的な崩壊，開発の懸念，そして悪化する環境条件に対処しなければなりません。国は，国連，WTO，環境変化を管理する条約などの国際機関の設立を通じて，これらの課題に対処するための努力を調整しようとしています。本講義では，国家，非国家の両方の構造と，安全保障，経済，人権，開発及び環境の分野における人類の共通の問題を解決するための取り組みについて説明する。南北の対立，国家間の協力のモデルと機構，ガバナンス構築に貢献する非国家主体の役割と国家との関係などを扱う。	
		都市経済学	都市経済学では，なぜ都市が存在するのか，なぜ都市は成長するのか，地方自治体はどのようにしてそのような成長を促進できるのか，といった視点から，都市構造や開発パターンについて議論する。たとえば首都圏の特定の地域が他の地域よりも急速に成長するのはなぜか，企業や世帯は，どのようにして特定の大都市圏内において立地場所を決めるのか，何が土地の価格を決定し，そしてこれらの価格はどのように空間を越えて変わるか，などがそこでは重要な問題となる。さらに本講義では，都市問題の空間的側面，すなわち，貧困，住居，そして郊外化やスプローリングなどに焦点を当て，最適な都市開発に必要な政策を概説する。	
		農村開発論	現在，世界人口の大部分は農村に居住している。そこではいわゆる非効率的な資源開発や，それに起因する環境破壊や資源の枯渇だけでなく，社会インフラの不足，破壊などの問題が存在する。本講義ではまず，農村部におけるこれら諸問題を概説したのち，これらを理論的に分析するための枠組みを提示し，そのうえで都市部との関係に留意しつつも農村住民の視点に立ち，環境と調和し農村の限りある資源を持続的に活用する最適な農村開発政策とはなにか，について明らかにする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
プログラム専門科目	国際経済開発プログラム	技術経営論	技術経営論では，主に企業レベルの技術・イノベーションとオペレーションを対象に，同分野の基礎的な理論に加えて，関連するリーンオペレーション，全社的品質管理などの実践的な管理手法について講義する。経営学の主要な分野である経営戦略，組織，人的資源管理との関連も検討する。また，先進国，新興工業国，後発国それぞれの企業事例について紹介したうえで，習得した理論や管理手法を用いた学生による分析・評価を実施する。	
		人的資源開発論	人的資源開発論では，企業をはじめ各種組織で働く従業員などの知識・スキル開発を中心的な論点とする。まず，成人学習や研修の管理・評価に関する理論的基礎と実践的手法を習得させる。知識・スキルの具体的な事例としては，とくに創造性，リーダーシップと異文化適応に重点を置き，学生による研修事例の分析・評価も行う。関連分野と位置付けられるキャリア開発や知識経営，さらに国際人的資源開発論として多国籍企業，各国企業や社会・国レベルの人的資源開発の国際比較も取り上げる。	
		公共管理論	公共管理論では，公的機関による組織活動と，こうした組織活動を効率的・効果的に実施するための適切な管理のあり方について，企業組織との比較の観点に配慮した形で議論を進める。具体的には，new public management を含む「公共管理」の基本的な枠組みについて整理したうえで，マネジメント・サイクルの考え方や，各種の経営資源とそれらの効率的・効果的な利用について検討する。また，組織の事例として先進国と途上国の公的機関及び国際機関を取り上げ，各事例の組織管理，人事管理について考察する。	
		経営組織論	経営組織論では，組織運営を行う際に必要となる諸問題について，組織行動論に代表されるミクロ組織論の理論的枠組みに基づきながら，心理学や社会学などの学際的知見を踏まえた形で講義を進める。具体的には，個人・集団レベルの行動や組織構造・デザインといった基本的な内容を検討したうえで，個人のモチベーションや職務満足度，集団におけるリーダーシップ，コミュニケーション，さらに組織文化，人的資源管理，組織変革・開発について考察する。	
		経営戦略論	経営戦略論では，企業の中長期的な目標を実現するために整合的な企業行動をとるための指針としての経営戦略を学ぶ。具体的には，戦略の概念と理論，戦略形成の手法とプロセス，戦略が機能する論理について学ぶ。特に，SWOT 分析，垂直統合と競争優位，コストリダーシップと線品差別化，戦略的柔軟性，標準・ネットワーク・プラットフォーム，戦略的提携，多角化戦略・資源配分などについて習得する。	
		環境政策論	環境政策論では，環境問題を市場と環境との相互作用として捉える環境経済学を基盤とし，国内および国際的なレベルでの環境規制政策と天然資源管理政策の理論と実践を扱う。抽象的な経済モデルによる理論的説明とアジア，アフリカを中心に実際の環境政策，資源管理政策とを比較することによって，理論と実践のそれぞれの役割と意味について考察する。	
		都市政策論	都市政策論では，日本の国，地方レベルで都市政策の問題と計画問題を参考に，他の国の都市政策との比較を行う。トピックは，都市行政，都市計画，各種地域レベルでの公共政策，財政，国との関係，コミュニティ開発，経済と社会の不平等，運営と管理，そして環境の持続可能性など，さまざまな観点を扱う。比較では，欧米などの先進国，中国や ASEAN などの経済的に急速に発展している途上国，アフリカでの低所得国など，国の発展と地域の違いなどを踏まえたいくつかの大きなグループに分ける。	
		国際協力論	国際協力論では，国際協力とは何か，その理念と実践を学ぶ。具体的には南北問題，地球公共財，国連・国際機関，政府開発援助(ODA)，人道支援，NGOs，MDGs/SDGs などの基礎的な知識を習得し，今後の国際協力のあり方を議論するための能力を養う。また，国際協力をテーマとした多様な分野の研究論文をレビューしながら，習得した知識や国際協力の実情を踏まえ，今後の国際協力のあり方について議論する。	
		労働政策論	労働政策論では，労働経済学の理論を講義するとともに，その実証例をバランスよく配合し，様々な社会問題を理論的に説明する力を養うことを目的とする。我々が日常耳にする社会問題の多くの部分は，労働に関係する。具体的には，配偶者控除制度と１０３万円の壁，最低賃金と雇用の関係，移民の流入と賃金といった議題である。これらを理論的に説明する力を養い，さらに最新の実証研究の学術的な知見を理解することを目的とする。理論は，余暇選択理論，労働供給，労働需要，労働市場均衡，人的資本理論の順で進めていく。	